
疾風！アイアンリーガーStrikers

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾風！アイアンリーガルStrikers

【Nコード】

N3079J

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

世界は呼んでいた。限りない過ちを打ち砕くために世界は一つの熱い魂を呼び寄せた。熱き魂は少女達に出会い何を見るのか？最強のエース・・・始まります。

第一話 エース世界を越える（前書き）

完全パラレル原作無視です！不快感に思われる方は！Uターンお願いします！

第一話 エース世界を越える

世界は呼んでいた。限らない過ちを打ち砕くために世界は一つの熱い魂を呼び寄せた。熱き魂は少女達に出会い何を見るのか？最強のエース・・・始まります。

第一話 エース世界を越える

マグナムエース達シルバーキャッスルは今シーズンの開幕戦にむけて猛練習に励んでいた。現在十人しか居ないシルバーキャッスルは人数不足のため野球リーグ以外の参加が出来なかった。

「おーらいおーらい!!」

シルキー達が守備練習についている中マグナムエースは考えにふけていた。

「・・・大丈夫？マグナムエース」

「リュウケン・・・心配ない・・・大丈夫だ」

「随分考え込んでいるみたいだけど・・・どうしたの？」

「・・・なんでもない・・・気にするな」

マグナムエースは最近見る夢のことを考えていた。夢の世界はこことは違う景色：空を飛ぶ人間：そして杖のような物を持った人間達。そして響く謎の声。

(…お願い…あ・なた……が必・要な…の)

普通の夢なら気にはしないが度重なると話は別だった。

(…あの夢は一体なんだ?…何故同じ夢ばかり見る?…それにあの声…俺を呼んでいるのか?)

練習が終わりシルバーキャッスルのメンバーはメンテナンスを行っていた。マグナムエースはここでも考えにふけていた。そんなマグナムエースにシルバーキャッスル監督のリカルド銀城が話しかけた。

「…マグナムエース」

「…監督」

「…どうかしたのか?練習に身が入ってないみたいだが……なにか考え事か」

「ええ、実は」

マグナムエースは思い切って夢のことをリカルドに話してみることにした。

「…なるほど……興味深いな」

「…はい…一回じゃありません……毎日同じ夢ばかり見ているん

です・・・まるで俺を呼んでいるように」

「…もしかしたら・・・それはお前に向けてのSOSじゃないのか？」

「…俺に？」

リカルドは笑みを向けるとその場を後にした。そしてメンテナンスが終了しマグナムエースは充電ベッドに入った。

（…今日もあの夢を見るのか…何なんだ？）

マグナムエースはまた夢を見た。…見慣れない景色…空を飛ぶ人間…そして杖のような物を持った人間達。そして響く謎の声。だが今日の夢は違っていた。視界だけだった夢の中に自分が立っていた。

（…お願い…助けて…あなたの心が必要なのに）

「誰だ！お前は！？何故俺を呼ぶ！」

（…お願い）

「待て！」

マグナムエースは夢に踏み出した。声のする方向に全力で走った。するとマグナムエースの視界が段々ぼやけてきた。そしてマグナムエースを妙な感覚が襲った。

（なんだ！？意識と身体が引き剥がされる！）

その瞬間マグナムエースの身体を光が飲み込んだ。

「うあああああああ!!」

「はっ！」

マグナムエースが目を覚ますと辺りは夜だった。夢から覚めたと思ったマグナムエースだが同時に妙な感覚に襲われた。

「…夢か…なんだ？身体が妙だ…まるで自分の身体じゃないみたいだ」

段々マグナムエースの視界がはっきりしたが、その瞬間己の目を疑った。

「…ここは！…シルバーキャッスルじゃない…それにこの身体…俺の身体じゃない」

マグナムエースは身体を起こし鏡を見た。自分の姿が違う。姿は人間…そして青い髪の少女だった。マグナムエースは自分とは違う身体の中に眠っているもう一人の存在を感じていた。

（…これは夢か？…いや…夢にしては感覚が違いすぎる…まさかあの声が俺をこの子の身体に入れたのか？）

マグナムエースが混乱していると隣から眠そうな声が聞こえた。

「んゝスバルうまだ起きてんの？早く寝なさいよ」

そう言う少女は再び眠りについた。

（…スバル…この子の名前か…まさか…今この子が眠っているから俺がこの子の身体を動かしているのか？）

マグナムエースはひとまずベッド入った。

（・・・とにかく・・・早くこの子に身体を返さなければ・・・意識を
静めるんだ）

マグナムエースが眠りについた瞬間身体の主導権はスバルに移った。

「じゃあ今日も訓練始めようか」

なのはがフォワード達に訓練内容を伝えるがスバルの表情がすぐれない。

「スバル：どうしたの？」

心配そうになのはが質問した。

「あ、すみません、なんか頭が凄く重くて」

「昨日起きた時に寝冷えしたんじゃないの？」

「え？あたし昨日起きてないよ」

「じゃあ昨日は寝ぼけてたの？」

ティアナの指摘にスバルは全く覚えがない。昨夜は目を覚ました記憶もない。そして身体の調子がいつもより重い。まるで自分の中に別の誰かが居る感覚だった。

「スバル体調管理はしっかりしないとダメだよ。じゃあ今日の訓練は全員で私に一撃くわえること以上」

なのはの訓練内容に一同驚愕した。

「うわあ…いきなりハードルの高いメニューだなあ」

「やってやろうじゃないの！」

開始されたと同時になのはに向かっていく。スバルは自分の違和感を抱えながら戦っていた。

(…この子たちはいったい何なんだ?)

マグナムエースはスバルの意識の中から見ていた。空を走る道や竜、マグナムエースは夢で見ていた光景を思い浮べていた。そして確信した。自分は不思議な人間たちの世界に来てしまったと。

「え? うあああああああ」

なのはの一撃を食らった瞬間スバルの意識が飛んでしまった。

「どうしたの? スバル! これくらいでへこたれる気?」

なのはの砲撃魔法がスバルに直撃した。爆炎が起きるがスバルは無事だった。そしてなんとスバルはリボルバーナックルでなのはの砲

撃を受けとめていたのだった。

「すごい、よし！」

なのは光弾の連射をした瞬間スバルは突進しながらリボルバーナックルでなのはの光弾を受けとめはじめたその姿はまるで野球の守備のようだった。

「…なに…スバルの動きが全然違う」

「…スバルさん…なのはさんの攻撃を的確に受け止めてる」

ティアナとエリオはスバルの動きの違いに驚いていた。スバルは自分に直撃しそうな光球を華麗な動きでキャッチしていく。動きに全く無駄が無い。

「たあああああ！！」

スバルがものすごいジャンプをすると光球を持ったままのリボルバーナックルでなのはにタッチした。空中にいたなのははスバルと一緒に地上に降りた。

「すごいねスバル！いつの間にあんな動きを？」

なのはがスバルの顔を見た瞬間驚いていた。スバルの表情がまったく違ったからだ。顔にはゴーグルが形成され、どこか遠くを見つめている表情になっていたからだ。ゴーグルが消えた瞬間スバルの表情はいつもの表情に戻った。

「…スバル？」

「え？あ！はい！私・・・いったい!？」

「・・・覚えてないの？」

スバルの突然の豹変になのはは違和感を感じた。

食堂にて昼食をとるフォワードメンバーだったがスバルは食事が進まない。

「・・・なに？なにかの前兆？・・・スバルが全然食べてない!!」

「スバルさん・・・体調でも悪いんですか？」

「え？あ、ああ！大丈夫！大丈夫！」

ティアナとキャロがスバルを心配するがスバルは空元気を出して答えた。スバルは最近見る夢を考えていたロボット達がスポーツをする世界だった。そして自分の視点が野球のピッチャーマウンドにあるところだった。

（・・・なんなんだろうあれ？なんかスポーツしてる気分だし）

スバルはトイレで手を洗いながら考えていると鏡を見た。

（え?）

スバルが鏡を見るとそこには本来映っている姿は無かった。映っていたのは赤い野球選手のようなロボットだった。パニックになるスバル。

（え！なに！？なんなの！？）

（…落ち着いてくれ…俺にもよくわからないんだ）

動転するスバルに対しロボットのほうはとても落ち着いている。

（あ！あなたは誰？）

（俺の名はマグナムエース）

（マグナムエース・・・あなた！どこにいるの？）

（…信じられないだろうが…俺は君の中に居る…正確には俺の意識だけが君の中に居る）

（じゃあ！今朝からの頭痛はあなたのせい？）

（…おそらくそうだろう一つの身体に二つの意識がある・・・身体にかなりの負担がかかっているのだろう）

（で！出てってください！）

（出来ることなら俺もそうしたい…だが方法がわからないんだ）

（そ！そんな！）

落胆するスバルにマグナムエースは言葉を続ける。

（…少しだけ時間をくれないか？…方法が見つかったら必ず君から離れる）

（方法が見つからなかったらどうするんですか？）

不安げに言うスバル。

（…決まっている…方法が見つかるまで諦めずに探すのだ！）

スバルがマグナムエースの表情を見るとその顔にどこか信頼できる気持ちになれた。

（…ひとつわかったことがある…昨日の夜、俺が目覚めた時とさっきの模擬戦のときは身体に負担は無かった…恐らくどちらかの意識が眠っていると身体の負担はないのだろう…しばらく俺は眠りにつく…すまない）

その瞬間鏡からマグナムエースの姿が消えた。するとスバルの身体はとても軽くなった。

「ちょっと！マグナムエース？」

「…スバル…あんたなに騒いでるの？」

「ティア！あのね！」

スバルはティアナにマグナムエースの事を話した。

「はぁ？何言ってるの？頭でも打ったんじゃない？」

「ホントなんだって！信じてよ！」

いきなり自分の中にもう一人の別人格が居るのを信じろなど到底無理な話である。

「わかった！証拠見せる！マグナムエース！出てきて！」

スバルは目を閉じマグナムエースを呼び出そうとするがマグナムエースは反応しない。

「…終わった？あたし部屋帰るわ」

呆れた顔で部屋に帰るティアナ。

（…ちょっと！マグナムエースどうしたのよ！）

いくらスバルが呼び掛けてもマグナムエースは全く反応しない。どうやら深い眠りについたようだった。

（…もしかして…私に迷惑かけないように眠ってくれてるの？）

マグナムエースの気遣いに少しだけ嬉しく思っていた。

これがマグナムエースとスバルの出会いだった。

続く

第二話 心の目を覚ませ

「野球大会？」

なのはの提案に？のはやて。

「…うん…なんか今日のスバル…全く動きが違ってた」

なのはは今日の模擬戦の映像をはやてに見せた。

「ほんまや…何て言うか戦い慣れしとるわ」

「…うん…正直今日のスバルの動き全く予想できなかった…一瞬で懐に入れちゃった」

「で？何で野球なん？」

「今日のスバルの動きなんか野球みたいでしょ…それにもしかしたらあの人はスバルじゃないかも…なんかあの動き…前にどこかで見たことがあるような気がする」

「わかった…なのはちゃんの頼みならしゃーないわ」

第二話 心の目を覚ませ

その頃マグナムエースはスバルからこの世界の事を聞いていた。機動六課、魔法。マグナムエースには知らない事だらけだった。そし

てマグナムエースは自分の居た世界のことをスバルに話した。

（じゃあマグナムエースは別の世界から来たの？）

（・・・ああ・・・何故かは分からないが・・・もしかしたらあの声に呼ばれたのかもしれない）

（あの声って？）

（俺の夢に出てきたんだ・・・そしてこの世界の事も）

（え？ロボットって夢見るの？）

（ああ、他のロボットは知らないが俺たちの世界のロボットは夢を見る）

（へえロボットも夢見るんだ）

スバルはマグナムエースの事に興味津々だったがマグナムエースは一つ気になることがあった。

（良いのか？スバル。俺が表に出てると辛いんじゃないか？）

（ん？大丈夫！大丈夫！マグナムエースの事知りたいし、それにお互いの事は知っておいたほうが良いって！）

スバルの元気な表情にマグナムエースはやれやれといった表情だった。

（真っ直ぐだな君は）

（え？そうかな？それにしても不思議だな～アイアンリーグかぁロボットのスポーツなんて）

（俺からすれば魔法の世界のほうが不思議だな）

（ねえねえ！マグナムエースは何のスポーツのリーガーなの？）

（俺は野球リーガーとして造られたが野球専門のリーガーなわけじゃない）

（え？野球以外のスポーツも出来るの？）

（まあな。俺たちロボットも人間と同じさ。例えばタイプが違おうと通じるものが一つある）

（通じるもの？）

（スポーツマンシップだ。それさえ忘れなければどんな競技だろうと己を磨き合うことができる）

（磨き・・・あう）

（そうだ・・・アイアンリーガーを磨くのはアイアンリーガーだ）

スバルはマグナムエースの言葉に人間以上の人間臭さを感じていた。

（・・・それとスバル・・・俺のことは黙っていてくれないか？）

（え？どうして？）

（・・・俺があの声に呼ばれたのなら・・・俺の意識だけではなく身体もこの世界に呼ばれるはずだ・・・しかしこの世界に来たのは俺の意識だけで君の身体の中に入った・・・何かの意図があるのかもしれない・・・俺の考えすぎじゃなければいいが）

（何かの意図か・・・わかった！マグナムエースの事は秘密にしておく・・・だけど一人にバラしちゃった）

（誰にだい？）

（私のパートナーなんだけど大丈夫！大丈夫！絶対に誰にも言わないから！と言うより信じてないから！）

（わかった。なら俺も信じよう）

（え？どうして？）

（君が信じているなら俺も信じるだけさ。それ以上の理由がいるか？）

（え？）

マグナムエースの真っ直ぐな心にスバルは少し照れた。そろそろ訓練時間が近づいてきたためティアナが迎えに来た。

「スバルー。そろそろ時間よ」

「あ、うんわかった！」

（じゃあマグナムエースそろそろ訓練の時間だから私行くね）

（ああ、気をつけて）

と言いつつも実際マグナムエースはスバルと一心同体のためスバルにくっ付いていく形になった。フォワードメンバーを一同に集めたのは。

「」「野球大会!？」」「」

なのはのいきなりの発言で驚く一同。

「そうだよ。この四人と六課のメンバーで試合をやるチームはフォワードと私を含めたチームだよ。相手は今チーム編成中だよ」

「そんな！急に野球って言われましても」

戸惑うエリオ。なのははスバルの方を向いた。

「…スバルは経験があるんじゃないかな？」

「え？」

スバルは夢の事とマグナムエースの事を考えて答えた。

「は！はい！ぴ！ピッチャーを少し！」

（…スバル？）

ティアナが念話でスバルに問い掛けた。

（なにティア？）

（あんた本当にやったことあるの？）

（も！勿論！）

慌てるスバル。

「なのはさん：私がキャッチャーやります」

「ティアナよろしくね」

スバルとティアナが向かい合った瞬間スバルはマグナムエースを呼び出した。

（マグナムエース、出てきて）

するとマグナムエースの意識が表面化しはじめた。

（どうしたんだスバル？）

（マグナムエースってピッチャーだったんでしょ？ティアに投げってみてよ）

（・・・え？・・・無理だ・・・危険すぎる）

マグナムエースはいくら身体が人間でも自分はアイアンリーガー。自分の投げる球を人間に向けるのは危険だと判断していた。

（大丈夫！！私たちだっていつも凄い訓練うけてるんだもん！！マグナムエースの球だって絶対取れる！！）

（…わかった）

スバルが目を開じるとマグナムエースに切り替わった。スバルの表情が変わる。その光景をなのはは見守っていた。マグナムエースがピッチングのフォームに入り一球投げるとティアナのミットにボールがヒットした。

「重！こんな速い球とれるなんてあたしも捨てたもんじゃないわね」

「…スバル」

なのはは重い表情でマグナムエースを見つめた。

「…今度は全力で投げてみて・・・私の目は節穴じゃないよ」

（え！今の剛速球が本気じゃないの？）

ティアナの疑問を浮かべているとマグナムエースはなのはに返事をした。

「…わかりました」

マグナムエースがピッチングのフォームに入るとティアナに向かってさっきよりも速い球を投げた。

「え！うわああああ！」

ティアナがボールをキャッチしようとした瞬間ティアナはミットごと吹き飛ばされてしまった。その光景を見て啞然とするなのは達とスバルだった。

（なに！マグナムエースあなた何者！）

内心で動揺するスバル。

「…良い球だね…だけどその球は捕れない…私を含めて」

なのははポジションチェンジを考慮したがティアナが反発した。

「待ってください！次は必ず取ってみせます！スバル！もう一球！」

ティアナがミットを構えるとマグナムエースはなのはの方を向いた。

「…あと一球だけ」

「…わかりました」

マグナムエースはティアナの方を向き構えた。

（…無理だ…今の彼女がどんなに全力を出しても…俺の球を捕ることは出来ない）

マグナムエースはティアナが吹き飛ばされるギリギリまで力を絞り投球するがそれでも豪速球な事には変わらない。

「く！うわああああ！」

またも吹き飛ばされるティアナ。マグナムエースはスバルに一つの提案をした。

（スバル…君がキャッチャーになるんだ）

（え？ マグナムエースはピッチャーだったんじゃない）

（…これは君たちの試合だ…君たちが自分の特性を活かしたポジションの方がいい）

（…けどそれじゃ勝てない）

（…これは親善試合だ…勝ち負けは問題ではない…大切なのは自分達が力の限り正々堂々戦い抜く事が大切なんだ）

（…正々…堂々…わかった…私がキャッチャーをやる）

「なのはさん！」

「ん？」

「私がキャッチャーをやります！」

「わかった…スバル…キャッチャーをお願い…ピッチャーはティアナ…お願い」

なのはの提案にティアナは不服だった。

「待ってください！キャッチャーを探してください！！スバルがピ

ツチャーになれば勝てます!!」

「・・・待って・・・ティア」

スバルは先ほどのマグナムエースの言葉を伝えた。

「・・・これは戦闘じゃないよ・・・勝ち負けは問題じゃないよ・・・大切なのは、力の限り正々堂々戦うことなんだよ」

「正々・・・堂々？」

ティアナは不思議に思った。いくらなんでもスバルからそんな言葉が出るはずがない。ティアナの中に一つの疑問が生まれた。

（・・・まさか昨日スバルが言ってたことって本当のこと？）

「・・・スバル・・・ポジション決めはよろしくね」

「え？なのはさん！」

慌てるスバルをよそに一同解散になった。昼食の時間になるとスバルはポジション設定のため頭を悩ませていた。

「うーん！野球のポジションなんて決めた事ないからわかんないよ」

（・・・君がやすうけあいするからだろう）

しばしば呆れ気味のマグナムエース。

（うーだってえーそうだマグナムエースも一緒に考えてよ）

（俺も？）

（うん！私にも一緒に教えてよ）

マグナムエースはスバルにフォワードメンバーについて聞いた。それぞれのチームポジションや能力の特性についてなど。

（・・・そうだな・・・まずピッチャーはティアナだ）

（なんで？）

（・・・彼女の役目はおそらく戦闘力で劣るような状況でも戦術で戦場を制することだろう・・・彼女ならピッチャーに必要な咄嗟の判断能力が備わっている・・・君たち4人の中ではピッチャーは彼女しかないない）

（え？）

スバルはマグナムエースの洞察力に驚いていた。戦闘訓練を1回だけ見ただけかつスバルからの簡単な説明だけで、なのはの訓練目的がわかったからだ。

（そしてキャッチャーはスバル・・・君だ）

（やっぱり私にパワーあるから？）

ちよっと複雑そうな表情のスバル。

(確かにそれもあるが・・・ピッチャーの投げる球は単純な腕力で受け止められるわけじゃない・・・ピッチャーとキャッチャーは信頼関係が成り立たないといけないんだ・・・俺にも信頼できるキャッチャーが居た・・・彼はどんな時でも俺を信頼してくれた・・・だから俺も精一杯投げる事が出来た・・・君達はお互いの事を知っている・・・きつといいバッテリーになるはずだ)

(・・・けど・・・単純な腕力だけで取れないって)

(・・・君がティアナの投げる球ならどんな球でも受け止める事が出来る・・・ティアナも君にならどんな球でも投げる事が出来る
そう思える関係が出来ているはずだ)

(・・・そう・・・かな)

(・・・エリオはショートだな・・・彼の持ち味は確かにスピード。
遊撃手には彼のスピードが頼りになる・・・本当はサードになつてほしいところだが)

(何か問題あるの?)

(・・・ああ、キャロだ)

(・・・まさかキャロが足手まといってことじゃ)

(そうじゃない。表には見せないが彼女はまだ不安定だ・・・誰かのサポートが必要だ。今のメンバーで彼女に一番近いのはエリオだ。彼が支えになってお互いの力を補うようにすればいい。だから彼女はセカンドだ。エリオと一緒に彼女は安定した力を発揮できるはずだ)

(なるほど)

スバルはマグナムエースの洞察力に感心していた。たった一回の出会いや説明でここまでメンバーの分析をするとは思わなかったからだ。

(凄いねマグナムエース。ここまで分析するなんて)

(別に俺は分析したわけじゃない・・・ただ彼女達の心を感じただけだ)

ロボットとは計算や合理性を求める物だと思うかもしれないがマグナムエースのような人間臭いロボットはスバルは始めて見た。

翌日

「・・・というポジションにしてみました」

スバル(マグナムエース)の選んだフォワードメンバーのポジションになのは納得した。

「・・・確かにみんなの特性が活かされたポジションだね」

「待ちなさいよ！」

ポジションにティアナが抗議した。

「なんであんたがピッチャーじゃないのよ!! キャッチャーなんて探せばいくらでも居るでしょ!!・・・それに・・・あたしがピッ

チャーなんて」

「ティア・・・キャッチャーは誰でもいいんじゃないんだよ。絶対に信頼できる人じゃないと・・・私はティアの投げるボールならどんなボールだって受け止める!!お互いを信頼する心があれば実力以上の力が出せる。受け売りだけどね」

スバルの真っ直ぐな言葉にティアナはおろか、なのはまでもが納得した。

「スバル・・・そこまで言うなら野球のコーチやってみようか」

「へ?」

「じゃあ私はシャーリーとデータ収集に入るからよろしく」

「え! ちょっとなのはさん!!」

慌てるスバルをよそに、なのは笑顔で去っていった。

(ええ〜ん! マグナムエース)

(・・・わかった・・・ただしちゃんと君も練習するんだぞ)

(了解!!)

スバルはマグナムエースに変わるとコーチに入った。マグナムエースはまずボールに慣れるためキャッチボールから開始した。

「よし! 行くぞ!」

ステップアップしマグナムエースのノックが開始された。最初の挑戦者はキャロだった。

「きゃ！」

いきなりの速球に思わず目を瞑ってしまったキャロ。

「怖がっちゃ駄目だ！まずはボールを見る事から始めるんだ！」

マグナムエースはキャロにあわせ軽い流し打ちのノックに切り替えた。やはり避けてしまうキャロだが段々目が慣れてきたようで手を出すようになってきた。

「良いぞ！その調子だ！」

次の瞬間キャロが打球を捕ることに成功した。

「と・捕れた」

「よし！今の感覚を忘れないようにもう一度行くぞ！」

マグナムエースがノックを再開するとキャロは5回に1回の確立でキャッチし始めた。

「大分良くなったぞキャロ！」

「あ、ありがとうございます」

マグナムエースの存在に気づいていないキャロからすればスバルの

豹変に少し驚いていた。

「次！」

「さあ来るなら来なさい！」

次はティアナの番だ。ティアナはボールを捕ろうとした瞬間股下をすり抜けてしまい顔が赤くなった。恥ずかしいらしい。

「手だけで捕ろうとするからだ！身体全体でボールを止めるんだ！
！」

「く！止めりゃいいんでしょ止めりゃ！！」

ティアナは体当たり方式でボールに食らいついた。時には身体につけボールの反動が弱まったところをキャッチした。

「どう！？スバル」

「その調子だ！とにかく！ボールを止めるんだ！！」

各自の守備練習が終わると一時休憩に入った。中でも高速移動の連続だったエリオの疲労は困憊していた。

「ふう野球の練習って結構体力使うんですね」

「愚痴るなよ・・・お前のスピードを頼りにしてるんだからさ」

「はーい」

マグナムエースの信頼を表した言葉にエリオは少し照れた。そしてマグナムエースはスバルに裏庭に行くように指示した。

（マグナムエースどうしたの？）

（今から君のキャッチャーの練習だ）

（あ、そうか私がキャッチャーなんだ）

（・・・なのはは、どうやら俺にコーチさせる気みたいだ・・・君を指導できる時間が少ない・・・空いている時間にキャッチャーの練習をしてもいいか？）

（望むところ！！）

マグナムエースはまずスバルにボールを見極める事から始めた。

（いいかスバル・・・キャッチャーはただボールを受けるだけじゃない・・・すぐに切り替えしが出来るようにボールを押し返すパワーが必要だが、まずは身体でボールをとめることを覚えるんだ）

（はい！）

ピッチングマシンを使いスバルはボールを見極めとにかく受け止めた。

（よし！その調子だ！どんどん行くぞ！）

マグナムエースは口で理論を教えるより身体に覚えさせる指導方法をとった。その方がスバルに合っていると思ったからだ。マグナム

エースの予想通りキャッチを続けていくうちにスバルはコツを掴んだのかマグナムエースの60%並の投球をクリアできるようになった。段々キャッチが楽しくなってくるスバル。

（すごい練習すればするほど楽しくなってくる！！）

（それが一番大切なことだ）

（え？）

（楽しんでプレーする事が大切なんだ。単純な事だけど一番大切なことなんだ）

（・・・マグナムエース）

「スバル」

「え？」

スバルが振り返るとそこにはなのはが居た。

「・・・どうかな？みんなの調子は」

（・・・ああどうしよう！マグナムエース変わって！！）

（え？おいスバル！）

マグナムエースの抗議も虚しくスバルが奥に引っ込んでしまったため強制的にマグナムエースが表に出てきてしまった。しばし困るマグナムエース。

「スバル？どうしたの？」

「え？いや、その、凄いですね。皆上達が早いです・・・飲み込みがいいですね」

「そっか・・・ねえ・・・スバルは投げないの？」

「え？」

「さっきティアナが『キャッチャー入門』って本読んでたけど・・・どうしてもあなたに投げさせたいみたいだよ」

なのははそれだけ言うとマグナムエースの前から立ち去っていった。

夜。スバルが眠っていると夜中に部屋を出る音が聞こえた。

（スバル・・・すまないがちょっと身体を借りるぞ）

マグナムエースは少し気になったのかベッドから降りた。すると下のベッドで寝ているはずのティアナの姿が無かった。

（・・・こんな時間にどこに行ったんだ？）

マグナムエースが外に出るとグラウンドからピッチングマシンの音がした。そこにはティアナの姿が合った。キャッチャーの練習をしているようだった。ボールを受け止めきれず弾き飛ばされるティアナ。だがその眼は死んでいなくむしろ立ち上がるたびに闘志が膨れ上がっていくのをマグナムエース感じていた。

「・・・マグナムエース」

その瞬間マグナムエースは振り返った。

「・・・やっぱり・・・あんたスバルじゃないでしょ・・・口調も全然違う・・・馬鹿げてると思ったけど・・・スバルの言っていることは本当だったみたいね」

「・・・」

マグナムエースは無言のまま立ち去ろうとした瞬間。ティアナがマグナムエースの前に立ちはだかった。

「・・・なんであんたがピッチャーをやらないの?・・・あんたの球をあたしが受けられなかったから?」

「・・・」

「黙ってないでなんか言いなさいよ!そんなにあたしみたいな凡人と話すのが嫌?」

その言葉にマグナムエースは振り向いた。ティアナはマグナムエースに続ける。

「あんたなんかに分からないわよ!凡人のあたしの気持ちなんか!」
ティアナの睨みにマグナムエースは微笑んだ。

「・・・思ったとおり・・・君は凄くいい目をしている」

「え？」

「それにその闘争心・・・リーガーとして十分な素質がある」

「なによそれ！お世辞のつもり！？」

ティアナの反論にマグナムエースは目を伏せた。

「・・・そうか・・・今の君には何を言っても届かない・・・だがこれだけは言っておく・・・真の力とは才能や即物的な力だけではないということだ」

「・・・強くなる事に才能以外の何が必要なのよ！！！！」

「・・・ルーキーの君にはまだわからないだろう・・・だがいつかわかる 때가来る・・・人を磨くのは人だ！！」

マグナムエースはそれだけ言うとティアナにボールを投げ渡した。

「・・・これが俺の第一球だ・・・君が心のさらしを振り払う事が出来れば俺の球を捕ることが出来るはずだ」

「・・・なん・・・ですって」

マグナムエースの意外な発言にティアナは混乱した。

「・・・その時がきたら俺は必ず君に投げる・・・自分を信じろ」

それだけ言うとマグナムエースはティアナの前から立ち去っていった。

た。

第二話 心の目を覚ませ（後書き）

ついに始まった野球対決！だけど私のせいでマグナムエースが実力を出せない。その時マグナムエースの出した方法とは。

次回 疾風！アイアンリーガーStrikers 魔球44ソニック
正々堂々！試合開始！

第三話 魔球44ソニック

「ああ？野球大会に出ろだ？」

なのはの突然の頼みに仰天のヴィータ。

「ねっ！お願い！」

「なんであたしが？」

「だってあの5人と五分にやれるのってヴィータちゃん達くらいだもん」

「なるほどな・・・あ？5人？」

「うん。私の直感なんだけどもう一人凄い人が居そうな気がするの・・・もしかしたら・・・私たちよりも強い力を持っている」

なのはの意見に少しフリーズするヴィータ。

「そこまで言うならやったろうじゃねえか！」

ヴィータが参加する事になった。

「フェイトちゃんもお願い。もしかしたら私たちの知らない何かかもしれない」

「わかったよ」

二つ返事のフェイトになのは釘を刺した。

「これは親善試合だけど・・・スバルの中の何かを探すためのもの・
・スバルにとって危険なものかもしれない」

なのは達隊長陣の考えは親善試合のほかにスバルの中に居るマグナムエースの正体を知るためでもあった。

第三話 魔球44ソニック

「・・・それにしても相手チーム凄い人が集まったわね」

どこから用意されたのか野球のユニフォームに着替えたフォワードチーム。ティアナは相手チームを見て驚いている。なにしろ相手は歴戦の勇士ライトニング隊長フェイト・T・ハラOWNとスターズ副隊長ヴィータだから。その他一般隊員も含めちゃんと9人居た。

「・・・野球とはいえフェイトさんと戦うなんて」

「・・・ちよつと複雑です」

エリオとキャロも内心複雑そうだ。

「でもなんでフェイトさんやヴィータ副隊長が野球に参加するんだろう？」

スバルの疑問に拳骨のティアナは念話に切り替えた。

(あんだ馬鹿！？どうせ原因はマグナムエースでしょ！？)

(あ！)

スバルはティアナの指摘に始めて気がついた。

(・・・あんたに言われたからマグナムエースの事黙ってるけど！
マグナムエースの正体探る目的ありありでしょ！じゃなかったら野球なんて言い出さないわよ！！)

(だってティア！)

(だってクソもないわよ！！大体あんたがマグナムエースに野球の指導させてんのが問題でしょ！！)

(ううー)

(こうなったら！マグナムエースに責任とってもらって試合に参加してもらおうからね！！そうマグナムエースに言っておきなさい！！)

(ちよっとティア！)

ティアナはそれだけ言うと言話を切った。どうせスバルの事だからマグナムエースを呼び出すティアナはそれを狙っていた。

(見てなさいマグナムエース！あたしもやるときはやる！)

なのはからスバル達フォワードチームと隊長チームにルールが説明された。

「それじゃあルールを説明するね。相手の妨害以外なら魔法は使ってもよし」

「え！？魔法使っていいんですか！？」

意外すぎるルールに啞然とする一同。

「ていうか魔法使ったら何でもアリアリになるんじゃない！」

「説明終了！魔力値はシャーリーが常時計っているからそのつもりで」

と実況席と書かれた場所で空中パネルを表示しているシャーリー。

（（（なに考えてんだこの人）））

フォワード一同その考えでまとまっていた。

（・・・俺も魔法を使うとは思わなかった）

マグナムエースも予想外の出来事に汗だった。そして試合が開始され先攻は隊長チームでフォワードチームは後攻になった。フォワードチームは守備に付いた。ピッチャー、ティアナ、キャッチャー、スバル、ショート、エリオ、セカンド、キャロだった。

「いくわよスバル！！」

ティアナの第一球が投げられた。ストレートが1番バッターを空振りさせる。マグナムエースの特訓のためか形のある投球が出来るティアナ。スバルはその球を確実にキャッチしている。

「結構重いな」

スバルはキャッチをしながらティアナの投球を受け止めていた。カーブやチェンジアップなど変化球を自在に操り三者三振で打ち取るティアナ。そして後攻のフォワードチームの攻撃。相手ピッチャーはヴィータ、フェイトはサードだった。第一打者は一般隊員だった。

「いくぜ！アイゼン！！」

その瞬間ヴィータはボールを自身のデバイス『グラーフアイゼン』で投げた・・・というより打球を打った。球は物凄いスピードとパワーをかね揃えていた。

（（（あんなのありか！！！！）））

とツツコムフォワードご一行様。キャッチしたキャッチャーは物凄く手が痛そうだった。一番バッターのエリオだがヴィータの打球に立ち尽くしているエリオ。

（こ・・・こんな反則技打てるわけないよおおおお）

ヴィータの打球に恐れを感じ始めているエリオ。

「はああああああ！！」

グラーフアイゼンの打球にエリオはまた立ち尽くしてしまった。結局3ストライクでバッターアウトになってしまった。

「こ・怖かった」

もったもな意見である。なにせ砲撃魔法を打てと言っているようなものだからだ。

「い・いつてきまゝす」

もう既に敗北状態の二番バッターキャロ。キャロの手が震えている。そしてスバル、ティアナ、他のメンバーも既に敗北ムードだった。

（いかん・・・皆既に心が折れ始めている・・・あの打球に恐怖しているんだ）

マグナムエースはスバルの意識の中から見ている。野球経験のないメンバー達や野球の経験はあっても、あのような打球に遭遇したものは少ないだろう。マグナムエースを除いて。

「やっぱり駄目でしたあ」

焦るキャロ。三番バッターはスバルとマグナムエースだった。

（どうしよう！あんな球打てないよ）

（スバル・・・気持ちで負けるな）

マグナムエースのアドバイスにバッティングフォームに入るスバル。

（・・・スバルの中の何か・・・なんかわかんねえが・・・全力でいくぜ！！）

ヴィータの本気の打球が繰り出された。さっきより素早い打球にス

バルはやはり棒立ちになった。

（や！やっぱり怖い！！）

やはり砲撃魔法並みの打球に戸惑うスバルだが意識から見ていたマグナムエースは違っていた。

（スバル・・・一回だけ変わってくれ）

（へ？）

マグナムエースはスバルから身体の主導権を借りた。バッターになったマグナムエースはヴィータの球を見送った。ストライクをとられるマグナムエースだが。

（・・・確かにスピードとパワーがある・・・しかし）

マグナムエースは今まで腕を磨きあってきたアイアンリーガー達の事を思い出した。ヴィータの第三球が繰り出された瞬間。

「でいやあああああああ！！！」

マグナムエースはヴィータの打球を打った。

「なに！」

マグナムエースはゴールドアームのライジングブラストやワイルドホークのファイヤーコメットなど魂を籠めた魔球を見てきた。ヴィータの打球はそれに勝るとも劣らない球だったが気持ちで折れていなかったマグナムエースはヴィータの球を捕らえた。

「は!!」

しかしサードラインに伸びた打球をフェイトがファインプレーで防ぎ3アウトチェンジになった。

(ああ!おいしい!!)

スバルはそう思いながらマグナムエースがベンチに入るのを見送っていた。ベンチに戻るマグナムエースにエリオとキャロが駆け寄った。

「スバルさん!どうやって打ったんですか!」

「そ!そうです!あんなボールの見えない魔球」

マグナムエースは少し微笑むと一言だけ答えた。

「・・・気持ちで負ける・・・試合は己を磨き相手を磨くものだ・・・」

「じゃあ僕でも打てるようになるんですか!?」

「ああ・・・チャンスは自分で掴むんだ・・・ただし・・・欲張るなよ」

マグナムエースはエリオとキャロにそれだけ言い残すとスバルに変わった。マグナムエースの言葉を聞いた瞬間フォワードチームに少しだが闘志が溢れ始めてきた。

その頃外野席のなのはとシャーリーは。

「やっぱり・・・只者じゃなかったね」

「なんかスバルさんがあの球を打つとき凄く魔力が増大したんですけど大丈夫でしょうか・・・」

スバルのデータ指数が一時臨界を超えていた。なのはとシャーリーは若干不安を感じていた。

（こりゃ・変なところは見せられないわね）

「てりゃ！」

ティアナは四番バッターであるヴィータに渾身のストレートを放つがヴィータはホームランでティアナを強襲した。次の打者はフェイトだった。

「てりゃ！」

出塁もしていないのにフェイトはバント体勢に入った。バントは成

功しティアナ、スバルがボールを拾いに言った瞬間。閃光が走った。いつの間にかフェイトはベースに帰って来た。そうフェイトは持ち前のスピードでランニングホームランに成功していたのだった。通常人間の目には捉えられないがダイヤモンドに刻まれた煙がそう物語っている。

「くっそ！」

悔やむティアナをよそにフェイトはあることを考えていた。

（・・・まだ出ないの？スバルの中の何か）

その後もヴィータのホームラン、フェイトのランニングホームランで徐々に点をもぎ取っていく隊長チームだが、マグナムエースにかんかされたフォワードチームもヴィータの打球を捕らえ始め点をもぎ取り始めてきた。エリオもマグナムエースのアドバイスと見様見真似のランニングホームランで点をもぎ取った。試合は五回の表。何やらティアナがなのはに一つの事を提案し始めた。ティアナの提案になのはは応じたのか、なのははピッチャー交代を指名した。

「ピッチャー交代！リリーフ、スバル。キャッチャー、ティアナ」

その決断にスバルだけではなくマグナムエースも驚いていた。

「なのはさん！どういうことですか！？」

流石に困惑するスバル。

「ティアナがちょっと肩壊したみたい・・・今のメンバーだとスバルしかピッチャーになれないよね」

なのはの意味ありげな雰囲気のスバルだけではなくマグナムエースも困惑していた。

（どういうこと！？私ピッチャーなんて出来ないよおお！！）

マグナムエースは一つの心当たりがあった。

（・・・まさか・・・俺の正体を探るためにこの試合を？彼女はど
ういうつもりだ？俺の球は今の彼女には取れない）

（なのはさんなに考えてるんだろう！？）

マグナムエースは気づいた。野球経験の無いものや明らかに実力の
違う隊長陣を試合相手にしたこと。この試合は仕組まれたものだど。

（・・・だが俺が投げなければ彼女はこういう試合を繰り返すかも
しれん）

（どうするのマグナムエース！？）

（決まっている・・・例えどんな試合でも俺は力の限り正々堂々戦
う・・・それが使命だ）

（・・・マグナムエース）

（スバル・・・すまないがしばらく身体を借りるぞ）

（・・・わかった）

スバルが目を閉じた瞬間スバルの顔にゴーグルが形成された。マグナムエースに切り替わった証拠だ。

「スバル！あたしは特訓であんたの球を完全に取りれるようになった！だから思いっきりきなさい！」

ティアナはマグナムエースの正体がばれないようにあえてマグナムエースをスバルと呼んだ。マグナムエースはティアナの目を見たその瞳は闘志が溢れ身体能力を超えていた。

（・・・その目・・・今の君なら・・・必ず）

マグナムエースは投球フォーム入りティアナに第一球を投げる。ティアナはボールを受け止める瞬間一瞬後ろに下がりボールの勢いを殺しキャッチする事に成功した。ティアナはスバルやブルアーマーのようにパワーでボールを受け止めるのではなく技術でボールを受け止める方法に出たのだった。マグナムエースはニヤリと笑うとマウンドに立った。

（いくぞ！ティアナ！！）

投球フォームに入るマグナムエースそしてマグナムエースの直球がティアナのミットにヒットした。啞然とするバッター。マグナムエースの剛速球に驚くフォワード陣だが隊長陣はその投球に疑問を感じていた。

「おかしい・・・スバルまだ気を使って投げてるみたい」

「それどういう」

「スバルは本気じゃないってこと」

なのはの指摘にフェイトは哑然とした。二者三振に打ち取ったマグナムエースだが四番打者のヴィータになった。その途端ヴィータはホームラン予告をしだした。

「スバル・・・まだあんな球投げんなら、あたしは簡単に打つ・・・勝負したけりゃ本気で投げんだな」

ヴィータはマグナムエースがまだ本気で投げていないことを見抜いていた。その瞬間ティアナは。

（え！？マグナムエースはまだ本気で投げてなかったの！？）

死ぬほどの特訓でマグナムエースの球を捕れるようになったティアナにとってヴィータの指摘は相当ショックだった。焦った表情が浮かぶがマグナムエースは構わず投球に入った。

「ティアナ！気にするな！今は試合に集中するんだ！！」

マグナムエースの剛速球ストレートだがヴィータはそのスピードを完全に捉えていた。

「おりゃああああ！！」

ヴィータの打球がマグナムエースの顔面スレスレを突きぬけホームランになった。

「スバル・・・おめえの球は確かに速ええ。だけど直球なら当てる事は出来る・・・勝負すんなら本気で投げるんだな・・・おめえま

さか・・・本気で投げたらティアナに捕れないと思ってんのか？・・・それともあたしらを舐めてんのか？見損なってるじゃねえよ！！」

歴戦の勇士には相手が本気がどうかわかるのかヴィータはマグナムエースが本気の投球をしていない事を見抜いていた。ヴィータの言葉にティアナが続いた。

「マグ・・・スバル！！本気で投げなさい！！」

マグナムエースは無言で首を振った。

（・・・駄目だ・・・今あの球を投げたらスバルとティアナを殺してしまう・・・待つんだチャンスを）

マグナムエースの球に目が慣れてきた隊長チームの打者達は打つのではなく当てるだけの作戦に切り替えた。マグナムエースの投球はスピードとパワーが両方合わさっているため当てるだけでもかなり跳んだ。たちまち10点の差がついた。現在25対15で隊長チームが勝っている。

「スバル・・・おめえを買い被っていたみてえだな・・・キャッチャーに気を使って本気ださねえなんて・・・そんなに本気の球を打たれるのが怖ええか！？」

マグナムエースの正体を探るためなのかヴィータの挑発とも思える野次を繰り返して来た。とうとうティアナがマグナムエースの元まで詰め寄った。その表情はとても苦しそうだった。

「マグナムエース・・・お願い・・・次からはフルパワーで投げて！！絶対に捕ってみせる」

「それはできん君達を殺したくない」

「・・・君達って・・・マグナムエース!!!!」

ティアナから強い意志を感じたのかマグナムエースは一つの方法を出した。

「・・・たった一つ方法があるとすれば・・・君達がお互いの心を解き放ち・・・限界突破するんだ。そうすれば俺の44ソニックを受け止められるはずだ!」

「・・・限界・・・突破」

限界突破その言葉がティアナが反応してしまった。

「・・・無理よ・・・限界突破なんて・・・そう簡単にできるはずない」

ティアナの不安な表情にマグナムエースは答えた。

「・・・心で負けるな」

「え?」

「心で負けなければ必ず限界突破できる・・・自分を信じろ・・・そして・・・仲間を信じろ」

「・・・仲間を?」

マグナムエースは無言で頷きピッチャーマウンドに向かった。マグナムエースがピッチャーマウンドに立つとスバルが念話で語りかけてきた。

（・・・マグナムエース・・・さっきの話・・・どういう事？）

（さっきの話？）

（本気で投げたら私も殺すって）

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・）

マグナムエースは無言になった。それでも詰め寄るスバル。

（・・・答えて！！マグナムエース！！！！！！）

（・・・そうだ・・・今の君では俺の球に耐え切る事が出来ない）

（私は！！耐えられる！！！！絶対！！！！）

（なら彼女を信じろ・・・君なら出来る・・・そして彼女にもだ・・・人を磨くのは同じ人だ）

マグナムエースの言葉にスバルとティアナは考えた。

（ティアナを・・・信じる）

（スバルを・・・信じる）

その瞬間二人から膨大な魔力が噴き出した。スバルとティアナは自分の魔力を無理矢理引き出し始めた。あまりに膨大すぎる魔力。

「ううあああああああああああああああああ!!」

「くっくくくくくくくくくくくくくくくくくく!!」

「いけねえ! 止めるんだ!!」

二人は膨大すぎる魔力を制御する事が出来ない。なのはを含めヴィータやシャーリーが止めに入ろうとした瞬間。マグナムエースだけはスバルの意識の中から叫んだ。

「・・・俺は・・・二人を信じる!!」

マグナムエースは力が増大し続けるスバルとティアナに精一杯の魂を伝えた。

「・・・スバル・・・ティアナ・・・心の力は自分のためだけに使
うんじゃない・・・君達が力をお互いに分け与えるんだ・・・お互
いの心を信じる・・・お互いの心を感じ取れ!」

(ティ・・・ティアの心)

(・・・スバルの・・・心)

「「くう! うわあああああああああああああ!!!!」
「!!」」

スバルとティアナの魔力が天を貫いた。二人の魔力エネルギーを計測しているシャーリーが慌てふためいている。二人の魔力ゲージが臨界を超えているからだ。スバルとティアナが光から現れた時二人は変わっていた。スバルの瞳は金色に。ティアナも身体から魔力が溢れ出していた。

「・・・お前・・・何てことしやる!!」「待ってください!!」

ヴィータがマグナムエースに抗議しようとした瞬間。スバルとティアナがヴィータを止めた。

「お前等! そんな魔力に耐えられるわけねえだろ!! 目に魔力映ってるじゃねえか!」

「・・・それが全然辛くないんです・・・なんか身体から自然に噴き出すんです」

「なに!? シャーリー!」

「確かに魔力は異常な高まりを見せているけど・・・信じられません! 二人の身体に全然負担がかかっていないんです!!」

「な!?! リミッター外れてんじゃないやねえだろうな!!」

「それがリミッター付けたままリミッター外した時の数値超えてるんです!!」

驚愕するヴィータ。それに引き換えスバルとティアナは心地よい力

に満ち溢れていた。

（・・・感じる・・・これがティアの心）

（・・・これが・・・スバルの心？それに）

（（マグナムエースの心））

スバルとティアナはお互いの心だけではなく、マグナムエースの心を感じ取っていた。そしてスバルが念話でマグナムエースに嬉しそうに叫んだ。

（・・・マグナムエース！！）

マグナムエースはスバル達に笑みを向けサムズアップした。

（これからが俺達の逆襲だ！）

（うん！）

（任せなさい！）

現在9回表23点差で向かえた第1バッターはヴィータだった。

「・・・待たせたな・・・ヴィータ！」

ニヤリとするマグナムエースに対しヴィータは冷静さを失っていた。

「打ち取ってやる！サヨナラホームラン打ってやる！！！」

（投げられた・・・耐えられた！マグナムエースのフルパワーの球に）

そしてヴィータもバットを構えたまま震えていた。

「あ・・・あ」

「これが44（フォーティーフォー）ソニックだ！」

「あ！」

44ソニックを見たなのは達は驚きを隠せなかった。そして計測器を構えていたシャーリーも44ソニックを解析し始めたがその途端計測器が破壊された。

「何！？あの球！？スバルは一体！」

そしてマグナムエースは44ソニックを連投し3者3振に抑えた。勝負は48対25でフォワードチームは負けてしまったが響き渡る歓声。

「なんか・・・23点差なのに負けた気がしないね」

「だって勝ったんだもん！」

フォワード達に喜ぶ顔をよそに一人の剣士がその光景を見守っていた。ピンクの髪をしたポニーテールの女性だった。

「ん？」

マグナムエースは視線に気がつき女性のほうを向いた。マグナムエースの姿を見ると女性は笑みをこぼし去って行った。

（スバル・・・あの人は？）

（え？ああシグナム副隊長の事？どうしたの？）

（・・・いや・・・彼女から只ならぬ気迫を感じた）

マグナムエースの予感当たっていた。

夜、六課宿舎の裏庭でシグナムは自身のデバイス『レヴァンティン』を抜いていた。

「はあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！」

レヴァンティンの一閃が空気を切り裂いた。

（・・・間違いない・・・奴はマグナムエース）

シグナムは何故かマグナムエースの事に気づいた。

（・・・マグナムエース・・・奴を討ち取れば・・・奴との決着に
一歩近づく）

シグナムの目にはマグナムエースの先に映る一人の侍の姿が映っていた。

第三話 魔球44ソニック（後書き）

突然俺の前に現れた騎士。奴の名は烈火の将シグナム！その闘志溢れる挑戦状が俺を奮い起こした！

次回 疾風！アイアンリーガーStrikers 対決！剣対魔球！
正々堂々！試合開始

第四話 対決！剣対魔球

第四話 対決！剣対魔球

なのは達隊長陣はスバル（中身はマグナムエース）の44ソニックの映像を検証していた。

「一体何なの？あの球スバルがあんな隠し技を持ってたなんて」

考え込むのは。

「シャーリー……あの球の解析は出来た？」

「それがあ」

「？」

シャーリーが44ソニックの分析データを表示するが分析しきれずコンピュータがバグを起こしてしまった。

「これどういうこと？」

「早い話が解析不能って事です……それにあの球……魔力反応が全く無いんです」

その瞬間なのは達が凍りついた。

「……それ……本当？あんなエネルギー出してるんだよ……」

魔力を使ってないわけ」

「私だって何度も調べましたがコンピュータが解析する前にエネルギーを検索しましたけど魔力じゃないんです。私疲れてるんでしょうか？・・・それにあの二人変なんですよあの試合が終わったのに魔力の平均値が全く下がらないんですよ・・・計算ミスかな」

既にノックダウン状態のシャーリー。慌ててなのは話題を変えた。

「あ、そういえば今朝からヴィータちゃんの姿が見えないけど」

「それが・・・ヴィータ裏庭で朝からバットの素振りやってるんや」

「「「へ？」」」

「うおりゃあああああああ！！！！」

六課の仕事そっちのけでバットの素振りをやっているヴィータ。

（あんなみつともねえ姿さらして！！負けねえ！二度とあの球の前に棒立ちになるかあ！！！！）

バキ！

力が入りすぎ握力でバットが折れてしまった。

「ちい！次のバット！！！」

ヴィータの傍には握りつぶされたバットの山があった。数推定六課の宿舎並。

「てなわけでごっちも大変なんや。よっぽど悔しかったんちゃう？」

呆れ気味のはやて。

「・・・けどあの球あの人居ない時で良かったよね」

「だよね」

「ちよつとちよつと！！！」

なのはがはやてとフェイトを呼びかけるとその例のあの人ドアの前にいた。そして例のあの方はニヤリと笑いその場を後にした。崩れ落ちるはやて。ヴィータの朝練や例のあの人これから起こすであろう騒動のことを考えるとはやては胃を抑えながらグロッキー状態になってしまった。

「はやてちゃん！」

「ううゝ胃薬持ってきてえ……野球大会なんて許可するんやなかった……ガク」

そのままボタンキューになってしまったはやて。リンやシャーリ―が慌てる中

（……良かった……責任者じゃなくて）

などとフェイトがホツと思っていた瞬間なのははふと感じ取っていた。

（あの人なら絶対にスバルに勝負を仕掛ける。ここは調査させてもらおうかな）

その頃例のあの人ことシグナムは自室で一枚の絵を描いていた。

（……まさか奴に教わったことをやる事になるとはな）

シグナムは絵を描き終えた。描かっていたのは一本松に一羽の百舌。その絵を封筒に入れると部屋を出た。

（・・・マグナムエースは奴が描いた絵を気迫から読み解いたと聞いた・・・奴と同じ絵でもマグナムエースが私の絵をゴミとして捨てるのなら私の奴に対する思いはその程度のものという事だ）

シグナムは一人の侍の事を思い描きながら六課に向かった。

その頃マグナムエースはスバルに頼み込みジャンクパーツから自分が使っていたバックパックを造っていた。

（よし！完成だ！）

（へえ！マグナムエースって器用なんだあ！あ、私のデバイスも自作したんだよ）

（凄いなあ。とりあえず形は出来たがあとは実用できるかだ。スバル後で微調整を手伝ってくれないか？）

（へ？なんで？）

（俺はこの世界の機械に詳しくない。細かいところをちょっと教えてほしくてな）

（わかった！でもこれなんなの？）

（ああ、これは）

「・・・マグナムエース」

スバルの疑問に答えようとしたマグナムエースだがティアナが割って入ってきた。

「どうしたんだ？ティアナ」

「・・・凄い球だったよね」

ティアナはマグナムエースの44ソニックのことを考えていた。

「・・・私・・・確かに受け止めたけど」

俯いているティアナ。

「・・・私には投げられない・・・あんたが投げる前はピッチャーなのに」

「・・・そうやって自分の可能性を決め付けるのが君の悪いところだ」

「じゃあなに？私にあの球が投げられるとでも言う気？」

ティアナが嘲笑うようにマグナムエースに言うがマグナムエースは答えた。

「・・・たしかに・・・今の君には投げられない」

「・・・やっぱりね・・・私なんかじゃ」

「勘違いするな・・・俺が言ったのは『今の君に』と言ったんだ」

「え？」

マグナムエースの意外な言葉に一瞬耳を疑うティアナ。

「今の君にはわかるまい・・・だがわかるその時が来たら必ず教える」

「ほ、本当に？本当に教えてくれるの！？」

「約束だ」

啞然としながらティアナはマグナムエースに言葉を続けるがマグナムエースは出来たばかりのバックパックを持ち部屋から出てしまった。

（・・・マグナムエース）

（どうした？スバル）

（本当にティアがああ球を投げることが出来るの？）

（ああ、彼女が大切な事に気づけば必ず）

（・・・けどどうやって？）

マグナムエースは無言になった。理屈ではないからだ。マグナムエースはフォワードたちの無限の可能性を感じ取っていた。そしてティアナが己を磨き続ければ44ソニックを投げる事が出来るとマグナムエースの魂を感じ取っていたからだった。

（・・・それにしても俺のこの世界の使命は一体何なのだ？彼女達を磨くことなのか？しかしそれは彼女達が自分で磨かなければならない・・・何故俺だけがこの世界に呼ばれた・・・心・・・か）

マグナムエースは謎の言っていた心というキーワードが引っかかっていた。

「私にもあの球を投げる事が出来る・・・だけど絶対に教えてなんてくれない」

「ティアナ」

マグナムエースの約束を信じられないティアナをシグナムが呼んだ。

「シグナム副隊長？どうしたんですか？」

シグナムは無言で一枚の手紙をティアナに差し出した。

「・・・これをスバル・・・いや・・・マグナムエースに渡してほしい」

「え！」

「・・・私からのファンレターとでも言っておけ」

驚くティアナをよそにシグナムはそのまま立ち去っていった。その頃スバルはエリオとキャロと一緒に昼食をとっていた。

「スバル」

「ん？なにティア」

「あんたにファンレター」

ティアナは早速シグナムに渡された封筒をスバルに渡した。

「私に？」

スバルが手紙を開くと描かれていたのは松に鳥の絵だった。

「何ですかこれ？」

「松に雀？」

「なんだろうねこれ？」

マグナムエースはスバルの身体を通して手紙に触れた瞬間凄まじい気迫を感じた。

(・・・ファンレター?・・・いや違う・・・そんな甘い物じゃない・・・この絵に籠められた気迫は只者じゃない・・・間違いない・・・これは俺に対する挑戦状だ)

マグナムエースの背後にシグナムの影が浮かび上がった。

(・・・あの人か)

「・・・スバル・・・ちよつと」

「え?」

「・・・この手紙・・・シグナム副隊長がマグナムエースに宛てたもの」

「どういうこと?」

(・・・一本松に百舌・・・前にあいつが送ってきた挑戦状と同じ・・・だがこの絵に籠められた気迫はあいつのものとは違う)

マグナムエースはかつて友が自分に送ってきた挑戦状の事を思い出した。そして夜スバルが眠っている時マグナムエースは考えにふけていた。

(・・・何故あの人がこの挑戦状を俺に送ってきた・・・まさか俺の正体に気付いたのか?・・・あの尋常じゃない気迫・・・対決は避けられんか)

マグナムエースは完成したバックパックを背負い部屋を出ようとし

たその時。

「百舌は誇り高い鳥って聞いた」

「ティアナ？」

「一羽しか居なかったところを見ると、どっちかが生き残る・・・
挑戦状でしょあれ」

「ああ」

「シグナム副隊長ならやりかねないけど・・・スバルの身体を壊したらただじゃ置かないからね」

「・・・ティアナ・・・わかった」

マグナムエースはティアナに見送られ部屋を出た。六課宿舍から離れた草原に剣士は待ち構えていた。

「・・・やはり来たか・・・スバル・・・いや・・・マグナムエース！！」

「・・・やはりあんただったか」

「・・・あんな絵だけに籠められた挑戦状を読み解くとは・・・奴の言ったとおりの者だ・・・お前にマシンを超越した心があって魔球44ソニックは生み出されたのだな」

「俺に何の用だ！」

「・・・決まっている！貴様の魔球を打ち砕き！奴との勝負に一步近づく事だ！！」

「奴だと？」

「貴様は知っているはずだが・・・今は答えまい・・・私と勝負だ！！」

「断る！！！！」

「何！！」

「俺の44はマウンドで投げるためだけにある！！！！それに勝負は試合でいつでもできる！！勝負なら試合で受けて立つ！」

「ならば何故ここに着た！！」

「あんたに聞きたい事があるからだ！！何故俺の事に気付いた！！？」

「私に勝ったら教えてやる！！」

その時マグナムエース達をライトが照らした。あまりの眩しさに顔を隠すマグナムエース。

「く！誰だ！」

「邪魔をする気か！！！！」

その瞬間ライトの影から黒い影が降り注いだ。

「うおあ!!」

マグナムエースが避ける。

「逃げろ! シグナム!」

「余計なお世話だ!」

シグナムはライトから発射された影を全て叩き落した。叩き落したのは野球のボールだった。

「どうやら狙いは俺のようだな!!」

マグナムエースは跳んでくるボールをグローブでキャッチしながら突き進んだ。その瞬間ボールはグローブからバックパックに装填されマグナムエースは肩のバズーカを構えた。バズーカからマグナムエースがキャッチしたボールが発射される。そして照らされているライトを全て破壊した。現れたのはピッチングマシンを装備した重量車両だった。ライトが破壊されたのと同時に撤退していく車両。

「・・・お前ほどの奴が何故狙われる」

「・・・アイアンリーガーといえど完璧ではない・・・清く正しくに生きているつもりでも知らない内に誰かの怨みをかけてしまう」

「ふっ! 貴様気に入った・・・それでこそ勝負のしがある・・・奴の見込んだとおりだな」

「・・・俺もあんたが気に入った・・・そこまで言うなら勝負しよ

う！そのかわり俺が勝ったらあんたには質問に答えてもらう」

「・・・貴様が負けたら？」

「・・・俺の正体を教える！」

「ふん！つまらん！そんなものではない・・・こうしろ・・・私が勝つたら私の言う事を一つだけ聞け」

「何？」

「勝負！！！」

マグナムエースとシグナムは対峙した。お互いから例え切れないほど闘気が膨れ上がっている。マグナムエースはボールを構え、シグナムはレヴァンティンを構えた。

「一球勝負！！あんたを空振りに打ち取ったら俺の勝ち！」

「44を斬り捨てたら私の勝ちだ！」

（・・・シグナム・・・あんたに俺の全ての魂を籠める・・・俺のオイルが沸騰するぜ！！）

（・・・私はお前の魔球を打ち砕く・・・奴に勝つために！！）

それぞれの思いを胸にマグナムエースはシグナムに対し投球体勢に入った。マグナムエースの魂が燃え上がりスバルの身体から凄まじいエネルギーが噴き出した。

「いくぞ!! 44ソニック!!!」

マグナムエースの44ソニックがシグナムに向かって跳んだ。

「レヴァンティン!!! 紫電!!!!!! 一閃!!!!!! でああああああ
ああああああああ!!!」

シグナムは44ソニックの中にあるボールに食らいつきレヴァンティンを振った。レヴァンティンは44ソニックを捉えたがその瞬間凄まじい閃光が走った。

「うわあああああああああ!!!」

爆風に吹き飛ばされるマグナムエースだが、爆風が収まるとすぐに立ち上がった。

「勝負は!?!」

爆風が収まった跡にはシグナムが立っていた。しかしその表情は曇っていた。マグナムエースは周囲を見回すとボールが刺さったままのレヴァンティンが地面に突き刺さっていた。

「・・・剣は吹き飛び・・・ボールは捉えられていた・・・引き分けか」

「・・・く! やはりまだ奴には及ばないという事か!!!!」

「・・・奴?」

「・・・お前が元の世界に帰ったとき極十郎太きわみじゅうろうたに会ったら伝えてほ

しい・・・お前との決着は必ず着けるとな」

シグナムはそれだけ言い残し去ろうとした瞬間。

「・・・その必要はない」

「・・・何!？」

「・・・今のあんたの言葉に俺の疑問も解けた・・・俺が帰る前に・・・十郎太も必ずこの世界に来る!!!・・・その時に磨き合えたい」

「・・・なに? 根拠は何だ!？」

「俺たちは魂で繋がっている・・・魂が呼び合えば必ず俺の仲間もこの世界に来るはずだ・・・それに今・・・あんたとも繋がったはずだ」

マグナムエースはそれだけ言うのとシグナムの前から立ち去った。マグナムエースが立ち去った後。シグナムは自分の手に残ったかすかな鼓動を感じていた。

「これが・・・奴らのリーガー魂か」

翌日リーガー魂を受け取ったシグナムの相手をしたフェイトが苦勞したのは言うまでもない。

第四話 対決！剣対魔球（後書き）

俺の無茶でスバルが倒れてしまった。何？俺にスバルの代わりをやれ？

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers マグナムエース
危機一髪！

正々堂々！試合開始！！

第五話 マグナムエース危機一髪！

第五話 マグナムエース危機一髪！

「あゝわかんないよ」

本日事務仕事がメインのフォワードご一行様。スバルはパソコンに向かって頭を悩ませていた。

「まったく！スバルあんたまだたくさん残ってんのよ？」

ティアナによって書類がダン！ダン！つとどつかのギャグ漫画のように積み重なる資料。

「うえゝこんなにもう駄目だあゝ！！身体も凄いだるいし」

あまりの量に目を回すスバル。その瞬間マグナムエースが表に出てきてしまった。

「あれ？」

普段はスバルに許可をもらい表に出てくるマグナムエースだが今回は何故か強制的に表に出てきてしまった。

（おいスバル？スバル？）

マグナムエースはスバルに呼びかけるが全く返事が無い。

（どうしたんだ？ スバルはまさか昨日の勝負の時に身体に負担がなかったのか？）

どうやらスバルの意識は完全にグロッキー状態で何も反応が無い。とはいえ目の前の書類が終わらない限り訓練にも行けない。その事にマツハキヤリバーが抗議した。

へあなたが無茶をさせるからです・・・責任を取ってください

（しょうがない）

初出撃やシグナムとの決闘でスバルがグロッキーになったのは自分の責任でもあるため今回だけはスバルの代理で仕事を始めることにした。するとタワー並みにあつた書類がものの数分で片付けられていった。元々人手不足のシルバーキヤッスルではリーガー達も事務仕事を手伝っていたのとスバルの仕事内容を見てきたマグナムエースにとってはこの程度の仕事は朝飯前であつた。マグナムエースの仕事をこなすスピードと正確さに六課全員が驚いていた。ただ一人を除いて。

（事務仕事はマグナムエースにやらせたほうが早いかも）

ティアナは内心でそう思っていた。

「ふう終わった」

タワー並みの書類を30分前後で仕上げたマグナムエース。そのスピードに入念にチェックが入るが全てがクリアしていて文句のつけようが無い。因みに本日もうスバルに回す仕事は無い。

「スバルさん・・・あのちよつと」

エリオがマグナムエースを呼びマグナムエースは何かと話を聞くと。

「ここがちよつとわからないんですけど」

「ああ、ここはこうしてこうすれば」

マグナムエースの的確なアドバイスをエリオが疑問に思っていた部分があっさり解けた。

「あ！ありがとうございます！」

「どういたしまして」

「あ！スバルさんこっちもお願いします！」

「マグ・・・スバル！こっちも！！」

キャロとティアナもマグナムエースにアドバイスを求めたためマグナムエースは午前の時間は事務処理を全て回っていた。

お昼 昼休みの時間になりマグナムエース（身体はスバル）のお腹がなり始めた。

「お昼か・・・人間は食事を取らないといけない頃なんだな」

マグナムエース達アイアンリーガーも人間と同じで燃料を食べたりオイルを飲んだりしないと機能停止してしまうだけで済むが人間の

場合だと空腹感というものが付きまとうためマグナムエースは食事を取ろうと食堂に行こうとした瞬間はあることに気付いた。

「そうだ。俺はこの世界のお金を持っていない」

ぶっちゃけ突然世界を越えてきたマグナムエースが金銭などを持っているはずもない。スバルのお金はあるがそれはスバルのものであるため使うわけにはいかない。だからと言って他人から借金すれば返さなければいけないのは身体の持ち主であるスバルだ。

（困った）

仕方なくマグナムエースは無料の飲料水と書かれた蛇口からコップで飲料水を一杯飲み、その場を後にしようとした瞬間ティアナに肩をつかまれた。

「あんた何してんの？ちゃんとご飯食べたの？」

「いや」

「まああんたの性格だからスバルのお金使うのが申し訳ないとも思っているんでしょ」

呆れたように言うティアナにマグナムエースは面目ないという表情だった。

「ま、今日のはあんたに世話になったし一回だけなら奢ってあげるけど」

「それは不味い。いくらなんでも」

「お腹空かれて後でスバルに暴れられるほうが迷惑なのよ!」

ティアナは半ば強引にマグナムエースを食堂まで連れて行った。

「で? 何にする?」

マグナムエースは悩んだ。何せ人間の食事は初めてだったからだ。あまりティアナに高価なものを奢らせるのも悪いと思ったのか当たり障り無くラーメンを頼んだ。

「どう? 人間の食事は」

「うん。とっても美味しいよ」

ティアナにとってマグナムエースの光景は異様としか思えなかった。中身はマグナムエースでも身体はスバル。今までスバルの大食いを見てきたティアナにとって小食(といっても一般人の量)のスバルの姿はシュールとしか言いようが無かった。

「スバル!!!」

まだ昼食の最中のマグナムエースにヴィータが叫んだ。

「ん? ヴィータ?」

「その様子だともう一人のスバルみてえだな!!! おい! スバル!!! あたしと勝負しろ!」

スバルは苦し紛れの誤魔化しで自分は二重人格だと設定していた。

「勝負って・・・なんの勝負ですか？」

「決まってるだろ！！お前の44ソニックと勝負だ！！！」

「悪いが断る！俺の44はマウンドで投げるためにある！それに勝負はいつでも試合で受けて立つ！！」

「おめえこの前シグナムと決闘したじゃねえか！！おし！待ってろ！！はやてから試合の許可もらってきてやらあ！！！」

ヴィータの言葉にマグナムエースは

（この間の戦車は彼女達の仕業か）

5分後

「却下ああああああああ！！！！！！！！！！」

はやての絶叫が六課内に響き渡り驚く職員ご一行様。その後ヴィータが半ば脅しの状態で試合の宣言をしたため肅清を食らったのは言うまでもない。

午後の訓練になるとマグナムエースはスバルの代わりに訓練を受けることになった。マグナムエースはリボルバーナックルが使えないため自作のバックパックを装備していた。困みにマッハキャリバーは使っていない。自分と組ませてマッハキャリバーに変な癖をつけないためだ。だが悪夢は始まったばかりだった。マグナムエースの訓練相手はヴィータだった。訓練の最中にヴィータは。

「44ソニックを投げろ！スバル！！！」

ヴィータはしつこかった。負けず嫌いなのだろう。それでもマグナムエースは44ソニックを投げなかった。ヴィータの攻撃を次々とかわしていくマグナムエースだがふとティアナの姿が目に入った。必死に訓練を受けているが、その姿はどこか焦っているようだった。

「よそ見するな」

マグナムエースはヴィータの一撃をグローブで受け止めた。驚きを隠せないヴィータ。いくらグラーフアイゼンのヴィータの攻撃は凄まじい、だがマグナムエースは片腕で受け止めていた。

「てめえ！！！」

ヴィータが光弾を放った瞬間。光弾はグローブに吸収された。マグナムエースは今までの模擬戦でヴィータの手の内を感じ取っていたからだ。

「うおりゃああ！！！」

グラーフアイゼンの一撃をマグナムエースはサイドステップで回避

すると肩のバズーカをヴィータの至近距離に突きつけた。硬直状態が続く。

「・・・おい何で撃たねえんだよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

マグナムエースは明後日の方向にバズーカを向け砲弾を放った。

「おめえ！いくら模擬戦だからって手を抜くんじゃねえ！！」

「・・・手を抜いているわけじゃない・・・君達の教え方は確かに合理的だ。だが肝心な事を忘れている」

「なんだと？」

「俺たちは仲間だ。師弟関係の前に一番大切なことじゃないのか？」

その言葉を聞いた瞬間ヴィータは焦った。たしかになのはやヴォルケンリッターのことは仲間だと受け入れていたが、スバル達新人フオワードに対しては何処かで副隊長と部下という職務上の付き合いということが合ったかもしれない。だがマグナムエースに基本的なことを指摘されて少しうつむいていた。

「・・・たしかに管理局に入っちゃった事で忘れかけてたみてえだな」

ヴィータが少し休憩を提案し始めたのでマグナムエースは座り込み他のメンバーの訓練を見ていた。その時マツハキャリバーがマグナムエースに話しかけた。

〈あなたは本当にロボットなのですか？〉

「マツハキャリバー？」

〈私はマスターをより早くするために生まれました。あなたは私とは違う〉

「・・・違う・・・俺も最初はそうだった・・・スバルは君の事を相棒だと言ってくれるんだろう？」

〈はい〉

「・・・そして君はその事に戸惑っている。君にも心がある証拠だ・・・それさえあれば君達はお互いを磨き・・・強くなれる」

〈・・・マグナムエース〉

「おい！スバル！！休憩終わりだ！！」

「はい！！」

ヴィータの元に駆け出すマグナムエースだがどうしてもティアナのことが気になった。

（何をそんなに焦る必要があるんだ？）

マグナムエースはあえて何も聞かずに訓練に戻った。

翌日

ヴィータは訓練項目を実戦方式に切り替えお互いを磨きあう方向に切り替えた。先日までバタンキューだったスバルが苦労したのは言うまでもない。

第五話 マグナムエース危機一髪！（後書き）

俺たちに任務が入った。ホテル・アグスタの護衛任務だった。その時ティアナの弾丸がスバルに襲い掛かった。

次回 疾風！アイアンリリーガーStrikers ホテル・アグスタ
正々堂々！試合開始！

第六話 ホテル・アグスタ

機動六課はホテル・アグスタに向かっていた。ジェイル・スカリエッティという人物が一枚噛んでいる可能性があるという説明を聞きながら。

第六話 ホテル・アグスタ

ホテル・アグスタに着いてフォワードメンバー達はザファイラ、シヤマルと共に外の警護を付いた。そんな中ティアナはスバルと念話で部隊長である、はやての事について話していた。

（・・・ま、八神部隊長達の詳しい能力とかは特秘事項だから私も詳しくは知らないけど）

（・・・レアスキル持ちの人はみんなそうよね・・・）

（？ティア、なんか気になるの？）

（・・・別に）

（そ、じゃあまた後でね・・・）

スバルと念話を終えたティアナは六課の構成員について考えていた。六課の戦力は能力限定が施されているにしても異常だった。なのは達隊長陣に聞いた話では、隊長格全員がオーバーSランクであり、副隊長陣もSランクや隊員達も未来のエリートばかり、同じフォワ

ードメンバーのエリオとキャロは10歳でBランクでありキャロは召喚術士。潜在能力の塊であり優しい家族のバックアップのあるスバル。

そして

スバルの身体に潜みスバルの潜在能力を引き出す事の出来る謎の生命体マグナムエース。

（・・・何がいい目よ・・・あんな球私に投げられるわけじゃないじゃない）

ティアナはマグナムエースがスバルの身体で投げた44ソニックのことを思い浮かべた。マグナムエースに自分にも投げられると言われた後ティアナもティアナなりに44ソニックを分析し始めたが解析不能である上未知のエネルギーによって投げられている球を自分に投げられるはずがない。ティアナはそう思っていた。

（私が何かに気付いたら教えてくれるって言ったけど……絶対に教えてなんてくれない……でもそんな関係ない……私は……立ち止まるわけにはいかないんだ！）

ティアナはマグナムエースに対して劣等感に似たようなものを覚えた。

（来た）

シャルがガジェットを探知するとメンバーに指示を出した。終結するメンバー。スバルは先にティアナと合流し、ホテル・アグスタから副隊長陣の戦闘を見ていた。

「副隊長たちとザファイラって凄い！」

感心するスバルだがティアナの表情は曇っていた。そしてシャルの指示で前衛に終結したフォワードメンバーのまえにガジェットが召喚された。

「召喚魔法？」

フォワード陣の中に召喚されるガジェット。ヴィータが援護に向かってっていると連絡が入るがそれを聞かずティアナが飛び出してしまった。

「守ってばかりじゃ行き詰ります！！ちゃんと全機落とします！！」

（ちよっとティアナ！？）

「スバル！クロスシフトA！行くわよ！」

「おう！！私のバックパックを射出してください！」

スバルはマグナムエースのバックパックを装着するとウインググロ―ドを走りながらガジェットをひきつけた。

（・・・証明するんだ）

ティアナはクロスミラーージュのカートリッジを4つロードした。シヤマルが危険だと言うがティアナは聞かない。魔力弾がいくつも生成された。

「私は・・・ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！！！！」

クロスミラーージュを構えるティアナ。だがその姿を見守っていたマグナムエースが危機感を覚えた。

（いかん！）

ティアナの身体に負担がかかりすぎていることが明白だった。

「クロスファイアああ・・・シュウト！！！！」

魔力弾が軌跡を描きガジェットを貫いていった。ティアナ自身もクロスミラーージュでガジェットを破壊する。だがティアナの無茶がたり魔力弾のコントロールが利かなくなりスバルに襲い掛かった。

「え？」

スバルに魔力弾が直撃する寸前スバルの左腕が勝手に動き魔力弾を受け止めた。魔力弾は左腕に装着していたグローブに吸収されバツクパックに装填された。スバルはそのまま肩のバズーカを構えろとガジェットに向かってティアナの魔力弾を発射した。そうスバルを守ったのはマグナムエースだった。そのままティアナの前に降り立つマグナムエース。

「スバル・・・いえ・・・マグナムエース」

自分のミスショットに動揺を隠せないティアナだが。マグナムエースは一言だけ言った。

「・・・気にするな・・・今は自分を見失わない事に集中しろ」

それだけ言うとマグナムエースはスバルの意識の中に引っ込んだ。

「は！私！」

「ティアナ！！」

スバルが意識を取り戻すと激怒したヴィータが降りてきた。

「ティアナ！この馬鹿野郎！無茶やった上に味方まで撃ってどうすんだよ！！」

だがティアナは既にマグナムエースの言葉に啞然として聞いていない。

「あの・・・ヴィータ副隊長、今のもその・・・コンビネーションのうちで」

スバルがティアナを必死に庇う。

「ふざけろタコ！直撃コースだよ今は！！」

「違うんです！今のは私がうまくやらなかったから！」

「うるせえ馬鹿ども！！」

「お前等二人まとめてすっこんでろ！！」

ヴィータの剣幕にスバルとティアナはそのまま立ち去ってしまった。

「ティア・・・むこう終わったよ」

「いい・・・あたしここ警護してる」

「ティア」

スバルが話しかけるが

「いいから行けって言ってるのよ！！！！」

半ば八つ当たりのようにスバルを怒鳴りつけるティアナ。

「ごめんね・・・ティア」

声を押し殺しその場を去るスバルだがティアナは振り向こうとしな

い。

「あたしは・・・」

悔し涙を流すティアナ。だがうしろに誰かが立っているのがわかった。ティアナは目をこすって振り向いた瞬間そこにはスバルの姿があった。

「なによスバル！行けって言ったでしょ！！」

「・・・ティアナ」

「マグナム・・・エース」

ティアナの目の前にいたのはスバルでは無くマグナムエースだった。

「何よ・・・マグナムエースお願いだから放っておいてよ！！」

それでもマグナムエースはティアナの前から立ち去ろうとはしなかった。

「・・・なんで・・・なんで私なんか機動六課にいるのよ！！！！
なんで！私みたいな凡人が！！！」

その言葉を聞くとマグナムエースは一言呟いた。

「ティアナ・・・君は機動六課の一員だ・・・どんな事があっても」

「え？」

「君が機動六課に来たのには意味がある・・・それは同じチームの仲間として力を合わせ・・・苦しみに立ち向かい・・・喜びを分け合うためだ・・・もし君が困っている事があれば・・・みんな必ず力を貸してくれるだろう・・・それを忘れないでくれ・・・俺たちは仲間だ」

マグナムエースはその言葉だけを残しティアナの前を去った。

（・・・仲間）

ティアナには今のマグナムエースの言葉がとても重かった。

第六話 ホテル・アグスタ（後書き）

・・・仲間・・・本当にあたしに仲間が居るの？・・・マグナムエ
ース・・・あんたはあたしに何を伝えたいの？見せてやるわよ！あ
たしの44ソニックを

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 伝えたいもの
正々堂々！試合開始！

第七話 伝えたいもの（前書き）

こんなのマグナムエースじゃねえ!! とか思われるの覚悟です。

第七話 伝えたいもの

マグナムエースがミッドチルダに居る頃シルバーキャッスルでは。

「ちょっと！どうしてマグナムエースは動かないの！？」

突然機能停止しているルリーが工場長ことメツケルに詰め寄る。

「それがわかれば苦労はせん！！回路は正常に動いておるのに起きないんだ！まるで心だけがどっか行ってるみたいに」

その言葉にリカルドは。

「・・・マグナムはおそらくこことは別の世界に行ったのだろう」

「・・・別の世界ってどういうこと！？」

「・・・これはマグナムエースに聞いた話だが」

リカルドの言葉にシルバーキャッスルのメンバーは驚いていた。

第七話 伝えたいもの

「行くわよ！スバル！！」

「おう！」

スバルとティアナは自主連に明け暮れていた。手数を増やすために。

「あたし達にはもっと可能性があるはず・・・あの時限界突破した時みたいに」

「うん！私もいつまでもマグナムエースに頼ってられないからね！
」

スバルとティアナがフォーメーションを研修している姿をマグナムエースはティアナを見守っていた。しかしティアナの焦りに嘗てファイター兄弟に出会ったときの自分を連想してしまった。

（・・・今の彼女は大切な事を忘れている・・・あの時の俺のように）

マグナムエースはかつて自分が迷い込んでしまった闇にティアナが落ちかけているのがわかった。それゆえにいくら言葉で伝えようとしてもティアナには届かない。

（・・・今の彼女に言葉で伝わらないのなら・・・俺は）

マグナムエースは拳を握り締めた。その拳からは熱き魂が燃え上がった。

スバルとティアナは最後の自主練を終えて模擬戦での話をしていた。

「それでティア・・・明日の模擬戦・・・いけるかな？」

「成功率は五分五分かな・・・それよりスバル・・・本当に良いの？」

「え！何が？」

「今回の模擬戦であんたの憧れのなのはさんに・・・ある意味は向かう事になってしまうけど」

「大丈夫だよ！強くなるための努力だもん！ちゃんと結果を出せば認めてくれるよ！それにマグナムエースだって言ってたじゃん！人を磨くのは人だって！」

ティアナはスバルの憧れであるなのはに逆らう事になる事に少し戸惑っていた。そしてなによりいつもはお節介を焼くマグナムエースが何も言わない事に戸惑っていた。

（あたしには切り札がある）

翌日午前の訓練でのまとめとしてなのはとの模擬戦が行われようとしていた。最初はスバルとティアナだった。エリオとキャロはヴィータと見学している。

「あ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

「フェイトさん？」

なのはとスターズ部隊の模擬戦を見るために屋上にフェイトが駆け

込んできた。

「私も手伝おうと思ってたんだけど」

「今はスターズの番」

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」

「ああ、なのはもここんとこ訓練密度濃いからな。少し休ませねえと」

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったりビデオでみんなの陣形をチェックしたり」

「なのはさん、訓練中もいつも僕たちの事見ててくれるんですね」

「本当に、ずっと」

フェイトとヴィータの会話にエリオとキャロもなのはに感謝の意でいっぱいだった。

スバルとティアナはクロスシフトで戦闘しティアナが魔力弾を生成した。

「クロスファイアああシュート!!」

クロスファイアシュートがなのはに向かって飛んでいくがキレがない。なのはが簡単に回避するとウイングロードが現れそこからスバルがリボルバーナックルを構える。

「フェイクじゃない！本物！？」

なのはは一瞬ティアナが作り出した幻術だと思ったが本物である事にきづき魔力弾をスバルに向けて放つ。スバルはプロテクションで防ぎながら飛び掛るとなのはに向かって殴りかかる。

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

なのはのプロテクションで防がれるがスバルは力押しでプロテクションを破壊しようとする。しかしスバルはウイングロードから落とされた。

「ほらスバル、駄目だよそんな危ない軌道は！」

「すみません！でも！ちゃんと防ぎますから！」

「ティアナは？」

ティアナが居ない事に気づいたなのはは周りを見渡すと砲撃を放とうとしているティアナの姿が見えた。

（クロスシフトC！行くわよスバル！）

「おお！」

スバルはカートリッジをロードするとウイングロードを駆け抜けてなのはに突っ込んだ。なのはの攻撃がスバルに襲い掛かるがスバルは回避しながら突っ込む。その瞬間スバルがなのはの動きを封じ込めた。そしてティアナがクロスミラージュのカートリッジをリードすると魔力刃が生成された。

（バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける！！）

「一撃必殺！！」

ティアナがなのはの真上を捉えた瞬間。

「レイジングハート・・・モードリリース」

〈了解〉

なのはがレイジングハートを待機モードにすると爆発が起こった。爆発がおさまるとなのはは左手でスバルの攻撃を右手でティアナの攻撃を受け止めていた。魔力刃を素手で握っていたため右手からは血が流れ落ちる。

「おかしいなあ・・・二人ともどうしちゃったのかなあ？」

スバルとティアナはただ啞然としていた。

「頑張ってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ・・・練習の時だけ言う事聞いているフリして本番でこんな危険な無茶するなら・・・練習の意味無いんじゃない？練習どうりやろうよ・・・ねえ？」

「あ・・・あの！」

「私の言ってる事・・・私の訓練・・・そんなに間違ってる？」

ティアナが魔力刃をとき砲撃体勢に入った。

「私は！もう誰も傷つけないから！！無くしたくないから！！だから！！！！強くなりたいんです！！！！」

ティアナは自分の全ての思いをなのはにぶつけた。そしてその思いをスバルの中からマグナムエースも聞いていた。

「・・・少し・・・頭冷やそうか」

そう言うとなのはティアナを指差した。

「・・・クロスファイア」

「うわあああああああ！！ファントムブレイ！！！！」

「・・・シュート」

錯乱状態のティアナがなのはに向かって砲撃魔法を放つスバルが居るのにもかかわらず、なのはの魔力弾がファントムブレイザーを掻き消した。あまりの力の差に戦意を喪失してしまうティアナ。

「ティア！は！バインド！！」

スバルがバインドで拘束される。

「じっとしてスバル・・・よく見てなさい」

「は！なのはさん！！」

なのはは容赦なくティアナに向かって魔力弾を放ちティアナを爆炎

が包んだ。煙が晴れるとティアナの前に赤きロボットが立っていた。その姿はまるでティアナの盾だった。あまりの突然の事になのはは愚かティアナ、スバルも驚きを隠せなかった。ロボットはそのまま地面まで落下していった。

（・・・俺の・・・身体）

（え？）

（・・・そうか・・・これが答えなのか・・・俺は！！！！）

そうティアナを守ったのは時空を越えてやってきたマグナムエースの身体だった。しかし、なのははマグナムエースの身体が落下したのを確認するとティアナに向かい魔力弾で追撃した瞬間スバルが自らの拘束を力技で外しアクセルシューターの軌道に立ち魔力弾を受け止めた。

「・・・駄目だよスバル・・・邪魔をしちゃ」

爆風の中からなのはの前に現れたスバルの顔にはゴーグルが形成された。なのはの顔を見てもスバルは全く動じなかった。

「シャーリーさん！俺のバックパックを射出してください」

「は！はい！」

スバルは背中にバックパックを左腕にはリーガー用のグローブを着しウイングロードの上に降り立った。

「・・・君達は二人とも間違っている」

「「え？」」

スバルの言葉を聞いた瞬間二人の表情が変わった。そう、なのはの攻撃を止めたのはマグナムエースだった。

「あなた・・・一体」

「あんたの相手は後でする」

マグナムエースはそれだけ言うと言意喪失しているティアナの方を向いた。

「ティアナ！お前はこんな所で諦めるのか！お前はスバルと一緒に磨き合ってきたんじゃないのか！？そんなに自分のやってきた事やスバルの事が信じられないのか！！！」

「・・・なによ・・・マグナムエース・・・偉ぶって・・・なんなのよ！！！」

マグナムエースはティアナにグローブを向けた。

「来いティアナ！！・・・君の全力を出して・・・俺と正々堂々、勝負だ！！！」

「・・・な・・・にを」

（・・・スバル・・・マツハキヤリバー・・・悪いが無茶をさせてもらう）

(え!)

「く! クロスファイアああシュート! ! !」

ティアナのクロスファイアシュートがマグナムエースに襲い掛かるがマグナムエースには直撃せず周囲のビルを破壊した。煙幕が立ちこめる。マグナムエースが周囲を見渡すとそこには無数のティアナに囲まれていた。

(・・・これがティアナの幻術か)

無数のティアナは一斉にクロスミラージュを構えると一斉射撃した。

「うおああああ! !」

一発の魔力弾がマグナムエースに当たる。

(く! 目で見えるな! 心で感じたままに動くんだ! !)

その瞬間マグナムエースの動きが変わった。ティアナの攻撃が一発も当たらなくなった。そしてマグナムエースはあることに気がつきウイングロードの前に立ち上がった。

「・・・ティアナ・・・さっきの砲撃技を俺にもう一度撃ってみろ!」

「「「え! ! !」」」

マグナムエースの言葉にその場に居た全員が凍りついた。

「だったら!! 望みどおり撃ってやるわよ!! ファントムブレイザー!!!」

ティアナは幻術を解き全魔力を籠めた砲撃がマグナムエースに襲い掛かるがマグナムエースは左腕のグローブでティアナの砲撃魔法を簡単に受け止めてしまった。

「な・・・に・・・」

ティアナだけではなく、なのはやフェイト、ライトニングの二人も驚いていた。例え中身はマグナムエースでも身体はスバル。スバルの身体能力以上のことはできない。そう思っていたからだ。

「・・・やはりそうだったか・・・ティアナ・・・君は大切な事を忘れている・・・君は自分ひとりの力しか信じていない」

「な・・・んですって!!」

「独りよがりの君の攻撃など俺には通用しない!・・・俺には仲間が居る・・・その仲間が俺を強くする!」

「・・・私にだって・・・私にだって仲間は!!」

「君に仲間は居ない!!!」

マグナムエースはキツパリ答えた。その瞬間ティアナは絶望の淵に立たされた。

「君は心を閉ざしている・・・例え皆が君の事を仲間だと受け入れていても君自身が受け入れず!心を開かない限りそれは仲間になら

ない!!」

「う!うるさああああい!!!!!!」

ティアナのクロスファイアシュートがマグナムエースに襲い掛かるがマグナムエースは回避せず真っ向から受け止めていた。まるでティアナの思いを受け止めるかのように。

「何で・・・何で倒れないの!？」

「今の君にはわかるまい!身体を通して溢れる力が!仲間との絆の力が!」

(絆!)

その瞬間ティアナの脳裏に兄ティーダの姿が浮かび上がった。だがティアナはすぐに振り払いマグナムエースを睨んだ。

「・・・だったら・・・見せてやるわよ!!その独りよがりで掴んだ技を!」

ティアナがクロスミラージュから一つの魔力球を生み出した。ティアナはその魔力球を掴み取ると投球体勢に入った。

(見せてやるわよ!あたしの切り札!!)

なのは達はその投球に見覚えが会った。

「・・・・いくわよ・・・・44おおおソニック!!!」

魔力球から魔力が噴き出した。そうスバルにも隠れティアナは独学で44ソニックを特訓していたのだった。魔力で再現された球は見た目はマグナムエースの44ソニックそのものだがマグナムエースはグローブであっさり受け止めそのままバズーカの砲身から魔力球を取り出した。

「無駄だティアナ！この技は俺には通用しない！これはアイアンリ―ガーの技だ！アイアンリ―ガーの技とは相手を知り！分かり合うためにある！！そして今の技には心が無い！心も無く！相手を倒すためだけの技などゴミくずと同じだ！！」

「え！」

マグナムエースは先ほどティアナが生成した魔力球を構えた。

「真っ向勝負だ！俺の技と君の技で！！・・・君の閉ざされた心に・・・熱き魂を注ぎ込む」

「く！受けて立ってやろうじゃない！！」

ティアナは再び魔力球を生成すると44ソニックの体勢に入った。だがティアナの脳裏にはティーダの姿が離れない。ティアナの身体から僅かだが力が溢れ出した。

（・・・絆・・・あたしにだってある・・・兄さんとの兄妹っていう絆が！！！！）

ティアナの表情を見た瞬間マグナムエースも魔力球を握り締めた。

（・・・ティアナ・・・今の君ならわかるはずだ・・・この一球に

俺の君への全ての魂を籠める・・・受け取れ!!)

その瞬間マグナムエースの握り締めていた魔力球が燃え上がった。

「44 おお おお おお おお ソニック うう うう !!」

ティアナが魔力で再現した44ソニックをマグナムエースに向かって放った瞬間マグナムエースも投球フォームに入った。そして心に揺らぎのあるティアナにむかってマグナムエースはティアナとの約束を思った。

(俺は今!! 君との約束を果たす!)

マグナムエースは魔力球に全ての思いを籠めた。

「44 ソニック・オン・ファイヤ ああああ !!」

マグナムエースは44ソニックに魂の炎の力を上乗せした魔球を放った。ティアナの44ソニックとマグナムエースの44ソニック・オン・ファイヤーがぶつかり合う。そしてティアナの44ソニックがいとも簡単に押し返されマグナムエースの44ソニック・オン・ファイヤーが直撃した。

「うわ ああああああ !!」

ティアナの身体を熱き稲妻が走った。ティアナは44ソニック・オン・ファイヤーから何か感じ取り始めた。

(なに? 身体に・・・心に・・・何か入ってくる・・・なんなの? これ)

そして44ソニック・オン・ファイヤーの直撃を受けウイングロー
ドからティアナは墜落してしまった。マグナムエースはティアナを
抱きとめるとフェイトやライトニングの居る場所までティアナを運
んだ。

「・・・彼女をお願いします」

「・・・あなた・・・一体」

マグナムエースはティアナをフェイトに預けるとそのまま、なのは
の前に立った。重い空気の中マグナムエースとなのはが対峙してい
た。

第七話 伝えたいもの（後書き）

ついに始まった俺となのはの戦い。なのは！君達は本当に大切な事に気付いていない！その時俺の魂が皆を呼び寄せた！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers エース・オブ・エース対マグナムエース

正々堂々！試合開始！

第八話 エース・オブ・エース対マグナムエース

「マグナムエースの身体が消えちゃった！」

突然マグナムエースの身体が消えた事に驚くルリィ。その瞬間リュウケンが空を見上げた。

「リュウケン・・・どうしたの!？」

「感じる・・・マグナムエースが戦っている」

第八話 エース・オブ・エース対マグナムエース

なのはとマグナムエースはウィングロードの前で対峙している。

「一体誰なの? あなたは?」

「俺の名はマグナムエース・・・アイアンリーガーだ」

「アイアン・・・リーガー」

「なのは・・・君は間違っている・・・例え今ティアナを叩きのめしても、その力に心が無ければその熱き鼓動は伝わらない!!」

「・・・熱き・・・鼓動」

（みんな・・・俺に力を貸してくれ!!!!）

マグナムエースは天に向かって手をかかげたその時。

（は！マグナム！！！）

サッカーリーグに参加中のマッハウインディが

（オウ！マグナム！！）

バスケットリーグのトップジョイが

（！！・・・マグナムエース）

竹林で修行中の十郎太が

（あ！マグナム！！）

アメフトリーグのブルアーマーが

（ん？マグナム！）

宇宙に居るGZが

（頑張って・・・マグナムエース）

（マグナム！）

（マグナム！）

シルバーキャッスルのリウケンとシルキーたちが異次元にいるマグナムエースのメッセージを受け取った。

（・・・感じる・・・みんなの心のエネルギーが・・・俺の・・・スバルの右腕に注ぎ込まれているのを！！）

（なんだろうこの力・・・とっても気持ちいい）

スバルの右腕が光り輝いた瞬間その瞳が青く燃え上がった。

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

マグナムエースが投球体制に入った瞬間エネルギーが波打った。

「44（フォーティーフォー）スクエア あああああああああ
あああああああ！！！！！！」

それは44ソニックではない魔球。みんなの心の力から生み出された技。44スクエアがなのはに向かって跳んだ。

「レイジングハート！」

〈了解〉

なのはの砲撃が44スクエアとぶつかり合った。だがなのはの砲撃魔法を44スクエアは押し返したのはに直撃した。

「きゃあああああああああああああ！！！！！！」

なのはにマグナムエース達の思いが入ってくるが倒れなかった。なのははそのままレイジングハートを構えた。

（・・・なんだろう・・・この力・・・私・・・何かとても大切な事を忘れている気がする）

相手を倒すための技ではない44スクエアを受けたなのはは何かを思った。

（・・・わからない・・・けどこの人と戦ったらわかるかもしれない！）

なのはは迷いを吹っ切るように指先からクロスファイアーシュートが放つがマグナムエースは歩みを止めずなのはのクロスファイアー

シュートを一つずつ受け止めていた。

「え？」

「今の君に！俺の歩みを止めることなどではしない！！」

「く！ディバイiiiiiiiiンバスター！！！！」

マグナムエースはディバインバスターを真っ向から受け止めた。凄まじい爆炎が立ち込める。しかしマグナムエースは立っていた。ディバインバスターを受け止め尚且つ高町なのはを見つめたまま。

「・・・嘘・・・なんで！」

マグナムエースの意識は朦朧としている。だがそれでも膝を突かず焦点の合わない視線でなのはを真っ直ぐ見ていたからだ。

「嫌！嫌ああああ！！！！」

なのははマグナムエースが怖くなった。リミッターがかかっているとはいえディバインバスターまで使ったのにもかかわらずマグナムエースは倒れないからだ。そして言い知れない威圧感が・・・真っ直ぐな瞳が恐ろしかった。なのはは恐怖のあまり再びディバインバスターを放つ体勢に入ったその瞬間。

一陣の風が吹いた。

「マッハスピーン!!!」

なのはの足元にサッカーボールが打ち込まれた。なのはは砲撃態勢を解いてしまった。なのはが見上げると、そこには自分より一回り大きいロボットが立っていた。ロボットはなのはには目もくれず意識のないマグナムエースに向かって茶化した。

「よおマグナム。随分可愛い身体になっちまったじゃねえか」

「ウ・・・ウイン・・・デイ」

そう降り立ったのはマグナムエースの友、マッハウインデイだった。

「アクセルシューター」

なのはの光弾がマグナムエースとマッハウインデイに襲い掛かる瞬間。

「竜うううう鉄・拳!!」

「はあああああ!!!!」

なのはの光弾をまた現れた二体のロボットが防いだ。

「大丈夫？ マグナムエース」

「リュ・・リュウケン」

「・・・無事か・・・マグナムエース」

「・・・十郎太」

現れたのはキアイリュウケン、極十郎太だった。

「な！なんなの！？」

「こっちにもいるぜ！！！」

なのはがビルを見上げた瞬間そこにはブルーアーマーがトップジョイがGZがマグナムエースの魂で結ばれた友シルバーキャッスルのメンバーが立っていた。

「誰なの！？あなた達！マグナムエースが呼んだの！？」

「俺たちは呼ばれたんじゃない！！自分の意志で着たんだ！！おい！マグナムエース！！いつまで寝てんだ！！！」

マッハウインディの声に朦朧としている意識を起こすマグナムエース。

「みんな！！」

「伝えるんだろ？あの子に」

「・・・ウインディ」

「マグナムだけの思いで届かないならミー達も力を貸すネ！」

「・・・トップジョイ」

「力を合わせれば乗り越えられる!!」

「・・・GZ！」

「がんばれマグナム！」

「みんなの気持ちを籠めよう」

「そいつは良いや!!」

その瞬間シルバーキャッスルのメンバーの心のエネルギーがマグナムエースに降り注がれた。

「・・・行くぞ!・・・なのは!!」

「く！」

シルバーキャッスル全員の魂がスバルの身体に移りマグナムエースが投球フォームに入った瞬間マグナムエースに集まったエネルギーが天を貫き誰もがその姿に銀河を見た。

（みんなの熱い思いが詰まったこの力!高町なのはに届け!）

（なに?この力）

スバルはマグナムエースに集まった未知の力に心地よさを感じてい

続く

第八話 エース・オブ・エース対マグナムエース（後書き）

・・・あの時マグナムエースを通して私に注ぎ込まれたあの力・・・
温かくて・・・とても心地よかった・・・あの力はいったい

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 集結！シルバー
キャッスル

正々堂々！試合開始！

第九話 集結！シルバーキャッスル

ティアナは暗闇の中影に向かっていった。

「はあああああ！！！！！！」

ティアナが44ソニックを投げた瞬間。

「なあに？その球？」

ティアナが振り向いたその先にはスバルが立っていた。

「スバル？」

「それが44ソニック？そんな球投げるために特訓に付き合わされてたなんて馬鹿みたい」

ティアナの後ろに立っていたスバルは嘲笑うようにティアナを見た。

「……なに……何処が違うのよ！！」

「全くそんな球スピード以外の何にも備わってないよ」

「……なのはさん」

スバルが消えるとそこには、なのはが立っていた。そしてティアナが振り返った瞬間赤き野球選手のようなロボットが立っていた。

「……今の球には心が無い……ただの消し炭だ！」

「・・・マグナム・・・エース・・・だったら見せてやろうじゃない！！消し炭かどうか！！」

ティアナが影に向かって投球体勢に入った。

「4 いいいい4 おおおおおソニック！！！！」

ティアナが44ソニックを投げた瞬間影が実体化しティアナの姿になった。

「は！」

「クロスファイアああシューシュート！！！！」

影のティアナのクロスファイアシュートがティアナの44ソニックを破壊した。

「うああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ティアナにクロスファイアシュートが直撃しティアナの身体が砕け散った。

第九話 集結！シルバーキャッスル

「は！」

ティアナは悪夢から目を覚ました。全身から汗を流していた。

(なんだったの?・・・あれは)

ティアナの記憶が徐々にはっきりしていく。

(そうだ・・・あたしはマグナムエースの44ソニック・オン・ファイヤーを受けて・・・そのまま)

マグナムエースの言葉と44ソニック・オン・ファイヤーを受けた解きの感触を思い出した。

(え?)

ティアナは手に熱いものが宿っていた。

(・・・なに・・・この熱さ)

「あっ! 気がついたんですね!!」

医務室に入ってきたのは牛のようなロボットだった。それにティアナは驚いていた。

「シャマル先生ー! 目を覚ましましたよ」

ロボットが声を出すとシャマルが入ってきた。

「ブルアーマーさんありがとう」

「いえ、こう見えてもリーグホスピタルに勤めてましたから」

そう言うとブルアーマーはティアナをシャマルに任せ立ち去った。

「シャル先生・・・今のは」

「ブルアーマーさんマグナムエースのお友達みたい」

「マグナムエースの？」

「あ、そうそうティアナこれ十郎太さんって人から渡されたんだけど」

シャルは十郎太に渡された一枚の紙切れを差し出した。だがそこには何も書かれていなかった。

その頃マグナムエースはシルバーキャッスルのメンバーに今までの事を説明していた。

「そうか・・・そのような事が」

マグナムエースの言葉に十郎太を始めとするシルバーキャッスルのメンバーは驚いていた。

「お前はずっとひとりで戦ってきたのかよ」

「ウィンディ、それは違う・・・俺は一人じゃなかった・・・例え存在する世界が違って俺たちの心には同じ風が吹いているそれだけだ」

「へっ！言ってくれるじゃねえか！これからは俺たちも手を貸すぜ！」

「僕も頑張るよ」

「ミー達も一緒ネ」

「某もだ」

「無論だ」

「みんな」

マグナムエースは友の言葉が嬉しかった。

「ところでマグナム！お前なんでそんな身体なんだ？」

ウィンディは笑いを堪えて言った。

「いや、俺にも分からないんだ。気がついたらスバルの身体に居たんだ・・・それに俺の身体がこの世界に來た何とかなるかもしれないが」

「・・・お前苦労したんじゃないのか？」

GZが同情の眼差しで見えてきた。

「・・・お前も苦勞してみるか？いろいろな意味で」

「・・・遠慮しておく」

マグナムエースの言いたくない苦勞がわかったのかGZは黙った。

（この人たちがマグナムエースの仲間？）

スバルはシルバーキャッスルに何か言い知れない絆を抱いていた。それは自分達には足りていない。そうも思っていた。その瞬間アラートが鳴り響いた。ヘリポートに集結するフォワード陣とシルバーキャッスル。なのはがフォワード達に号令をかける。

「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の3人」

「みんなはロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ・・・留守を頼むぞ」

「「はい！」」

フォワードの3人は返事を返す。

「・・・はい」

ティアナも返事をするがそこからは闘志がない。その光景になのは達隊長陣、シルバーキャッスルのメンバーも心配した。

「・・・ティアナは出動待機から外れておこうか」

なのはの突然の一言にメンバーは驚いた。

「その方がいいな・・・そうしとけ」

ヴィータも肯定したがティアナは納得しなかった。

「・・・言う事を聞かない奴はいらないって事ですか？」

ティアナの言葉に憎しみが湧き上がる。驚く六課のメンバーだがシルバーキャッスルのメンバーはその憎しみに動じなかった。

「現場での指示や命令はちゃんと聞いてます！・・・教導だってサボらずにやってます・・・それ以外の努力だって・・・教えられた通りじゃないと駄目なんですか？」

ヴィータが怒りをあらわにするがそのヴィータをマグナムエースが止めた。

「・・・私は・・・なのはさんたちみたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能だって無いし・・・キャロみたいなレアスキルも無い！少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらないと・・・強くなれないじゃないですか！！！」

その瞬間シグナムがティアナに殴りかかろうとしたが、その腕が何者かにつかまれた。その腕を掴んでいたのはシグナムが待ち望んだ相手極十郎太だった。

「離せ！十郎太！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

十郎太は何も言わずにただシグナムの腕をつかんでいた。

「駄々をこねる馬鹿は！！なまじ構ってやるから付け上がるんだ！何故貴様らは何も言わないんだ！？」

その表情に十郎太は一言だけ呟いた。

「・・・今のお主では何も伝える事は出来ぬ」

「なに！！」

「言い方はどうあれ・・・それは彼女の心の叫びだ・・・ずっと一人で抱えてきた」

マグナムエースの言葉に十郎太が続いた。

「お主が何者だか知らぬが、某にわかることが一つだけある・・・お主達の目には霧がかかっている・・・かつてのマグナムエースのように」

「なんだと！！！！」

「確かにティアナ殿のやった事は無茶以外のなにものでもないだろう・・・だがお主達はそれに気付かなかったのか？」

「！！！！！！」

十郎太のその言葉を聞いた瞬間。六課メンバーの誰もが凍りついた。確かにティアナの無茶には薄々感づいていたが誰もそのことを追及しなかった。

「・・・仲間を見ず一方的に虐げるなどそんなものは仲間ではない！・・・そんな物ではマグナムエースの籠めたメッセーじも届かなかったようだな・・・まして某の残したものが読み解けぬようならそれまでだ」

十郎太はそれだけ言うとその場から立ち去った。そしてマグナムエースがティアナに一言だけ呟いた。

「・・・ティアナ・・・君には君の戦いがある・・・劣等感を感じる必要なんか無いんだ」

「でも！・・・でも！！！！」

「ああ！もう面倒くせえ」

均衡を破ったのはウィンディだった。ウィンディは一枚のビジュアルディスクを取り出した。

「・・・みんな集まってくれこいつを見れば納得する・・・あんな達が出発してくれ」

ウィンディの言葉に出動するのは達。そして十郎太を除くシルバーキャッスルのメンバーとフォワードメンバー、シグナム、シャル、シャーリーがロビーに集まった。シャーリーがマグナムエースの世界のビジュアルディスクを再生できるように調整する。再生準備が整いビジュアルディスクを再生するウィンディ。それはワール

ドツアーの時の野球リーグワイルドホーク戦の映像だった。そこにはマグナムエースが立っていた。44ソニック・オン・ファイヤーを連投するマグナムエースに対しスバルは明らかにいつものマグナムエースとは違って、事に気づいた。

（・・・違う・・・あれは44ソニックじゃない・・・あの44ソニックまるで今日・・・ティアが投げた奴みたい）

スバルはマグナムエースの投げる44ソニックにいつも言い知れない力を感じていたが、今映像で見ている44ソニックは明らかに別物だった。それはティアナ、エリオ、キャロ、シグナムも感じていた。凄まじい投手戦だが、マグナムエースは仲間の言葉に耳を傾けず、44ソニックを投げ続けた。そして、身体の破損や無理が祟っている事が明らかにわかった。そして、次の映像を見た瞬間、誰もが目を疑った。

「は！」

「そんな!!」

「まさか!!」

ワイルドホークに44ソニック・オン・ファイヤーがホームランを打たれた瞬間、マグナムエースは身体中から爆発を起こし、そのままマウンドに倒れこんでしまったのだった。

「・・・これって」

「・・・オーバーヒートだ」

スバルの口調が変わった。マグナムエースに切り替わった。

「・・・俺の過剰な精神エネルギーが肩に負担をかけているのにもかかわらず投げ続けた。あの時の俺は誰の言葉も耳に届かなかった。仲間も信じず・・・俺はただ一人で焦っていた・・・十郎太の言葉も聞かずに」

「・・・あの後マグナムはすぐにリーグホスピタルに運ばれたが・・・回路が正常に直ってももう44ソニックを投げられる可能性は0だと言われた」

ウィンディの言葉にその場に居た全員が凍りついた。

「あの時俺はとても大切な事を忘れていた・・・そしてただ無茶を繰り返した・・・その結果がこれだ」

映像には無残に倒れているマグナムエースの姿があった。

「そんな・・・マグナムエースさんものはさんと同じことになってたなんて」

「同じ事？」

シャーリーの言葉にマグナムエース達が反応した。

「はい・・・これです」

シャーリーが見せた映像はシルバーキャッスルの想像を遙かに超えるものだった。

ティアナは一人港に座り込んでいた。マグナムエースの過去そしてなのはの過去を知ったティアナこれまで自分がいかに愚かな事をしていたのに気付いた。自分の思いだけで仲間を巻き込みそして危険にさらしてしまった事。そしてマグナムエースの仲間という言葉に逆らい続けてきた事だった。

「・・・ティアナ」

そのティアナになのはが話しかけた。

「・・・なのはさん」

「今回は私も間違ってたかな・・・私はティアナの技は極めれば凄いなだよって事を伝えたかった・・・けどマグナムエースさんに言われた事『力に心が無ければ熱い想いは伝えられない』って・・・私はただ力でねじ伏せる事しかしなかった・・・私もマグナムエースさんから受けた技に心があった・・・一人だけじゃないみんなの気持ちに私が私に伝わってきた・・・私たちに欠けていたものがあった」

ティアナもなのはと同じ気持ちだった。するとなのははティアナのクロスミラーージュをモード2を開放した。

マグナムエースはその光景をスバルを通して見ていた。なのはもテ

イアナのことをちゃんと見ていたという事がわかった。

「……ごめんなさい……ごめんなさい！」

ティアナは泣き崩れていた。マグナムエースの言うとおりで。皆は自分を見てくれていた。だが自分がそれを拒絶していた。そして何気なく十郎太に渡された紙を見たその時。

（……白くなれ）

十郎太のメッセージが浮かび上がった。

（白？）

そして後ろを振り向いたその時マグナムエースが立っていた。なの
はも振り向いた。

「……マグナムエース」

マグナムエースはティアナにボールを投げ渡した。

「今の君なら投げられるはずだ」

「え？」

ティアナは立ち上がると心の中の何かが燃え上がり何気なく投球体勢に入った瞬間ティアナは44ソニックの投げ方が自然とわかった。

（なにこれ！身体が勝手に覚えている……これが……これが）

ティアナから魔力ではない未知の力があふれ出した。フォームも何もかもがバラバラだったがしかしそれは今までに無い感覚だった。ティアナの右腕に熱き魂が燃え上がる。

「・・・これがあたしの！！44ソニックだああああ！！！！」

ティアナの渾身の44ソニックが海に投げられた。それは自分が魔力で再現した見せ掛けの44ソニックではない真の44ソニックだった。そうマグナムエースは44ソニックの投げ方をティアナの魂に刻み込んだのだった。突然の事で力が抜けてしまい倒れこむティアナ。

「ティアナ！」

マグナムエースが抱きとめるとティアナは一言だけ呟いた。

「・・・大丈夫・・・凄く・・・体力を使う技ね・・・どう？あたしの44ソニックは？」

「ああ、最高だったぜ！」

マグナムエースの言葉にティアナは安心したのか気絶してしまった。その顔はとても穏やかだった。それを見ていたスバルもなのにも安心していた。

続く

第九話 集結！シルバーキャッスル（後書き）

ティアナはみんなと受けとけ始めた。その時俺たちに新しいメンバーが紹介された。その名はエリス。なんだって？ミッドチルダ製のアイアンリーガー？

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 謎の新人エリス 正々堂々！試合開始！

第十話 謎の新人エリス

「・・・ふむ・・・アイアンリーガーか・・・実に興味深い」

暗闇の1室で男は全裸の女性を見つめていた。

「・・・起きたまえ・・・エリス」

「・・・はいドクター」

エリスと呼ばれた女性は目を覚ますと身体に服が装着された。

「今から君は機動六課に向かいあのシルバーキャッスルとかいう素材どもを調査してくるのだ」

「・・・わかりました」

それだけ言うとエリスはその暗闇から飛び出した。

第十話 謎の新人エリス

「シャーリーさん。どうですか？」

「50%くらいかな」

マグナムエースは自身の身体の前に立っていた。隣にはシャーリーが居るがパネルボードの前で頭を悩ませていた。

「うゝん片方の人格だけそれもピンポイントで移し変えるのは難しいなあ。下手をすればスバルの人格がマグナムエースさんの身体に入っちゃうかもしれないし」

「・・・そうですか・・・いつまでもスバルの身体の中に居る訳にはいきません」

「・・・全力尽くしますか」

シャーリーは再びパネルボードに向かった。その後マグナムエースは何故自分がこの世界に呼ばれたことを六課のメンバーに話した。当然六課メンバーは驚き一刻も早くマグナムエースの意識をスバルから取り出す方法を模索し始めた。

（・・・俺の身体がこの世界に来た以上もう隠しておく必要が無い・・・何かの意図というのは俺の考えすぎか・・・それなら一刻も早くスバルの身体から出なければ）

（いやあ・・・別に居ても良いよ）

（・・・しかしそれは君に悪い）

（大丈夫！大丈夫！・・・まだ時間はいっぱいあるし・・・それにもうちよっと一緒に居たいな）

はつきり言うマグナムエースは純粹にスバルには迷惑をかけていると思っている。だがスバルは自分やティアナの事を本気で心配しいつも傍に居て力を貸してくれたマグナムエースが好きなのか。今のスバルには自分の中にマグナムエースが居る事が当たり前になっ

てしまっていた。

（・・・じゃあ50%に賭けてみる？私別にマグナムエースの身体でも困らないけど）

（・・・もう少し待とう）

スバルの半ば脅し文句にマグナムエースは黙った。因みに他のシルバーキャッスルのメンバーはというと時空漂流者扱いになるのか処遇に困っていたためウィンディとトップジョイとGZは時間つぶしになのは達隊長陣はウィンディ達が持っていたビジュアルディスクでアイアンリーグを観戦していた。

「行け！！シュートだ！！！」

「ゴールドフット！決めてやれ！！！」

「止めてえ！ブル！！」

何故か熱狂する六課ご一行様。因みに対戦はサッカーリーグ決勝戦。シルバーキャッスル対ダークプリンスの試合だった。

（スバルは見ないのか？）

マグナムエースの素朴な疑問に。

（うんと実は私マグナムエースの夢をよく見ててそこでよく観戦してたんだ）

マグナムエースはハツと思ったスバルが自分達の世界の夢を見ていたからだ。そしてふと気付いた。

（そういえばティアナはどうしたんだ？）

（あれ？どうしたんだろう？）

「すうううう！」

ティアナは裏庭で投球練習に没頭していた。その練習にシルバークィヤッスルのメンバーが付き合っていた。投球体勢に入った瞬間ティアナから魔力ではない何かが吹き上がる。

「4 いい 4 おおソニック！！！」

「どおりゃあああああああああ！！！」

ティアナは44ソニックを投げた。それは凄まじいものであったがブルアーマーが捕手する。

「ふう！今のあたしじゃ3球が限界かな」

「けど中々の球だったぜ」

ティアナは44ソニックを投げられる限界を数えていた。今のティアナでは3球が限界だった。

「・・・マグナムエースってよくこんな凄い球投げ続けたわね」

「だけどティアナも投げることに磨きがかかってるぜ」

ブルアーマーの言葉にリュウケンや十郎太も頷いた。その時。

パチパチ

何処からともかく拍手が響いた。一同が振り向くとそこには黒髪の少女の姿があった。

「凄い球ですね。見てて圧倒されました」

少女はティアナたちに歩み寄った。

「誰だい君？」

リュウケンが尋ねると少女は。

「私はエリス。この世界のアイアンリーガーです」

「え！？アイアンリーガー！？」

ブルアーマーが仰天する。エリスを見るとその姿は人間そのものだった。自分達の世界でも女性リーガーは居たが自分達のようなロボットだった。

「まあミッドチルダだったらアンドロイドっていうことかもしれないわね」

「ええ！私もシルバーキャッスルに入れてください！」

どうどうと頭を下げるエリスだが。

「え？けど、そういう事はオーナーに話を通してもらわないと、けど僕達今六課預かりだから・・・はやてさんに話を通してもらわないと」

「なら今すぐにそのはやてさんの所に行ってきます！」

エリスははやての元に向かった。

「なんか前にもこんな事があったような」

「・・・ではそういう事で」

はやては急遽やってきたシルバーキャッスルのメンバーを時空漂流者という名目で機動六課で預かる事に許可が下りた。

「はやてさん！私をシルバーキャッスルに入れてください！！」

ずっこける一同。当然である。たった今現れたばかりのシルバーキャッスルに入れてほしいものなど居るはずがない。

「な！なんやあんた！？」

「申し送れました！私はエリスです！シルバーキャッスルのメンバーがこの世界にやってきたって聞いてこの機動六課に来ました」

はやての収集がかかり集まる六課&シルバーキャッスルのメンバー。

「えー本日ここに集まってもらったのは他でもありません・・・こちらエリスさん。ミッドチルダ製のアイアンリーガーだそうです」

「エリスです！よろしくお願いします！！」

深々と頭を下げるエリス。

「八神副隊長それ本当なんですか？」

「シャーリーの精密検査の結果旧世代のテクノロジーで作られたアンドロイド・・・ミッドチルダ製のアイアンリーガーっていうのは間違いないわ」

ヘラヘラと笑うエリス。

「ところで君は何のスポーツのリーガーなの？」

「野球もサッカーもなんでもできます！！」

ピッチングやシュートの素振りをするエリス。

（んーなんかこんなシチュエーション、ミーどっかで見たことがあるよな）

トップジョイがなんか思っているとエリスはスバルの腕をつかみグラウンドまで来た。

「ちょー！ちょっと！どいうつもり」

「私の実力をお見せします！スバルさんバッターになってください」
エリスがピッチャー、ブルアーマーがキャッチャー、スバルがバッターに立った。

「てりゃっ!!」

エリスの蚊の止まるような投球に驚くスバルとブルアーマー。そしてエリスはニヤリとした瞬間表情が変わった。エリスは物凄い剛速球を繰り出した。そのスピードはマグナムエースやヴィータの投球に似て非になるものだった。

「ふん！」

マグナムエースに切り替わったスバルはあっさりホームランにした。自分の球が打たれたことに驚くエリス。

「何で・・・何で私の球が打たれるの?・・・私の身体はカメラアイも駆動モーターも電子頭脳だって!みんなより遙かに優れたパートナーなのに・・・なんで!」

「リーガーの真の実力とはマシンパワーだけではないという事だ」

「え?」

「俺たちアイアンリーガーを磨くのはアイアンリーガーだ」

それだけ言うとマグナムエースはその場を後にした。

「まっ! 勢いは最高だったぜ! 次はがんばれよ!」

ウィンディの言葉にシルバーキャッスルのメンバーから激励をもらうエリス。打たれたが何故か納得のいく敗戦だった。

「・・・以上がこれまでのシルバーキャッスルのデータです」

「ふむ。まだデータ不足だな・・・君は引き続き調査を続けたまえ」

「はい・・・ドクター」

第十話 謎の新人エリス（後書き）

誰だろう・・・最近僕誰かに見られている気がする。赤い髪の子・・・誰？

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers リュウケンがんばる

正々堂々！試合開始！！

第十一話 リュウケンがんばる（前書き）

ここからはStrikersの話を中心に無視した方向に行きます。エリスのデータです。ノーヴェのストライクアーツを学ぶきっかけも捏造しました。

エリス

スカリエッティ製の戦闘機人の失敗作。廃棄処分されそうなところをシルバーキャッスルの諜報という形で送り込まれた。その身体は旧世代のテクノロジで造られておりリーガー達同様オイルなどを補給しなければならない。

第十一話 リュウケンがんばる

人間のきっかけとは些細なものである。これはその些細な事の話である。

今シルバーキャッスルと機動六課でサッカーの試合をしていた。チーム編成は7対7の試合だった。因みにマグナムエースはスバルの身体に入っていたため六課チームだった。因みに六課チームのリーダーはティアナ。シルバーキャッスルのリーダーはウインディだった。

第十一話 リュウケンがんばる

「おりゃああ!!」

十郎太のドリブルにエリオが食いつく。十郎太はリュウケンにパスを通した。今度はキャロが食いつくがリュウケンはセンタリングを上げた。

「トップジョイ！」

「まっかせるネ！ジャアアアアンプ!!!!」

「みんな！ディフェンス!!」

センタリングを受け止めたトップジョイの空中パスにウインディが

ゴールポジションに立った。そしてすかさずティアナは戦法をたくみに変え始めた。ティアナも仲間と打ち解けたのか自然とみんなのことがわかった。

「行くぜ!!!」

ウィンディの足のタービンが回転した。ウィンディのシュートは複雑な軌道を描きながらゴールに襲い掛かった。ウィンディの必殺技『ジグザグシュート』だった。

「うわ!」

ゴールキーパーのスバルは軌道を見切れずゴールを許してしまった。

「よし!行くぜ!」

「よし!今度こそ!」

六課チームもリベンジのためゴールに襲い掛かるがエリスのラフプレーが炸裂した。

「うあああ!」

ヴィータが吹き飛ばされる。エリスはそのままシュートするがスバルに止められてしまった。するとハーフタイムになりエリスがチームに戻った瞬間シルバーキャッスルのメンバーはエリスを睨み付けていた。

「ど・どうしたんですか?」

「お前・・・今のプレーなんだよ！」

ウィンディがエリスに詰め寄る。

「だってアイアンリーグはそんなものでしょ？」

「なに！俺たちはサッカーをしてるんだぞ！！」

ウィンディが怒るとGZがそれを止めた。

「待てウィンディ」

「離せ！GZ！」

「いいかエリス。アイアンリーグでも俺たちシルバーキャッスルにはシルバーキャッスルの戦い方がある。それは例えどんな試合であろうと正々堂々戦うことだ。俺たちはアイアンリーガーだ・・・破壊が目的ではない！」

「正々・・・堂々？」

エリスにはそれが理解できなかった。だがシルバーキャッスル流に戦ってみる事にした。

「正々堂々戦えば良いんでしょ！！」

半ばエリスはやけくそになりながらフェアプレーで戦った。バーニアでディフェンスをかわしシュートポジションにはいりシュートした。

「おりゃああああ!!」

スバルは真っ向から受け止めた。悔しがるエリス。エリスが振り向くとそこにはシルバーキャッスルのメンバーが居た。

(またお説教かな)

半ばまた怒られると思ったエリス。だが

「惜しかったな!やれば出来るじゃねえか!見直したぜ!」

「ベリーナイスネ!」

「そうだ!それで良いんだ!」

ウィンディ、トップジョイ、GZがエリスを激励した。拍子抜けするエリス。

「けど・・・ゴールは決められなかったんだよ」

「何言ってるんだよ!お前の今みたいなファイトが良いんじゃないじゃねえか!次は絶対決めようぜ!!」

「え・・・うん!」

さっきまで自分のプレーに怒っていたウィンディがくれた激励の言葉にエリスは何故だか満たされていく感じになった。

「ん?」

「どうした？リュウケン」

「いや。最近誰かに見られているみたいなんだ」

「以上が今回のシルバーキャッスルのデータです」

エリスはスカリエッティにデータを送信していた。実はエリスはスカリエッティに送り込まれたスパイだった。

「・・・これは・・・任務」

戦闘機人の失敗作であるエリスは廃棄を免れるために諜報活動という形で生き残り、シルバーキャッスルに送り込まれた。だが何故かモヤモヤした気持ちになっていた。

「・・・なんだろう・・・この気持ち・・・なんで・・・こんなに苦しいの？」

エリスの心にはシルバーキャッスルや機動六課のみんなの笑顔が刻まれていた。

「・・・構うもんか・・・私の帰る場所はドクターのところだけ」

エリスは自分の心に嘘をついた。

「・・・どう思う？エリスの事」

ウィンディがマグナムエースに言った。

「あいついつもふらりとどこか行くしな・・・それにこの世界にアイアンリーガーが居るなんて都合よすぎだろ」

「狙いが俺たちだけなら別に良いさ・・・それにあいつはそんなに悪い奴じゃなさそうだ」

「おいマグナム」

「お前やトップジョイと一緒にだよ。それに今日の試合だって最初はともかくあんなに楽しそうにプレーしてたじゃないか。彼女は仲間さ・・・少なくとも今はな」

「まったく相変わらずお人よしな奴」

呆れるウィンディ。そしてスバルはマグナムエースの心が器量が広いと思っていた。

（マグナムエース）

（どうしたんだスバル？）

（・・・マグナムエースは彼女がスパイだって構わないの？）

スバルの疑問にマグナムエースは答えた。

（・・・何か訳があるんだろう）

（けど）

（目的や人種の違いで敵とは言えない）

その言葉にスバルは黙った。

（別にいいじゃないか。その内良い仲間になれるさ）

（マグナムエース）

「ふむ・・・アイアンリーガーか」

スカリエッティはアイアンリーガーに興味を持った。機械でありながら常に限界を超える力の源に興味を持ったからだった。

「ねえドクター」

「ん？ノーヴェか」

「そのアイアンリーガーとかいう奴ら・・・戦ってみたいんだけど」

「彼らはまだ未知数だ・・・それに君はまだ完全じゃない・・・だがいい機会だな・・・君はこのリーガーをマークしたまえ」

スカリエッティが表示したのはキアイリュウケンだった。

「・・・なんでこいつ？」

「奴は空手のリーガーだ・・・君の役に立つかもしれない」

「・・・わかった」

ノーヴェはリュウケンに狙いを定めた。

その頃フォワードチームに久しぶりの休日が訪れていた。それを利用しリュウケンとGZはあるメカショップを訪れていた。それは自分達の食料とも言えるオイルを調達するためとミッドチルダの地形を頭に入れるためだった。オイルの並べられている棚を見つめるリュウケン。

「あ、GZあったよ」

オイル缶の裏の説明書きを見る。

「うん、これなら俺たちが飲んでも大丈夫そうだ」

リュウケンとGZがメカシヨップを出るとなにやら地下が騒がしかった。

「誰か居る」

「行くぞ」

リュウケンとGZは気配のする方向まで行くと。そこには鎖に繋がれケースを持った女の子が居た。

「大丈夫!？」

リュウケンが駆け寄ったその時何者かに吹き飛ばされてしまった。壁に叩きつけられるリュウケン。

「リュウケン!」

「大丈夫。平気だよ」

壁に叩きつけられたのにもかかわらず何事も無かったかのように起き上がるリュウケン。リュウケンを攻撃したのは赤い髪の少年のような少女だった。少女の名は『ノーヴェ』

ノーヴェはそのままリュウケンたちを見下ろすように柱の上に立った。

「GZ・・・その子をお願い」

「わかった」

リュウケンは無ーヴエとの戦いが避けられないと感じたのか戦闘体勢に入った。GZはスティックで女の子の鎖を外しリュウケンにこの場を任せそのまま撤退した。

「竜・鉄・拳!!」

リュウケンの竜鉄拳が柱にヒットした。柱の上に立っていた無ーヴエが落下してくるのをリュウケンが受け止めた。

「お前あの子にひどい事した。謝るんだ」

「なにもしてないよ!!」

リュウケンは無ーヴエに女の子への謝罪を要求したが無ーヴエはなにもやっていないと主張しリュウケンを蹴り飛ばし距離を置いた。

「うおおおおおおお!!!!」

無ーヴエはリュウケンにパンチの連打を浴びせるがリュウケンは微動だにしないというよりも全く動かない。それもそのはずリュウケンは空手リーガーだからなのか非常に討たれ強い。アイアンリーグでまだラフプレーが流行していた頃リュウケンに攻撃してきたリーガーの殆どは自分で殴っておきながら自滅してきた。そして戦争兵器でもあるアイアンソルジャーの攻撃を受けても無傷であった。ようするにリュウケンは頑丈もしくはタフなのである。そして気も優しいため進んで自分から相手を殴るような事はしない。反撃もせずただ打たれているだけでもかもその攻撃が全く効いていない事に無ーヴエはイラついていた。確かに無ーヴエにはパワーはあるしかし不完全なのか破壊力に変換されていないようだ。

「何で！お前は反撃しねえんだよ！！」

ノーヴェはリュウケンの態度が気に入らなかった。

「僕の空手は人を傷つけるためにあるんじゃない！！」

受けの構えから崩さないリュウケンにノーヴェは苛立ちを覚えた。
しかしリュウケンはどうしてもノーヴェを殴る気にはなれなかった。

（・・・何故だろう・・・この子の事を殴っちゃいけないような気がする）

それは人間を殴ってはいけないのかリュウケンの優しさなのかはリュウケン自身にもわからなかった。

その頃GZはなのは達と連絡を取り合流するべくさつき保護した女の子を抱えながらブーストダッシュしていた。

（なるべくここから離れなければ！）

「はっ」

その途中女の子はGZの腕の中で目を覚ました。

「心配するな！今安全な場所まで連れて行く」

GZあまり子供の扱いが得意ではないGZは直球で会話を済ませた。
しかし、そのGZを狙う影が合った。ディエチだったディエチはイノメスカノンをチャージしGZを狙っていた。

「IS、ヘヴィバレル発動・・・12秒、11、10、9」

カウント0になるとGZに向かって集束砲が発射された。

「なに!？」

GZは咄嗟に女の子を下ろし射線上にたった。

「なんのつもりだ!？」

ディエチが謎めいたその瞬間。GZはヘヴィバレルを受け止めた。

「くうううううおおおおお!!!!!!でえい!!」

GZはヘヴィバレルを弾き飛ばした。自分の攻撃が受け止められた事に驚くディエチ。そして第二射に入った。

「・・・今度こそ」

再びイノームスカノンからヘヴィバレルが発射されるがGZは真っ向から受け止めた。

「くうう!!俺の装甲は伊達じゃないんだ!!これくらいの攻撃どうってことないぜ!!!!」

「く!!なんてやつ!!」

再びヘヴィバレルを破ったGZ。

「時間が無い！掴まれ！」

GZは女の子を肩に乗せるとそのままブーストダッシュで小脇の道に入った。

「どうしたんだ!？」

ヘヴィバレルの余波でノーヴェの頭上に巨大な一枚の瓦礫が降りかかってきた。

「危ない!!」

リュウケンが落下してきた瓦礫を受け止めノーヴェを庇った。

「・・・お前」

ノーヴェにはそれが理解できない自分に襲いかかってきた敵を庇ったリュウケンの行動が。

(こいつ何のつもりだ?)

尚も巨大な瓦礫がリュウケンたちに襲い掛かる。

「はあああああああああ!!!!」

リュウケンの額に『心』の文字が浮かび上がる。

「き・君・・・なるべく身体低くして」

咄嗟にノーヴェは体の体制を低くする。その瞬間リュウケンの背中

に『押忍』と表示された。

「はあああああああああ！！！！！竜・天・きゃあああああく！！！！！」

リュウケンが竜天脚で瓦礫を蹴り上げた瞬間瓦礫は見事に真つ二つになった。リュウケンの破壊力に啞然とするノーヴェ。

「大丈夫？怪我は無い？」

リュウケンが振り向いた場にはノーヴェの姿は消えていた。

「何処行っちゃったんだろう？」

リュウケンはGZと合流するべく行動を開始した。

一方GZはフォワードメンバーと合流し女の子の治療に当たっていた。

「この子は・・・一体？」

スバルの身体を通して女の子を見たマグナムエースは気になった。

一方場所が変わりノーヴェはリュウケンのことを考えていた。

「・・・あいつがもし手を出していたらあたしは確実に負けていた」

悔しさをあらわにするノーヴェ。そして自覚した。自分には一発はあっても一撃が無い事に。

「キアイリユウケン・・・次は真剣勝負だ」

この後ノーヴェは一発を一撃に変える方法を模索し始めた。この出来事が後にノーヴェとヴィヴィオがストライクアーツを学ぶきっかけになった。

第十一話 リュウケンがんばる（後書き）

この子はなんだ？レリック？なんだそれは？うわちよつと待ってくれ俺に懐くな！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers ヴィヴィオ
正々堂々！試合開始！

第十二話 ヴィヴィオ

GZはこの前に保護した女の子のお見舞いに来ていた。お見舞いに来た理由それはブルアーマーからの連絡だった。

第十二話 ヴィヴィオ

「なに？俺に來いだと？」

画面の前のブルアーマーに苦情を言うGZ。

「そうなんだ。あの子目は覺ましたんだがとても怖がってるんだ」

「こういうのは俺じゃなくてトップジョイの方が良いんじゃないか？」

「オウ！ミーも怖がられちゃってるネ！GZじゃないとダメヨ！」

トップジョイもお手上げという状態。やもえずGZは女の子が待っているであろう病室の前に立った。

「はあ」

緊張の余り凄いため息を吐くGZ。それもそのはずGZは長年ソルジャーとして戦ってきたため子供の扱いが得意ではない。だが必死に努力しシルバーキャッスルの子供たちとは仲良くなれた。が、そ

れでも初対面の子供には少し苦手意識を持っているようだ。病室の前に立つGZだがその途端ブルーアーマーが飛び出してきた。

「ブル？どうした？」

「あ！GZ！あの子が居なくなっちゃったんだ！」

「なに！？」

慌てて周辺を探し始めるブルーアーマーとGZ。ブルーアーマーは表をGZは中庭を搜索し始めた。

（どこに行ったんだ？）

辺りを見回すGZだが女の子は見当たらない。その時だった。

「ん？」

GZは足に違和感を感じた。なんと探していたであろう女の子がGZの足に捕まっていた。

「お・おい」

女の子は怯えた様子でGZにしがみ付いていた。

「おい。離してくれ」

それでもGZの足から離れない女の子どうやら余程怯えてるようだ。

「・・・参ったな」

するとG Zは以前リュウケンに言われた事を思い出した。

（笑顔だよG Z）

G Zに蘇った苦しい思い出。

「お・・・おい」

女の子がG Zの顔を見た。

「に！にいゝ！」

凄まじく引きつった顔（本人は一生懸命笑顔を作っているつもり）で女の子を見るG Z。不思議と恐れなかった女の子。それよりも不思議そうにG Zを見る女の子。

「にいゝ！」

「あ！にいゝ！！」

G Zの引きつった笑みに女の子も釣られてにいゝつとなる。どうやらベズベズと同じで睨めっこ勘違いした様子だ。

「にいゝー！！」

「ぎいゝいゝ！！」

G Zは表情に力を籠めると女の子も表情に力を籠める。

「きゃは！」

女の子はG Zの面白い顔（くどいようですが本人にとっては精一杯の笑顔のつもり）に笑った。

「はっ。はは」

お互いの緊張が解けたようでG Zも苦笑いになる。そしてG Zは女の子に疑問を言った。

「なんで俺なんだ？」

「・・・助けてくれたから」

女の子はヘヴィバレルから身を投げて守ったG Zの事が忘れられなかったようだった。

「名前は？俺はG Z」

「・・・ヴィヴィオ」

「・・・お父さんとお母さんは？」

「・・・居ない」

「そうか」

すまない事を聞いたと思うG Zだが。

「！！！！危ない！！！！」

その瞬間シャツハが窓を突き破りヴィヴィオに襲い掛かろうとした。ヴィヴィオを庇うようにGZはスティックを構える。

「なんのつもりだ!!」

「その子は危険かもしれません!」

「それがどうした!この子に何かしてみろ!俺が相手になる!!」

GZのバイザーが降りる。たとえどんな理由があろうと子供に危害を加えようとするのを見過ごすのはGZのソルジャーとしてのプライドがそしてGZに宿ったシルバーキャッスル魂が許さなかった。正に一触即発の状態が続く。そこになのはが割って入った。

「シスターシャツハ。GZさん待ってください」

なのはの介入で一触即発は免れたがヴィヴィオはGZの後ろに隠れてしまった。

「大丈夫だ。少なくともこの人は害はない」

GZの言葉にヴィヴィオは恐る恐るなのはに歩み寄る。なのはの優しい問いかけにヴィヴィオは警戒心を少しだが解き始めていた。

(ふう)

GZはこの場をなのはに任せ立ち去ろうとするがまたしても足に違和感を感じた。ヴィヴィオがしがみ付いていた。

（参ったな）

場所は変わって六課内。なのは達が聖王教会に行っている頃ヴィヴィオはGZの肩に座っていた。どうやら懷いてしまったようで離そうとすると泣くので離すに離せなくなってしまうた。その光景はシユールなのかシルバーキャツスル以外のメンバーは不思議そうにGZを見ていた。

「なんでGZさんに懷いちゃったんでしょね？」

エリオの疑問にリュウケンが。

「ああ見えてGZは子供に優しいんだよ」

「人は見かけによらずって言うけどリーガーも同じなのね」

ティアナの意見ももつともである。ぶっちゃけGZは戦闘使用のリーガーなので見た目は兵器だが子供には優しい。だがだが不器用な事もあってうまく伝えられない。そして今日はGZとトップジョイ、エリオとキャロでヴィヴィオの面倒を見る事になった。

「みんな何して遊ぶネ！」

「えっと・・・」

「その〜」

トップジョイの発案にぶっちゃけエリオとキャロはGZが遊ぶ事が出来るのか分からないといった様だった二人はGZを見ると。

「俺は・・・鬼ごっこしか知らん」

と言うわけで鬼ごっこする事になった一同。鬼はGZだった。

その頃スバルとティアナは前回の戦闘で出くわした一味の報告書をまとめていた。正直リュウケンに襲い掛かってきた人物を含めシルバーキャッスルのメンバーも報告書をまとめていた。マグナムエースはスバルの表情がすぐれない事に気がついた。

（どうしたんだ？スバル）

（あ、マグナムエース・・・なんでもないよ）

何でもあるそうマグナムエースは確信した。だがあえてマグナムエースは深く聞かなかった。

（スバル・・・何があるかは知らないが今は聞かないだが一人で抱え込むな。俺たちは仲間だ）

（・・・マグナムエース）

すると物凄い轟音が六課内を響いた。

「な！何なの！？」

仰天するスバル。

(・・・心配ない)

(へ?)

マグナムエース達シルバーキャッスルは動じていない事にスバルとティアナは?だった。

(がんばれよ。GZ)

一方

壁際でGZのスティックがエリオとキャロの間を貫いていた。物凄い表情で避けているエリオとキャロ。

「捕まえたあ!」

鬼ごっこに凶器を使ったGZ。

「あ!危ないじゃないですか!」

「心配ない。ちゃんと手加減した」

「手加減しても危ないですよ!」

エリオとキャロの抗議にGZは済まないといった表情だった。その様子にヴィヴィオはケラケラ笑っていた。

「GZこっちネ」

トップジョイがGZをおびき寄せるとGZはブーストダッシュでトップジョイに迫った。

「捕まらないネ」

「捕まえるう！」

「ジャアアンプ!!」

いきなりのトップジョイのジャンプ回避にGZは勢い余って壁に激突してしまった。破壊された壁にエリオが。

「これ絶対にフェイトさんに怒られますよ」

「・・・すまん」

申し訳ないといった表情のGZにキャロが。

「あ、そろそろおやつにしましょう！」

おやつタイムに入った一同。ヴィヴィオとエリオとキャロはケーキをGZとトップジョイはオイルを飲んでいた。因みにヴィヴィオはGZの肩に座って食べている。余程GZが気に入ったらしい。

「おいしい、あ」

ヴィヴィオはケーキを食べていたお皿をGZの胸の中に落としてしまった。申し訳なさそうにしているヴィヴィオだがGZは。

「心配ない」

GZが構えると胸からホッケーに使うパックが発射される。パックは壁にぶつかる。

「うわゝ凄い」

どうやらヴィヴィオはGZには心を開いてくれたようだった。そしてお皿が発射された瞬間壁に叩きつけられたお皿は粉々になってしまった。

「あゝ」

「スマン」

箒とちりとりで回収するGZとトップジョイ。するとヴィヴィオは遊び疲れたのか眠ってしまっていた。

「いきなり遊んだから疲れちゃったみたいネ」

「すこし休ませてあげましょう」

エリオの言葉にGZはソファアームまでヴィヴィオを運んだ。そしてあつという間に時間が過ぎキャロが絵本を読んでいたところに、なのはとフェイトが帰ってきた。

「ただいま!」

なのはが帰ってきた瞬間なのはに抱きつくヴィヴィオ。GZはその場を去ろうとした瞬間。

「GZ」

ヴィヴィオに呼ばれてしまった。

「また遊んでね」

ヴィヴィオの笑顔にGZも本当の笑顔で答えた。

「ああ、約束だ」

GZの表情を見た瞬間誰もが思った。

(GZさんって良い笑顔するんですね)

第十二話 ヴィヴィオ（後書き）

え？機動六課に査察が入る？それは不味い俺達のことでは迷惑をかけてしまう。なに？査察の間ロストログアの捜索チームに？

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 結成！チームシルバーキャッスル

正々堂々！試合開始！

第十三話 結成！チームシルバーキャッスル（前書き）

エリス

容姿 15歳くらい 黒髪ストレート 女性標準身長

第十三話 結成！チームシルバーキャッスル

マグナムエースは今教会に居た。何故だか知らないが身体は元に戻っていて首に蝶ネクタイが巻かれている。

「おめでとう！」

「がんばれよお！」

「泣かせたら承知しないからねえ」

シルバーキャッスルのメンバーや機動六課のメンバーに何故か祝福されるマグナムエース。

「????????」

何の事だと思いつと横を見ると純白のウェディングドレスを着たスバルの姿があった。

「……幸せにしてね」

満面笑顔のスバル。

「!!!!!!!!!!!!」

あまりの衝撃的なことにマグナムエースの回路が焼き切れそうになった。

「はっ!!」

マグナムエースは飛び起きた。身体はスバルのまま周りで夜。そして頭の中ではスバルの意識は眠っていた。

「……びっくりした」

流石のマグナムエースも動揺してしまったようだ。寝直すマグナムエースそして再び飛び起きた。

「うわあああああああ!!!!」

今度はスバルだった。

「な! なんちゅう夢を!」

どうやらスバルも同様の夢を見たようだ。スバルも寝なおした。その下には不機嫌そうなティアナの姿があった。

(……頼むから飛び起きるのは一回にしてよね)

第十四話 結成! チームシルバーキャッスル

マグナムエースはなのは達の訓練に参加していた。だが今回はスバ

ルの姉ギンガも一緒だった。

（あ、マグナムエース紹介するね。ギン姉）

（は、はあ）

マグナムエースは今朝見た夢のせいであまり家族紹介されるのが気になってしまったようだ。そして何故かマグナムエースを見るギンガの視線が痛い。まるで敵を見ているかのような視線だった。そしてギンガとの組み手隊長戦が終わり柔軟に入っているときにギンガがバットを持ってきた。

「ギン姉ということ？」

「・・・マグナムエースを出しなさい」

「へ？」

「いいから出しなさい！」

「は！はい！」

ギンガの剣幕にスバルは愚かティアナ、エリオ、キャロまでビクツとなってしまうていた。

「あ、あの、はじめましてマグナムエースです」

気まずそうにマグナムエースに切り替わるとギンガの明らかに敵意むき出しの顔でマグナムエースを睨んだ。

「あ、あの」

「あなたね！妹を傷物にしたのは！」

「え？」

なんのこっちゃのマグナムエースとスバル、因みにフェイトとティアナはエリオとキャロの両耳を押さえ始めた。何やら物凄い剣幕で怒っているギンガその内容はエリオとキャロに聞かせるに破壊力がありすぎたので聞こえないようにした。そして

「というわけで！私と勝負しなさい！！マグナムエース！！！」

「・・・そこまで言われたのなら対決は避けられんか」

「・・・あの」

シャーリーがマグナムエースとギンガの間に割って入った。

「マグナムエースさんなんですけど。元に戻せますよ」

「「え？」」

シャーリーの一言に？マグナムエースとスバルとギンガ。

「この前ピンポイントで人格を入れ替える装置完成しました。これさえあればマグナムエースさんを元の身体に戻すことができます」

「良かった・・・早く元に戻してください」

（ダメ！絶対ダメ！ギン姉との勝負はどうなるの！？）

スバルの事を無視してマグナムエースは元に戻る手順を踏み始めた。

「へへっ」

なにやらオイルを調合しているヴィヴィオ。そのオイルには色々な種類があり不気味な臭いを発していた。

「ヴィ、ヴィヴィオ・・・何やってるの？」

なのはが恐る恐る聞いてみるとヴィヴィオは満面笑みで答えた。

「GZにあげるの！！」

ヴィヴィオはGZの為に特製オイルを作っていたのであった。正直オイルの混合はやってはいけない。

（GZさん今回は逃がしてあげないと）

となのはが思っている間にオイルが完成したのかヴィヴィオがどこかに行ってしまった。

「ヴィヴィオおおお！！！！」

慌ててヴィヴィオを探すのはGZの命が危ない。

「見つけた」

「あ！なのはママ！」

だがとき既に遅しGZとシルバーキャッスルはヴィヴィオの作った特製オイルを全て飲み干していた。しかしピンピンしているリーガー達。

「大丈夫なんですか？」

「ああ、中々の味だったぜ」

ウインディの言葉に目が点になるのは。

「それじゃあ失礼します」

「まったね」

満面笑顔のヴィヴィオとやれやれといった顔のなのはがその場をあとにした瞬間シルバーキャッスルは膝を突いた。

「うげ。だ・大丈夫か？みんな」

「なんとか」

「・・・ベリークレイジーな味だったネ」

あまり美味しくなかったようであった。元々アイアンリーガーの世界ではバナナ味のオイルやイチゴ味、パイナップル味といった奇妙なオイルがあるためオイルの混合に対しては全く問題はなかったようであった。だが一人だけ各部から煙を出し倒れこむものが居た。

「エリス！」

自称ミッドチルダ製アイアンリーガーのエリスだった。エリスには混合オイルは身体に合わなかったらしくそのままシャーリーのところまで運ばれた。とりあえずオイルを抜いて様子を見る事が重要だった。

「査察か・・・どないしよう」

困惑するはやて。それもそのはず元々微妙な立場の機動六課に異世界からの漂流者シルバーキャッスルが居るのは不味い。

「そや！」

はやては何かをひらめきフォワードチームとシルバーキャッスルを集めた。ちなみにマグナムエースは元に戻ってなかった。惜しいところで失敗したらしい。一時的には元に戻ったようだが物の数分で元に戻った。どうやら外部から強い魔力で人格固定されているようだ。

「皆に集まってもらったのは他でもないです。今からこのチームにロストログア搜索隊を結成したいと思います。噛み砕いて言うと独立部隊かな」

「え？独立部隊ですか？」

なのはの言葉に思わず仰天するティアナ。

「チームメンバーはスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、そしてシ

ルバーキャッスルの皆さんです。メカニックにシャーリーをつけま
す」

「俺たちも？」

なのはの言葉にまたしても？のウインディ。

「チームリーダーはティアナお願いできる？」

「わ！私ですか！？」

「俺たちは別に異論は無い」

「私たちも」

マグナムエースを筆頭とするシルバーキャッスルやスバル達フオワ
ード陣も異議なしだった。

「うん！ここにチームシルバーキャッスルの結成や」

今ここにロストロギア搜索隊シルバーキャッスルが結成された。

第十三話 結成！チームシルバーキャッスル（後書き）

結成されたシルバーキャッスル。そしてロストログアを搜索する私
たちをナンバーズが襲った。そしてついに私の正体が皆にバレてし
まった。

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 襲撃！ナンバー
ズ！

正々堂々！試合開始！

第十四話 襲撃！ナンバーズ！

現在チームシルバーキャッスルは旅立ちの準備をしていた。回されてきた船はマグナムエースの宇宙船ボーシップ号にそっくりだった。どうやら管理局がサプライズで作り上げた払い下げ品が回ってきたようだった。

「まあデザインはともかくこの大きさならあたし達とリーガー達は入りそうね」

チームリーダーになったティアナは緊張しながら母艦を見つめていた。

「ええっと。まず持っていくのはマグナムエースの身体とお金とおやつと」

「スバル！遠足に行くんじゃないのよ！！」

ティアナの意見ももつともである。因みにシルバーキャッスルの食料ともいえるオイルは機関などを含めると膨大な量になるのでかなりもめた為現時調達という形で一応の決着を見た。

第十四話 襲撃！ナンバーズ！

「それじゃ行くぜ！」

パイロットに任命されたヴァイスはボーシップ号（シルバーキャツスル命名）を受け取るためシャトルを起動した。目的地はミッドチルダの反対側だった。シャトルを見送るなのは達。

「気をつけてね・・・みんな」

「あれ？ ヴィヴィオは？」

フェイトが辺りを見回すと見送りに着ていたはずのヴィヴィオが居ない。

「まさか!!」

ところ変わってシャトルの中。GZの頭になにやら重たいものが降り立った。

「GZ!!」

「ヴィヴィオ!!」

「「「「「「ええええええええええ!!!!!!」」」」」」

「

なんとヴィヴィオが着いてきてしまったようだ。

「どうするの？」

「今更引き返せない。向こうに着いたら迎えに来てもらおう」

ボースップ号までの道中と一緒にする事になったヴィヴィオ。遊び相手をしているのは勿論GZとトップジョイそしてエリスだった。

「お！ブルまだ怖いのか？」

「だ！大丈夫だよ！！」

ウインディがからかう様にブルアーマーに言う。

「え？ブルアーマーさんってシャトル苦手なんですか？」

ブルアーマーに変わりウインディが説明した。

「ああ、それに俺たち滅茶苦茶重いだろ。落っこちまうんじゃないか？えかって心配だな」

軽くシャレにならない事を言うウインディ。

「ウインディさんそれ不吉だから止めてください」

エリオの意見にキャロが翼を見た瞬間。

「エンジンが火を噴いてる！！」

「「「なに！！？」」「」」

一同が翼を見ると確かにシャトルの翼から火が出ていた。

「これ不味くない！！！」

「ウインディさんが変なこと言うから!!」

「俺のせいだよ!!」

「しい! ずう! かあ! に!!」

ティアナの怒声に静まり返る一同。流石チームリーダー動じていないが内心とっても動じていて虚勢を張っている。

「みんな落ち着きなさい!! ヴァイス陸曹!! 不時着ポイントは!?!」

「ああ、ここじゃあの氷河地帯しかねえ」

「オウ! 神様! ミーを助けて!」

必死に祈るトップジョイ。そして不時着体勢に入ったシャトルは氷山に乗り上げたが幸い怪我人は0の状態になった。

「ふう! 助かったぜ」

「ミーみんなが助かるようにいっぱいお祈りしたネ!!」

「さっき自分だけ助かれれば良いって言ってた」

意地悪そうに言うリュウケンに大爆笑の一同。やはり屈強の時のムードメーカーであるトップジョイの存在はこういう時に大きい。

「ここは何処だ?」

「とりあえず氷河地帯という事だけはわかるな」

「結構吹雪いてますよ」

エリオが見た瞬間外は猛吹雪だった。そしてシャトルは破損したため隙間風が入る。スバルからマグナムエースに切り替わった。

「とりあえずみんなの避難場所を作ろう」

「それが良いわねエリオ、キャロ、バリアジャケットに」

「はい！」

スバル達はバリアジャケットに変身して寒さを凌ぐ作戦に出た。そしてヴィヴィオやヴァイス、シャーリーにはシャトルに付属されていた防寒服を着せた。リーガー達が中心となりとりあえず残骸をかき集め風除けを作った。

「問題は熱ね」

「これを見つけた」

GZが何らかのメカを見つけた。

「これ非常用のヒーター」

「どうやらオイルを使うようだ」

「旧世代のヒーターか無いよりマシか・・・けど燃料が無い」

考えるティアナ。するとマグナムエースが

「俺達のオイルを使えばいい」

「え？でも」

「俺達の身体から少しずつオイルを足していけばヒーターが動く」

するとマグナムエースは自分の身体を持ってきて胸を開きオイルをヒーターに給油した。するとヒーターが起動し熱が出てきた。

「みんな・・・これなんですけど」

シャーリーは気まずそうにミニコンを出した。

「何も映ってないですけど」

「これ魔力反応を探すものなんですけど・・・魔力反応ないんです」

「え？」

スバル、ティアナ、エリオ、キャロは魔法を使おうとしたが魔力が分散されてしまう。

「これって」

「ここはAMFが強いかもしれませんが」

「AMFって自然に発生するものなんですか？」

「いえ・・・けど似たような自然現象はあるかもしれません・・・
現にここにいる全員魔力反応が表示されてないです」

「救助を待つか・・・ここで戦闘になったら今のあたし達じゃ戦えない」

慌てず救助を待つ一同。すると一台のシャトルが現れた。

「ワオ！救助ね！！」

トップジョイとリュウケンが表に出た。

「あれが救助？そうは見えないけど」

「ミーにはそう見えるね！！」

シャトルから一人の女性が出てきた。みんなその顔には見覚えがあった。

「戻れ！！」

「IS発動・・・ヘヴィバレル」

ディエチだった。ヘヴィバレルが発射されトップジョイは咄嗟に避けた。

「な！何ね！！」

「いかん！シャーリーさんあのヘッドギアを」

シャーリーからヘッドギアを受け取るとマグナムエースはヘッドギアを装着すると意識がスバルの身体からはなれ元の身体に戻った。マグナムエースはこのヘッドギアを使えば一時間だけ元の身体に戻るように改良されていた。今スバルたちを戦わせるのは得策ではないというよりも今戦えるのはアイアンリーガー達のみ。為マグナムエースは自分の身体に戻るいい選択肢はなかった。

「GZ！エリス！シャトルを固めてくれ！みんなを頼む！！」

「わかった！！」

「任せて！！」

「ウインディとブルと十郎太は俺と一緒に」

「「おう」」

「ティアナ！ヴィヴィオを頼むぞ！」

「任せて！」

「よし！行くぞ！」

マグナムエース達が飛び出した瞬間。上空からトーレの攻撃が入った。しかも速い。

「てやあああああああ！！」

十郎太がムテンソードでトーレの攻撃を防いだ。

「卑怯な!! いきなり攻撃を仕掛けてくるとは!!」

その瞬間シャトルから続々と降りてくるナンバーズ。どうやらナンバーズはエリスの信号をおってきたようだ。完全にシルバーキャッスルに狙いを定めたようだ。

「ふっふふのふくんさあて誰が相手かしらね」

クアットロの言葉にディエチはその場を去った。

「ちょっとどうしたのよ!」

「私の相手が居ない」

そう言うときディエチは自身の乗ってきたシャトルに乗り込んだ。

「シルバーキャッスル・・・ルールは簡単だ私たちを止めてみせろ・・・試合開始だ」

「来るなら来い!!」

チンクの合図にマグナムエース達はホッケーのスティックを持ちながらヴィヴィオ達の乗ったシャトルを守護した。

「ライドインパルス!!」

「スローターアームズ!!」

「ていやあああああ!!」

十郎太はトーレとセツテと二対一の戦いを繰り広げていた。トーレとセツテの動きは十郎太にとっては見切れないものではないが動きの鈍くなって更にオイルを供給してしまった今では受け続けるのが精一杯だった。十郎太は更に背後にもう一人の気配を感じた。

「く!!」

デイドだった。あまりのスピードに十郎太以外の者は着いていけないだろう。

「……ツインブレイズ」

「く!!」

十郎太はなんとか凌ぐと一気に形勢不利になった。

「……卑怯な……三対一か」

「ノウ!三対二ネ!!」

すると十郎太の応援にトップジョイが加わった。

「ブレイクライナー!!」

「うわああああ!!!!」

ノーヴェのブレイクライナーを受けたりユウケン。

「どうだ！」

自分の一撃と思う攻撃をリュウケンに浴びせたノーヴェ。しかし。

「く・・・平気だよ」

立ち上がってくるリュウケン。ノーヴェはリュウケンにそのまま攻撃を仕掛けた。

「ちい！ちょこまかと！」

ウエンディのライディングボードからの砲撃をかわし続ける。ウインディ。

「へ！速さが足りないぜ！！」

ウインディがフルパワーで走った。スピード自慢のウインディはウエンディをかく乱させた。

「速ければいいっスか？」

「行くぜ！！」

ウインディの足のタービンが回転するとサッカーボールからジグザグシュートが繰り出された。吹き飛ばされるライディングボード。

「ああ!!」

ブルーアーマーが上空に気配を感じるとそこにはオットーがいた。

「・・・レイストーム」

拡散の光線が放たれる。

「速い!!」

ブルーアーマーはシャトルへの直撃を防ぐために自らレイストームに当たりに行った。

「うおおああああああああ!!」

「・・・馬鹿な奴」

爆煙が晴れるとそこにはブルーアーマーが立っていた。

「これぐらいどうってことないぜ!!」

「く!!」

一方シャトルを守備組のスバルたちはいつもとは動きの違うリーガー達に動揺していた。そして戦えない自分達が悔しかった。

「みんないつもの動きが出来ていない！どうして！！」

スバルの言葉にGZが。

「氷の上だ。それに凍結しかかっているオイルが動きを鈍くしているんだ」

「そんな！」

「く！せめてハイパーニトロがあれば」

「ハイパーニトロ？なにそれ？」

「俺達の世界の耐寒用の軍事燃料だ。この極寒地じゃ並みのオイルでは凍ってしまふ。オイルが凍結すれば俺達の動きも鈍くなる・・・それに慣れない魔法戦だ」

「ここでは耐寒用の燃料がいるってことね」

GZの言葉にティアナも納得した。

「くっそAMFさえ無ければ！」

拳を叩き付けるスバル。

「ぐああ！！」

「えあああ！！」

次々と倒れるリーガー達。

「くっそ」

「ぐおお!!」

だがそれでもみんな立ち上がった。身体は傷ついていたがリーガー達の闘志は消えてなかった。

（なぜだ！？なぜこいつやら倒されても倒されても立ち上がってくる！？勝負はとっくに決まっているのに）

チンクはアイアンリーガーの機能停止するほどのダメージを追いつながら尚も立ち上がってなおも諦めていないアイアンリーガーが怖かった。

「IS発動・・・ランブルデトネイター」

チンクはランブルデトネイターをマグナムエースに向かってクナイのような武器で投げ付けた。マグナムエースは踏みとどまり全ての攻撃を受け続けた。

「あの攻撃を避けるどころか一步も引かないなんて」

チンクは驚く。

「引くわけには行かん！俺はゴールをあの人たちを守る！！」

その光景にエリスは。

「私・・・私もう我慢できない！戦う！」

エリスがスティックを持って出陣してしまった。

「おい！エリス！！」

GZは止めようとしたが魔法も使えないこのAMFの中で今GZまで飛び出してしまえばシャトルの守りは完全に無くなってしまう。

（・・・信じてるぞ・・・エリス）

「マグナム！私も戦う！！」

エリスがホッケースティックを持って現れた途端クアットロにある考えが浮かんだ。

「ねえお姉さまゝそろそろ帰ってきたほうがいいんじゃない？」

ハツとするエリス。その言葉にシャトルの中のヴィヴィオが驚いた。

「GZということ？」

「・・・エリスは・・・恐らくスカリエッティのスパイだ」

「スパイ・・・そんな嘘でしょ」

ヴィヴィオの中にエリスと一緒に遊んだ記憶が蘇る。

「だっていつも一緒に居てくれて・・・そんなの変だもん!!!」
たまらずヴィヴィオは飛び出した。

「エリスお姉ちゃん!!!」

ヴィヴィオは吹雪の中シャトルを飛び出した。

「ヴィヴィオ! 戻るんだ!」

GZがヴィヴィオを戻そうとするがそれでもヴィヴィオは叫んだ。

「なんで黙ってるの!? 黙ってちゃわかんないよ!!!」

ヴィヴィオの悲痛な言葉にエリスは沈黙を保ったままだった。

「・・・この沈黙が証拠だ」

チンクの言葉にエリスは。

「・・・私は」

エリスは思い出していた。スカリエッティの元で実験動物のように
されていた日々をだがそれは妹達のためでもあった。自分はスカリ
エッティの元に帰らねばいけない。だがそれと同時にシルバーキャ
ッスルでの楽しかった頃の思い出が蘇った。初めて自分を自分とし
て認めてもらえ仲間としてみてくれたみんなの事が。エリスの出し
た答えは。

「・・・私・・・戻らない・・・帰るつもり・・・無い」

エリスは動揺しながら言った。その瞬間エリスに装着されていた激痛回路が起動した。

「くう！うああああああああ！！！！！！」

激しく痛がるエリス。

「エリス！！」

マグナムエースとウィンディ、トップジョイがエリスを介抱する。

「私は！帰りたくない！私は！ああああああああああああああああああ！！！！」

「エリス！」

「ブルアーマー・・・こいつを機内まで運んでやってくれ」

「・・・・・・・・」

複雑な表情で無言のブルアーマー。

「・・・・・・・・ブルアーマー？どうしちゃったんだよ！？みんな」

ウィンディの疑問にマグナムエースが見渡すとリュウケンと十郎太も同じだった。

「・・・・・・・・スパイだった事に気づかなかったのは・・・・・・・・某の不覚」

「・・・・・・・・」

冷たい言葉を放つ十郎太と無言のリユウケン。

「みんな！あの時みんなはダークのスパイだったミーを迎え入れてくれたネ！！」

「・・・・でも」

（・・・・いかん。みんな慣れない世界と戦いで参っている・・・・オイルも凍り心も冷たくなっているんだ）

そうマグナムエースの言ったとおりリーガー達は慣れない世界の戦いで精神的に疲労が困憊していた。激痛でのた打ち回るエリス。だがスカリエッティの元へ帰るのを拒んでいる。

「この！出来損ない！！」

ノーヴェ達がエリスをリンチし始めた。

「ぐう、ああ、私はシルバーキャッスルに居たい！！」

「！！」

突然リユウケンがエリスに向かって駆け出した。

「丁度いい。仲間とか言われている奴にトドメ刺されな」

ノーヴェはリユウケンの破壊力を知っているはそれゆえエリスを一撃で破壊する事が出来るそう思ったがリユウケンがとった行動は違

った。

「なに？」

リュウケンは一リスに覆いかぶさった。まるで一リスを守るかのよう。

「ちいこのー！！」

ノーヴェ達は再びリンチを開始した。リュウケンは自分の下に居る一リスを守るようにノーヴェ達の攻撃にひたすら耐えていた。

「どおりやあああああー！！！！」

ブルーアーマーのタックルがノーヴェ達を吹き飛ばした。

「・・・来るなら来い！」

十郎太も一リスの前に立ちはだかった。シルバーキャッスルのリーガー達は一リスを守る決断をした。それでもオイルが凍結しギアが回らない状態の為苦戦したが一リスを守るためにリーガー達は何度も倒れた。しかしそれと同時に何度も立ち上がった。一リスはそれを見て心が苦しくなった。そして一リスは。

「・・・なに・・・やってるの？・・・みんな馬鹿じゃないの？」

「一リス？」

リュウケンを押しのけ一リスはナンバーズ達の元へ向かった。それと同時にシルバーキャッスルに精神的ダメージを与えたと思い撤退

していくナンバーズ。

「どういうつもりだよ!? エリス!」

「私は元々スパイよ・・・古巣に戻る」

「エリスお姉ちゃああん!!」

「バイバイヴィヴィオ! 私はヴィヴィオの純粋な心は忘れないよ」

エリスは泣きそうな笑みでヴィヴィオを見ながら去った。そしてナンバーズもそのまま去った。

「・・・エリスお姉ちゃんがスパイなんて・・・そんなの信じないもん・・・」

泣き崩れながらもヴィヴィオはエリスを信じた。

「くっそ! あいつのことを知ってたのに! 俺は!!」

悔しさのあまり拳を叩き付けるウィンディの言葉にマグナムエースは。

「信じているんだ」

「マグナム?」

「俺もエリスを信じる! あいつは今戦いを始めたのだ・・・たったひとりで」

それと同時に時間が切れたのかマグナムエースはスバルの身体に戻った。スバルの身体に戻ったマグナムエースはナンバーズたちを見送っていた。そしてエリスを信じた。

ナンバーズ前線基地にて

「うわあああああああ!!!!」

エリスはクアットロから拷問を受けていた。

「さっさと言ったほうがいいんじゃない。アイアンリーガーにどんなプログラムが使われてるのか」

「わが身を犠牲にしても奴らを守るエネルギーはどこから生まれてるんだ？」

クアットロとトーレの言葉にエリスは。

「プログラムなんてない!!」

「え？」

「・・・みんなシルバーキャッスルが好きただだよ・・・それだけだよ!!!!」

「訳わかんない事言うな!!」

「お前達にはわからない!! みんなの心がエネルギーだ!! うわああああああ!!」

拷問を受けながらもエリスは叫び続けた。そして電磁ネットの張られた牢獄に閉じ込められた。

(ナイスプレーだぜ! エリス)

サッカーをしている時のマッハウインディの姿が。

(エリス!!)

(エリス! 助けてくれええ)

(エリスお姉ちゃん!)

ヴィヴィオと遊ぶトップジョイとGZの姿が

(エリス! ちょっと手伝ってくれ)

シャマルの手伝いをするブルアーマーの姿が

(・・・エリス心を静めるのだ)

一緒に書道をやっている十郎太の姿が

(がんばってエリス)

いつも応援してくれたリュウケンの姿が

(エリス)

自分の正体を知りながらそれでも仲間として迎えてくれたマグナムエリスの姿がエリスの中にはシルバーキャッスルの思い出でいっぱいだった。

「・・・私は・・・」

エリスは最後の力を振り絞り一つだけくすねていたランブルデトネイターを取り出し牢獄を爆発した。

「出来損ないが逃げ出した」

「これは不味いんじゃないツスカ」

ナンバーズやガジェットがエリスを探しているとエリスは自分用の部屋のオイルを一口だけ飲んだ。

「みんな・・・みんな!」

エリスは走った。そして巨大な装置を見つけた。

「これは・・・まさか!!」

「そうよ・・・それがAMF発生装置」

クアットロがエリスを囲んだ。

「これで魔力を消してここに閉じ込めてたのね!!」

「逆スパイでもやる気？」

「くっ!!」

エリスが外に出ると前線基地から砲撃が浴びせられた。爆発で吹き飛ばされ倒れてしまうエリス。

「私は・・・帰るんだ・・・シルバーキャッスルに」

「へえ面白いじゃない。一度裏切ったのに仲間に迎え入れてくれると思ってるの？」

「無理だと思っスよお」

クアットロは一つのオイル缶を投げ渡した。

「まあどうしてもって言うならそれでも飲みなさうい。それ耐寒用のオイルだから」

エリスは指先でオイルを舐めると成分を分析し始めた。それは確かに耐寒用のオイルだった。

「・・・だったら・・・これを・・・みんなに持っていく」

「へえうそれあんた飲まなかったら凍りついちゃうよ」

それでもエリスは歩き始めた。

「・・・シルバーキャッスルに・・・行く」

「この吹雪じゃシルバーキャッスルに着くまでに凍っちゃうよ」

クアットロは一つの作戦を思いついた。

シャトルにてクアットロから通信が入っていた。

「エリスがそっちに向かったわよ」

「なんだって!？」

驚くマグナムエース達

「あの子が自分で行くって行ったのよ。あれだとそっち行く前に凍っちゃうんじゃない」

「なぜそれを我々に」

「ふっふふのふん。スパイだったエリスを迎えに行くきあるかなあ」

クアットロはそれだけ言う通信を切った。

「クアットロなんであんな事言ったんだ？」

「そのほうがエリスもシルバーキャッスルも苦しむと思ってね」

チンクもそう思っていた。

その頃エリスは大氷原を一人歩いていった。吹雪の中シルバーキャツスルのいるシャトルまで・・・たった一人・・・耐寒用オイルを持ちながら。

「……マグナムに……みんなに……これを」

その瞬間エリスの体内のメカが放電を起こした。そのまま倒れこむエリス。

「・・・身体が・・・動かない・・・こんなところで・・・情けないよ・・・エリス」

「エ
う
う
！
！」

リス
う
う
う
う
！！

エ
リ



「……はっ……みんなの声が……違う……空耳だよ……聴覚の回路も……イカれちゃった」

そのまま目を閉じるエリス。

「しっかりしろ！！エリス！！」

「寒さでオイルが凍っちゃってるぞ！」

「起きろ！エリス！！」

暗闇の中エリスが目を覚ますとそこにはスバルの身体のマグナムエースがマッハウインディがブルアーマーがリュウケンが十郎太がトッブジョイがそしてGZが居た。

「無事か！？エリス。今連れて帰ってやるからな」

「これ・・・私の回路が夢を見ている」

「夢ではござらん。エリスお主には謝らねばならぬ・・・某はまだ未熟」

目の前の光景に驚きを隠せないエリス。

「みんな・・・本物なの？」

「当たり前じゃないか」

「・・・みんな私のこと探してくれたの？」

泣きじゃくるエリスに微笑むマグナムエースとブルアーマー。

「そうだ・・・マグナムこれを」

「これは？」

「耐寒用のオイル・・・やつらの」

「よく持って来れたな」

「・・・マグナムエースお願いがあるの・・・私のスカリエッティ

の通信回路破壊して」

「いいのか？スカリエッティの所へ帰れなくなるぞ」

エリスは微笑んだ。

「・・・構わない・・・私が帰るのはシルバーキャッスルだけだよ」

「わかった！シャーリーさんに頼んで破壊してもらおう！」

マグナムエースはエリスに肩を貸した。もう片方にはウインディがシルバーキャッスルのみんなが再びエリスを迎え入れた。

第十四話 襲撃！ナンバーズ！（後書き）

奴らは来る・・・自分たちの命も顧みず・・・傷ついた身体で・・・エネルギーも底を付き・・・それでも・・・奴らは何を信じているの？

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 出撃！八人の勇者
正々堂々！試合開始！

第十五話 出撃！八人の勇者

第十五話 出撃！八人の勇者

エリスはシャトルの中で正座していた。そこにムテンソードを持った十郎太が居た。それは武士の時代の介錯人のようだった。

「きあああああ！！！！」

十郎太がエリスに向かってムテンソードを振り下ろす。するとエリスの長い黒髪が宙を舞った。

「・・・これでスカリエッティのスパイの私とはさよならだ」

「これで気分はどうだ？エリス」

「良いに決まってるじゃないか！痛みの原因も取ったし断髪してケジメもつけた。エリス！これで正真正銘の俺達の仲間だ！」

「ウインディ・・・みんな・・・ありがとう・・・」

ショートヘアになったエリスは泣きそうになる。

「新しいスタートは涙じゃなくて笑顔ネ！！」

「トップジョイ・・・うん！」

泣き顔ではなく笑顔を見せるエリス。その顔にチームシルバーキャ

ツスの全員が受け入れた。

「エリスお姉・ちゃん・よか・・・」

その途端ヴィヴィオが倒れてしまった。

「」「」「ヴィヴィオ！！」「」「」

「凄い熱！！」

シャーリーがヴィヴィオを寝かしつけ薬を飲ませた。

「ケホ・・・ケホ」

「それ飲めば元気になる？」

「容態がわからないからなんとも言えないけど・・・部屋を暖かくしないと」

シャーリーの言葉にキャロがフールドに頼みヒーターだけではなく焚き火をつけさせた。

（マグナムエース・・・私なら・・・良いよ）

（なに？）

スバルがマグナムエースに念話を放った。

（私の身体を使えばオイルも凍らないしマグナムエースの力も使える！！）

（ダメだ・・・君を危険な目に合わせるわけにはいかない・・・そんな事のために君の身体を粗末にする事は出来ない）

マグナムエースは外を見る。外は吹雪く。そしてマグナムエースは吹雪を見つめながら一つの決意をした。すると

「・・・一人で行く気じゃああるまいな」

マグナムエースが振り向くと十郎太が立っていた。

「水臭いぜ！マグナムエース」

「奴らの基地に乗り込むなら僕たちも行く」

「・・・何の事だ？」

ウィンディとリュウケンの言葉をはぐらかすが十郎太は。

「とぼけるな。お前の考えている事ぐらい見抜けぬ思っているのか？」

「俺たちは仲間のはずだ！」

「そうネ！！」

「力を合わせるんだ！」

リーガー達はマグナムエースに迷いのない目で見つめた。

「よし行こう!!」

マグナムエースはティアナを呼び出し自分達が出撃する事を告げた。

「戦闘機人と戦おうって言うの？」

「いえ何とかしてあのシャトルを奪ってきます」

マグナムエースの目的は戦闘機人たちがこのシャトルまで乗ってきたシャトルだった。

「彼女達はあんた達を狙ってるのよ」

「わかってる! だけどこのままじゃどうする事も出来ない!」

「そうネ! どうかしないとミー達はここから脱出できないネ!」

ウィンディとトップジョイの言葉にティアナは。

「・・・危険すぎる」

「精神一到なにごとかならざらん」

「みんなにどれだけのエネルギーが残ってると思ってるの？」

「エリスの持ち帰った耐寒用オイルがある・・・ヴィヴィオの容態も気になる・・・せめてAMF発生装置だけでも破壊しないと」

リーガー達にありとあらゆる危険性を言ったティアナだがやっと決断した。

「止めても無駄みたいね。ただし！シャトルが取れなくても必ず戻ってくる事！これはリーダー命令！！」

「ありがとう！！」

「私も行く！」

エリスが飛び出した。

「エリス。お前は残れ」

「え？」

「お前の身体はまだ本調子じゃないだろう？」

「平気よ！ほら！」

元気に動き回るエリスだが。

「なあエリス。無茶するな」

「・・・やっぱりみんなまだ私のこと信じてないの？」

ガッカリするエリスだが。

「そうじゃない。お前はここに残って他のみんなを守るんだ」

「え？」

マグナムエースの言葉に耳を疑うエリス。

「このAMFじゃみんなが戦えない。ティアナやヴィヴィオたちにもしもの事があつたら大変だからね」

「その重要な役目をお主に頼みたいのだ」

リュウケンと十郎太の言葉にエリスが。

「私がみんなを？」

「そうだ」

「わかった！私はここに残って！みんなを守るよ！！」

「頼むぞ！」

「頼りにしてるぜ！」

シルバーキャッスル全員から激励をもらうエリスは感激でいっぱいだった。そして一缶の耐寒用オイルをワインデイが一口、十郎太も一礼して一口、ブルアーマーが一口、リュウケンが一口、トップジョイが一口、GZが一口、そして一時間のタイムリミットのマグナムエースが一口飲みそのままエリスに差し出した。

「私入らないよ此処に残るんだから」

「いや何が起こるか分かん。少しでも注入しておくんだ」

「・・・うん・・・わかった」

みんなが回し飲みしたオイルをエリスも感動しながら一口飲むと。

「丁度空っぽ」

そしてリーガー達は吹雪の中に並んでいた。

「必ずシャトルを奪って帰ってきてね！！ブルアーマー！トップジ
ョイ！GZ！！約束だからね！！」

「おう！お前もしっかりやれよお！！」

「ミーたちに任せるネ！！」

「ヴィヴィオを頼んだぞ！！」

「私に任せて！！」

リーガー達はシャトルをエリスに任せた。

「よし！みんな！いくぞ！！」

「「「「「おう！！」」」」」

全員ホッケーのスティックをかかげると勇者達はフィールドに向かった。

一方シルバーキャッスルの様子を探っていたディエチが。

「・・・マグナムエースだけじゃないみたいね・・・今回は私の相手は着ている・・・ん？」

ディエチは望遠でエリスを見た。

「なんなの？スパイを許すって言うの？」

ディエチの連絡で戦闘体勢に入りガジェットが起動し始める。

リーガー達もひたすら基地に向かって歩んでいた。

「もうすぐ奴らの基地だ！十郎太！AMF発生装置は・・・」

「・・・わかっている」

十郎太がムテンソードを抜いた。

「・・・このムテンソードに斬れぬものは無い！！」

「よし！！真正面から突き進むぞ！！！！最後まで諦めるな！！」

「「「「「おう!」「」「」」」」

「ようし!そのシャトルで一氣に合流ポイントまで行くぜ!」

「燃えてきたぜ!!」

「僕も頑張るよ」

「ミーに任せるネ!」

「覚悟は出来ている」

「吹雪を抜けるぞ!!」

シルバーキャッスルが吹雪を抜けた瞬間そこにはシャトルの前にナンバーズが立ちふさがっていた。

「・・・待っていた。マグナムエース」

チンクはマグナムエースに狙いを定めたようだ。

「たった一缶の耐寒用オイルで何が出来る?」

嘲笑うように言うチンクに。

「今のお前には分からないさ!」

チンクの合図と共に攻撃が開始される。ディエチ、ウェンディ、オットー砲撃組が構えた。

「散るんだ!!」

「「「「「おう!!」」」」」

散開するシルバーキャッスル固まっていれば格好の的だった。マグナムエースの前にチンクが立ちはだかる。

「お前の相手は私だ」

「やられるわけにはいかない!!」

「ランブルデトネイター!!」

チンクのランブルデトネイターをマグナムエースはスティックで打ち返すがその途端シャトル周辺に攻撃が加えられた。

「私の攻撃を打ち返せばシャトルを破壊する事になる……お前の目的はこれじゃないのか？」

「くっ!!」

シルバーキャッスルは全員シャトルから離れて戦った。

「お前達にシャトルは奪わせん!!」

「いや! 奪ってみせる!!」

チンクはランブルデトネイターをクナイで投げ付けるがマグナムエースはグローブでキャッチしながら突き進んだ。ランブルデトネイターはグローブから吸収されバックパックに弾丸として装填されて

いく。

「参る!!」

十郎太がムテンソードを構えた瞬間バイザーが降り駆け出したがノーヴェとトーレ達を通り過ぎた。

「なに!？」

十郎太はそのままAMF発生装置施設に向かった。

「そいつを行かせるな!!」

チンクの指示に十郎太を追いかけるノーヴェ達がマグナムエースのバイザーが降りバズーカを構えチンクのランブルデトネイターを发射しノーヴェ達の足止めをした。

「お前の相手は私だ!!」

「おうわああああ!!!!!!」

マグナムエースがランブルデトネイターで吹き飛ばされた。一方爆煙が晴れ十郎太を追おうとしたノーヴェの前に

「・・・十郎太の邪魔はさせない!!」

リュウケンが立ちはだかった。

「くあ!!」

「ぐう！」

その傍らブルとウインディは弾幕を受け続け持っていたスティックが破壊された。

「やったツスカ!？」

しかし

「これくらいでやられる! シルバーキャッスルだと思うな!！」

ブルとウインディがウエンディたちに向かって速攻を仕掛ける。

施設に潜入が成功した十郎太の前にと守りで残っていたセツテが立ちあがった。

「邪魔だてするかああああ!！」

ビュッ! ビュッ! ビュ!! バサっ・・・ガシャーン!!!!!!!!

「ああ!! うわああああああああ!!！」

セツテは十郎太の剣幕とムテンソードに生身以外が一瞬で斬り捨てられた。構わず突き進む十郎太。

一方GZとトップジョイはトーレ、デードの攻撃を受け続けた。

「ジャアアアアアンプ!!」

トップジョイのジャンプでかく乱するとGZが構えた。

「ソルジャー!スラップショット!!」

GZのソルジャースラップショットがトーレとディードに炸裂した。
だがGZをディエチが狙っていた。

「くううううう!!!!」

GZはヘヴィバレルを受け止める。

「俺は新参者でな!みんなより被害はないぜ!!」

ウィンディのスピードにウエンディはライディングボードの照準が定まらない。そして砲撃を放つがウィンディは回避しその先に居たディエチとオットーに直撃してしまう。

「チームワークが!悪いんだよ!!!!」

「うわ!!」

ウィンディのキックがライディングボードを蹴り飛ばしウエンディは倒れた。

「もらった!!!!」

ウインディがそのままシャトルを奪取しようとした時ウインディに異変が起きた。

「く！．．．くそ．．．こんな時に．．．エネルギーが．．．うわあ！！！」

ウエンディの砲撃を受けてしまい倒れるウインディ。

「マッハウインディ！！！」

「そろそろエネルギーが切れてきたんじゃないのか？」

「く！！！」

歯を食いしばるマグナムエース。そしてシャトルもろともウインディを破壊しようとオットーとウエンディは砲撃体勢に入る

「終わりだ！！く！！！」

その瞬間ブルーアーマーに押さえ込まれた。

「離すッス！！！」

「離さない！絶対！！．．．．．は．．．．．な．．．．．さ．．．．．
．．．．．な．．．．．い．．．．．い．．．．．」

ブルーアーマーもエネルギーが切れる寸前だった。目が霞むがそれでもオットーとウエンディのことを押さえ込んでいた。

「離せ!!」

ノーヴェの足を押さえ込んでいたリュウケンも滅多打ちになっていたが、それでもノーヴェの足を掴んだままだった。

「十郎太の・・・邪魔は・・・うおわ!!!!!!」

リュウケンはノーヴェの足を離してしまった。

「くっそ! お前はこれが終わったらゆっくり料理してやる!!」

ノーヴェが十郎太を追おうとした瞬間リュウケンは最後の力を振り絞り起き上がった。額に『心』の文字が浮かび上がる。

「くう!! 爆・竜うう拳!!!!!!」

「なに!!!!!!」

リュウケンが拳を地面に叩きつけた瞬間巨大な地割れがノーヴェを飲み込んだ。

「うわあああああ!!!!!!」

リュウケンの爆竜拳の地割れに飲まれるノーヴェ。

「十郎太・・・頼んだよ・・・」

最後の力を使い果たしたリュウケンは自ら作り出した地割れに落ち

ていった。

「てあああああああ!!!!」

十郎太は内部でクアットロが操作する巨大ガジェットが繰り出す魔力弾を斬り捨てた。そして一本橋になっていた足場を切り落としガジェットを真っ逆さまに落とした。十郎太は上に上がるリフトを見つけるが同時に目が霞んできた。

「く! エネルギーが・・・」

十郎太もエネルギーが尽きかけていた。

「ジャアアアアアアアアアアンプ!!」

トップジョイがトーレとデイドにしがみ付き動きを封じた。

「この!! 離せ!!」

「離しなさい!!」

トーレとデイドの攻撃がトップジョイに繰り出されるが。

「ミーは痛い慣れっこネ!」

トーレとデイドの攻撃を受けながらトップジョイはトーレを押さえ込んでいた。

「くうううおおお!!!!」

「何故だ！何故私のヘヴィバレルを何度も受けて立ち上がってこれる？」

ディエチはGZに恐怖を感じていた。自分のイノーマスカノンの一撃をGZは何度も防いでいるからだ。

「約束があるんだ！！ここでやられるわけにはいかないぜ！！」

GZは尚もヘヴィバレルを受け続けた。

「貴様達は一体何なんだ！？受身ばかりの甘い戦いで何ができる！！？」

エネルギー切れで動けなくなったシルバーキャッスルのメンバーを見てそう言うチンク。だがマグナムエースがチンクを押さえ込む。

「ならばお前に聞く！お前は何故戦う！何のために傷つけあう！！」

その言葉にチンクも黙った。

「お前が敵だからだ！」

「敵じゃない！俺は・・・いや俺たちはみんな生きているもの同士！！！！みんな兄弟なんだ！！！！」

「訳のわからない事をいうな！！」

その頃巨大なAMF発生装置の前に十郎太は一人立っていた。

「・・・もはやエネルギーは尽きた・・・某に残っているのは精

神力のみ・・・その精神力を出し尽くせばこの十郎太・・・無に帰するかもしれん・・・だが・・・それに变えてもこのAMF発生装置は！斬る！！！！！！」

十郎太の目が光った瞬間精神力が極限まで高められた。

「ムテンんんんん！！ソオオオオオオオオオド！！！！！！」

十郎太の一閃で真つ二つになるAMF発生装置。それを見届けた十郎太は膝を突いた。

「なに！？」

「やった！」

チンクが構えた瞬間。マグナムエースはサイドステップで跳びチンクの至近距離にバズーカを構えた。硬直状態が続く。

「・・・何故撃たない・・・お前のそのバズーカの中には既に私を何度も破壊できるだけのランブルデトネイターが入っているはずだ」

「まだわからないのか！」

マグナムエースは明後日の方向に全弾放った。驚くチンク。

「なぜ・・・私達はお前達を破壊しようとしたんだぞ」

「・・・俺たちは同じ生きている仲間なんだ・・・傷つけあうなんて間違っている」

「・・・シャトルを持っていけ」

「チンク」

「私たちの負けだ・・・お前達には持つていく権利がある・・・遠慮はいらない」

自分達の敗北を思い知ったチンク。チンクはシルバーキャッスルに何か言い知れぬ思いを感じていた。チンクの合図でナンバーズは臨戦態勢を解き撤退を開始した。その姿を見送るシルバーキャッスル。

（・・・何故だ・・・何故やつらは追撃してこない・・・私達は敵のはずなのに）

ナンバーズが撤退したのを確認するとマグナムエースはみんなに自分のオイルを補給し撤退体勢に入った。

「行こう。みんなが待ってる」

シルバーキャッスルは残されたシャトルでスバル達が待っているポイントまで向かった。

第十五話 出撃！八人の勇者（後書き）

マグナムたちがシャトルを奪取している頃、私たちもガジェットの襲撃を受けていた。今戦えるのは私しかない。その時再び風が吹いた。

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 出現！黄金の旋風！

正々堂々！試合開始！

第十六話 出現！黄金の旋風！

マグナムエース達がナンバーズとの激戦を繰り広げている中シャトルに残ったチームシルバーキャッスルはヴィヴィオの看病をしていた。エリスは自分の事を否定したがスバル達は口を揃えてこう言った。

「マグナムエース達が信じるなら私たちも信じるだけだよ」

エリスにはその言葉が嬉しかった。そして懸命にヴィヴィオを看病していた。

第十六話 出現！黄金の旋風！

リーガー達が表でナンバーズとの激戦を繰り広げている中クアットロは密かにガジェットの軍団をチームシルバーキャッスルに送り込んでいた。チームシルバーキャッスルを完全に叩き潰すために。

「よくも私たちに恥をかかせてくれたわね、殺しちゃおっかな」

クアットロは裏切り者のエリスをそしてチームシルバーキャッスルが許せなかった。そしてリーガー達を絶望させるためにガジェットを送り込んでいた。

ガジェットの反応をエリスのセンサーが探知した。

「・・・来る」

「え？」

「ここはお願い」

「エリス！どうするの！？」

「私はみんなにこのシャトルを守るって約束した・・・だから行く！」

エリスは残されていたホッケースティックを持ち出しシャトルを飛び出しガジェットの前に立ちはだかった。

「・・・みんなの帰る場所を私は守る！！」

ガジェットの光弾をエリスはホッケーのスティックで打ち返しガジェットを破壊した。

「負けられない！みんなが帰ってくるまで！！」

ガジェットの攻撃をエリスはスティックで打ち返した。しかしあまりのガジェットの数にエリスはジリ貧になった。

「く！」

ISや魔力、技の無いエリスはそんなに戦闘能力が無い。だが仲間を守るために懸命にガジェットに立ち向かったその瞬間。

「44 おおおソニック！！！」

44ソニックがガジェットを破壊した。エリスの前にティアナが降り立った。

「ティアナ」

「守られてばかりってしょうに合わないのよ」

魔力ではない44ソニックを体得していたティアナは戦う決断をした。だがそれはティアナだけではなかった。

「おりゃあああああ！！！」

降り注ぐ光弾をスバルがスティックで打ち返す。

「私の仲間に手を出すなああ！！」

「スバル！」

「いいエリス。私は44ソニックを三球しか投げられない・・・後、二球・・・なるべくガジェットを一箇所に集めて」

「わかった！！」

エリスとスバルは速攻を仕掛けた。ガジェットの中を縦横無尽に駆け回りなるべくガジェットが一箇所に集まるように誘導した。ある程度一箇所に集まるとティアナは44ソニックで撃破した。だがそれでもガジェットの数は減らない。残り一発の44ソニックでは決して削り取れない数だった。ガジェットの攻撃がエリスに降り注がれそうになった瞬間。スバルとティアナが盾になった。吹き飛ばさ

れるスバルとティアナとエリス。

「スバル！ティアナ！！」

身体を起こすスバルとティアナは

「エリス！私はあなたを信じる！！私達はどんな時でも仲間だよ！
！」

「あんたはヴィヴィオを本気で心配してくれた！少なくともそれだけはあんたの本音でしょ！！」

「スバル・・・ティアナ」

「無理無理！出来損ないの戦闘機人のあんたに何が出来るの？」

「・・・違う」

「え？」

エリスは立ち上がった。自分を信じてくれた仲間のためにそして自分自身のために。

「私は戦闘機人なんかじゃない！どんな時でも決して諦めない！それがアイアンリーガーだ！！」

戦闘機人ではなくアイアンリーガーとしてエリスが渾身の力を振り絞り立ち上がった瞬間。

再び風が吹いた。

「44 おおソニック!!」

ガジェット軍団に44ソニックが打ち込まれた。爆散していくガジェット。その44ソニックはマグナムエースのものでティアナのものでもなかった。エリスが氷山を見上げた瞬間。

「選手交代だ!」

そこには3体のアイアンリーガーが立っていた。二人は野球、一人はサッカーリーガーだった。そしてチームシルバーキャッスルはそのリーガー達を知っていた。

「・・・ゴールド三兄弟」

「ん? 俺たちを知ってるのか?」

エリスの呟きにゴールドフットが答えた。

「何だよシルバーキャッスルのやつらだと思ったら・・・いやお前新入りか？」

「は、はい！」

「やっぱりな。お前から奴らと同じお人よしのリーガー魂を感じる」

ゴールドアームのはエリスの事がわかった。

「な！なんなのよ！？あんた達関係ないでしょ！！！」

クアットロの言葉にゴールドアームは。

「・・・それが関係あるんだよ・・・シルバーキャッスルと戦った奴らにはな・・・切っても切れねえ『絆』 ってもんが生まれちまうんだ」

ゴールドフット、ゴールドマスクも頷いた。するとガジェットからシャトルに向かって一斉砲撃が向けられると。

「フット！マスク！いくぞ！！！」

「「おう！！！」」

「「「竜巻フォーメーション！！！」」」

ゴールドフットが中心となり巨大な竜巻がシャトルの壁になった。

砲撃が竜巻に防がれる。

「なに!？」

仰天するクアットロ。するとゴールドアーム、ゴールドマスクの竜巻がガジェット達に照準を合わせ、ゴールドフットはサッカーボールを繰り出した。

「いくぜえええ!! アタック! トルネード! サンダアアアスペシヤル!!!」

ゴールドフットから繰り出されたシュートがゴールドアーム、ゴールドマスクの竜巻を遠心力とし凄まじいシュートが繰り出されガジェットを縦横無尽に破壊していった。

「まだだぜ!!」

今度はゴールド三兄弟が合体するように組み合った。

「「トリプル竜巻フォーメーション!!!」」

すると先ほどの竜巻よりも凄まじい竜巻が発生した。

「トリプル!」

「トルネード!」

「イリュージョオオオオン!!!」

「「クライシス!!!」」

ゴールド三兄弟のシュートがガジェットの三分の二を破壊した。その破壊力を見たチームシルバーキャッスルのメンバーは啞然とした。

「後はお前の番だぜ」

「え？」

ゴールドアームはエリスに野球のボールを渡した。

「お前にもオイルを沸騰させる事が出来るはずだぜ」

「え？・・・うん！マグナム・・・みんな！私に力を貸して！」

エリスがゴールドアームから渡された野球のボールを握り締める。すると身体の中の何かが熱くなった。それは抑える事の出来ない熱さだった。

「・・・熱い・・・なんなの？・・・この熱さ」

エリスは身体から溢れる熱さに

「私のオイルが沸騰するぜ！！」

その瞬間エリスから膨大なエネルギーが解き放たれた。それは決してテクノロジーから生まれない力をエリスは掴み取った。エリスは心のおもむくまま投球フォームに入った。

「シャイニングスマッシュ！！」

エリスの投球は光り輝き強烈なジャイロボールが残りのガジェットを一掃した。

「・・・できた・・・私にも出来た」

「くっそ」

クアットロがガジェットを撤退させる自分の未知なる可能性を見出したエリス。その瞬間ゴールド三兄弟の身体が透けてきた。

「ちっ！どうやら時間切れみてえだな」

「・・・ゴールドアーム」

「・・・まあいいぜ。お前との試合を楽しみにしてるぜ・・・せいぜい腕を磨いておくんだな」

「わかった」

するとゴールド三兄弟が光となり消えた。

「なんだったの今の？」

「わからない・・・けどシルバーキャッスルの絆が呼んだ奇跡かも」

「あたしたちにも出来るかな？」

「絶対できるよ！これからそれを築いていくんだもん」

「全くお気楽なんだから」

スバルのプラス思考に呆れるティアナ。

「熱が下がった!」

シャトルでヴィヴィオの看病をしていたエリオとキャロはヴィヴィオの容態回復に喜んでいた。

「おーい!! みんなー!!」

するとシャトルを奪取してきたリーガー達。チームシルバーキャッツスルはリーガー達の下へ駆け出した。

（みんな・・・約束・・・守れたよ

第十六話 出現！黄金の旋風！（後書き）

ロストロギア・・・それはとても危険な力・・・悪用されるわけには
いかない・・・このロストロギアは？

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 時を越える
正々堂々！試合開始！

第十七話 時を越える

第十七話 時を越える

シルバーキャッスルは合流ポイントでヴィヴィオを預けようとしたが見ず知らずの人間に預けるのならば自分が面倒を見るというGZの意見で結局一緒に行動する事になった。ボーシップ号を受け取ると現場に急行した。指定されたポイントは密林でありその遺跡に会った。

「ここは・・・いかにも！ってところね」

スバルとリーガー達は遺跡を探索していた。ティアナ、エリオ、キヤロはボーシップで待機している。この人選はくじ引きで決めた事だった。

「この遺跡はというロストログアなんだろうね？」

「・・・少なくとも観光名所じゃなさそうだな」

スバル達は奥に進んでいくと遺跡に模様が刻まれていた。

「なんだろうこれ？」

「ミーにはさっぱりネ」

「気をつけろ。何が起こるか分からん」

GZの号令にリウケンとトップジョイは模様から手を離れた。

「それにしても何だろうねこれ」

「おい！スバル無闇に・・・」

スバルが模様に触れた瞬間。模様が光り出した。

「なんだこれ？」

魔力反応確認

「なんだ！」

『なに！どうしたのスバル！』

通信機からティアナの声が響く。

「なんか遺跡が動き出した！！」

『そこから離れなさい！何が起こるか分からないわよ！！』

スバル達は遺跡から脱出しようとした瞬間遺跡のコアの部分が光り出しスバル達を飲み込んだ。

「うあああああああ！！！！！！！！！！」

「・・・ここは？」

スバルが目を覚ますとどこかの町に立っていた。シルバーキャツスのメンバーは近くには居なかった。

（マグナムエース！）

（大丈夫だ。ここに居る）

マグナムエースはスバルの意識の中に居た。しかしここが何処だかわからない。

（何処なんだ一体？）

（わからない・・・ティアに連絡とってみる・・・ティア！ティア！！！）

通信機や念話でティアナたちに連絡を送ってみるが繋がらない。

（どうして！？）

（わからないウインディたちも居ない！あの遺跡に飛ばされたのか？）

するとスバルは物凄い魔力を感じ取った。

（なに？この魔力！！！）

絶望的な魔力反応に向かってスバルが走った。

「あれは！！！」

スバルが空を見上げると強力な魔力結界が張られていた。

「なに！これ！まるで……」

そうスバルは以前シャーリーに見せられた『闇の書事件』を思い出した。

「なにがどうなってるの！？」

スバルは空を見上げた瞬間。黒い雷が空から放たれようとしていた。

「いけない！！マッハキャリバー！！」

〈了解〉

「セエツトアップ！」

スバルはバリアジャケットを装着した。あの黒い雷が放たれれば町

に被害が及ぶ恐れがあるからだ。だが自分の魔力では防げないがスバルは。

「行くよ！マツハキヤリバー！マグナムエース！」

〈はい！相棒〉

（行くぞ！）

「ウイングロード！！！」

ウイングロードを展開しスバルは雷の落とされるであろう魔力結界まで走った。そしてそのままカートリッジをロードすると雷を迎え撃つ体勢に入った。

「一撃・・・必倒！！ディバインバスター！！！」

黒い雷とスバルのディバインバスターがぶつかり合う。当然のことながらディバインバスターは押し返される。

「くうう！！弾かれる！！！」

（スバル！）

「マグナムエース！」

（スバル！精一杯の心を籠めてディバインバスターを構えたら俺に代わってくれ！！）

「え？わかった！！！」

（マッハキャリバー！君もだ！）

〈OK〉

スバルは一旦距離を置くと再びカートリッジをロードし精一杯の心を籠めディバインバスターを放つ体勢に入った。

「お願い！！マグナムエース！！」

スバルはディバインバスターの体制のままマグナムエースに切り替わった。

（スバルとマッハキャリバーの心で増幅されたディバインバスターに・・・俺の全てを叩き込む！！！！）

その瞬間ディバインバスターの魔力が未知のエネルギーで増幅された。その力は周囲を空気を巻き込んだ。

「ライトニングバスターアアアアアアアアアア！！！！！！」

マグナムエースはスバルのディバインバスターに自らの魂を上乗せした。それは正に魔法版44ソニックだった。

「であああああああああああああ！！！！！！」

黒い雷と心の力で増幅されるライトニングバスターがぶつかり合い相殺した。

「うわああああああああああ！！！！！！」

あまりの爆発にマグナムエースは吹き飛びそのまま地面に倒れこんでしまった。

「ここは痛！」

スバルが目を覚ますとそこは何処かの一室だった。そして身体に痛みが走った。どうやら雷を受け止めたショックで痛めてしまったようだ。すると扉が開き一人の少女が現れた。

「あ！気がついたんですね！！」

スバルはその少女を見た瞬間驚愕した。

「なのはさん！！」

「え？そうですけど・・・お姉さん誰ですか？」

スバルは混乱した目の前にいるのは高町なのはだった。だがその姿は子供だった。

「どうしたの？　なのは」

「フエイトちゃん」

「え？ フェイトさん！！？」

スバルが驚くそこにはなのはと同じ位の身長のパフェットの姿があった。

「なにがどうなってるの？」

子供の姿のなのはとフェイトに混乱しているスバル。

(スバル)

(マグナムエース)

（どうやら俺たちは過去に来てしまったみたいだ）

(えええええー！！！！！)

第十七話 時を越える（後書き）

ここは何処だ？ 某は今どこに居るのだ・・・この気配は！ シグナム殿！

次回！ 疾風！ アイアンリーガー Strikers 侍対騎士
正々堂々！ 試合開始！

第十八話 侍対騎士

現在

「スバル達が消えた!!?」

ボーシップのティアナの通信に六課のなのはは驚いていた。

「はい・・・あの遺跡が急に動き出してスバル達とウィンディ達が飲み込まれちゃったんです」

ティアナたちも正直焦っている。しかし一人だけ焦っていない人物が居た。

「奴等は大丈夫だ」

「・・・シグナム副隊長」

「・・・あのロストログアは時を超えるものだ奴等は今過去に行っただ」

「・・・シグナム副隊長どうしてそんな事がわかるんですか?」

シグナムは必要以上に言わない。だがはやてが沈黙を破った。

「・・・シグナム」

「・・・主」

「・・・シグナム・・・あんたは一体何を知ってるん？マグナムエースやシルバーキャッスルがこの世界に来た時もあんただけは別に驚かなかったやろ」

「・・・そうだな。おめえならあの十郎太とかいう奴にとつと決闘しかけると思ってたんだけどな」

はやての言葉になのはやヴィータ、画面の先のティアナもシグナムを見つめていた。そしてシグナムは重い口を開いた。

「・・・私の奴に対するものはそんな甘いものではない・・・それにもうこの出来事が起きたのなら隠しておく必要はありません・・・高町お前はマグナムエースが44ソニックを始めて投げた時どこかで見たことがあるといっていただろう」

「・・・はい」

「・・・みんなも心のどこかで引かかっているのではないか？シルバーキャッスルの事を」

確かにそうだった。なのはやフェイト、はやてたちはシルバーキャッスルが現れた時に不思議と受け入れてしまった。心のどこか敵ではないと思っていたからだった。

「正直・・・私も十郎太の事しか覚えていない・・・44ソニックを見たときに僅かに思い出した程度だ・・・主これから私の知っている事の全てを話します」

六課のなのはとボーシップのティアナ達はシグナムの話を聞いた。

第十八話 侍対騎士

過去

スバルは起き上がり幼き日のなのはやフェイト、リンディに話を迫られていた。

（うわあ！どうしようマグナムエース）

（・・・とりあえず俺たちが管理局の人間だと言うのは黙っておこう・・・君はまだ管理局の人間じゃないからな）

（・・・うん・・・それに絶対に信じてもらえないし）

「お姉さん管理局の人ですか？」

「え？」

スバルはなのはに聞かれ焦ってしまった。

「い・いえ！違います！違います！！通りすがりのただの魔導師です！！！！」

裏返った声で言うスバル。余計に怪しくなってしまった。

「じゃああの管理局の制服は？」

「あ！えっとあれは・・・コスプレ！！そうコスプレです！！」

物凄く苦し紛れの言い訳に目が点になるのは。

「怪しい」

「うん・・・怪しい」

「怪しすぎる」

スバルの苦し紛れに疑いの目のなのは達。幼くてもやはり後に『エース・オブ・エース』と呼ばれるだけの事があるのか、ただ単にスバルの嘘が下手なだけなのか後者ではあるが。

（・・・スバル・・・俺に代わってくれ）

（ううお願い）

スバルは一旦目を閉じるとマグナムエースに切り替わった。

「すみません・・・実は俺は旅の魔導師です」

「旅の魔導師？　っていうか口調変わってませんか？」

マグナムエースに再び驚くのは。

「はい・・・魔導師も完璧ではありません。部族や人間によつてはぐれる者も居ます・・・俺達はそんな仲間を集めて旅をしているのです」

「はあ」

「あの服もこことは別の世界の服です・・・偶然管理局の服に似ていたでしょう」

「そうですか」

とりあえずさっきまでのスバルの言い訳が胡散臭かったのかマグナムエースの言葉は信じていた。

「じゃあ旅の魔導師さんにも聞いてみましょうか。闇の書のことなんだけど」

リンディがスバルを含め闇の書の話始めた。

（マグナムエース！これ！）

（ああ、どうやら俺たちが飛ばされたのは『闇の書事件』の時代のようにだ）

闇の書やヴォルケンリッターについて説明が始まっていた。なのは達はヴォルケンリッターたちのことを考えていたがスバルは考える必要が無かった。正直どう反応していいか混乱している。

「あとこのロボットなんだけど」

この映像を見るとビルの一隅に十郎太の姿があった。

「十郎太！！」

「え？知り合いなんですか？」

「はい！私の仲間です！少なくともこの人は敵じゃありません！」

スバルの一言にとりあえず十郎太の疑いは晴れたようだ。そしてそのまま解散する事になった一同。スバルは今後の方針を考えていた。

（これからどうしよう）

（とりあえずウィンディ達を探そう・・・十郎太がここにいるということはみんなこの時代に飛ばされた可能性が高い）

（・・・わかった）

とりあえずスバルは今後の方針が決まった。そしてマッハキャリバーを懐に入れ部屋を出ようとしたその時。

「・・・あなた・・・本当は何者？」

リンディにスバルは呼び止められてしまった。

「え？ですからただの旅の・・・」

「みんなは誤魔化せても私は誤魔化されないわよ」

リンディはさっきまでと違い鋭い眼でスバルを見た。

「あなたのデバイス・・・とてもじゃないけど今の技術じゃ作れない・・・カートリッジシステムも完璧だしあなたは何者？それにIDもまだ未発行の番号だし・・・あなたは誰なの？」

スバルはまるで蛇に睨まれた蛙のような気持ちだった。

「す！すみません！！！！」

スバルは逃げるようにその場を立ち去った。

「はあ、どうしよう提督この頃からやり手だったんだ」

「とまあ、未来の事は明かさないほうが良いですね」

「え？どうして？」

「未来が変わってしまうかもしれません」

スバル達はそのまま町に繰り出した。

時間は少しさかのぼる

「はあ・・・はあ・・・」

十郎太はどこか荒野を歩いていた。ロストログアの光に飲み込まれたとき何故か荒野に飛ばされていた。右も左もわからずただ闇雲に歩いているだけだった。

「くっ・・・は」

十郎太はそのまま倒れてしまった。

しばらくすると十郎太は何者かに水をかけられた。装甲が熱を持っていたためか水はすぐに蒸発した。

「・・・ん」

十郎太が目を覚ますとそこには見慣れた騎士の姿があった。

「シグナム殿！」

「・・・誰だ？ 貴様」

十郎太は訳がわからなかった。確かにミッドチルダに来た時シグナムとは初対面だった。そしてシグナムは自分の事を知っていた。しかし十郎太は身に覚えは無かった。今度はシグナムが同じ状態のようだった。

「・・・某機動六課チームシルバーキャッスルの極十郎太ともうす者」

「・・・機動六課？何の事だか知らないが私がお前を偶然見つけた。そしてお節介をおこしたそれだけだ」

「！！！」

十郎太は疑問で一杯だった。例え自分の事は知らなくても管理局のことを知らないわけが無い。シグナムの案内で十郎太は弱った身体で町まで行こうとしていた。

（・・・おかしい・・・この者は一体）

十郎太は町まで辿り着くと急に空が曇った。そして目の前には魔力結界が貼られている。シグナムは魔力結界に飛び込んだ十郎太も結界に飛び込むとそこには子供の姿のなのはとフェイトがヴィータとザフィーラと戦っていた。

「どういうことだ！」

十郎太は混乱していた。何故なのはとフェイトが子供なのかそして何故なのは達がヴォルケンリッター達が争っているのか。

「・・・命の恩人とはいえ・・・魔導師が野党まがいの狼藉！許さん！！」

十郎太はシグナム達を止めようとするが身体が言う事を聞かない。そして黒い雷がなのは達に襲いかかろうとした瞬間ウインググロード

が走った。スバルの姿を見た十郎太は仲間がこの世界に来たことを確認した。スバルが黒い雷を受け止めると十郎太はシグナムに回収された。

「どう思う？あの魔導師・・・」

ヴィータは突如現れたスバルのことを考えていた。

「わからんが闇の書の魔法を受け止めた奴だ・・・あなどれん」

「そーい、あたし今日変なロボットと戦ったぞ」

「・・・変なロボット？」

「ああ、なんかあいつも変なもん持ってた、それ闇の書に入れたらページが半分くらい埋まったぞ」

「本当かそれは！そいつはどんな奴だ！？」

「お前が連れて帰ってきた奴みたいなのだよ」

ヴィータは八神邸の庭に立っている十郎太のことを指した。

「・・・そうか」

「問題なのはあの仮面の男と謎の魔導師、それにあのロボットね。もしかしたらあの謎の魔導師とロボット達から蒐集したほうが闇の

書が完成するかも」

シャルの意見にシグナムは庭に向かった。

庭では十郎太が一人考えにふけていた。

（闇の書・・・子供のなのは殿とフェイト殿・・・そしてはやて殿・・・ここは過去の世界か）

十郎太はロストログアで過去の世界に飛ばされた事を痛感していた。すると後ろからシグナムがオイル缶を差し出した。

「いらん」

「何故だ？」

「・・・これ以上野党から施しは受けぬ」

その言葉にシグナムは。

「・・・侍・・・私たちの行動に口を出さないでもらおうか」

「・・・お主ほどの者が何ぬえ野党まがいのことをする？」

「・・・貴様に言ったところで関係の無い事だ」

シグナムはオイル缶を置くとそのままその場を立ち去った。そして再び気配を感じ振り向くとそこにはシャルの姿があった。

「侍さん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「実は」

十郎太ははやてから闇の書についての事を聞いた。はやてがマスターに選ばれた事・・・自分たちの事・・・そしてはやてにかかった事。

「・・・そうか・・・だからと言ってそのような事が許されると思っ
ているのか？」

「わかってます・・・けどはやてちゃんを救うには・・・」

「・・・そのような方法ではやて殿が救われたとしてはやて殿が喜ぶ
ぶとも思っているのか？・・・昔のお主達ならともかく今のお主達なら別の方法ではやて殿を救う事も出来るはずだ」

十郎太の言葉にシャルマルは黙ってしまった。十郎太は未来から来た
が『闇の書事件』を知らない。そして解決方法も知らないしかし心
を持っているシグナムやシャルマル達が別の方法を探せば別の道もある
かもしれない。そう信じていた。

「・・・これ以上野党の施しは受けたくはないが・・・もう少し世
話になる」

十郎太は八神邸に居座る事にした。

（・・・彼女達にはあの行動が必要なのかも知れぬ。しかしだがそ
れは間違っている・・・人の真意が分からぬとは某未熟・・・わか

らぬ・・・過去は変えてはいけない・・・何が正しいのだ」

十郎太は考えにふけながら時は過ぎていった。シグナムが再び蒐集活動に出向いた事を十郎太が知ると十郎太もその世界まで飛んだ。

「またやっているのか！！！あれはフェイト殿」

十郎太の目の前でシグナムとフェイトが戦いを繰り広げているが。

（たしかに過去を変えてはいけないのかもしれない・・・だが某やはりこの行為黙って見過ごす事は出来ぬ！！！）

十郎太は砂漠を駆け出した。シグナムとフェイトの戦いを止めようとする十郎太の前に仮面の男が襲いかかろうとするが。

「邪魔だああああああああ！！！！！！」

仮面の男は十郎太に瞬殺されてしまった。

「シグナム！！」

「十郎太」

十郎太はシグナムとフェイトの戦いに割って入りシグナムを押さえ付けた。

「同じ魔導師同士で争ってどうする！！お主は騎士としての魂まで捨ててしまったのか！！お前はそんな事のために生まれてきたはずではないはずだ！！」

「うあああああああああ!!!!」

シグナムは十郎太を押しつけレヴァンティンを突きつけた。

「貴様に何がわかる!! プログラムの私たちを人として家族として・
・・心優しき主を救うには!! もうこうするしかないのだ!!」

シグナムのやり場の無い怒りの飛竜一閃が空を斬った。

「はあ・・・はあ・・・その為になら・・・私は騎士としての誇り
すら捨てよう!!!」

シグナムの姿を見た十郎太は。

（・・・奴の剣からはとてつもない悲しみがにじみ出ている・・・
だがその心が己を侵し・・・心を捻じ曲げてしまう事に奴は気づい
ていない・・・いや・・・奴は気付いていながらも・・・どこか似
ている・・・マグナムエースに出会う前の某に）

（アイアンリーガーを磨くのは・・・アイアンリーガーなのだ!）

マグナムエースの言葉を思い出した十郎太の腕から蒼い魂が燃え上
がった。

（・・・某に宿りしシルバーキャッスル魂）

十郎太はムテンソードを抜いた。

（・・・剣と剣同士ならその熱き思いは伝わるはず）

十郎太はムテンソードをシグナムに向けた。

「勝負だ！シグナム！！」

「なに！？」

「一対一だ！！！」

十郎太はシグナムにムテンソードを突きつけた。

「どちらかが倒れるまで戦う・・・それがルールだ！！某が勝ったら今後一切狼藉から足を洗い別の道を探してもらう！！」

「・・・貴様が負けたら！？」

「この先ずっと貴様の手先になろう！！」

十郎太の本気の瞳にシグナムは。

「・・・おもしろい・・・私に決闘を挑もうというのか・・・受けよう！！」

侍と騎士はお互いの剣を構え対峙した。十郎太の顔にバイザーが降りる。両者のあまりの気迫にフェイトは黙って戦いを見る事しか出来なかった。

「・・・そんなか細い剣で・・・私のレヴァンティンを受け止められるか？」

その瞬間風が吹いた。

「はあああああああああああああ!!!!」

「うおおおおおおおおおおお!!!!」

シグナムと十郎太の剣が交差し降り立つ二人の剣士。

(・・・出来る)

十郎太は自分のアーマーが切り裂かれている事にシグナムの実力を
感じ取っていた。しかしそれはシグナムも一緒だった。

「!!!!」

シグナムも自分の騎士甲冑が避けている事に驚いていた。

「はあああああああ!!!!」

シグナムのレヴァンティンの一閃を十郎太は一つずつ丁寧に受け止
めている。そして一旦距離を置き飛竜一閃を放つシグナムだが十郎
太はその一閃を回避した。

「シグナム! お主の剣は邪念が満ち溢れている! 憎しみの泥沼に足
を踏み入れてしまえば剣により身を滅ぼすぞ!!!!」

「だまれええ!!!!」

剣士たちの剣は再び交差しあう。

「お主として剣の道に生きようとしたのではないのか!？」

「そんなの知るかあああああああ!!!」

シグナムの思いの一撃を十郎太は受け止める。

「今のお主は剣を道具としてしかみていないのだな!!!」

「だったらどうした!!!」

「そうか!!!」

すると十郎太はムテンソードを納めシグナムの前に立ちはだかった。

「どういうつもりだ!!!」

「剣士として・・・騎士としての誇りを捨てたお主の剣ではもはや拙者を斬ることはできぬ!!!」

「なに!?!」

「ならば渾身の力を籠めて!拙者を斬ってみろ!!!」

「くっ!!!はあああああ!!!レヴァンティン!!!」

シグナムはレヴァンティンからありったけのカートリッジをロードした。凄まじい魔力にレヴァンティンだけではなくシグナム自身にも負担が絶大だった。レヴァンティンから膨大な魔力が噴き出しシグナムは飛び掛った。

「紫電!!!一閃!!!」

シグナムの渾身の紫電一閃が周囲を破壊しながらレヴァンティンを十郎太に振り下ろすが。

「見切った」

渾身の紫電一閃を十郎太は真っ向から、それも素手で受け止めていた。膨張する魔力が行き場を失い周囲を破壊しつくしている。

「馬鹿な！私の剣を素手で！！」

「剣の力とは即物的な力のみにあらず！！刃を研ぐように己の心も研ぎ澄まさなければその道など極められはしない！！」

「くっそおおおおおおお！！！！！！」

十郎太はバイザーが割れシグナムも騎士甲冑が裂けそして爆発が起きその場に居たフェイトも巻き込まれてしまった。そして爆風が収まると剣士達はその場に倒れていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙する剣士たち。だが最初にその沈黙を破ったのはシグナムだった。

「私の負けだ・・・まさか私の剣を素手で受け止めるとは・・・」

「・・・某もお主の気迫に敗れ倒れ込んだのだ・・・引き分けだ」

引き分けたと言う十郎太。

「・・・そういえば・・・引き分けの時の約束は決めてなかったな」

「・・・次に会った時今度こそ白黒ハッキリ着けるそれが約束だ」

「シグナム？」

「・・・私はお前の言った通り出直してみよう・・・そのときが本当の勝負だ」

シグナムは十郎太のほうを向いた。

「・・・せいぜい首でも洗って待ってるんだな」

「・・・お主も覚悟しておけよ」

剣士達は再戦を誓い合いその場で別れた。正直十郎太はこの後シグナムがどういう行動に出るかはわからない。だが十郎太は信じた。今のシグナムなら新たな道も見つける事が出来ると。すると

「おーい！十郎太ー！」

十郎太が空を見上げるとそこにはウイングロードのスバルとシルバーキャッスルの仲間たちが迎えに来ていた。

「もう！探したんだからねー！！」

「・・・みんな・・・あっ！！スバル殿！危ない！！」

「十郎太ー！」

スバルはウイングロードから十郎太に向かってダイブした。

第十八話 侍対騎士（後書き）

ああ！ここ何処よ！私たち迷子？漂流者？あの車椅子の子・・・は
やてさん！？

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 闇の書の影
正々堂々！試合開始！

第十九話 闇の書の影

現在

「・・・そんなことが」

シグナムの話を聞き終えたなのは達。そして驚愕していた。過去の闇の書事件にリーガー達関わっていたという事だった。

「・・・そんな事があったなんて」

「じゃあ何で私ら忘れてるん？」

「・・・恐らく今の私たちが過去に行き自分達の記憶を書き換えたか・・・あるいはロストログアに記憶から消されたか・・・いずれにしる状況が不味い事にならない」

「・・・なんで？」

「・・・奴等が私たちの過去を黙って見過ごすと思うか？」

シグナムのその言葉に全員絶句した。

第十九話 闇の書の影

更に時間はさかのぼる。

「ううゝお腹減ったよゝ」

空腹にのた打ち回るスバルと武士は食わねど高楊枝のマグナムエース。その理由は簡単お金を持っていないからだった。

「はぁ〜アルバイトでも探そうかな〜」

コンビニで求人広告を見始めるスバル。すると隣のメカシヨップからエリスが出てきた。

「あ！エリス！！」

「スバル！良かったー！！」

突然の再会に驚くスバルとエリス。そして道中スバルはエリスにこれまでを話し始めた。

「うわぁそれ大変だったね」

「でしょ〜マグナムエースが居なかったらどうなったことやら・・・
・そういえばエリスは何やってたの？」

「みんなが作った部品売りに行ってたの」

「えっ？じゃあみんな居るの？」

「うんウィンディと十郎太以外はみんないる。今日は私の当番の日だったから私が出稼ぎ」

「当番の日って・・・みんないつごろここに来たの？」

「一週間くらい前かな・・・私に『闇の書事件』の記録がインプッ

トされてたから時代の特定は大変じゃなかったけど」

「そっかー私はマグナムエースのおかげで混乱しなかったかな・・・それよりもメカショップで出稼ぎか・・・エリス以外は行かないほうが良いんじゃないの？」

「え？なんで？」

「みんなが行ってそのまんま帰って来なかったら嫌でしょ」

その瞬間スバルにエリスのコブラツイストが炸裂した。

「不吉なこと言うなああ！！」

「イタイイタイ！ギブギブ！！」

エリスはコブラツイストを解くとスバルの格好を見た。

「・・・スバル・・・服買いに行こう」

「え？なんで？」

「ここはミッドチルダじゃないんだから管理局の制服じゃ目立つでしょ！！」

「は！」

今更と言う感じだった。そこに。

「おーい！」

ブルアーマーがスバルとエリスの元に走ってきた。

「あっ！ブルー！！」

「あっ！スバル！ってことはマグナムも」

スバルが目を閉じるとマグナムエースに切り替わった。

「大丈夫だ俺もここにいる」

スバル達は帰路についていた。この先のスクラップ場でキャンプしているらしい。

「いやゝあまりに帰りが遅かったから心配したぜ」

「ごめんブル」

「それにしても偶然だなあスバルとマグナムエースに会うなんて」
信号待ちしている一同だが余程目立つのか通りかかる全員がブルアーマーを見上げる。ちよつと緊張するブルアーマー。

「やっぱり・・・目立つかな？」

「まあ今の時代じゃロボットって感情回路は持っていないからな」

「けどトップジョイは近所の子供と遊んでたけど」

「子供の面倒ならトップジョイの右に出る奴はいないな」

ブルアーマーの言葉にウンウンと首を縦に降る一同。すると信号が青に変わった。信号を渡っていると交差点から一台のトラックが信号を無視し突っ込んできた。

「うああああ！助けてくれーブレーキが利かない！！！」

交差点の人々が逃げ惑うと一人の車椅子の少女が車椅子から倒れてしまった。暴走したトラックがその少女に突っ込もうとしたその時。

「危ない！！！！！」

ブルアーマーが少女の前に立ちはだかった。

ガチャャン！！！！

「ぬうううううううう！！！！！」

ブルアーマーがトラックを受け止めるが圧力で押されてしまう。

「ダメだよ！！潰されちゃう！！！！！」

だがマグナムエースだけはその姿を見守っていた。

「ぬうううううん！！よいしょー！！！！！！！！！」

するとブルアーマーが10メートル以上あるであろうトラックを持ち上げた。その隙にスバルとエリスは少女を救出した。ブルアーマーはトラックを路肩に置くとブレーキをかけた。

「大丈夫ですか？」

「あ！ありがとうございます！君のおかげで大事故にならないで済んだよ」

運転手はブルアーマーに礼を言うと車のディーラーを待った。

「ブル！」

スバルとエリスは先ほど助けた少女を手にはブルアーマーが来るのを待っていた。

「お待たせ・・・！！」

ブルアーマーが助けた少女を見た瞬間驚愕した。

「は・・・はやてさん」

「は・・・はい・・・けど・・・誰です？」

スバルたちが助けたのは幼き日のはやてだった。スバルとエリスも困惑している。

「あの・・・ありがとうございます！！」

丁寧にお辞儀するはやてにかしまってしまいうスバル達。この幼き少女が後の上司になるからであろうか。

「あのく良かったらお礼をしたいんですけど家に来ませんか？」

「え？ああ、お礼なんて良いです。仲間を待たせているので」

「え？けど」

困惑するはやてにスバルがブルアーマーに小声で話しかけた。

（ブル）

（なんだい？）

（ここは好意に甘えたほうが良いかも）

（なんで？）

（今ヴィータ副隊長たち蒐集に行ってるからもしもの時のために私たち付いていたほうが良いかも）

（私もそう思う）

（エリス）

（たとえどんな時でも一人でみんなの帰りを一人で待つのが辛いんだよ）

（うん・・・それに・・・うまくすれば十郎太に会えるかもしれないし）

ブルアーマーは考えた末に出したのは

「・・・じゃあ仲間も一緒にお邪魔する形で良いですか？」

「もちろん！」

「じゃあお邪魔して良いですか？」

「もちろん！」

「じゃあ私が送っていくよ」

はやてが笑顔になるとスバルははやてを家まで送ることになった。

（スバル）

（何？ マグナムエース）

（蒐集とはまさか）

（・・・うんリンカーコアを集めて闇の書を完成させること・・・）

（それは・・・君と同じ魔導師からか？）

（・・・聞いた話だと怪物みたいなものから奪っているみたいだけど）

（・・・奪う・・・か）

（マグナムエース・・・もしかして）

（・・・俺はこのことを黙って見過ごすことはできない）

（・・・けど・・・それじゃあ歴史が）

（・・・たとえば歴史を変えることになったとしても・・・俺は彼女たちの傷つけあう行動を黙って見過ごすことはできない・・・それにこの後の彼女への悲しい結末にもだ）

スバルは頭では理解していた。歴史は変えてはいけけないだがその歴史を黙って見過ごして良いのか？スバルは考えるようになった。そしてスバルは八神邸にたどり着くとはやてを見送った。リーガー達も到着し全員が八神邸でひと時の休息を取ることになった。そしてリーガー達はこれから起こる闇の書事件に深くかかわることになるのだった。

第十九話 闇の書の影（後書き）

あの時何故かヴィータが俺に攻撃を仕掛けた。そして俺から何かを抜き取った。まさか俺たちから抜き取ったものって・・・まさか！次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 闇の書対シルバーキャッスル

正々堂々！試合開始！

第二十話 闇の書対シルバーキャッスル

フェイトは十郎太とシグナムの戦いを思い出していた。剣士と剣士の誇りをかけた戦い。そして魔力も何もない十郎太がシグナムの渾身の一閃を素手で受け止めたことを考えていた。

「あの人はなんであの剣を素手で受け止められたの・・・誇り・・・」

意を決したようにフェイトは部屋から出ると何やら騒がしかった。

「おいちよつと離せよ!!」

フェイトが見るとそこには十郎太と同じくらいのロボットが居た。

「たく!俺に何の用だよ!?身体はなんともねえって言ってるだろ!!」

「あなたは蒐集されたんですよ!!以上がないわけないでしょ!」

「何わけのわかんねえ事言ってるだよ」

するとフェイトがロボットに向かって言った。

「あなた・・・極十郎太さんと知り合いですか?」

「十郎太を知ってるのか?」

「はい!あなたは!」

「あっそうかこの世界じゃ俺はマッハウインディ」

ウインディは自己紹介するとシルバーキャッスルの元まで転移された。

第二十話 闇の書対シルバーキャッスル

十郎太と合流したシルバーキャッスルは闇の書事件のこと十郎太に話した。

「なるほど・・・はやて殿の過去にそんな事が」

十郎太は目を瞑ると一言だけ言った。

「お主はこの行為を見過ごすのか？」

「けど過去を変えるのは！！」

「それでお主の心が納得するのかと聞いているのだ」

十郎太の言葉は難しかった。確かに今止めればヴォルケンリッターの悪事やはやてを救うことができるであろう。しかしその代償に歴史を変えるわけにはいかない。だがシルバーキャッスルにはそれで

も救いたいという願いはあった。

「全くお前たち何やってんだよ」

「ウインディ!!!」

フェイトの言葉で開放されたウインディはシルバーキャッスルの現在地を教えてもらい合流してきた。

「要は闇の書を完成させてはやてを救えばいいんだろ？」

「しかし、闇の書を完成させるには」

「リンカーコアの代わりになるものならあるぜ」

ウインディの言葉にマグナムエースたちは仰天した。

「それは一体！」

「俺たちの魂だ」

「まさかそんな物で代わりなんて無理ヨ!!!」

「現に俺がそれで一回蒐集されたんだ」

「本当なのか？」

「ああ、しばらく動けなかったがこうしてピンピンしてんだ・・・
もしかしたら俺たち全員で闇の書を完成させられるかもな」

ウインディの冗談にエリスが携帯電話を取り出した。

「はい！はい！わかりました！！」

「どうした？エリス」

「はやてさんが入院したって！！」

「なに！！」

シルバーキャッスルは急いで病院に向かったが十郎太は病院の前で待った。

「シャマルさん！！」

スバルはシャマルにはやての容態を聞くと重い表情をするがシャマルは元気に振舞ってくれた。ちなみにシルバーキャッスルはヴォルケンリッターの顔は見えていないという誤魔化しはやて宅にお世話になった。

「これからしばらくはお見舞いに来ます」

「ありがとうございます。はやてちゃんも喜びます」

それからしばらくの時間が過ぎていった。シルバーキャッスルは、はやてのお見舞いをアリサやすずかと共にした。だが闇の書ははやての身体を浸食していくのを止められない。マグナムエースは自分の無力を呪った。

しかし時は残酷なことをした。なのはとフェイトそしてヴォルケン

リッターを対面させてしまったのだった。その場の一触即発はしないがお見舞いが終わるとなのは達は転移した。それを追いかけるシルバーキャッスル。場所はわかっていたため早く駆けつけることができた。

（どうしよう！！マグナムエース！！）

スバルがなのは達の戦い見て焦っているとマグナムエースは一言つぶやいた。

「・・・人は・・・時に間違った道を進んでこそ正しい道を知ることがある」

（え？）

「おりゃあああああああ！！！！」

ヴィータの一撃がなのはに振り下ろされそうになったその時、リーガー達が自分の因縁の相手の攻撃を防いだ。

「スバルさん！！」

「ウインディ・・・」

「GZ！」

「十郎太！！」

そしてウイングロードからシャマルのいる場所まで降りるリーガー達。

「あなたたち……一体」

シャルの言葉にマグナムエースは一言問いかけた。

「シャルさん……闇の書……いや……夜天の書が完成すればはやては助かるんだな？」

その言葉に反応したのはヴィータだった。

「そうだ!! もう少しで! はやてが元気になって帰ってくるんだ!」

「そうか……」

「だから……お前たちの魂さえあれば……邪魔すんじゃないええええ!!」

ヴィータの涙を流した言葉にマグナムエースは目を閉じると意を決したようにヴィータの前に立ちはだかった。

「……そんなに欲しければ……俺の魂をくれてやる!!」

マグナムエースの言葉に絶句するシグナム達。

「何のつもりだ!？」

「仲間を……友を救うためなら……俺は魂でも何でも差し出す!!」

「俺もだ!!」

ブルアーマーも立ちはだかった。

「本当にそれではやてが助かるのなら!俺の魂もくれてやる!!」

「ミーもあげるヨ!!」

ブルアーマーに続きトップジョイも前に出た。

「新米だけど・・・私の魂だってあげる!!」

エリスが前に立ちはだかった。

「某もだ・・・」

十郎太もシグナムから離れシャマルの前に立った。

「僕もだ!!」

「俺のもくれてやる!!」

リュウケンとGZも前に出た。

「まったく。揃いも揃ってよ。いいぜ!一回抜かれちゃったけど俺の魂もやるよ!!!」

ウインディもフェイトから離れた。シグナム達はリーガーたちの行動が理解できなかった。友を救うというそれだけの理由で、自らの命を顧みないリーガー達が。

「シャマルさん・・・夜天の書を」

「え・・・」

「早く!!」

シャマルは闇の書を繰り出した。そして蒐集が開始される。

〈蒐集〉

その途端リーガー達の身体が光り輝きエネルギーが沸きあがった。そして光は収束され闇の書に注ぎ込まれていく。その光景は今までの蒐集とは違い闇の書は暖かい光で包まれていた。そして見る見るうちに闇の書のページが埋まっていた。だがシャマルがいきなり蒐集を妨げた。

「・・・どういうつもりですか？」

「これ以上・・・あなた達から力を吸収すると闇の書が壊れてしまいます」

だがあと少しのところまでで闇の書事態が持たない。その時だった。突然なのは、フェイト、ヴォルケンリッター、そしてリーガー達がバインドで拘束された。

「なんだ!?!」

するとそこには仮面の男が二人立っていた。

「お前は!!」

「お前たちのおかげで闇の書が完成に近づいた」

「・・・後は」

その瞬間ヴォルケンリッターたちが苦しみ始めた。するとシグナム達から光の玉が現れた。

「あれは!!」

(リンカーコア!!)

仮面の男は最後のページをヴォルケンリッターで埋めるつもりらしい。マグナムエース達はバインドを外そうとするが以前なのはにかけられたものに比べ、二重三重あるいはそれ以上で拘束されていた。

「あああああああ!!」

「あああああああ!!」

シヤマルとシグナムの姿が消えてしまった。次はヴィータの番のようだ。

「やめろおおおおお!!」

その時ブルーアーマーの角が前に倒れた。アタックポジションに入りフルパワーの状態になった。

「どおりゃあああああ!!」

ブルーアーマールの突進でヴィータが開放されそうになるがその瞬間リーガー達全員が結界の様な所に閉じ込められた。その瞬間ヴィータが張り付けの状態になりはやてが転送されてきた。

「くそ！出せ！！」

「リュウケン！十郎太！！破壊するぞ！！」

「わかった！！」

「無論だ！」

ブルーアーマーとリュウケンと十郎太が構えた。

「どおりやああああああああああ！！！！」

「竜うううう鉄拳！！！！」

「はああああああああああ！！！！」

リーガーたちが結界を破るが、時既に遅しはやての目の前でなのはとフェイトに化けた仮面の男がヴィータを抹消した。

「はやて！！」

マグナムエースが降り立ったとき闇の書の闇がはやてを飲み込んだ。なのはとフェイトも脱出したが闇が晴れるとそこにははやてではなく銀髪の女性が現れた。その姿は堕天使のような姿だった。

「はやてちゃん!!」

「はやて!!」

銀髪の女性が一瞬表情を変えた。

「お前は何者だ!？」

「私は・・・闇の書」

マグナムエースの問いかけに闇の書は答えた。そして攻撃態勢に入った。

「私の力の全ては・・・主の願い・・・そのままに・・・」

エネルギーが収束されるとボールのような形状になった。すると闇の書はサッカーのような体制に入った。リーガー達はその技に見覚えがあった。

「あれは!」

「・・・マッハスピン」

すると闇の書がマッハスピンを繰り出してきた。

「スバル!!」

（わかった!!）

マグナムエースはスバルに防御魔法を展開させるとマッハスピンを

受け止める体制に入るが吹き飛ばされてしまった。

「うわあああああああ!!!!」

「マグナム!!!!」

「つく・・・大丈夫だ」

立ち上がるマグナムエース。そして闇の書は魔力を再び収束した。

「デアボリック・・・エミッション・・・」

「あれって!!」

「空間魔法!?!」

なのはとフェイトがそう言った瞬間。距離を置き始めた。リーガー達もスバルのウイングロードで一時撤退を試みる。

「闇に染まれ」

その瞬間。闇の書の攻撃が開放された。

「どうする!?!」

「確か歴史だとなのは達が解決法を見つけるはずだ・・・それまでは俺たちにできることをするんだ!!!!」

「できること?」

める。

「く!!」

「刃以て・・・血に染めよ・・・」

その瞬間闇の書とリーガーたちの周りに無数の赤い剣が現れた。

「穿て、ブラッディダガー」

赤い剣はリーガー達に襲い掛かってくる。

「44 おおおおおソニック!!」

「シャイニングスマッシュ!!」

マグナムエースとエリスの投球が赤い剣の軌道を狂わせる。

「竜・鉄・拳・脚!!」

軌道の狂った赤い剣をリュウケンが竜鉄拳と竜天脚のコンビネーションで防いだ。

「きああああああああ!!!!」

残った剣は十郎太が斬り捨てた。すると闇の書は呪文を唱え始めた。

「咎人達に・・・滅びの光を・・・」

「あれは、なのはさんのスターライト・ブレイカー!!!!」

スバルの言葉に警戒態勢に入るリーガー達

「星よ集え・・・全てを打ち抜く光となれ・・・」

周囲の光が収束され空気が揺れ動く。そしてエリスのセンサーが急な反応を示した。

「みんな！！結界に取り残された人が！！」

「なに！？」

「貫け閃光」

もうスターライト・ブレイカーは放たれようとしている。リーガーたちの決断は。

「みんな！正面から迎え撃つぞ！！」

「「「「「おう！！！！」」」」」

「・・・スターライト・ブレイカー」

闇の書からスターライト・ブレイカーが放たれた。シルバーキャッツは真正面から対抗した。

「スーパーノヴァフォーメーションだ！！！！」

「「おう！！」」

「たあ!!」

「でい！」

「「はあ!!」」

「どおりやあ!!」

リーガー達は一斉に飛び上がると輪を描き8人同時にシュートする体制に入った。闇の書のスターライト・ブレイカーとシルバーキャッスルのスーパーノヴァが正面からぶつかり合う。

「くううううううう!!」

「でえああああああ!!」

「どりゃああああああああ!!」

「「「「「「はああああああああ!!!!!!!!」」」」」」

シルバーキャッスルのスーパーノヴァがスターライト・ブレイカーを押し返すがあまりの破壊力にシルバーキャッスルも倒れてしまった。シルバーキャッスルが倒れたのを確認すると闇の書はなのは達の方へ向かった。シルバーキャッスルも痛む身体を起こし追いかける。するとなのは達が闇の書を説得しようとするが闇の書は触手ではなのとフェイトを絡めた。

「ていやああああああああああ!!!!」

十郎太がなのはたちを拘束している触手を斬りおとすと闇の書の前に立った。闇の書はシルバーキャッスルを見下ろしていた。

「闇の書・・・いや夜天の書！！お前ははやての願いを叶えると言った・・・これがはやての望んだことなのか！？」

「・・・そうだ。私は主の願いを叶えるだけだ・・・私はそのための道具だ」

「ならばその涙はなんだ！！」

マグナムエースの言葉に闇の書は己が涙を流していることに気づいた。

「この涙は主の涙だ・・・私は道具・・・悲しみなど・・・感情などない」

「悲しみなんて無いって・・・そんな言葉・・・そんな悲しい顔して言われたって誰が信じるもんか！！」

「あなたにも心があるんだよ！！私たちと同じように！！」

突如大気が揺れ始めた。

「早い・・・もう崩壊が始まったか」

「なに？」

「私はじきに意識を無くす。そうなればすぐに暴走が始まる・・・そうなる前に意識のあるうちに主の望みを叶えたい」

「まだ・・・」

マグナムエースがフェイトを止めた。

「夜天の書・・・お前はただ己の心に戸惑っているだけだ・・・そしてお前は心を恐れている」

「なに？」

「その心とはやてに正々堂々正面から向きあわないのがその証拠だ！！」

「黙れ！！！！」

闇の書は魔力球を生成すると投球体制に入った。

「マグナムエース・・・貴様の最大の技で葬り去ってやる」

その瞬間闇の書から膨大なエネルギーがあふれ出した。そのまま投球体制に入る闇の書だが突如投球フォームが崩れた。とても苦しそうな表情をしている。

「なんだ・・・この技は・・・こんな技・・・主の身体が耐えられない・・・」

「当たり前だ！！その技はみんなの心の結晶だ！！心を否定している今のお前に投げることなど出来はしない！！！！」

闇の書はディバインバスターの体制に入った。その瞬間フェイトが

飛び出した。

「この、駄々っ子!!」

「やめろ! フェイト!」

その瞬間フェイトの身体が微粒子になり消えてしまった。

「フェイト!!」

「フェイトちゃん!!」

なのはと闇の書は海の方面に行った。人的被害を少なくするためであろう。マグナムエースたちシルバーキャッスルもその後を追う。なのはと闇の書の戦いが交差する。

（く! どうすれば!!）

（八神部隊長の意識が戻れば・・・）

スバルのその言葉にマグナムエースはある事を閃いた。

「みんな! 俺たち全員の心を奴にぶつけるんだ!!」

「となると・・・あれか!!」

「よし! いつでも来い!」

シルバーキャッスルがフォーメーションに入った。一方なのはもユニノのアドバイスに全力全開の魔力ダメージを与えるという結論に

出た。そしてシルバーキャッスルの言った心を込めたスターライト・ブレイカーを放とうとしている。

「全力!!!全開!!!」

なのはがスターライト・ブレイカーを放とうとするが闇の書の夜天の雷がなのはにクリーンヒットした。

「きゃあああああ!!!」

なのはの思いを込めたスターライト・ブレイカーがレイジングハートから零れ落ちてしまった。なのはが諦め掛けたその時スターライト・ブレイカーにウイングロードが走った。

「受けたぞ!なのは!!!」

「え!!!」

ウイングロードが走ったと同時にシルバーキャッスルがなのはの思いを込めて作った魔力球を受け取った。

「トップ!ジョイ!!!」

「十うう郎太!!!」

「リユううウケン!!!」

「GZ おおおお!!!」

「エリス!!!」

「ウインディ！！！！」

「頼むぜ！！マグナム！スバル！マッハキャリバー！！」

ブルーアーマーから放たれたダイレクトパスが光の軌跡を描きマグナムエース達に託された。

「スバル！！マッハキャリバー！！！！みんなの思いで増幅されたこの球に！！俺たちの全てを叩き込むんだ！！」

（うん！！！！）

〈了解！！〉

「受けてみる夜天の書！！これが俺たちの心のシュートだああああああああああ！！！！」

その瞬間リボルバーナックルから大量のカートリッジがロードされマッハキャリバーに魔力と心の力がこめられた。

「ライティングクラアアアアアッシュ！！！！！！！！」

みんなの思いのこもったライティングクラッシュが闇の書に炸裂した。

「うああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

闇の書、夜天の書に、なのはのそしてシルバーキャッスルの思いの

こもったシュートがヒットする。

「なんだこれは……身体に……何かが入ってくる……この力は一体？」

すると闇の書の身体が心の力で輝きを放ち始めた。

第二十話 闇の書対シルバーキャッスル（後書き）

闇の書事件。俺たちは過去を変えてしまうかもしれない。だが俺たちは後悔しない！！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 決着！闇の書事件 正々堂々！試合開始！

第二十一話 決着！闇の書事件

暗闇の中はやては目を瞑っていた。そしてその前には闇の書が立っていた。

「・・・主・・・安心して眠ってください」

だが、突如闇の書の身体が輝き始めた。

「なんだ・・・これは!？」

動揺している闇の書。

「う・・・ん・・・」

するとその輝きではやてが目を覚まそうとしていた。

「・・・主」

「・・・なんやろう・・・この光・・・とっても温かい・・・」

はやては闇の書からあふれ出している光に心地よさを感じていた。

「・・・この光はあなた？」

「・・・違います・・・私に・・・こんな光・・・心なんてあるはずが・・・」

はやてがそつと闇の所の頬に触れた。

「・・・そっか・・・この光・・・心なんやな・・・とても温かい・・・まるで祝福の風みたいや」

「これは私の心じゃありません!! これは私にぶつけられた他人の心です!!」

「そっか・・・その心があなたの心を動かしたんやな・・・」

はやては闇の書に微笑む。

「他人だけの心でああなたの心がこんなに輝くわけない・・・」

「・・・主」

「決めた・・・あなたの名前はリインフォース」

第二十一話 決着! 闇の書事件

シルバーキャッスルの渾身のライトニングクラッシュを受けた夜天の書が輝いた瞬間二つの黒い物体が吹き飛んだ。一つはフェイトも一つは。

「どうなった!!」

「あれは一体?」

マグナムエースは信じて見守っていた。すると何かを感じ取った。

「・・・おいで・・・私の騎士達・・・」

その瞬間シグナム、ヴィータ、シャマル、ザファイラが召喚された。

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我等の魂、尽きること無し」

「この身に命ある限り、我等は御身の許にあり」

「我等が主。夜天の王・・・八神はやての名の下に」

「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風リインフォース・・・セツトアップ！！」

その瞬間はやてが騎士甲冑姿になった。

（マグナムエース！これって！！）

「ああ、成功したんだ！！」

はやてが元に戻ったことを喜んでいるスバル。そしてシルバーキャッスル達。

「はやてちゃん」

「はやて」

なのはとフェイトが集まった。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、シルバーキャッスルのみんな・
・ごめんな・・うちの子達がいろいろ迷惑かけてしもうたみたい
で・・・」

「ううん、気にしないで」

「全然平気だから」

「そっかありがとうな」

三人がうまくまとまっていたようだった。そしてはやてはマグナム
エースの元へ駆け寄った。

「スバルさん・・ううんマグナムエースさん」

「気づいていたのか？」

「二重人格化とおもうてたけど・・別々の人格みたいや・・あ
りがとうございます・・この子にリインフォースに心を教えてく
れて」

はやてがリインフォースをシルバーキャッスルに紹介した。少々照
れくさそうなりインフォース。

「これからよろしく・・リインフォース」

シルバーキャッスルがリインフォースを迎え入れた。

（いいのか私はお前たちを殺そうとしたんだぞ・・お前たちは一
体）

「これが、シルバーキャッスルなのさ」

そしてユーノ、アルフ、クロノが現れた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ。和んでいるところ悪いが時間がないのでこちらの話を聞いてほしい」

「時間がない？」

「ああ、あそこの黒い物体・・・闇の書の防衛プログラムが、後数分で暴走を始める。僕らはそれを何らかの方法で止めなければならぬ。停止させる方法は現在二つある」

「その方法は？」

「まず一つ目。極めて強力な氷結魔法で停止させる。ようするに氷付けにする。二つ目軌道上で待機している戦艦アースラの魔導砲・・・アルカンシエルで消滅させる。でだ、これ以外にほかにいい手はないか？闇の書の主と守護騎士の皆に訊きたい」

少々考え込んでいる一同。

「えっと・・・最初の氷付けにするのは多分難しいと思います。主の無い防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから。それに凍結させても、コアがある限り再生機能は止まりません」

「アルカンシエルも絶対だめだ！！こんなところでアルカンシエル撃つたらはやての家まで吹き飛んじゃうジャンか！！」

「そ、そんなに凄いの？」

「えっとね、発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲・・・つまり辺り一体をふっとばしちゃうんだ」

「あ、あの！私それ反対です！！」

「同じく！！」

「ミーも絶対反対ヨ！！」

「・・・僕もかあ・・・艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が始まったら、ひがいはそれよりずっと大きくなる」

「暴走が始まると、触れたものを侵食して無限に広がっていくから・・・」

「そうだ！！！！」

なのはが突如何かを閃いた。

「ライトニングクラッシュとスーパーノヴァなら！！」

なのはは自分のスターライト・ブレイカーを媒体にしたシュート。そしてスターライト・ブレイカーを押し返した技のことを皆に説明した。

「それで大丈夫なのか？」

「あの時私のスターライト・ブレイカーだけであの威力だもん!!
皆の最大の魔法を集めれば!!」

「できますか。みなさん？」

するとシルバーキャッスルはこう答えた。

「へっ！できますかじゃねえ。やるんだよ!!」

「俺たちが時間を稼ぐ！その間にみんなは魔法を収束させてくれ
ブル頼んだぞ!!」

「了解!!」

シルバーキャッスルが暴走を開始した闇の書に向かうとブルーアーマーからスーパードライブとライトニングクラッシュの説明がされた。

「心がエネルギー？」

「ああ、みんなが心を出し尽くせばきっと倒せる!!」

「それが本当なら・・・」

なのはたちはブルーアーマーの言葉に賭けた。そしてなのはたちが最大の技の体制に入った。

「全力全開!! スターライト!!」

「雷光一閃!! プラズマザンバー!!」

「ごめんな・・・おやすみ・・・響け終焉の笛！！！！ラグナロク！！！！」

その照準はブルアーマーだった。

「「ブレイカー！！！！！！」」

三人の最大の魔法がブルアーマーたちに収束される。

「いくぞみんな！！俺たちみんなの心のシュートで決着をつける！！！！」

マグナムエースの言葉に、ブルアーマー、アルフ、シャマル、ザフィーラ、ユーノ、クロノがスーパードヴァ体勢に入った。そしてフルパワーのブルアーマーの目が光った瞬間。

「ああああああっ！！！！トップジョイ！！！！」

「十郎太ああ！！！！」

「シグナム！！！！」

「ヴィータ！！！！」

「リュウケン！！！！」

「GZおおお！！！！」

「なのは！！！！」

「フェイトちゃん!!」

「エリス!!」

「ウインディ!!」

「マグナム!! スバル!!」

「いけえ!! はやて!!!」

星の軌跡を描いた心のダイレクトパスがはやてに向かって打ち上げられた。

（・・・これがみんなの心の結晶や!! 行くよ・・・リインフォース!!!）

（はい主!!）

魔力球に向かって飛翔するはやてとリインフォース。

「はああああああああああ!! ライトニングクラッシュ!! ラグナロクダイヤモンド!!!」

なのは、フェイト、ヴォルケンリッター、そしてシルバーキャッツの心の力で増幅されたボールをはやてがシュートと共に解き放った。心のシュートが海を割りそしておぞましい姿の闇の書を飲み込んだ瞬間大きな閃光が走った。あまりの眩しさに全員。その場に居た全員が目を伏せた。

「どうなった?」

闇の書を見た瞬間。闇の書は跡形も無く消滅していた。ハイタッチするなのはたち。だが、その瞬間シルバーキャッスルの全員が転送された。

「ここは？」

「みんな・久しぶり」

目の前に居たのは19歳のなのはだった。

「なのはさん!!」

「スバル心配したんだから」

「つたく遅いんだよ・・・」

「ごめん。それにこれ」

なのははあるユニットを差し出した。

「ホワイなにこれ？」

「記憶を書き換える機械・・・このままだとタイムパラドックスで未来に影響が出ちゃうかもしれないだから」

「みんなの記憶を書き換える必要があると」

するとマグナムエースはなのはに一言言った。

「なのは少し時間をくれ」

「・・・わかった」

今なのは、フェイト、はやてヴォルケンリッターそしてリインフォースが居た。

「主はやて、申し訳ありませんが私は消えなくてはなりません」

「なんでや!？」

「基礎構造が歪められたままなのです。このままでは、また新たな防御プログラムを組みなおしてしまいます。その際、高確率で主はやてはまた侵食されてしまいます」

「だめや!! 防御プログラムなら私がなんとかする!! だから!!」

「お聞き訳を・・・」

その時、はやてに向かってボールが飛んできた。はやてを庇うよう

にリインフォースはボールを受け止めた。その前に居たのはマグナムエースだった。

「・・・マグナムエース・・・何のつもりだ!!」

マグナムエースは無言でリインフォースを睨んだ。リインフォースもマグナムエースを睨んだ。

「何のつもりだと聞いているんだ!」

リインフォースの前にマグナムエースは静かに答えた。

「・・・はやてには君が必要なんだ」

「わからないのか! 私が居ればまた闇の書が復活してしまう!」

「・・・それでも君が必要なんだ!!」

「お前たちにまた牙を向けるかもしれないと言っているんだ!」

「その時は! 俺たちもあんたの牙を折る!!!!」

マグナムエースの真っ直ぐな言葉にリインフォースは駆け出してしまった。

「待て! 逃げるなリインフォース」

リインフォースを追うマグナムエースになのはとフェイトもはやてに肩を貸しながら追いかけた。少し離れた場所でリインフォースは立っていた。マグナムエースもその場に居た。

「・・・私は主を守りたい・・・だが私が存在すれば主を死なせてしまう！だから私は！」

「・・・君はそうやってはやてを見捨てる気か？」

「何！！」

「一番簡単な方法をとり、あんな小さな少女に『自分のせいで家族を失う』という大きな十字架を背負わせるきか？」

「貴様に何がわかる！」

「君が本当にはやての為を思うなら、はやての為に自分自身と戦うことだ！！」

その言葉に黙り込んでしまうリインフォース。

「もう君は闇の書の意志なんかじゃない・・・リインフォースというはやての家族なんだ・・・そしておまえ自身が守護騎士になれるはずだ！！！」

「く！だが・・・だが」

マグナムエースの言葉に涙を流すリインフォース。マグナムエースははやてにボールを差し出した。

「・・・これ」

「君の気持ちを籠めるんだ・・・本当の気持ちを」

「正直に生きろ！」

マグナムエースはその言葉だけを残しその場から立ち去った。

「気が済んだ・・・マグナムエース」

マグナムエースがなのは達の元に戻るとタイムマシンに乗り込んだ。そして記憶変換装置を起動させるとマグナムエース達は元の時代に帰っていった。

一方、リインフォースは立ち竦んでいる。なぜ自分がそこに立っているのか分からなかった。しかし頭の片隅に言葉が引っかかっていた。

正直に生きろ

現代に戻ってきたシルバーキャッスルはそこで驚くべきものを見た。
リインとは別にリインフォースが存在していたからだった。

「リインフォース曹長」

ティアナがリインフォースに敬礼する。状況が飲み込めないシルバーキャッスル。

「はじめまして・・・いや久しぶりと言うべきか？」

リインフォースはマグナムエースたちに笑顔を向けた。

第二十一話 決着！闇の書事件（後書き）

あの時、私は自分の気持ちに正直になってしまった。それが正しいのか？それとも間違っているのか・・・まさか！！こんな時に暴走が！！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers もう一人の守護騎士

正々堂々！試合開始！

第二十二話 もう一人の守護騎士

リーガーたちが戻ってくるとリインフォースが存在していた。リインフォースの話によれば無限書庫で日々修正プログラムを受け続けて何とか均衡を保っている状態にあると言い。そして、はやてへの侵食を防ぐためにユニゾン機能の改変を行った。その為安全のためと、はやてのサポートにリインが誕生したとのことだった。

第二十二話 もう一人の守護騎士

「うーんと」

「その・・・」

エリオとキャロは明らかにリインフォースを恐れている。

「どうしたんだよ？」

ウインディがエリオたちに尋ねると。

「ちょっと怖いんです・・・曹長はいい人です。修正プログラムも働いていますけど・・・けどもし戦闘中に暴走したら・・・」

その瞬間ウインディがエリオを睨み付けた。

「な・なんですか」

「・・・お前・・・気をつけて物を言えよ」

その光景を見ていたリインフォースは当然だといった顔をしてその場を後にした。

一方、リインフォースの姿を監視していたクアットロは

「ふゝん。あれが闇の書ねゝかなり微妙なプログラムが使われているみたいだけど」

そこでクアットロはあることを思いついた。

その時ボーシップをガジェットの群れが襲った。

「なんだ!?!」

「敵だよ!?! いきなり攻撃を仕掛けてきた」

「おいおい! ここは空中だぜ!」

ウインディの言葉にティアナは。

「ボーシップを足場にして戦えば・・・スバル! キャロ! リイン曹長は空中戦はお願い!! あたしもボーシップから援護する!! みんなはボーシップで待機!!」

「「了解^{です}」」

するとボーシッポ外からスバルはウイングロードをキャロはフリードにまたがり戦闘が開始された。

「リボルバーシュート!!!」

スバルのリボルバーシュートがガジェットを破壊しフリードがガジェットを焼き尽くしリインは凍りつかせた。

「44 おお おお おお ソニック!!!!」

ティアナの渾身の44ソニックがガジェットを破壊した。その44ソニックはとても磨きのかかっていたものとなっていた。

（ティアナ・徐々に44ソニックを自分のものになっているな）

その時スバル達の横を影が通り過ぎたクアットロだった。

「取り付かれた！」

誰もがそう思ったその時だった。

「ブラッディダガー」

赤い剣がクアットロを牽制した。

「リインフォース曹長」

咄嗟にリインフォースが出撃したのだった。エリオは止めたがリー

ガー達はリインフォースを信じた。

「馬鹿じゃない？ 私の狙いはあんたなのよ」

「なに？」

するとクアットロは銃を構えた。

「これでどう？」

クアットロはリインフォースにウイルス弾を何度も打ち込んだ。

「く！ あ！ ああああああああああああ」

その瞬間リインフォースが絶叫を上げ始めた。リインフォースのプログラムが崩され始めたのだった。

「まさか！ 暴走！！？」

「いけねえ！！ 止めるんだ！！！」

リインフォースの自己防衛プログラムが発動しかけているがリンカーコア蒐集までに至っていない。中で待機していたウインディやブルーアーマーがリインフォースを抑えるがあまりの苦しさによりインフォースはウインディとブルーアーマーを吹き飛ばしてしまった。

「くうう！！ わあああああああああ！！！！！」

暴走にもがき苦しむリインフォース。誰もがリインフォースの破壊を決断しようとした瞬間。

「どうなった!?!」

「わからない!?!」

「ふうんあんたの暴走はその程度のもだったんだ」

クアットロがマグナムエースたちにガジェットを向けた。

「暴走するなら!?!とことん暴走しなさい!?!」

迫りくるガジェット群。ティアナ達が止めようとした瞬間。リインフォースが前に出た。

「夜天の雷!?!」

リインフォースの夜天の雷がガジェットを一掃した。リインフォースの行動に驚いているシャーリー。

(・・・勝った・・・私は生まれ変わった・・・守護騎士に・・・闇の書と決別したんだ!?!!)

「みんな!一斉攻撃!?!リインフォース曹長!?!フォーメーション
シルバー!?!」

「わかった!?!」

ティアナの指示でフォーメーションに入るシルバーキャッスル。スバル、リュウケン、十郎太、エリオが先行しガジェットを撃破そして余ったガジェットをティアナ、トップジョイ、GZが一掃した。

そしてエリス、リインフォースがとどめに入りガジェットを完全に消し飛ばした。

「くそおおおおおおおおおおお！！！！！」

クアットロが撤退するとシャーリーがリインフォースのデータを調べた。すると基礎プログラム、暴走プログラム、自己修復プログラムの全てが正常値を示していた。つまりリインフォースは元の夜天の書に完全に戻ったのだ。

「すごい！どうして直ったんだろ！！！」

スバルが喜んでいるとティアナが。

「多分・・・過去に取り込んだマグナムエース達の魂が共鳴して危険なプログラムを焼ききったんじゃないの？」

「それ本当？」

期待満々のスバルだがティアナは顔を顰めた。本当は分かっているみたいだ。そして根暗モード全開のシャーリー。

「私・・・デバースマスターなのに・・・」

自分がプログラムを直せなかったのが悔しいらしい。検査が終わリインフォースは起き上がるとシルバーキャッスルの元へ駆け寄った。祝福するシルバーキャッスル。

「おめでとう！！！」

「やったな!!」

「みんな・・・ありがとう」

リインフォースはシルバーキャッスルに向かって笑顔を向けた。そして妹とも呼べるリインが飛んできた。

「お姉さん!! やったです!!」

「ありがとう。リイン・・・ユニゾンデバイスではなくなったが私はこれから守護騎士として生きてみようと思う。そして私自身のリガー魂にしたがって」

第二十二話 もう一人の守護騎士（後書き）

ホワイ？何故かミーの周りで変なことが起きるヨ。え？ユーはナンバーズの。そんな事しなくてもミーは相手になるネ！ミーと勝負ヨ！次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 熱烈のストーリートバスケ

正々堂々！試合開始！

第二十三話 熱烈のストリートバスケ

第二十三話 熱烈のストリートバスケ

マグナムエース達シルバーキャッスルは補給のために近くの町にボ
ーシップを停めていた。

「じゃあみんな行くぞ」

マグナムエースたちはくじ引きをしていた。ヴィヴィオやシャーリ
ーのように非戦闘員も居るため留守番組と買出し組の二つに分かれ
た。

買出し組

マグナムエース&スバル、ウインディ、ティアナ、キャロ、リュウ
ケン、ブルアーマー、エリス、リイン

留守番組

十郎太、トップジョイ、GZ、エリオ、リインフォース、ヴィヴィ
オ、ヴァイス、シャーリー

「何とかバランスよく分かれたわね」

戦力としては十郎太とGZ、リインフォースが居れば万が一があっ
ても大丈夫だと思いうティアナ。

「それじゃあ行ってきますー!!」

「お土産楽しみにしてるヨー!!」

スバルたちを見送ったトップジョイ。そして留守番組もやるべきことがあった。

「それじゃあみなさん！ボースリップ号の整備に入りましょう！！」

「「「おおー！！」」」

留守番といってもただ留守番していれば良いというものじゃない。留守番組はボースリップ号の点検という仕事分担だった。シャーリーの号令で担当箇所が振られる。

「それじゃあ十郎太さんとヴァイス陸曹はエンジン部を」

「あい分かった」

「了々解」

十郎太とヴァイスがエンジン部に向かう。

「GZさんとヴィヴィオは私とリーダーチェック」

「分かった」

「うん！」

GZと一緒にのがうれしいのか張り切るヴィヴィオ。

「エリオ君とトップジョイさんとリインフォースさんは備品の点検」

「OKネ」

「わかりました」

「わかった」

「はいみなさんががんばりましょう！」

留守番もいろいろある。万が一の点検や備品のチェック護衛などほんの些細なことでも取り逃がしてはならない。

「へえ、これがボーシップ号か・・・」

ボーシップの外面に水色の髪の少女セインが立っていた。ちなみに今はレーダー点検中のためセインには気づいていない。

「ちょっと探らせてもらっちゃおうかな」

するとセインはディープダイバーでボーシップの表面を潜り抜けた。

「ええっとオイル缶が40缶と食料がもって三日分と・・・」

エリオ達が倉庫のチェックをしている。そして足りないパーツを書き始めた。

「後は予備のパーツと洗面具ネ!!」

「飲料水も補充が必要だな」

トップジョイとリインフォースが物資の整理が終わらせた。

「この後はどうします?」

「みんなの手伝いに行くネ!!」

「そうだな」

エリオ、トップジョイ、リインフォースはエンジン部に居る十郎太達も手伝いに行った。

その頃セインはボーシップ号の中を観察していた。

「へえ、これがボーシップ号・・・意外に広いね」

などに見物しているとトップジョイ達を見かけたエンジンルームで十郎太達の手伝いに向かっているようだ。

「あのお調子者にちよつかいでも出してみようかな」

セインはお調子者と判断したトップジョイにちよつとした嫌がらせを思いついた。

「おいトップジョイ。その配線繋いでくれ」

「OKネ」

トップジョイがヴァイスの指示で配線の接続に入った。その様子を見ていたセインは。

「うしし。あの配線にちよつと細工したのよねー繋いだ瞬間100万ボルトの電流が流れるようにして」

セインはこれでリーガーが一人減るそう思ったその時。

「トップジョイそれ逆だぞ!!」

「「え?」」

トップジョイとセインの声がはもった瞬間。セインに100万ボルトが逆流した。

「うぎゃあああああああああ!!」

「あれ?なんか声がしたような」

とりあえず配線を繋ぎなおして作業に取り掛かるヴァイス。一方天井に潜んでいたセインは黒焦げになっていた。

「トップジョイ殺す!!」

次にセインが仕掛けたのはデーパーダイバーを利用した爆撃だった。

トップジョイの頭上を捉えた瞬間。

「む!!」

十郎太が天井にムテンソードを突き刺した。ムテンソードはセインの顔ギリギリに刺さった。

「ワット? どうしたネ十郎太?」

「うむ!! 曲者が紛れ込んだと思ったのだが逃したようだ」

十郎太はそのままムテンソードを収めた。

「ガタガタ」

突然の奇襲に驚いているセイン。

「おのれ!! トップジョイ!!」

奇襲したのは十郎太なのだが何故か怒りの矛先がトップジョイにいつている。

「とりあえずあの剣道リーガーが居ないところを狙うしかないわね」

十郎太達と別れるとトップジョイはいったんシャワールームに入った洗淨するつमोरいようだ。だがそこに再びセインが現れた。

「今度こそ! 今度こそ!!」

トップジョイがシャワーの蛇口を捻るとそこから水ではなくオイル

が流れてきた。

「うししししどうだ!!」

やり方が段々チャチになってきたセイン。すると。

「オウ!! 間接パーツの動きが良くなったネ!!」

喜んでいるトップジョイにずっとこけるしかないセイン。

「おのれトップジョイ!!!!!!」

「・・・お主何をやっているでござるか？」

「へ？」

セインが振り向くとそこにはトップジョイを除く留守番組全員が居た。

「き! 貴様らなぜ私のいる場所が分かった!？」

「いやあれだけ騒がれるとな」

ウンウンと首を縦に振る留守番組。見つかった理由は簡単。リーダーが直ったからだ。我を忘れてトップジョイに嫌がらせをするということに集中していたセインはうっかりしていた。

「くっそ!! トップジョイ!!」

自らの失敗もトップジョイのせいにするらしい。

「そんなにトップジョイのことが嫌いなら試合をすればいいのではないか？」

と十郎太に言われるがまさにセインが連れてこられたのは森に併設されたバスケットフィールドだった。

「ルールはフルコート使用の1 on 1・・・先にゴールしたほうが勝ちでござる」

「OKネ」

「うん!!」

十郎太のジャンプボールにトップジョイとセインが跳んだ。

「取ったネ!!」

ジャンプボールを手にしたのはトップジョイだった。そのままドリブルでゴールを目指すが生い茂った木々が障害物になっている。

「ヘイ!!」

トップジョイは木々にボールを投げるとリフレクトショットでゴールに近づいた。

「なにあれ!?! あんなのありなんだ!?!」

トップジョイの戦法に目を丸くするセイン。トップジョイがボールをキャッチしようとしたその瞬間。

「IS 起動ディープダイバー!!!!」

セインがディープダイバーで木々をすり抜けるとトップジョイの取ろうとしていたボールをキャッチした。

「取り♪」

セインはそのままドリブルに移るとトップジョイのようにリフレクトショットでゴールに近づいた。そしてディープダイバーを駆使し障害物をすり抜けた。

「やるネ!!!」

トップジョイは持ち前のジャンプでセインの取ろうとしているボールをキャッチした。両者一步も引かない。

「すげえ気迫だ」

「譲る気なしですね」

ヴァイスとエリオはトップジョイとセインのプレーを見てそう感じていた。そして両者からはバスケットを楽しむという表情が見受けられた。トップジョイがセインのボールを取るとセインがトップジョイをセーブし、セインが攻めるとトップジョイがセーブした。両者の技と技のぶつかり合いになった。

「は!!!」

セインがトップジョイからボールを奪い取るとディープダイバーを

「ギャラクティカペガサスシュート！」

トップジョイのロングシュートが繰り出された。そのシュートはその名の通り天馬のようなシュートだった。

「あっ！！」

トップジョイのシュートが入った同時に試合が終了する。セインはトップジョイのシュートに見とれていた。そのシュートは天馬がかけ抜いていったからだだった。ぼけっとしているセインにトップジョイが歩み寄った。

「え？なに？」

「ナイスプレーネ！ミーとっても楽しかったヨ！！」

セインの健闘をたたえるトップジョイは手を差し出した。セインも思わず握手してしまうが宣言した。

「次は私が勝たせてもらうからね」

「OK！望むとこヨ！！」

つと再戦を誓い合い連絡先を交換しているトップジョイとセイン。そしてセインは去っていった。

「まった来るネ」

等と手を振って見送るトップジョイだが。

「良いんですか？ あれ」

「こちらに害も無さそうだし良いだろう」

つとGZが無理やり納得していた。

第二十三話 熱烈のストリートバスケット（後書き）

キアイリユウケン・・・お前が現れてから、あたしは負けばかりだ・
・悔しい！！戦闘機人のあたしが！！何？アイアンリーガーとして戦え？

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 拳に誓って
正々堂々！試合開始！

第二十四話 拳に誓って

第二十四話 拳に誓って

「のやろう!!」

ノーヴェはひたすらサンドバックを殴っていた。その表情には鬼気迫るものがあつた。

「どうしたんスカあれ？」

「見ての通り」

ノーヴェが殴っているサンドバックにはキアイリユウケンのプリントがされていた。

「なんであいつに拘ってんだ？」

「悔しいからじゃないの？」

ノーヴェの戦績は3戦中引分けで終わっているが。

一回戦 助けられる

二回戦 攻撃が効かない

三回戦 地割れに落とされた

（くっそ!! あたしの負けじゃねえか!!!!）

リュウケンのプリントされているサンドバックを叩き壊すノーヴェ。

「・・・勝ちたい・・・あいつに!!」

今ノーヴェを動かしているのはキアイリュウケンに勝ちたいという執念だけだった。

「手分けなのよこっちも大変で」

「オウそれは困ったネ!」

トップジョイと通信しているセイン。その後セインとトップジョイは話し友達となり時々会話している。もちろんシルバーキャッスルには許可をもらっている。

「ねえそっちのリュウケンと一回試合させてくんない? そうすればあいつも納得すると思うから」

「んゝマグナムたちに聞いてみないとダメヨ」

「そっかじゃまたね」

そう言ってセインは通信端末を切ると後ろから凄まじいさつきを感じた。油の切れたロボットのように振り向くとそこにはノーヴェがいた。

「ノ・ノーヴェちゃん?」

「リュウケんと戦えるの?」

「へ？」

ノーヴェはセインの胸倉を掴んで言った。

「リュウケンと戦えるのか？って聞いてんだ！！！」

ノーヴェの剣幕に押されるセイン。

「あ、あんたなんでそんなにリュウケンに拘るの？」

「あんなお行儀のいいスポーツ用の奴になんで戦闘用のあたしが負けんだよ！！！」

ノーヴェの瞳から一筋の雫が流れ落ちた。

「と言う訳であの子の目を覚まさせてあげて」

「わかった。この試合受ける」

通信端末の先のティアナが答えた。

「ただしルールはこっちで決めさせてもらうそれが条件」

「リュウケンと戦えるならなんだっていい！！！」

「なら明日このポイントに！」

ティアナはノーヴェにポイントを指定し通信を切った。

「ティアそんなこと勝手に決めちゃ」

「ごめん。でもあの子の目のあたしに似てたから」

翌日

シルバーキャッスルは指定したポイントで待っていた。そして時間通りノーヴェ、セインウエンデイが到着した。

「時間通りね・・・」

「さっさとはじめようぜ!!」

殺気立つノーヴェだが。

「まずこっちの条件を聞きなさい・・・まず第一にあなたは戦闘機人の名を捨ててアイアンリーガーとして戦うこと」

「なんだと？」

思わぬことに驚くナンバーズ。

「二つ目。これは階級を合わせた格闘技で戦うリュウケンの場合。あなたとはパワーも体格も違いすぎる。リュウケンのほうが遥かに大きいだからリュウケンのパワーをあなたと同じにする」

「ふざけんじゃねえ!!! そのままでも勝ってやる!!!」

「こっちのルールを飲んでもらわないとリュウケンと試合をさせることは出来ない」

「なめんじゃねえ!!!」

「・・・別になめてないわよ・・・言ってもわからない?・・・同じ条件でもリュウケンのほう強いって言ってんのよ!!!!」

あくまでも冷静に言うティアナ。その言葉にノーヴェは洩々了承した。

「よーしもっと引っ張れ!!!」

マグナムエースの号令でリングが作られた。ティアナはリュウケンの腕にスバルのリボルバーナックルと同じくらいの硬度のグローブを装着していた。

「ティアナ・・・この試合ってどうやるの?」

「まあ簡単に言うなら3分殴り合って1分休むそして3分殴るボクシングと同じよしこれで出来た」

リュウケンの腕にはフィンガーグローブが装着された。シャーリーたちはノーヴェのフルパワーを計算し完了した。

「こっちも出来ました」

「シャーリーさん！リュウケンの減量をお願いします。フェアになるようにセインやウエンディも手伝って」

「わかった」

「了解ッス」

「回路の一部を閉鎖すればいいですかね」

リュウケンの胸を開きリュウケンの回路を閉鎖した。徐々に身体が重くなるのを感じるリュウケン。そして試合の準備は完了した。ジヤッジはウエンディが務めることになった。セコンドはリュウケンにはティアナ、ノーヴェにはGZが付いた。

「赤コーナー！シルバーキャッスル所属！キアイ！リュウケン！！」

「青コーナー！ナンバーズ所属！ノーヴェ！！」

マグナムエースがゴングを鳴らすとノーヴェがリュウケンに襲い掛かった。だがリュウケンは回避運動をとる。

「ノーヴェ！落ち着け！そんな動きじゃ！リュウケンを捕らえられないぞ！！」

「リュウケン！怖気づかないの！！」

それぞれのセコンドの言葉に耳を貸さない両者。

「おりゃあああああああ！！！！」

ノーヴェの攻撃がリュウケンに襲い掛かるがリュウケンは必死に回避する。たちまち3分が経過しゴングがなった。

「前半はともかく後半は良かったぞ。何懷に入れば身軽なお前が有利だ」

GZの言葉をあまり聴こうとしないノーヴェ。

「リュウケン！どうしたの！？遠慮しないで殴りなさい！！」

再びゴングが鳴るとノーヴェが突進してきた。またしても回避行動をとるリュウケン。

「リュウケン！逃げないの！戦いなさい！」

「僕！殴りたくないよ！」

その言葉に全員ずっこけざるをえない。

「殴らなきゃ試合にならないでしょ！！」

「はああああああ！！！」

ノーヴェがジェットエッジでリュウケンに強襲するとリュウケンに一撃がくわえられた。倒れこむリュウケン。

「1. 2. 3. . . .」

ウェンディのカウントが開始されるとティアナは必死にリュウケンを説得した。

「リュウケン！！あんたはノーヴェに戦う条件を合わせた！！だから！ノーヴェのために精一杯殴りなさい！！！！それが礼儀よ！！！！」

「ティ・・・アナ」

その瞬間リュウケンの額に『心』の文字が浮かび上がった。

「8・9！！！！」

9カウントでリュウケンは立ち上がった。

「わかった・・・ティアナ」

「ファイト！」

ウエンディの合図にリュウケンは戦闘体制にはいるとノーヴェが襲い掛かった。

「おりゃあああああああ！！！！！！」

ノーヴェがリュウケンに襲いかかろうとした瞬間。

「竜鉄拳！！！！」

「ぐふはっ！！！！」

カウンターでノーヴェの顔面に竜鉄拳がクリーンヒットした。ふらつくノーヴェ。

（なに？今のパンチ・・・本当にあたしの力しか出せていないの！？）

自分のパワーが破壊力に変換された事に驚くノーヴェ。

「竜神脚！！」

「があああ！！！！」

ノーヴェの腹部に竜神脚がヒットし倒れこむノーヴェ。

「1. 2. 3. 4」

「くっそ！！」

立ち上がるノーヴェ。そして再びリュウケンに襲い掛かる。

「おりゃああ！！！！」

「はああああ！！！！」

ノーヴェの拳とリュウケンの拳が交差し凄まじい攻防戦が繰り広げられる。お互いの力ではなく技と技のぶつかり合いになった。再び竜鉄拳がノーヴェにヒットしノーヴェは倒れこむ。

「凄い攻防です」

「格闘技ってこんなに迫力があるなんて・・・」

エリオとキャロはリュウケンとノーヴェの一步も引かない攻防に圧倒されていた。

「ぶぐは！」

リュウケンの一撃に再び倒れこむノーヴェ。

「くっ1. 2. 3. 4!!」

「立てノーヴェ！お前のリュウケンに対する思いはそんな生易しいものだったのか！？そんな簡単にあきらめていいのか！？」

GZの言葉とウエンディのカウントが繰り返られるがノーヴェはダメージの蓄積された身体で立ち上がった。

「・・・きやがれ！ポンコツ野郎！！」

「はあああああ！！！！」

ノーヴェの攻撃はリュウケンに降り注がれるがリュウケンも負けじと拳を繰り出す。ダメージはお互いに互角だったがノーヴェのほうが足に来ていた。

「竜鉄拳！！」

「がはっ！！」

再び竜鉄拳に沈むノーヴェ。もう立てない誰もがそう思っていたが。

「ああ・・・ぐあ・・・」

ノーヴェは立ち上がろうとしている。その光景を見ている全員は驚いていた。それは闘争心なのかそれとも執念か。

「やめなさい！ノーヴェ！！これ以上やったら身体がバラバラになるわよ！！GZ！タオルを！！！」

「余計な事を言うな！！今の奴はリーガーだ！！そんなことを分かっているながらも立ち上がろうとしているんだ！！！」

GZの言葉に答えるようにノーヴェは立ち上がった。

（立ち上がった・・・もう奴の身体は限界を超えているはずだ）

「・・・やるなりウケン・・・けどあたしはまだ沈まない！！あたしは！！勝つ！！！！！」

ノーヴェの瞳が輝いたその時ノーヴェが構えた。

「あの構えは！！！」

ティアナ達はノーヴェの構えに驚愕した。その構えはリュウケンと同じだった。

（あいつはあたしと同じ力で何度もこの技をやったんだ・・・だったらあたしにできねえはずがねえ！！！！）

ノーヴェの拳が燃え上がった。

「はあああああああああああああああああああああああああ

ああああああああ!!!!」

「はああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

「竜ううう鉄!!けえん!!!!」

二人の目が輝き渾身の竜鉄拳が顔面に交差し同時に沈んだ。

「う・・・あ・・・」

「あ・・・ああ・・・」

同時に倒れるノーヴェとリュウケン。

「1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10」

ウェンディのカウントが終わると試合終了した。お互いの健闘を祝福するリーガー達。

しばらくしてノーヴェが目を覚ますと拳を叩き付けていた。

「くそ!くそ!!!!」

拳を地面に叩きつけながら悔しがるノーヴェ。その顔には涙が浮か

び上がっていた。

「泣いてるの？」

「うるせえ!!!」

ティアナの指摘にノーヴェは顔を隠す。だがティアナは。

「・・・悔しいでしょ」

「うるせえって言ってんだよ!! 戦うことしかできねえあたしがスポーツ野郎を倒せないなんて!!」

ティアナに掴みかかるノーヴェだが。

「戦う以外の事もできるじゃない・・・」

「え・・・」

「本当に戦うことしかできないなら・・・そうやって泣いたり悔しがったりする事なんてできないんだよ・・・」

ティアナのその言葉に虚を付かれたような顔をするノーヴェ。するとノーヴェはリュウケンを睨み付けると宣言した。

「キアイリュウケン!! 次は白黒はっきり付けてやる!!!! そしてあたしが勝つ!!! 正々堂々勝負だ!!!」

「うん! 僕も負けない!!!」

リュウケンとノーヴェは再戦を誓いその場を別れた。

「ティアナ殿何ゆえこのような事を？」

「十郎太・・・言っただでしょ。あの子あたしに似てるって・・・」

「そうか」

十郎太も再戦を誓った剣士に対し腕を磨くことを考えた。

「リュウケン。どうだったあの子」

「わからないけど・・・あの子はきつと強くなれそうな気がする。それに傷つけること以外のことにも気づけそうな気がする」

そう言うときリュウケンはノーヴェの背中を見送った。

第二十四話 拳に誓って（後書き）

そういえばマグナムエース達が着てから私達変わったな。それにしてもシルバーキャッスルって一番強い誰なんだろう？

次回！疾風！アイアンリリーガーStrikers シルバーキャッスル最強は誰だ！？

正々堂々！試合開始！

第二十五話 シルバーキャッスル最強は誰だ!?

きっかけはヴィヴィオの些細な一言だった。

「シルバーキャッスルって誰が一番強いのか?」

第二十五話 シルバーキャッスル最強は誰だ!?

ボーシッポ定着中スバル達はシルバーキャッスルで誰が一番最強なのか考えていた。

スバルの意見

「やっぱりマグナムエースじゃないかな。シルバーキャッスルが強くなったのもマグナムエースが入ってからだったし、リーダーシッポも取れてるし」

ティアナの意見

「けどそれを言うなら実際加入したのはウインディのほうが先じゃない?」

キャロの意見

「単純なパワーならブルアーマーさんだと思います」

エリオの意見

「戦闘だったら十郎太さんじゃないですか? AMF発生装置を破壊したの十郎太さんですし」

ヴァイスの意見

「自分の特性に気づいた途端強くなったりユウケンも強いんじゃない

いのか？」

エリスの意見

「士気を上げるならムードメーカーのトップジョイの存在は捨てられない」

ヴィヴィオの意見

「GZだもん！誰がなんて言ってもGZだもん！！」

全員が試行錯誤だった。因みにリーガーたちは買出しに行っているためマグナムエース以外誰もいないがマグナムエースは元の身体に戻り作業をしていた。

「まずみんなの力の源が何かってことですよね」

シャーリーの言葉にみんな頷いた。そしてふとスバルがティアナに言った。

「ねえティア？」

「どうしたの？」

「ティアってどうやって44ソニック投げてんの？」

マグナムエース同様に44ソニックを投げることの出来るティアナ。44ソニックの投げ方をマグナムエースから教えてもらったが考えている。

「ね・・・ティア？」

あまりに深く考え込んでいるティアナにスバルが止める。

「ごめん。どうやって投げてるか全然わかんない！」

ティアナの言葉に汗のメンバーそしてティアナの結論。

「理屈で投げられる球じゃないのよあれ・・・なんていうか自然と身体から湧いてくるって言うかなんていうか・・・」

こうなれば直接聞いてみることにした。

十郎太の場合 報告者エリオ

「某たちの力の源？」

「はい！参考にしてみたくなってそもそも十郎太さんとシルバーキヤッスルの出会いってなんだったんですか？」

「あの頃の某の目的はセンサーを越えた心を掴むことだった。マグナムエースの44ソニックと勝負したときマグナムエースのメッセージが44ソニックから流れた。きっかけはそれでござる」

「そのメッセージってなんですか？」

「一人の修行は極めた」

ウインディの場合 報告者ティアナ

「シルバーキヤッスルに入った理由？」

「うん。前から気になってたんだけどウインディは昔ダークプリンスのストライカーだったんだよね」

「ああ、今は変わったがああの頃のダークは酷かった。俺はサッカーがしたかったのによ。止めたときにマグナムエースに言われたんだ。正直に生きろってな」

「なるほどね」

ブルアーマーの場合 報告者リインフォース

「俺も昔君と一緒に暴走プログラムがあったんだ」

「なんだと？」

「けどマグナムエースが言ったんだ。俺の目はリーガーとしてまだ戦えるって。あいつがまた戦う決意をさせてくれたんだ」

トップジョイの場合 報告者エリス

「ミーは元々ダークのスパイとしてシルバーに入ったネ」

「そうなの？」

「そうネ！！マグナムはミーをどんな時でも迎え入れてくれたネ！！」

GZの場合 報告者ヴィヴィオ

「俺がシルバーキャッスルに入った理由はマグナムエースに誘われたんだ」

「そうなんだ！GZ遊ぼう！！」

「おい！放してくれ！」

リュウケンの場合 報告者キャロ

「僕は最初からシルバーキャッスルに居たんだ」

「そうだったんですか？」

「僕はサッカーリーグーとして発注されただけど手違いで空手リーグーとして作られたんだ。けどマグナムエースたちが入ってくれたおかげで僕は本当の僕に気づけたんだ」

全員が食堂に集まると調べた結果が報告された。

「スバルが言った通り全員にマグナムエースがかかわってるわね」

ティアナの考察はこうだった。

「けどマグナムエースが特別に強いってわけでもなさそうよ」

シャーリーは以前見たビジュアルディスクのことを考えていた。そして次の試合のビジュアルディスクに目を通した。試合はマグナムエース不在でシルバーキャッスルのメンバーが試合をしている場面だったが全員疑問に思ったことがある。

「なんでピッチャーマウンドが空いているの？」

単純な性能だけならシルキーたちではなくウインディやGZがピッチャーをやったほうが良いと思っていたが。リーグー達の目は何か

を待っているようだった。そしてシルキーがラフプレーでやられたときメンバーチェンジが起きた。それはマグナムエースだった。マグナムエースがピッチャーマウンドに立つと44ソニックではなく通常球を投げた。その顔は44ソニック・オンファイヤーを連投していた頃とは違っていた。打たれるがトップジョイの守備でアウトさらにゲッツーもとれた。

「みんなこれを待ってたんじゃない」

「え？」

するとスバルの頭にマグナムエースの言葉が再生された。

（俺にはこんなに頼もしい仲間が居る！どうしてそのことに気づかなかったんだ）

またしても続く攻防だがメンバーにはとあるものが見えていた。リガー達の絆とそして目には見えないマグナムエースに集まるエネルギーを。そして新たな輝きが生まれた。

「あれは！！」

マグナムエースが投げた球は44スクエア。かつて高町なのはにむかって投げた技だった。そしてそのまま試合終了になりシルバーキヤッスルは勝利を収めた。

「なんか・・・わかった気がする」

スバルの意見はこれだった。

「シルバーキャッスルは誰か一人で強いんじゃない。みんなで強いんだ……。ちよつと言葉じゃ説明しにくいけど」

「それあたしも思った。みんなの一途な思いが力になってく」

「よし!! 私たちもみんなで強くなろう!!!!」

スバルの言葉に再び一致団結するチームシルバーキャッスルだった。

第二十五話 シルバーキャッスル最強は誰だ！？（後書き）

マグナムエース。お前たちの言う心とは一体なんなのだ？姉は知りたいお前たちの心を

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 熱烈の大野球
正々堂々！試合開始！

第二十六話 熱烈の大野球

スカリエツティアジトにて。ナンバーズの一部のメンバーに変化が置き始めていた。

「すううううううう」

セインがトップジョイとの試合を思いながらバスケットに向かっていた。その手にはバスケットボールが抱えられていた。するとセインから未知の力があふれ出した。

「ギャラクティカペガサスシュート!!」

セインのロングシュートが天馬を描いた。そのままゴールするシュート。

「できた・・・私にも・・・」

セインは自分に何か変化が起こったことを感じていた。

「はああああああああ」

ノーヴェはサンドバッグに向かって構えた。すると未知の力があふれ出した。

「竜ううう鉄拳!!!」

ノーヴェの竜鉄拳がサンドバッグを粉碎した。

「……まだだ……もつと磨かねえと」

ノーヴェは再び竜鉄拳の構えに入った。

チンクはセインとノーヴェに起こったことについて考えていた。そして失敗作であるエリスの映像を見ていた。

『シャイニングスマッシュ!!』

出来損ないのエリスのテクノロジーを跳躍したエネルギーにチンクは啞然としていた。

「……何故だ……何故やつらは調整もされずに能力が上がった……進化したとでもいうのか……」

エリス、セイン、ノーヴェ。シルバーキャッスルに係わった者の進化にチンクは悩んでいた。そしてマグナムエースに対する拘りも。

「エリスの情報では奴はタイプゼロセカンドにとりついている……奴はタイプゼロセカンドにも進化をもたらすのか……姉は知りた……い……シルバーキャッスルのことを」

チンクは右目が痛んだ。ある騎士と戦ったときの戒めとして残しているものだった。そしてチンクの出した結論は。

第二十六話 熱烈の大野球

チンクはボーシップに潜入するとリーガーたちの眠っている充電ベツドの部屋を通るが

「ここではないらしいな」

そして倉庫のような場所に隠されていたあるものを見つけた。

「・・・あった」

見つけたのはマグナムエースの身体だった。

翌日

「大変ネ〜〜！！」

トップジョイの絶叫にリーガー＋リインフォースが倉庫に集まった。

「マグナムの身体が盗まれちゃったネ！！」

「なに！？なんでマグナムエースの身体を？」

マグナムエースの身体があった場所には一枚のディスクが置かれていた。

「なんだろうこれ」

リュウケンがディスクを再生するとそこには隻眼の少女の姿があった。

「チンク!!」

『シルバーキャッスル。マグナムエースの身体は預かった・・・返して欲しければ私と野球で勝負しろ・・・ポイントはここだ待っている』

チンクの挑戦状に考えるリーガー達。

「どうする？」

「罠かもしれない」

「けどマグナムの身体を放っておくわけにもいかない」

「この挑戦・・・受けよう!!」

スバルの号令にリーガー達は決意するが。

「あれ？あんたたちどうしたの？」

ティアナに出くわしてしまった。

「い!!いや!ちょっと倉庫整理!!」

「九人そろって？」

「ティ・・・ティアこそどうしたの？」

「ちょっとマグナムエースの身体の定期点検をしようと思って」

「ああ!! それなら俺たちがやっておくから!!..! なあみんな!!..!」
気まずく頷くリーガー達。

「そう?じゃあよろしく」

そのままティアナは倉庫を後にした。

「あ、あせった」

一方スカリエツティアジトではチンクがシルバーキャッスルの試合に向けてガジェットを選別しているが。

「水臭いよチンク姉」

「ノーヴェ?」

「シルバーキャッスルと試合するんだろ・・・あたしも行くよ」

「あたしも」

「セイン・・・」

「もうちょっと試合してみたい・・・」

「あたしたちも忘れないで欲しいッス」

ウェンディやトーレたちも着ていた。チンクはしぶしぶ参加を認め

た。

シルバーキャッスルのメンバーは指定されたポイントに到着した。水面の張られたグラウンド。因みにメンバーはマグナムエース&スバル、ウインディ、ブルアーマー、リュウケン、十郎太、トップジヨイ、GZ、エリス、リインフォースだった。

「ようこそ・・・シルバーキャッスルの皆さん」

ウインディがシルバーキャッスルを迎え入れるがチンクは混乱していた。

「・・・こいつらは一体なんだ？タイプもバラバラ。本当にこんな奴らで野球をする気か？」

サッカーや空手、はたまた戦闘機人やユニゾンデバイスでチーム編成しているシルバーキャッスルにチンクは驚いていた。

「プレーボール!!」

それぞれの守備位置についたシルバーキャッスル。マグナムエースは投球フォームに入った。

「44 おおソニック!!」

マグナムエースの44ソニックが投げられるがパワーダウンしてしまう。

「ふん!!」

ナンバーズ第一打者のウェンディが44ソニックを捕らえそのままの勢いに乗りバットをマグナムエースに投げつけた。

「ぐあああああああああ!!!!」

バットが直撃するマグナムエース。

「なにをするんだ!!」

「手が滑ったんすよ」

ブルーアーマールの抗議に悪びれないウェンディはそのままアウトになるのだが用は済んだといった顔でバッターボックスを去っていた。そのウェンディをノーヴェが咎めた。

「なんだよ今のプレー・・・今回は野球しに来たんだぞ」

「シルバーキャッスルを潰すのもあたしらの仕事ッス。もしかして本気で野球しに着たんすか？」

気に入らないといった表情のノーヴェはバッターボックスに入った。

（見せてやるぜ・・・アイアンリーガー、ノーヴェをな！！）

「44ソニック！！」

ノーヴェに向かって44ソニックを投げるマグナムエースだがノーヴェは違和感を感じた。

（なんだ？球威が落ちてやがる）

ノーヴェはそのままヒットにすると1塁まで走った。レフトのエリスがボールを拾うとファーストのGZに向かって投球フォームに入った。

「シャイニングスマッシュ！！」

エリスの魔球がGZに向かって投げられるとノーヴェは走った。

「ブレイクライナー！！」

ノーヴェのブレイクライナーとGZがシャイニングスマッシュをキヤッチするタイミングが判定される。

『セーフ！！』

「やるなノーヴェ」

「今のあたしをあいつ等と一緒にするな・・・」

ノーヴェの姿を見ていたウェンディは。

「なに真面目に野球やってるんスカね」

その頃

（大丈夫か？スバル）

（けどどうして44ソニックが）

（恐らくこのグラウンドからだろう水が張り巡らされている。44ソニックのエネルギーを吸収してしまうのかもしれない）

そう言うときマグナムエースは3番バッターのセインに44ソニックを投げるがセインも流し打ちをし1アウト1，2塁になった。そしてオットーの打球が繰り広げられるとオットーのレイストームがマグナムエースを襲った。

「ぐあああああ！！！！」

そして3アウトチェンジになりシルバーキャッスルの攻撃になった。ピッチャーはチンク、キャッチャーはノーヴェだった。

「はああ！！！」

ノーヴェの投球を捕らえる一番バッターのラインフォース。だが1塁のトーレにより撃墜されてしまう。

「ぐ！」

「アウトだな・・・闇の書もたいしたこと無いな」

「私は闇の書ではない・・・リインフォースだ!!」

リインフォースはそれだけ言うとベンチに戻っていった。

「あいつら・・・ノーヴェとセイン以外ちゃんと試合をする気がねえ!!」

怒りをあらわにするウインディだが。

「ウインディ・・・ナンバーズに見せてやろう某たちの戦いを・・・」

十郎太の言葉に一致団結するシルバーキャッスル。トーレやオットー、ディエチのラフプレーに耐えながらもシルバーキャッスルは試合を続けていた。

「ライドインパルス!!」

トーレの攻撃がホームのブルーアーマーを襲うがブルーアーマーは耐え切りアウトになった。

「なんだと!?!」

「どんな時でも絶対あきらめない!それがアイアンリーガーだぜ!!」

そして5回になった。

「はぁ!!」

「ぬおおおおお!!」

ディートのツインブレイズがファーストのGZを襲うがGZはディードの攻撃を防いでいた。

「・・・なぜ貴様らは反撃しない」

「俺たちはアイアンリーガーだ!破壊には決して屈しない!!」

「く!」

GZがボールを落としていなかったためディードはアウトになった。

「ジャアアアアアアアアアアンプ!!!」

センターのトップジョイが打球を取るとサードにいるリュウケンに投げた。

「リュウケン!!」

三塁に向かってウエンディはライディングボードを起動した。

「エリアルレイブ!」

そのまま体当たりを試みるが。凄まじい音がした。

「平気だよ」

リュウケンの頑丈さに沈んでしまったウェンディ。

（そいつを倒すのはあたしなんだからな・・・負けんじゃねえぞリ
ユウケン）

闘志を燃やすノーヴェ。0対0で試合が進むに連れてラフプレーの
中でもシルバーキャッスルは闘志を燃やし戦い続ける。その光景を
見ていたチンクは混乱していた。

「何故だ・・・何故こいつらはこんな馬鹿げた野球に真剣になれる・
・・・」

バッターボックスに立つチンクに強い声が響いた。

「たとえどんな試合であろうと。力の限り俺たちは正々堂々戦う！
！それが使命だ」

「正々堂々？」

「俺たちアイアンリーガーはスポーツをするために生まれてきた。
それぞれ種類も違う俺たちだが一つだけ通じ合うものがある。それ
がスポーツマンシップだ！！それさえ忘れなければ仲間を失おうと
己がはぐれようとアイアンリーガーのプライドまでは失いはしない
！！それが俺たちの誇りだ！！アイアンリーガーの使命だ！！！！」

マグナムエースの言葉に絶句するチンク。

「お前の冷たい回路に・・・熱きオイルを注ぎ込む！！チンク！！
！この一球に俺の魂を込める！！受け取れ！！！！」

マグナムエースのボールが燃え上がった瞬間チンクはバッティングフォームに入った。

「44ソニック・オン・ファイヤー!!!!」

マグナムエースの44ソニックを超えた魔球をチンクが捕らえた瞬間。バットから赤い稲妻が走った。

「う! ああああああああああ!!!!」

その瞬間チンクの戒めの証である眼帯がひび割れた。

「なに!? これは!!」

チンクは眼帯に触れると何かを感じ取っていた。

（確かに受け取ったぞマグナムエース・・・）

（・・・これから本当の勝負だ）

攻守が変わり第一バッターは4番の十郎太だった。チンクは投球に入る。

「見切った!!」

十郎太の打球をチンクが捕らえた。俗に言うピッチャー返しになった。十郎太の打球を受け止めたチンクは再び稲妻が走り眼帯に更なるひびが入った。

（これは・・・受け取ったぞ十郎太）

十郎太はそのまま何かを伝え終わったと感じバッターボックスを去った。その後も投手戦は続きついに最終回のシルバーキャッスルの攻撃になった。これで決着がつかない場合延長戦に持ち込まれる。第一バッターはマグナムエース。

「ふん！ふん！」

マグナムエースは軽くウォーミングアップをするとバッターボックスに入った。

（チンク・・・後はお前の番だ）

するとチンクの眼が輝き身体から未知のエネルギーが溢れ出した。そして右目の眼帯が砕け散りチンクの両目が開いた。

（チンク姉が戒めを外した）

キャッチャーのノーヴェは驚いているとチンクは投球体制に入った。その姿は見るものを圧倒していた。

「ランブルデトネイター・・・ドライブ！！！」

チンクから凄まじいエネルギーを纏った投球が繰り出された。それは正しく魔球だった。

「であああああああ！！！」

マグナムエースはランブルデトネイタードライブを捕らえるがバットが振り切る前にバットが破壊されノーヴェのミットに収まった。

「これは・・・」

マグナムエースやノーヴェも驚いている。

「見たかマグナムエース・・・姉の魔球ランブルデトネイタードライブ！」

バットを持ち替えるとマグナムエースは再びバッティングフォームに入った。

「ランブルデトネイター・・・ドライブ！！！」

チンクの渾身のランブルデトネイタードライブが投げられる。

「であああああああああああああああああ！！！」

マグナムエースは渾身の力を込めてバットを振った。

「うおおおおおおおおおお！！！」

そしてランブルデトネイタードライブは大空に消えた。サヨナラホームランだった。

「なに！！！」

己の魔球が打ち砕かれたことに愕然とするチンクだが。

（ランブルデトネイタードライブ・・・すばらしい魔球だ・・・あと少しバットを振るのが遅ければ完全に俺たちの負けだ・・・）

その途端マグナムエースの持っていたバットが粉々に砕け散った。

マグナムエースたちは見事に勝利しマグナムエースの身体は返還された。

「マグナムエース・・・姉はランブデトネイタードライブを磨き続ける・・・その時はまた姉と戦ってくれるか？」

「よろこんで・・・」

マグナムエースはチンクと握手を交わした。そしてナンバーズが帰還するのを見送った。その後帰ってきたリーガーたちはとつくにバレていたティアナに全員お説教になった。

第二十六話 熱烈の大野球（後書き）

スピードそれはとてつもない武器になる。シルバーキャッスルで一番速いのはあのサッカーリガーッスね。楽しみッス・・・そいつの攻撃をどう防ぎどう倒すか。

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 本当の力
正々堂々！試合開始！

第二十七話 本当の力

「マツハウインディか・・・早そうッスね」

ウエンディがウインディのデータを見ていた。高速移動とライディングボードからの攻撃がウエンディの自慢だ。だがその攻撃は氷河地帯のマツハウインディによって破られた。

「身体のおイルの凍結でもあの速さ・・・そしてエリスが耐寒用オイルを飲んだとき」

ウエンディは自分が蹴り飛ばされた場面を見ていた。

「あれは悔しかったッスね」

そしてウエンディは決意した。

「ちよつと喧嘩売ってみるスカね・・・」

ウエンディはそのままナンバーズ基地を飛び出しボーシップまで向かった。

第二十七話 本当の力

「じゃあウインディよろしく！」

「ああ任せとけて！」

ウインディはボーシップから買出しを頼まれていた。理由は近くの

ロストログアを回収するためフォワードメンバーが出撃するため
ーガー達が留守番組になった。物資補給のため今回はウインディが
単独で買出しに行くことになった。

「ウインディ何かあったらすぐに連絡してくれよ」

「わかってるって。心配すんなよ」

そう言うウインディは出発した。その姿を遠くから見ていたウエ
ンディ。

「チャンス。マツハウインディ一人だけなら好都合っす」

するとウエンディはライディングボードを構えた。

「ふう終わった」

ウインディは買い物を済ませるとボーシップまでの帰路についたが
何かを感じ取った。

「誰だ!!」

「マツハウインディッスね？」

「お前は!!?」

「あれこの間野球やったのにもう忘れちゃったんすか？」

姿を見せたのウエンディだった。

「お前・・・ナンバーズの!!」

「マツハウインディッスね!勝負!!」

ウエンディはライディングボードを構えるとウインディに砲撃を浴びせた。

「ちい!」

買い物袋を放り出しフルパワーで走るウインディ。だがウエンディはウインディの動きを読んでいた。

「そこ!!」

「く!!」

ウエンディの砲撃をウインディは間一髪避ける。

「ちょこまかと!!」

ウエンディは砲撃が当たらないことにイラついている。

「この!!」

ウエンディのライディングボードからの光弾が繰り出されるが

「マツハスピン!!!」

ウインディのマツハスピンがウエンディの光弾を遥か彼方に蹴り飛ばした。

「ち!！」

「荒れてんじゃねえか・・・だったらアイアンリーガー流にけりをつけてみるか？」

「いいッスよ・・・」

ウインディの挑戦を受けて立つことにしたウインディ、二人はグラウンドに来ていた。1対1で対峙している。

「ルールはVゴール方式。つまり先にゴールしたほうが勝ちだ」

「OK」

今キックオフが開始された。ボールはウインディからだった。ウインディのドリブルがゴールに向かうがウインディにあっさりボールをとられてしまう。

「なに!？」

「へ!行くぜ!！」

ウインディのドリブルがウインディのゴールまで向かう。単純な足の速さだけではウインディはウインディにかなわない。するとウインディはライディングボードを起動させた。

「エリアルレイヴ!！」

「ぐあああああ!！」

「取り♪」

「甘いぜ!!」

ウエンディはエアリアルレイヴでウインディを強襲するとボールを奪取した。再びゴールを目指すウインディにボールをとられてしまう。

「へ!遅いぜ!!」

(くそ!流石に速いッス!!データ通りのはずなのに!!)

研究したデータが通用しないウエンディは混乱していた。そして考えた。

(奴がゴールを決めるなら必ずマッハスピンを繰り出すはず・・・)
だったらその軌道に立てば!!)

その瞬間ウインディはゴールポジションに入った。

「行くぜ!マッハスピン!!」

「無駄ッス!!」

データ通りウエンディはそのままマッハスピンの軌道に立つが。

「であああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

ウインディのマッハスピンの大地を飲み込んだ。データを遥かに超えたシュートにウインディは止める術が無い。グラウンドが割れウインディのゴールに向かってボールが飛ぶ。

「しまった!!」

シュートされる。そう思ったその時ノーヴェがゴールポストに立ちはだかった。

「なに!？」

「爆!! 竜うううう!! けええええん!!」

ノーヴェの爆竜拳がウインディのマッハスピンを弾き飛ばしゴールを守った。

「まだゴールじゃないぜ」

ノーヴェがそう言うのとセイン、チンクがフィールドに降り立った。

「なにしてんだよ! さっさと決めちまおうぜ!」

「ぱっつと行こう!!」

「姉はいつでもいい」

ウインディは驚いている。なぜみんながこのフィールドに着たのか。

「余計なお世話ッス・・・こいつはあたし一人でやるッス!」

「わるいけどね、相手がシルバーキャッスルならこっちも黙ってられないのよ。あいつ等の言葉を借りるなら・・・」「オイルが沸騰するってね!!」「」

セインの言葉に啞然とするウエンディ。

「で!でも!マッハウインディが「俺なら構わないぜ」え?」

ウインディの言葉に再び驚くウエンディ。

「サッカーは11人でやるスポーツだ!燃えてきたぜ!!」

ウインディのエネルギーゲージが臨界を越え始めた。

「なら俺たちも参加だ!!」

目の前に下り立つ元の身体のマグナムエース、トップジョイ、十郎太。

「お前ら!」

「あまりにも帰りが遅いからな様子を見に来たんだ」

「セインたちと試合できるなんてミーとってもハッピーネ!!」

「ウインディ・・・いくぞ」

「ああ!!!!」

するとウエンディの中にあるウインディのステータスボードが過剰

な温度の上昇を表した。

（なんスかこれ！？この異常なテンション・・・いつ爆発してもおかしくないっす！！）

「なにやってんのウエンディ！！ボーっとしない！！」

「へ！わかったっす！！」

セインの言葉にウエンディは速攻体制に入った。

「奴らはフォーメーションに入るっす！潰すッス！！」

「「おう！」」

ナンバーズのフォーメーション崩しに対しシルバーキャッスルは。

「ウインディ！！お前の好きにやれ！！」

「なに！？俺にチーム戦でスタンドプレーをやってるか？」

「俺たちは計算通りに動いているんじゃないって事をわからせてやろう！！」

「大切なのはチームワークじゃなかったのか？」

「時と場合だ！！」

「よっしゃ！！」

ウインディはフルパワーで走った。残像を生み出すウインディのスピードで翻弄されるナンバーズ。

「行くぜマッハスピン!!」

マッハスピンの体制に入るウインディだがウインディは見逃さなかった。サイドにマグナムエースが迫っていた事に。

「エリアルレイヴ!!」

ウインディからマグナムエースにパスが繰り広げられウインディのエリアルレイヴがマグナムエースを襲う瞬間ボールは反対方向へ行ってしまった。

「は! ジグザグシュート!!」

急いでボールを追いかけるウインディだがジグザグシュートが軌道を変えたその先にはマグナムエースが居た。

「な! ジグザグシュートをパスに使った!？」

マグナムエースからシュートが繰り広げられるがノーヴェの咄嗟のパンチングがシュートを防いだ。

「惜しかったな。それにしても良く分かったな」

「わかるさ。俺たちシルバーキャッスル全員」

「・・・某もだ」

「ミーもわかったネ！」

「へ！じゃあ次はもっと難しくいくぜ！！」

ウエンディは混乱していた。相手のフォーメーションがわからない。確かにデータはある。だがデータに無いありとあらゆるフォーメーションを指示しなくても繰り広げるシルバークャッスル。

（なんなんすかこいつ等は！！）

パニック状態のウエンディ。そしてウインディのコーナーキックと同時に凄まじい風がフィールドを襲った。

「十郎太！風だ！！」

「わかった！！」

マグナムエースの指示に十郎太が瞑想状態に入った。

（なにをするきっすか？）

吹き荒れる風の中十郎太はある一点を指した。

「そこだ！ウインディ！！」

「よし！！」

十郎太に指示された方向に向かってウインディがシュートしボールが上昇するとウインディは十郎太に上空まで投げられた。

「風の入り口に入った」

マグナムエースもトップジョイとウインディの元へ跳んだ。

「なにをする気だ!?!」

「まさか! この風を味方につけたのか?」

チンクの言葉にウインディ、マグナムエース、トップジョイがシュート体制に入った。

「行くぜええ!! マッハスピーン!! 大回転!!!! ミストラルボンバ
アアアアアアア!!!!」

マグナムエースがウインディの足を掴むとトップジョイごと大回転し不死鳥のシュートが繰り出された。

「エリアルレイヴ!!」

ウエンディがミストラルボンバーにエリアルレイヴを仕掛けるがシュートは揺るがずウエンディごとゴールに向かう。

「なんなんスカ! この底知れないパワーは」

ライディングボードが破壊されウエンディはボールごとゴールに叩き付けられた。倒れこむウエンディ。

「くっそ」

「けど凄かったじゃねえか! ファイトは買っぜ!」

「く！」

ウェンディはウインディから差し出された手を払いのけるとどこかに行ってしまった。

「ありゃ」

「大丈夫だ・・・あのシュートは伝わっている・・・」

「そうか？」

チンクの言葉に首をかしげるウインディ。

「ちいなんなんスカこの熱さ・・・身体動かしてないと治まんない
ッス」

ウェンディはミストラルボンバーを受けたときの感触を思い出していた。ウェンディは気づいていないその身体に熱きものが目覚めかけていることに。

第二十七話 本当の力（後書き）

剣・・・それは殺しの道具のはずその剣に心を求めるとはお前は一体・・・

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 心の剣
正々堂々！試合開始！

第二十八話 心の剣

第二十八話 心の剣

「じゃーん！当たった！！」

スバルが映画鑑賞会の団体券を見せた。

「ワオ！映画ネ！」

「このところ戦いばかりだったから一生懸命ハガキ書いて当たんだ！！」

「たまには良いかもね」

「リーダーの許可も下りたし行こうぜ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

ヴァイスは会場にボーシップを発進させた。

1時間後

目的地に到着したボーシップの中からメンバーが降りた。

（スバル。どんな映画なんだ？）

（うん！アクション映画！マグナムエースたちも映画見るのか心配だったんだけど）

（俺も映画は見るさ）

（そっか！良かった！）

「おい！スバルー！マグナム！置いてくぞ」

「わぁ待ってよブル！」

そう言いながらスバルは先に行ったブルアーマーを追った。

「へー屋外でやるんですね」

屋外映画に興味津々のエリオ。因みにリーガーたちは重量のためマグナムエースとエリス以外立ち見になった。

「ポップコーン！ジュース！アイス」

「たく！映画の時くらいまじめに映画見なさい！！」

目の前のアイスに目がハートになっているスバルの頭をはたくティアナ。マグナムエースはやれやれといった様子だ。

「おっ始まるぞ」

映画が始まるとチームシルバーキャッスルは周りの視線が痛くなった。

「んゝなんかミーたち映画より目立ってるネ」

「トップジョイ気にすんなよ。映画を楽しもうぜ」

などとたわいも無い会話が繰り広げられる。

「GZ！楽しいね！」

「ヴィヴィオ・・・映画は静かに見るんだ」

GZの指摘にヴィヴィオは口を閉じる。

「始まりました・・・」

シルバーキャッスルを見つめるデイド。

「まずは奴らのリーダー格・・・マグナムエースから・・・」

デイドはそれだけ言うとツインブレイズを構えスバルの中のマグナムエースに狙いを定めた。

「ん？」

「十郎太どうした？」

「いやなんでもない・・・！！！」

いきなり十郎太が跳びムテンソードを抜いた。

「なんだ！？」

ウインディが上を見ると一つの影がスバルに向かってくる。

「！！！」

十郎太はその影を受け止めると会場に降り立った。

「十郎太！」

「散れ！！」

ブルーアーマーが十郎太に呼びかけた瞬間十郎太は逃げるように指示した。

「く！」

「な！なにネ！！」

「ヴィヴィオ！つかまれ」

「うん！」

散り散りになりながら会場から脱出するシルバーキャッスル。会場もパニック状態になり映画上映は中止されてた。

「く・・・もう少しで・・・なら・・・あの剣道リーガーから・・・」

デイドは十郎太を追い始めた。

遮蔽物に隠れながらスバルとマグナムエースはボーシップ号に向かっていた。

（マグナムエース！これって！）

（またナンバーズの襲撃か・・・十郎太がいなかったら確実にやられていた）

（えええ！？ありがとう十郎太！！）

驚くスバルは十郎太に感謝した。

（・・・とにかくボーシップに急ごう多分みんなもそこだ！）

（うん！）

スバルとマグナムエースはボーシップまで急いだ。

「エリオ殿大丈夫か？」

「十郎太さん・・・平気です」

「良かった・・・！！」

十郎太はエリオの背後に来る気配に気づいた。

「・・・ツインブレイズ」

エリオに振り下ろされたディードのツインブレイズを十郎太は受け止めていた。

「なに？」

十郎太の防御にディードは驚きを隠せない。ディードは高速移動で十郎太の背後を取るが十郎太はまたも受け止める。

「馬鹿な・・・センサーでは捉えられないはず・・・」

自分の攻撃がかわされていることにディードは混乱していた。

「・・・お前は一体」

ディードは再び十郎太に襲い掛かるが十郎太は目を瞑りながらディードの剣を回避した。

「な！」

「・・・見切った・・・」

その一言にディードは戦意を喪失してしまう。その隙に十郎太はエリオと一緒にボーシップ号まで向かった。

夜

十郎太は昼間の一件でエリオの訓練に付き合うことになった。

「はああああああ!!」

「!!」

エリオのソニックムーヴの攻撃を十郎太は受け止めていた。そしてたちまちストラダーを叩き落とされ一本とられるエリオ。

「ま・参りました・・・」

「・・・御免」

十郎太は礼をすると休息に入った。

「十郎太さんすごいですね・・・昼間のもそうですけど・・・すごいセンサーですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

十郎太は必要以上に語ろうとしない、徐々に気まづくなるエリオ。すると十郎太が口を開いた。

「・・・某の目的はセンサーを越える心を掴むこと」

「心ですか？」

十郎太の言葉に目が点になるエリオ。

「・・・難しかったか？」

「え・えつと・・・」

「!!」

すると十郎太の目つきが変わりエリオに振り下ろされた剣を受け止めた。

「な! なんですか! ?」

エリオを襲ったのはディードだった。

「・・・見事です・・・さすが極十郎太」

「・・・エリオ殿・・・そろそろボーシップへ」

ディードの言葉に十郎太はエリオを連れて帰り支度をした。

「・・・逃げる気ですか?」

ディードの挑発とも言える言葉に十郎太は答えた。

「・・・着いてこい」

エリオとディードは訳もわからないまま十郎太の後を追った。十郎太はエリオとディードを湖まで連れて来た。

「こんな所で何をするつもりですか・・・」

ディードの言葉に十郎太はムテンソードを構えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静かな時が流れると十郎太は湖に向かって駆け出した。

「きあああああああああああ！！！！」

エリオとディードの目の前で十郎太はムテンソードを振るった。それがなにを示すのかディードとエリオはわからなかった。

「・・・・水面を良く見てみる」

「これは？」

エリオが水面を見ると水面に写っていた月が真っ二つに斬られていた。

「これがなんだと言うんですか？」

「心乱れると水面の月は斬れぬ・・・・心静まりし時・・・・水面の月斬れる・・・・これぞ水月の剣・・・・」

「私の剣に迷いなどありません」

「ではやってみろ・・・・」

十郎太の言葉にディードはツインブレイズを構え水面を斬った凄まじい水しぶきが起きるが次の瞬間ディードは驚愕した。

「・・・・馬鹿な」

確かに切れ味はいいが肝心の水面に映った月を斬ることができなかった。

「確かにお主の剣からは何も感じぬ・・・だが心の無い剣と一緒にするな」

「・・・心の無い剣？」

「今のお主の剣は某にとって脅威ではない・・・エリオ殿帰るでござる」

「は・はい！」

十郎太はそれだけ言うとディードの前から立ち去った。

「・・・心・・・剣に心が必要なのですか・・・」

「今のお主にはわからぬ・・・だがわかる時が来る・・・それに気づけばお主は新たな力を得るだろう」

十郎太のディードはそのまま沈み込んだ。

「は！」

ディードはひたすら水面の月を斬りつけた。しかし水面は波打つばかりで肝心の月が何度やっても斬れない。

「何故ですか・・・何故奴はあんなことが出来た・・・それにこの鼓動は一体」

ディードの中に何かモヤモヤしたものが生まれ始める。だがそのモヤモヤは収まらなかった。

「これは・・・まさかこれが・・・これを静めれば・・・」

ディードが己のモヤモヤを静め始める。それはかなり困難だった。静めようとすればするほど焦り逆に力んでしまう。

「・・・焦るな・・・静まれ・・・」

「・・・白くなれ」

ディードの耳にその言葉が入ったその時不思議と身体が落ち着いた。そして未知の感覚がディードに生まれた。

「・・・ツインブレイズ」

ディードがその感覚のまま水面を斬った。すると先ほどとは違い水面は割れず水面の月が斬れた。

「・・・できた・・・」

ディードは先ほどとは違い自分の内なる何かに心地よさを感じていた。

「これは・・・一体・・・」

「・・・心でいざる」

「十郎太・・・」

デイドが振り向くとそこには十郎太が立っていた。

「あなたは私に何をしたんですか？」

「何もしておらぬ・・・お主が自分の中に心を生み出した・・・それだけだ・・・」

「・・・これが・・・心・・・」

十郎太はそれだけ言うとその場から立ち去った。

「・・・十郎太」

「・・・大切なことに気づいたお主ならいずれ相手しよう」

「・・・はい・・・私はあなたに挑戦します」

デイドも十郎太への挑戦を誓い自分に芽生えた心のまま己を磨くことを誓った。

第二十八話 心の剣（後書き）

機動六課の襲撃で呼び戻された俺達。そして襲い来るナンバーズ。
何故だ！？みんなはリーガー魂に目覚めたんじゃないのか？その時
スバルが！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 友との離別
正々堂々！試合開始！

第二十九話 友との離別

マグナムエースはスバルに元の身体に戻られ甲板に呼び出された。

「どうしたんだ一体？」

「うん！実は見せたいものがあって」

そう言うとスバルはバリアジャケットを装着した。

「行くよ・・・マツハキヤリバー！」

へはい相棒！>

スバルはディバインバスターの体制に入るがどこか違っていた。

「一撃・・・必倒・・・」

スバルの身体から未知の力が溢れた。

「ライティングバスタアアアアアアアア！！！！」

スバルが放った魔法それはかつてマグナムエースが闇の書の魔法に向かって放った魔法だった。

「・・・凄いな」

マグナムエースは驚いていた。まさかスバルがライティングバスターを体得しているとは思ってなかった。

「へへ特訓したんだ」

「ああ、最高のライトニングバスターだ」

「うん。けどマグナムエースと一緒に磨いた三位一体ライトニングバスターには敵わないけど」

「三位一体？」

「うん私とマッハキャリバーとマグナムエース!!」

その真っ直ぐな目にマグナムエースはやれやれと言った表情だった。

「私ね・・・小さい頃に空港事故があってね・・・その時なのはさに助けてもらったんだ」

「そうだったのか」

「私、レスキュー志望なんだ。あの時のなのはさんみたいにたくさんの人達を助けたい。それが私の夢」

「素敵な夢じゃないか」

「うん」

その時緊急警報が鳴り響いた。

第二十九話 友との離別

「管理局が襲撃にあっている!？」

突然の知らせに驚くチームシルバーキャッスル。そして映像を見た。

「これはナンバーズ！」

「ホワイ! 何故セインたちがそんな事を!？」

襲撃しているナンバーズに疑問を隠せないシルバーキャッスル。中にはシルバーキャッスルとの戦いで変わったものも居る。それが容赦なく襲撃していることが理解できなかった。

「とにかく行くわよ！」

ボーションを起動させ機動六課に向かうシルバーキャッスル。部隊が分裂しているためそれぞれチームに分かれることになった。

一方

「ふふふ。さうでドクターの再調整を受けたみんなの様子はどうかな」

ナンバーズの操作をしているクアットロ。ナンバーズ達の一部はシルバーキャッスルとの戦いで余計な感情に目覚めてしまったため強制的に再調整を施されていた。

「まああっちでは死にぞこないもがんばってるみたいだし、目的を達成させてもらおうかな」

「うあああああああああ!!」

槍を持った男にヴィータが撃墜されてしまった。すると駆けつけた十郎太がヴィータを受け止めた。

「何奴だ!! この極十郎太が相手いたす!!」

すると十郎太の背後一人の男の姿があった。

「貴様が極十郎太か・・・なるほど・・・ユニゾン状態じゃないと戦えなさそうだな」

「お主がヴィータ殿を・・・許せん」

男は槍を構え十郎太はムテンソードを構えた。

「きあああああああああああああ!!」

十郎太が槍の男に向かっていった。

「レイストーム・・・」

オットーのレイストームがシャルとザフィーラを襲う。

「ぐおおおお!!!!」

「きゃああああああああ!!」

オットーは再びレイストームを放つと一人のリーガーが受け止めた。

「どおりゃああああああああ!!」

「「ブルアーマー(さん)!!」」

するとブルアーマーの背後に気配を感じた。デイドだった。

「・・・ツインブレイズ」

デイドのツインブレイズが繰り出されるときリュウケンが追いついた。

「なに？」

「平気だよ」

デイドとオットーはリュウケンとブルアーマーに攻撃を仕掛けた。

「ホワイ!セインどうしちゃったネ!!?」

「なによあんた馴れ馴れしい」

セインはトップジョイを軽蔑の眼差しで見た。

「じゃあねガラクタ」

「セイン！」

セインはそれだけ言うのとディープダイバーで撤退した。

「スローターアームズ！！」

「ライドインパルス！！」

「く！」

「ううう！！」

エリスとリインフォースがセツテとトーレの攻撃を受け止めた。

「ほう出来損ないのわりにやるな」

「私はアイアンリーガーだ！！！」

「闇の書は余計な感情を持ったようですね」

「貴様にはこの魂は理解できないだろうな」

エリスとリインフォースはセツテとトーレに向かっていった。

「G Z・・・」

「大丈夫だ・・・俺がついている！」

G Zは必死にヴィヴィオを守っている。その時大量の召喚獣に囲まれた。

「なんだ！」

「G Z おおおおおおお！！」

「ヴィヴィオ！！！」

G Zの背後から忍者のような召喚獣がヴィヴィオを奪い去った。必死に追いかけるG Z。

「貴様！ヴィヴィオを返せ！！！」

「残念だけど・・・それはできない」

「子供？」

次の瞬間召喚獣の一斉攻撃がG Zを襲った。

「ぐおあああああああああ!」

「GZ! GZおおおおお!」

「ヴィ・・・ヴィヴィオ・・・」

GZはそのまま機能停止してしまった。

「くそ! どけ!」

「邪魔はさせないッスよ」

ウインディとティアナの妨害をするウエンディ。

スバルとマグナムエースはギンガがチンクとノーヴェと戦っているという情報を受け先行していた。

「ちょっと待ちなさいスバル!」

「ごめん!」

ティアナの言う事も聞かずスバルは独断専行している。マグナムエ

ースだけが必死にスバルに追いついている。

「ギン姉!!」

スバルの目に映ったのは血まみれで意識のないギンガの姿だった。まるで物のように扱うチンク。スバルの中に憎しみがあふれ出た。

「う! うあああああああああああああああああああああ
!!!!」

スバルの身体から膨大な力が噴出した。その表情はいつものスバルではなく憎しみに支配されていた。

「返せ・・・ギン姉を・・・返せえええええええええええええええええ!!」

スバルはギンガを掴んでいるチンクにそしてノーヴェに襲い掛かった。あまりの動きにマツハキャリバーがついていけない。

「うああああああああああああああ!!」

憎しみのままノーヴェに襲い掛かるスバルに一つの影が飛び込んだ。

「く!・・・スバル!」

「マグナムエース・・・どいて!!」

「憎しみにとらわれるな・・・お前を取り戻せ」

「うああああああああああ!!」

凄まじい爆発とともにマグナムエースは叩き付けられた。スバルはバリアジャケットが傷つきマッハキャリバーを破壊していた。戦意喪失しているスバル。

「チンク・・・なぜお前はこんなことを・・・」

するとチンクは何も言わずランブルデトネイターをマグナムエースに投げつけた。

「ぐおあああああああああああああ!!」

チンクのランブルデトネイターがマグナムエースを襲った。

「く! チンク! どうした!?!」

「貴様など知らない・・・姉が用があるのはそのタイプゼロ・セカンド」

「え?」

チンクの言葉に驚くスバル。

「笑っちゃもうよな。そいつもあたしらと同じ戦闘機人なんだからさ!」

ノーヴェの言葉にスバルは黙ってしまう。

（そんな・・・よりもよってマグナムエースに知られるなんて・・・）

隠すつもりはなかった。だが自分が人間じゃないことをマグナムエースが知ったらどう思うだろう。スバルはそれが恐ろしかった。そしてマグナムエースは口を開いた。

「それがどうした・・・」

「なに!？」

「たとえばスバルが戦闘機人であろうとスバルはスバルだ!! 大切なのはどうかではない! どうあるかだ!!」

「マグナム・・・エース」

スバルはマグナムエースの言葉がうれしかった。自分のことを受け入れてくれたことに。

「ざけんな!!」

ノーヴェのガンナックルがマグナムエースを襲う。

「く! うああああああああああ!!」

「トドメだ!!」

ノーヴェがガンナックルを突き出したその時スバルがノーヴェの攻撃を防いだ。

「スバル・・・」

スバルは何も言わずにマグナムエースを抱え離脱した。

「くそ！！」

ノーヴェとチンクがスバルとマグナムエースを追った。

「スバル」

スバルは何も言わない。マグナムエースは一言だけ言う。

「心配するな・・・ギンガさんは必ず助ける！！」

マグナムエースがチンクたち元へ向かおうとしたその瞬間。

「知ってたの？」

「え？」

「私が戦闘機人だって知ってたの？」

「ああ・・・ずっと一緒だったからな」

マグナムエースは重い口を開いた。するとスバルの表情が曇った。

「そっか・・・結局私は戦闘機人・・・人を傷つける事しかできないんだね・・・さっきのあの姿・・・それにマツハキャリバーだって」

スバルは自分が恐ろしかった。マツハキャリバーを破壊しなおかつ

怒り狂い敵を倒すことだけを考えたあの姿が。

「そんなことはない！君は優しい子じゃないか」

「けど・・・けど！！・・・怖い・・・あの姿が・・・私・・・私！！！」

スバルの表情を見たマグナムエースはあることを打ち明けた。

「・・・スバル聞いてくれ・・・かつてアイアンリーガーは強制引退をさせられアイアンソルジャーに改造された」

「アイアン・・・ソルジャー？」

「そうだ・・・アイアンソルジャーは遠い惑星に連れて行かれ・・・殺し合いの道具にされた・・・そして帰ってくることは不可能だった」

「そんな・・・なんでそんなことを知ってるの？」

「・・・俺もアイアンソルジャーだった」

その言葉にスバルは絶句した。

「俺は野球を・・・全てを奪われた・・・だが俺は帰ってきた・・・俺の心に従って」

「マグナムエース・・・なんでそれ私に？」

「さっきも言ったはずだ・・・どうかじゃない・・・どうありたい

かだ・・・お前がやりたいのはなんだ？人を助けるとだろう。ならその心に従えばいい」

すると爆発が起こりマグナムエースとスバルの元にチンクたちが現れた。今のスバルはとてもじゃないが戦えない。

「ここに隠れている」

「けど！」

「いいから言うとおりにしろ！！」

マグナムエースの剣幕に押されたスバルはそのまま黙り込んでしまった。そしてマグナムエースはチンクたちの前に出た。

「マグナムエース・・・お前を破壊する」

「やられるわけにはいかない！チンク、ノーヴェ、お前たちを元に戻してみせる！！」

「うおおおおおおおおおお！！」

ノーヴェのインファイト、チンクのガンファイトに翻弄されるマグナムエース。

「おおおおおお！！」

「く！！」

ノーヴェの拳を咄嗟にグローブで受け止めるマグナムエース。だが

背後からチンクのランブルデトネイターが襲い掛かった。

「ぐああああ!!」

倒れこむマグナムエース。そのまま欄ぶるデトネイターの乱れ撃ちを浴びせられた。

「マグナムエース！」

「ゼロ・セカンド。お前が出てくればこのガラクタは見逃してやる」

「来るなスバル！」

マグナムエースの言葉にスバルは意を決した。

「待って!!」

スバルはマグナムエースの前に立った。

「・・・本当に私が行けばマグナムエースは助けてくれるの？」

「スバル! や・・・めろ!!」

ボロボロのマグナムエースがスバルに向かって叫ぶ。しかしスバルはマグナムエースに向かって言った。

「マグナムエース・・・私言ったよね・・・たくさんの人たちを助けたって・・・だから助けるよ・・・マグナムエースを」

「く!!」

マグナムエースはスバルの身体に戻ろうとするが戻れない。

「な・・・ぜ・・・」

「マグナムエース・・・さよなら・・・」

スバルは涙を浮かべるとギンガとともにチンク達についていった。

「スバル！スバル！！・・・がは！！」

必死にスバルを呼ぶマグナムエースだが身体が動かずそして機能停止してしまった。

残されたのは大破したマグナムエースとマツハキャリバーだけだった。

第二十九話 友との離別（後書き）

スバルが俺を助けるためにナンバーズの元へ行ってしまった。待ってるスバル今助けに行く！なに！？俺たちに元の世界へ帰れ？そして俺を呼び出した声が今明らかに！！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 友よ今行く

正々堂々！試合開始！

第三十話 友よ今行く

「く・・・あ・・・」

マグナムエースが目を覚ますとそこは戦艦のメンテナンスルームだった。周りにはシルバーキャッスルのリーガーたちが修理を受けていた。

「ここは・・・」

「気がついた？ マグナムエースさん」

「なのは・・・」

なのはがマグナムエースの元に駆けつけた。

「ここは？ スバルは！？」

「ここはアースラ・・・スバルは・・・」

なのはの表情が曇る。マグナムエースは自分の無力を呪った。そして扉が開くとティアナが入ってきた。

「マグナムエース！」

「ティアナ・・・」

「よかった・・・目が覚めたのね！！」

「すまない・・・スバルが」

「謝らないで!!」

ティアナの言葉に反論できないマグナムエース。

「八神部隊長が呼んでた・・・」

「わかった」

第三十話 友よ今行く

マグナムエースが部屋を出てるとはやての部屋へ向かった。

「・・・待ってたよ・・・マグナムエース」

「はやて・・・」

「10年前のお礼言ってなかったな・・・ありがとう」

深々と頭を下げるはやて。その姿を見ていられないマグナムエース。

「よしてくれ、はやて」

「ううんちゃんとお礼させて・・・10年前のリインフォースのこと・・・今ならわかるよ」

するとはやてはあることをマグナムエースに言った。

「もう元の世界へ送る準備は出来ているよ」

「なに!？」

「これ以上みんなを巻き込むわけにはいかない・・・だから」

「スバルはどこだ？」

「言えない・・・」

「なぜ？」

「言ったら絶対マグナムエースは行っちゃうこれ以上マグナムエースたちに迷惑をかけるわけには」

「このまま何もしないで俺たちに帰れと言うのか？」

「そうだ!それじゃ納得できねえ!」

「ウインディ・・・」

はやての部屋にリーガーたちが集結した。

「はやて!ミィはセインを元に戻したいネ!」

「俺だってヴィヴィオを助きたい!!」

「僕だって!!」

リーガー達の言葉に驚きを隠せないはやて。

「はやて殿・・・某達はもう仲間だ。仲間の危機を救わない仲間など居ない」

「あいかわらず甘い奴らだな」

「シグナム殿・・・」

はやての部屋に入ってきたシグナムが十郎太に向かって言った。

「貴様はこの世界の住人じゃない・・・その行動を慎んでもらおうか・・・」

「残念だが・・・それは出来ぬ・・・」

「そうか・・・なら仕方がない」

シグナムはレヴァンティンを抜き十郎太に突きつけた。

「あの時の決着をつけるか・・・極十郎太」

「わかった・・・ここでは迷惑になる・・・」

十郎太はシグナムと共にはやての部屋を後にした。そして十郎太が部屋を出たのを確認するとシルバーキャッスルはボーシップに向おうとする。

「どこに行く気や!」

「スカリエツティのアジトなら私が案内する・・・私はスカリエツティのスパイだから」

「行くぞ・・・みんな」

「「「「おう!」」」」」

マグナムエースたちが出撃しようとしたその時マグナムエースのメインスイッチがシャーリーによって切られてしまった。

「マグナム!シャーリーお前何しやがる!!」

「いい加減にしてください!!つらいのがあなたたちだけとは思わないでください!!私だって・・・私だって!!」

今にも泣きそうになっているシャーリー。

「シャーリー・・・」

「マグナムエースさんのオイルも抜いてください・・・せめてこの事件が解決するまでは・・・」

シャーリーはそれだけ言うとマグナムエースの身体を倉庫に隔離した。その背中を見送るウインディ。

「確かに・・・これ以上俺たちが干渉しちゃいけないけど」

「俺たちの心は・・・もう決まっている」

ブルアーマーの言葉にリーガーたちは頷くがウインディは違った。

「やめようぜ・・・これ以上は迷惑かけちまう」

「ウインディ！お前！！」

「悪いけど俺は次のサッカーリーグの準備でもしてるぜ」

ウインディの背中を見送るリーガー達。その背中は悲しみを帯びていた。

トレーニングルームにて十郎太とシグナムはお互いの剣を構えていた。

「・・・不思議なものだな・・・記憶を書き換えられてもお前のことは忘れなかった・・・私は余程お前にこだわっていたようだ」

「シグナム殿・・・」

「私はお前を超える。そして次の決戦に勝つ」

十郎太もその言葉に応えるべくムテンソードを真剣にした。

「行くぞ！極十郎太！！」
きわみじゅうろうた

「勝負・・・」

十郎太の顔にバイザーが降りると両者は剣を交えた。

マグナムエースは暗闇の中に浮いていた。

「マグナムエース・・・」

（誰だこの声は・・・）

「マグナムエース」

（この声は・・・俺を呼んだ声に似ている・・・）

暗闇光がさすと一人の女性が現れた。その姿はスバルに似ていた。

「あなたは？」

「私はクイント・ナカジマです」

「クイント・・・まさか・・・あなたがスバルの？」

「はい」

「あなたが俺をこの世界に呼んだんですか？」

「はい」

マグナムエースは夢の正体がようやくわかった。

「まさか・・・ウインディやゴールド三兄弟を呼んだのも・・・」

「それは違います・・・私が呼んだのはあなただけです・・・」

「え？」

するとクイントは突然笑顔になった。

「彼らは勝手に次元の扉を乗り越えました。流石の私も驚きました」

（やはりスバルのお母さんだな）

マグナムエースはやれやれといった表情でクイントの表情にスバルと同じものを感じていた。

「何故俺を呼んだんですか？」

「あの子達に・・・心を教えて欲しかった・・・彼女たちにも心があるのにジェイル・スカリエッティはその心を否定させました」

クイントは目を瞑るとマグナムエースに言った。そしてマグナムエースは疑問に思っていたことを言った。

「なぜ俺をスバルの身体に入れたんですか？」

「あなたを危険から守りたかった・・・そしてあの子と一緒に成長

して欲しかった」

「たしかに・・・俺もスバルから大切なことを教わりました・・・そしてスバルは俺に大切なことを思い出させてくれました。教えてください。俺はあの時なぜスバルの身体に戻れなかったのですか？」

「それはスバルがあなたを拒否したからです」

「スバルが？」

クイントはマグナムエースに向かって言った。

「マグナムエース・・・ごめんなさい・・・あなたを巻き込んでしまった・・・こんなことを言うのは勝手かもしれませんが・・・もうあなたを巻き込みたくありません・・・自分の世界に帰ってください」

クイントはうつむいて言うがマグナムエースは答えた。

「残念ですが・・・それはできません」

「え？」

クイントはマグナムエースの言葉に耳を疑った。

「どうして・・・」

「・・・俺には戦うことが出来ます・・・戦う権利があります・・・殺し合いではない戦いの・・・俺にはこのままスバルやナンバーズ達を見捨てることは出来ません・・・それに俺はスバルに助けられ

ました・・・だから今度は俺が助ける番です!!」

「・・・マグナムエース」

「俺は真正面から戦います! スバルのために・・・そして自分のために!!」

その瞬間マグナムエースの身体が光り輝いた。あまりの眩しさにクイントは目を伏せてしまう。

「クイントさん・・・俺は行きます」

「・・・マグナムエース・・・娘を・・・あの子達を・・・お願いします」

「はい!」

マグナムエースはクイントに見送られながらフィールドに向かった。

「は!」

マグナムエースはメインスイッチを切られた状態のまま目を覚ました。そこには誰も居なくまるで隔離されているようだった。

「く・あ・・・は・・・は!」

マグナムエースはオイルの抜かれた身体で必死に動いた。這ってでも無様でもマグナムエースはスバルを助けに行くべくボーシップに向かった。

「何やってんだよマグナム」

「・・・ウインディ」

部屋の扉の先にウインディが待ち構えていた。だがマグナムエースはウインディを無視して先に進んだ。

「・・・マグナム・・・聖王のゆりかごが動いた・・・なのは達はもう行っちゃったし、スバルたちもそこだ」

ウインディがおもむろにオイル缶を持ち出した。

「・・・ウインディ」

「こいつが欲しいか？」

「く・・・」

「ならとつと行こうぜ。一人より二人だ」

ウインディがマグナムエースにオイル缶を差し出したその時だった。

「いや」

「九人だ」

マグナムエースとウインディが振り向くとそこにはリュウケンがブルアーマーが十郎太がトップジョイがGZがエリスがそしてリインフォースが居た。

「・・・みんな」

「全く！マグナムも水臭いネ！」

「・・・トップジョイ」

「スバル達を助けるなら僕たちも行く」

「・・・リュウケン」

「俺たちは仲間のはずだ！！」

「ブル！」

「お主が行くなら某も行こう」

「十郎太」

「ゆりかごなら私が案内する！」

「エリス」

「私の運命を変えたお前には責任をとってもらおうぞ」

「リインフォース」

「俺にもヴィヴィオを助けさせてくれ！」

「GZ」

「マグナム・・・みんな一緒だぜ・・・スバル達を放っておいてこのまま帰れねえよ」

「ウインディ」

「まっウインディは素直じゃないけどな」

「ブルほっとけ！」

「・・・みんな・・・行こう!!」

「」「」「」「おう!!」「」「」「」

＜私も忘れないで下さい＞

「マッハキャリバー？」

マグナムエースの胸にマッハキャリバーが装着されていた。

＜私も相棒を助きたい。だから私も一緒に行きます＞

「よし・・・行こう!!」

マグナムエースはマッハキャリバーを取り出すと精一杯の気持ちを込めた。

「待ってろよ・・・スバル・・・今行く!!」

第三十話 友よ今行く（後書き）

もうマグナムエース達は元の世界に帰ったかな？あたしたちはスバルを絶対に助ける。あの戦闘機人・・・まさか！！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 輝けシルバー魂
正々堂々！試合開始！

第三十一話 輝けシルバー魂

シルバーキャッスルはボーシップに乗り込んだ。

格納庫ではボーシップが起動したことに管理局員は驚いている。

「ボーシップ！発進だ！！」

「わかった！！」

GZの操縦で聖王のゆりかごに向かうリーガー達。ガジェットを潜り抜けボーシップは聖王のゆりかごを捕らえた。

「見えた！」

「突入だ！！みんな何かにつかまれ！！」

ボーシップがそのまま聖王のゆりかごに突入した。

第三十一話 輝けシルバー魂

「ここが聖王のゆりかご・・・」

マグナムエースは辺りを見回した。

「とっても広いネ」

「どこにいるんだ？」

『ようこそシルバーキャッスル諸君！』

「誰だ！」

GZが周囲を見渡すが誰も居ない。するとモニターのようなものが現れ一人の男が映し出された。

「ジェイル・スカリエッティ・・・」

『そうだ・・・君たちは興味深い・・・だが不要な感情が多すぎる・・・彼女たちに余計なものを植え付けてくれたね』

「まさかセイン達をあんな風にしたのは！！」

『再調整は苦労したよ』

「お前・・・まるで物みたいに・・・」

ウインディが怒りをあらわにした。

「ヴィヴィオはどこだ！！貴様！ヴィヴィオに何かしてみろ！！俺がただじゃおかない！！」

『すぐそうやって熱くなるところが不要だねーまあ良いこれを見たまえ』

映像が切り替わるとそこにはティアナ達が戦っている場面になった。

「これは!？」

『彼女はがんばっているよ・・・もつともあとどのくらい持つかな』

映像のティアナはもうボロボロだった。エリオ、キャロも同じでいつ倒れてもおかしくない。

「みんな行くぞ! エリス! 案内を頼む!!」

「わかった!!」

シルバーキャッスルはエリスの案内でティアナ達の元へ向かった。

「くああああああああああああ!!」

「うああああああああああああ!!」

ティアナ、エリオ、キャロは目の前の相手とそしてルーテシアと戦っていた。

「邪魔・・・」

ルーテシアは召喚獣たちを駆使しエリオ、キャロを追い詰めている。

「くっ!!」

ティアナもクロスミラージュをダガーモードにし目の前の戦闘機人と戦っている。

「く! うあああああああ!」

ティアナの肩に戦闘機人の拳がヒットした。激痛でもだえるティアナ。

「う! くっ!! ……これじゃ…もう44ソニックが投げられない…元から残弾なんてないけど」

「……………!!」

目の前の戦闘機人に対しティアナは既に44ソニックを3球投げていた。データの上ではもうティアナに44ソニックは投げられない。なおも戦闘機人の攻撃が続きその拳はエリオ、キャロをも襲った。

「くあああああああ!」

「うあああああ!」

「きゃあああああ!」

目の前の戦闘機人に対し自分が無力だと感じてしまうティアナ。

(…駄目なの? 私じゃ…けど)

その時ティアナの脳裏にマグナムエースが思い出された。

（こんな時・・・マグナムエースならどうする？・・・絶対に諦めない・・・そのシルバーキャッスル魂を私たちは持つてる！！）

ティアナは立ち上がりエリオとキャロに向って叫んだ。

「・・・諦めない！！・・・」

「ティア・・・さん・・・」

「みんな！思い出して！！マグナムエースがあたし達に教えてくれた事を！！私たちの中にあるシルバーキャッスル魂を！！」

「僕たちの中の・・・」

「シルバーキャッスル魂！！」

ティアナの言葉にエリオ、キャロも立ちあがった。そして目の前の戦闘機人とルーテシアに向かった。

「紫電一閃！！」

「ヴォルテール！！」

「く！！」

エリオ、キャロの猛攻にルーテシアは押され始める。

「「はああああああああ！！」」

「う・あああああああああ」

エリオとキャロはルーテシアを押し返すが同時に力尽きてしまった。
ティアナもクロスミラージュから魔力球を生成した。

「いくわよ・・・スバル!!」

ティアナは目の前の戦闘機人・・・スバルに向かって投球体制に入
った。

「これがあたしの心の44ソニックだああああああ!!」

ティアナの4球目の44ソニック。ティアナの身体の負担は限界に
なるが身体の負担を押し切り44ソニックをスバルに向かって投げ
た。

「!!」

スバルは今の自分に混乱していた。何故かキャッチャーの体制に入
ったからだ。ティアナの渾身の44ソニックを受け止めるスバル。

「ティ・・・ア・・・」

「スバル!」

スバルの元へ駆け寄るティアナ。

「!!!!」

だが次の瞬間スバルの拳がティアナに繰り出された。

「ス・バル・・・」

そのまま倒れこむティアナ。エリオ、キャロも動けない。

「みんな！」

マグナムエースたちが駆けつけるとルーテシアとティアナたちが倒れていた。

「ティアナ！しっかりしろ！ティアナ！！」

倒れているティアナをマグナムエースは抱き起こした。

「マグナム・・・エース・・・お願い・・・スバルを助けて・・・あの子にはまだ心が残ってる・・・リーダー命令だからね・・・」

するとティアナはマグナムエースが持っていたマツハキャリバーを握り締めた。

「・・・わかった！任せろ！」

「頼ん・・・だわよ・・・」

それだけ言うとティアナはマツハキャリバーをマグナムエースに託し気を失った。ティアナたちの思いを受け取ったリーガー達。

「……僕の回路がすごい熱を持っている……」

リュウケンも構えた。

「俺もだ」

ウインディもだった。

「熱い……オイルが沸騰しそう……」

エリスも構えた。

「すこし待っているんだ……」

リインフォースもティアナ達に少量の回復魔法を施すと立ち上がった。

「みんな……受けたぞ!!! ティアナ……必ず迎えに来るからな!!!」

ティアナ達を残しマグナムエース達はスバルというゴールに向かった。

第三十一話 輝けシルバー魂（後書き）

待っててくれティアナ。必ずスバルを取り戻す！俺達は絶対負けるわけにはいかない！！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 運命の大決戦
正々堂々！試合開始！

第三十二話 運命の大決戦

「さあシルバーキャッスル。私の手のひらで踊ってもらおうか・・・滑稽なダンスを」

ジェイル・スカリエッティはモニター越しにシルバーキャッスルを見ていた。

第三十二話 運命の大決戦

マグナムエースたちシルバーキャッスルは聖王のゆりかごの奥へ進んでいた。そして広い部屋に出た。

『シルバーキャッスル』

「クアットロ！」

突如現れたクアットロのアナウンス。

『さあ試合を始めるわよ！まずここから8つの部屋を渡ってもらうわね！8つの部屋を抜けた最終ステージで豪華景品プレゼント！』

「この野郎！ふざけやがって！！」

ウインディが突破しようとしたその時。

「待て！」

十郎太の声で止まるリーガー達。

「どうした!？」

「何か居る・・・」

十郎太の言葉に影からトーレ、セツテ、ディエチ、ディードがシルバーキャッスルに奇襲を仕掛けた。

「ぐあああああああ!!」

「きゃあああああああ!!」

マグナムエースとエリスがトーレ達の攻撃を受ける。

「マグナム!! エリス!!」

そしてモニターではクアットロが再調整されたナンバーズ達の手を止めた。

『さあお姉さま・・・そのガラクタを消しちゃって!!』

「任せろ!!」

「お前たちに用はない!! 俺はスバルを助けに来ただけだ!!」

「ならなおさら通せないね!!」

「うあああああああ!!」

トーレのインパルスブレードがマグナムエースにヒットした。

「ぐあああああああ!!」

「ナニネーーーーー!!」

「うおおおおおお!!」

ウィンディ、トップジョイ、GZにトーレの攻撃が次々とヒットする。

「はあああああああ!!」

「ぐあああああ!!」

「弱い・弱すぎる!! 所詮はスポーツ用か・・・戦闘では無力だな!! 敵を破壊できないなんてな」

「破壊できないんじゃない!! しないのだ!!」

「ポンコツが・・・訳の分からないことをペラペラと!!」

破壊しないと言ったGZに攻撃を仕掛けるトーレ。

「ヘヴィバレル!」

「く!」

マグナムエースはディエチのヘヴィバレルをグローブで受け止めるとバックパックから弾幕を発射した。

「ふん！余計な真似を！！」

「うおおおおおおおお！！」

トーレの攻撃でマグナムエースは持っていたマツハキヤリバーを落としてしまった。トーレ、セツテ、デイエチ、ディードがマグナムエースに一齐に襲い掛かったその時一つの影がマグナムエースを守った。

「なに！？」

「十郎太・・・」

放電しながら十郎太はマグナムエースに言った。

「マグナムエース・・・お主が倒れたら誰がスバル殿を助ける？」

十郎太はマグナムエースの落としたマツハキヤリバーを拾い上げた。

「・・・十郎太・・・」

「・・・某はお主を信じる」

十郎太はそれだけ言い残し手に持っていたマツハキヤリバーをマグナムエースに託すと機能停止してしまった。

「十郎太・・・すまない・・・く！！」

十郎太に託されたマツハキヤリバーを握り締めるマグナムエース。

「ふん・・・気の毒にな・・・まず一人・・・」

トーレの言葉にリュウケンに異変が起こった。

「う・う・うあああああああああああああああああああああああああ
あああああ!!」

「なに？」

トーレがリュウケンを見ると驚愕した。

「リュウケンが・・・燃えている・・・」

文字通り炎に包まれるリュウケン。ステータスボードを見ていたク
アットロも驚愕した。

「なにこれ！？あいつの中でもう一つ駆動炉が動いている・・・ま
さか・・・奴にはより強力な駆動炉がセットされている？・・・
けどこんなスペック無理が・・・進化していると言っても言うの!!!
？」

どう考えても規格外のものを積んでいるリュウケンにクアットロは
混乱した。

「この死にぞこないが！ライドインパルス!!」

「スローターアームズ！」

「ツインブレイズ！」

「ヘヴィバレル！！」

リュウケンが襲い掛かる攻撃を驚くべきスピードでかわすと両拳にエネルギーが溢れた。

「なに!？」

[illegible]

リュウケンが拳を地面に叩きつけると膨大なエネルギーがトーレたちを包んだ。

「なんだ．．．これは．．．体の力が．．．抜けていく．．．う．．．あ」

龍気拳を浴びたトーレたちは力が放出され倒れてしまった。

「十郎太！」

機能停止している十郎太にシルバーキャスルが駆け寄るが十郎太は何も反応しない。

「十郎太……待っている必ずスバルと一緒に迎えに来るからな！」

マグナムエース達は十郎太にそれだけ言い残し先へ向かった。

(マグナムエース・・・後は頼むぞ・・・)

既にトーレ達の攻撃でボロボロのシルバーキャッスルは次の部屋にたどり着いた。

「また部屋かよ!!」

ウィンディが次の部屋にたどり着くとそこはただっ広い部屋だった。すると壁の中からマグナムエースに攻撃が加えられた。

「ぐあああああ!!」

「へへへ!シルバーキャッスル!この先は行かせないよ!倒したかったらあたしを倒すことだね」

マグナムエースを襲ったのはセインだった。

「セイン!目を覚ましてくれ!!」

「何わけのわかんないことやってんの!!」

ブルアーマーの言葉に耳を貸さないセイン。

『無駄無駄!その子は完全な操り人形・・・さあ壊せ!!』

するとマグナムエースの背後から一つの影が舞い降りマグナムエースの持っていたマツハキャリバーを握り締めた。

「トップジョイ!」

「ヘイ！セイン！ミーと勝負ネ！！」

トップジョイがマツハキャリバーでドリブルをしている。その光景を面白そうに見ているセイン。

「へーじゃあ受けてやろうじゃない！お前を壊してやる！！」

セインがトップジョイのマツハキャリバーを奪い取るべく速攻を仕掛けた。トップジョイとセインの技と技の戦いが繰り広げられた。

「く！・・・え？」

セインはトップジョイに攻撃を仕掛けようとするが何故か手を出すことができない。

「ヘイ！セインこっちネ！」

（なんで？なんであたしルールどおりやってるの！？）

セインは自分の行動が理解できない。

（なんでだろう・・・このお調子者と・・・お調子者？なんであたしそんなこと知ってるの？・・・わからない・・・ズルもしちゃいけない気がする・・・なんで？）

するとトップジョイがマツハキャリバーにエネルギーを収束し始めた。

「あれは・・・ギャラクティカペガサスシュート・・・なんであた

し技の名前を知ってるの？」

「セイン！ミィはセインに全ての思いを届けるネ！！たとえばミィの全てと引き換えになったって！！」

トップジョイがシュートの体制に入った。

「ギャラクティカペガサスロングシュウウウウト！！」

マッハキャリバーから天馬が駆け出した。

「は！」

セインはトップジョイのシュートを防ごうと手を伸ばした瞬間その身体に熱き物が流れ込んだ。

「う・うああああああああああ！！」

マッハキャリバーはセインの手をすり抜けるとマグナムエースの元へ運ばれセインも倒れてしまった。

「トップジョイ！！」

「マグナム・・・ミィはここまでみたいネ・・・」

先ほどのトーレ達の攻撃が蓄積されたのか、最後の力を使い果たしたのかトップジョイは倒れてしまった。

「トップジョイ」

「トップ・・・ジョイ」

目を覚ましたセインがトップジョイの元に歩み寄った。

「セイン・・・元に戻ったネ」

「ごめん・・・あたし」

「セインが元に戻って・・・ミーとってもうれしいネ・・・あ・・・」

機能停止してしまったトップジョイ。

「トップジョイ！」

「トップジョイ！」

「マグナムエース！スバルはもっと先に居る！トップジョイは任せ
て！」

「セイン・・・トップジョイを頼むぞ！！」

マグナムエース達はトップジョイをセインに任せ奥に進んだ。

「十郎太に続いてトップジョイまで・・・くそ！！」

リインフォースが己の無力さを嘆いている。

「大丈夫だ・・・二人は一緒だ」

「なに!？」

マグナムエースはマツハキャリバーを握りしめた次の部屋に辿り着くと凄まじい拡散エネルギーがシルバーキャッスルに降り注いだ。

「みんな散れ!!」

シルバーキャッスルが散るとその先にはオットーが待ち構えていた。ダメージが蓄積され無理に動いたシルバーキャッスルは誰が倒れてもおかしくない状態だった。

「お前は!」

「シルバーキャッスル・・・よくもデイドに余計なものを植えつけてくれたね・・・僕がみんな壊してあげる」

「へっ! お前なんかによられるかよ!」

「・・・そうだ!!」

ウインディの言葉にブルアーマーがマグナムエースからマツハキャリバーを受け取った。

「ブル?」

「今度は・・・俺の番だ」

ボロボロの状態のブルアーマーの角が前に倒れフルパワーになった。

「・・・死にぞこないが・・・レイストーム」

「走れ・・・マグナムエース!!」

「たりゃあああああああ!!」

ブルアーマーの合図でマグナムエースが飛んだ。

「ぬおおおおおおおおお!!!!どりゃあああああああ!!」

ブルアーマーはそのままレイストームに突進した。

ぶつかり合うブルアーマーとレイストーム。

「どりゃあああああああああ!!!!どりゃあああああああ!!」

収束されたレイストームをブルアーマーが押し返している。そのことに驚愕しているオットー。

「どりゃあああああああああ!!!!」

「何・・・凄いパワーだ!!」

「どりゃあああああああああ!!!!」

レイストームを押し返しながらオットーに体当たりを仕掛けるブル
アーマー。

「僕のレイストームを正面から・・・たった一人で・・・お前は！
」

「俺はただのケンカ牛だ・・・！！！」

「くっ！！！」

ブルアーマーがオットーの元にたどりつた瞬間凄まじい爆発が起き
た。

「ブル！！」

爆炎の中からブルアーマーがマツハキャリバーを持って現れた。

「ブル！！」

「マグナム・・・スバルを助けるよ・・・絶対だ・・・」

ブルアーマーはマグナムエースにマツハキャリバーを託すと機能停
止した。

「ブル・・・お前の思い無駄にはしない！！」

再び奥に進むシルバーキャッスル。

「なんなの・・・あのシルバーキャッスル・・・もうスクラップ同然なのに・・・まあいい・・・こっちには最大のおもちやがあるんだから」

クアットロの隣には金髪の少女の姿があった。

シルバーキャッスルが次の部屋に走った先に一人の女性が倒れていた。

「なのは!!」

マグナムエースがなのはを抱き起こした。

「しっかりしろ!なのは」

「マグナム・・・エースさん」

「誰にやられたんだ!？」

「ごめんなさい・・・私にはできなかった」

「なに!？」

「ぐおおおおおおお!!」

突然G Zに攻撃が加えられた。リーガーたちが振り向くとそこには金髪の少女の姿があった。

「お前も・・・偽者だ!!」

金髪の少女はG Zに襲い掛かった。

「G Z!!」

「くるな! ヴィヴィオやめるんだ!!」

「なに!?!」

G Zの言葉に驚愕するウィンディ。

「嘘・・・ヴィヴィオ?」

絶句するエリス。

「ヴィヴィオ! どうした! なにがあった!?!」

「お前なんて知らない・・・お前みたいな嘘つきのロボット・・・知るもんか!!」

ヴィヴィオの攻撃がG Zを襲う。

「G Z!!」

「ふふふ。ガラクタにも優しい心ってあるんだ〜目の前の子が聖王の器だからってかばっちゃうんだ〜」

「貴様!!」

ヴィヴィオの背後からクアットロがガジェットを引き連れ現れた。

「貴様がヴィヴィオをこんな目に!!」

「そうよ。この子は私の意のままに動くのよ。さあママのためにそいつを壊して」

「わかった」

「・・・そういうことか・・・ならお前の相手は俺がする」

GZがクアットロとガジェットの前に立ちはだかった。

「GZ!!」

「先に行け!!」

GZはマグナムエースにパックを投げつけた。そしてパックからマッハキャリバーに何かが流れ込んだ。

「・・・ヴィヴィオを頼むぞ」

「・・・わかった」

マグナムエースはGZを残し先に進んだ。

「暑苦しい友情ってやつ？先に行こうかな～ああそうだあなたは先に行って」

「・・・わかった・・・」

ヴィヴィオはGZなど眼中に無い。ヴィヴィオを通すGZはクアットロの前に立ちはだかった。

「良いのかな～あの人形ちゃんはガラクタたちを壊しちゃうわよ」

「・・・俺はお前の相手をすると言ったんだ！！」

「へ～あんたみたいなガラクタ一人でこの数相手にどうするつもり？」

馬鹿にしたような目で見るクアットロ。そしてGZを取り囲むガジェットにGZはニヤリと笑った。

「・・・一人じゃないのさ・・・」

「なに？は！！」

クアットロは自分の足元が氷結していくのを感じた。周りを囲んでいるガジェットも氷結していく。

「なに！？この氷まさか！！」

クアットロがGZを見るとGZから冷気が溢れていた。

「まさか・・・自分の身体を氷結させてこの部屋を凍らせよう・・・」

「その通り・・・俺の冷却装置は特別製でな・・・全てのエネルギーを使えばこのフィールドくらい凍らせることができる!!」

徐々に凍結し始めるGZと凍結のせいで身体が動かないクアットロ。

「なんでそんな無駄なことを!!? そんなことをしてなんになる!？」

「お前にはわからないだろうな・・・俺達はこの世界に正義の心を取り戻すと誓い合った仲間だ・・・たとえば俺が倒れてもその心は仲間が引き継いでくれる!!」

「そんな無駄な存在のために! 自分が捨石になるなんて・・・」

「ふ・・・さあこれが俺の最後の力だ!! マグナムたちがゴールにたどり着くまで!! そしてヴィヴィオをお前から開放するために! 俺と一緒に凍り付いてもらうぞ!! ブリージングブレス!!!」

「う・うああああああああああああああああああああああああああああ!!」

GZから発せられたブリザードがクアットロを飲み込みガジェットをフィールド全体を凍らせた。

(・・・マグナム・・・ヴィヴィオを頼んだぜ)

そこには笑みを浮かべていながら凍りついたGZの姿があった。

突然ヴィヴィオの意識が戻った。

「G・・・Z・・・」

ヴィヴィオがGZを感じ取った。GZがクアットロを部屋ごと凍らせたため操作していたコンピュータが破壊されたからだった。

「GZ！GZ！」

ヴィヴィオは身体が利かないレリックの機能は健在なのか暴走状態になっている。

（GZ必ずヴィヴィオは助ける！！）

マグナムエースはGZから託されたパックを握り締めた。

次の部屋ではノーヴェが待機していた。

「待ってたぜ！シルバーキャッスル！」

「ノーヴェ・・・」

「さっきから鬱陶しいコントロール電波が流れててな途切れて気持ちよくなった」

「じゃあ・・・お前は元に？」

「元に？ざけんな・・・あたしはあたしだあああああ！！！」

マグナムエースにノーヴェが殴りかかったその時。

「リュウケン！」

「くう！」

リュウケンがノーヴェの拳を受け止めた。その手にマツハキヤリバーを持ちながらだった。

「リュウケン！！！」

「だいじょうぶ・・・マグナムエース！先に行ってノーヴェは僕が！」

リュウケンはそう言うマツハキヤリバーをマグナムエースに託し

た。

「頼むぞ・・・リュウケン!!」

マグナムエースが先に進んだのを見届けるとリュウケンはノーヴェと対峙した。

「ガンナツクル!!」

ノーヴェのガンナツクルから光弾が発射されるがリュウケンは素手で光弾を破壊した。

「ちっ速い」

空手リーガーのリュウケンは咄嗟の瞬発力がシルバーキャッスルの中で一番速い。ノーヴェのガンナツクルを受け止めることなど余裕だった。

「うおおおおおおお!!」

ノーヴェの攻撃がリュウケンにヒットするが。

「平気だよ」

「なに!？」

「前の君のほうが強かった・・・」

「うるせえ!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお!!」

ノーヴェのガンナックルがリュウケンに襲い掛かったその時。リュウケンの額の『心』の文字が輝いた。

「はあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああ!!!」

「うおおおおおおおおおおお!!!」

「激竜けえええええええええええん!!!!!!」

リュウケンの激竜拳がノーヴェに突き刺さり膨大なエネルギーがノーヴェを飲み込んだ。

「うあああああああああああああああああああああ
ああああああ!!!」

ノーヴェが倒れたと同時にリュウケンの額あてにヒビが入り倒れてしまった。

「あ・・・ぐは」

「リュ・・・リュウケン・・・」

元に戻ったノーヴェがリュウケンに駆け寄った。

「よかった・・・ノーヴェ元に戻ったんだね」

「くそ・・・あたしは！」

「大丈夫・・・平気・・・だよ・・・」

そのままリュウケンが機能停止してしまった。

「リュウケン！おいしっかりしろ！！リュウケン！！くそおおおおお
おおおおおおお！！」

「ランブルデトネイター」

「またかよ！！」

マグナムエースたちをチンクのランブルデトネイターが襲う。ダメ
ージの残っている身体では満足に避けることができない。

「チンク」

マグナムエースがチンクの前に出ようとするがエリスが前に出た。

「エリス？」

「マグナムエースがここで倒れちゃったら駄目でしょ・・・それに
気づいてるはずでしょ・・・もう私たち身体もエネルギーも後がな

いつて」

「エリス・・・」

エリスはマグナムエースからマツハキャリバーを持ち出した。

「先に進んで・・・大丈夫！どんな時でも諦めないのがアイアンリ
ーガーでしょ！」

「エリス・・・すまない！！」

マグナムエースたちが奥に進もうとするとチンクはランブルデトネ
イターを投げつけた。

「姉を無視していくな・・・」

「チンクちゃん・・・あなたの相手はお姉ちゃんだよ」

エリスがマツハキャリバーをチンクに向かって構えた。

「出来損ないの貴様になにができる・・・」

「可愛い妹を元に戻すのもお姉ちゃんの役目ってね」

するとエリスは手にしていたマツハキャリバーに精一杯の力を込め
た。

「なんだ・・・その力は」

「・・・チンクは忘れたかもしれないけどチンクも持っているんだ

よ・・・この力・・・テクノロジーじゃ絶対に生まれない!!」

エリスの思いでマッハキャリバーが光り輝いた。

「シャイニングスマッシュ・・・ファイティングソウル!!!」

「ランブルデトネーター!!」

エリスのシャイニングスマッシュを超えた魔球がランブルデトネーターを押し返しチンクに襲い掛かる。

「なに・・・!! うああああああああ!!」

そのまま倒れるチンクと力を使い果たしたエリス。

「エリス!! チンク!!」

「マグナムエース・・・」

「マ・・・グナ・・・ムエース・・・」

マグナムエースとチンクは倒れているエリスに駆け寄った。

「良かった・・・チンク元に戻ったんだ・・・」

「・・・はい・・・く!!」

「マグナムエース・・・」

エリスは自分の身体から給油口を取り出した。

「エリス！」

「私のエネルギーを持っていって……そうすれば少しは持つでしよ……」

「エリス！！」

エリスはマグナムエースの給油口を取り出し自らのオイルを給油した。

「私の思いマッハキャリバーに入れたしマグナムエースの中にも入れたからね……絶対スバルを助けてね……やくそ……」

機能停止してしまうエリス。マグナムエースはマッハキャリバーを拾い上げた。

「チンク……エリスを頼む……」

「ああ、『姉上』は任せろ！！」

「頼んだぞ」

マグナムエースはチンクにエリスを託すとまた次のステージに向かった。

「ふむ。失敗作のエリスまであんな力を得るとは……アイアンリガーとは一体なんなのだ？」

スカリエッティは画面を見ながら考えていた。

「奴らは所詮機械、命令されたとおりにしか動かないはず・・・機械とはその程度の存在のはず・・・誰の命令なのだ・・・」

「ドクター・・・私が行って確かめてきましょう」

「ウーノ・・・頼むぞ・・・聖王も時期に追いつく」

「お任せください・・・奴らはもう3人だけこの期に一斉に破壊します」

ウーノはシルバーキャッスルの元へ向かった。

「ちくしょう！！部屋はあといくつあるんだ！？」

「あと二つ・・・そして最終ステージを含めると三つだ・・・」

リインフォースの言葉にエネルギー残量を気にするウインディ。

「スバルを待たせるわけには行かねえよな」

トップジョイのようにムードを上げようとするウインディだが全員そんな余裕はなかった。そして次の対戦者ウーノが待ち構えていた。

「シルバーキャッスルこの先には行かせません・・・」

「お前は一体・・・」

「はじめまして・・・私はウーノです」

するとウーノの姿が消えマグナムエースたちに攻撃が浴びせられた。

「ぐ！」

「はああ!!！」

ウーノの一撃が加えられようとするリインフォースが防御結界を張りマグナムエースを庇った。

「リインフォース！」

「マグナムエース・・・マッハキャリバーを貸してくれ」

マグナムエースはリインフォースにマッハキャリバーを渡すと光り輝いた。

「これで良かったか・・・」

「リインフォース」

リインフォースはマグナムエースにマッハキャリバーを渡すとウーノの前に立った。

「早く行け・・・私の思いはもう込めた・・・あとは私が奴を食い

止める・・・」

「リインフォース・・・」

「心配ない・・・私は私として戦う・・・」

「わかった・・・頼むぞ!!」

マグナムエース達は奥に進むとリインフォースとウーノが対峙した。

「人形が!!」

「どっちが人形だ!」

リインフォースは襲い掛かってくるウーノを蹴り飛ばした。

「闇の書の意味の分際でご立派に人間扱いですか? 持ち主の命令どおりには動けない分際で!!」

立ち上がりながら毒づくウーノ。

「・・・確かに・・・かつての私ならそうだろう・・・だが今の私は違う!!」

リインフォースは魔方阵を展開し魔力を収束させた。

「私は私として・・・お前を倒す!! 私の魂に誓って!!」

「はあああああああ!!」

「夜天の雷!!」

リインフォースの渾身の夜天の雷がウーノを飲み込んだ。

「うああああああああああ!!」

蹲るウーノ。

「殺せ」

「殺しはしない・・・」

「何故だ?・・・管理局の命令だからか!？」

「違う・・・私がお前を殺したくないんだ・・・」

その言葉に言葉を失うウーノ。

「甘い・・・な」

「確かに・・・以前の私ならこんなことは絶対に思わなかったな・・・」

「く・・・」

ウーノが気絶するとリインフォースも力を使い果たし倒れた。

マグナムエースとウインディが最後の部屋に差し掛かるとまた立ちふさがる少女がいた。

「ウインディ!」

「遅かったッスねーさってとマグナムエースには用はないッス!!
マッハウインディ! あたしと勝負ッス!!」

ウエンディの指名を受けたウインディ。

「良いぜ。マグナムちよつと待っててくれ」

ウインディはウエンディと対峙した。

「お前・・・精神操作は・・・」

「あたしはそんなもの受けてないッス・・・このモヤモヤ・・・お前を倒して抹消するッス!!」

ライディングボードで砲撃しながら接近戦を持ち込もうとするウエンディ。

「であああああああああああああああああああ!!」

「はああああああああああ!!」

インファイトに入るとウインディとウエンディのキックが交差する。
ウエンディは再び距離をおくとライディングボードを乱射した。

「く! マッハスピン!!」

「おりゃああああああああああ!!」

光弾をマッハスピンで弾き飛ばしながらウインディはインに入って

いく。

「エリアルレイヴー!! 貫け!!」

「だああああああああああああああああ!!!!」

ウインディのフルパワーのマッハスピントウエンディのエリアルレイヴがぶつかり合い爆発が起きた。ウインディとウエンディは吹き飛ばされてしまう。

「ウインディーーーー!!」

「マグナム……どこに居るんだ……」

「ウインディ! お前目が!」

「どうやら……視覚センサーがやられちゃったみたいだ」

するとウインディはマッハキャリバーを握り締めマグナムエースに渡した。

「後は頼んだぜ……マグナム……」

「ウインディ……く!!」

マグナムエースはマッハキャリバーを受け取ると最終ステージに進んだ。

とうとう一人になってしまったマグナムエースはマッハキャリバーを握り締めていた。

「ウインディ、リュウケン、ブル、十郎太、トップジョイ、GZ、エリス、リインフォース、ティアナ……君たちの思いはマッハキャリバーに込められている」

マグナムエースはみんなの思いの込められたマッハキャリバーを握り締め一人ゴールに向った。

第三十二話 運命の大決戦（後書き）

みんな・・・みんなの思いが俺に力をくれる・・・その思いに応えるためにも・・・俺はこの一球でスバルを救い出してみせる！！
次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 蘇れ魂の友よ
正々堂々！試合開始！

第三十三話 蘇れ魂の友よ

第三十三話 蘇れ魂の友よ

「来た・・・」

マグナムエースは最終ステージに到着した。そこは暗くどこことなく不気味さを感じた。

「スバル！どこだ！！スバル！！」

『ふふふ！』

マグナムエースが叫ぶと不気味な声が響いた。

「ジェイル・スカリエッティ・・・」

『マグナムエース・・・よくここまでたどり着いたね～君には感服するよ』

「能書きは良い！スバルはどこだ！！」

『せっかちだね～たかだか機械にそんな感情があるなんてね～よろしい約束の商品だ・・・現れた前『14番』！』

14番という言葉とともに戦闘機人と化したスバルが現れた。

「スバル！」

「!!」

スバルは何も言わずISでマグナムエースを殴りつけた。

「ぐあああああああああ!!」

大きく吹き飛ばされるマグナムエース。スバルのIS振動破砕は機械に対して絶大な破壊力を有する。マグナムエースにとっては天敵ともいえる機能だった。

「くっ・・・スバル・・・は!」

マグナムエースが何かを感じ取り回避行動をとると戦闘機人と化したギンガの攻撃がきた。

「ギンガさん・・・」

「・・・・・・・・・・」

「ターゲット・・・マグナムエース」

「スバル!ギンガさん!!止めるんだ!!」

マグナムエースの言葉も空しくスバルとギンガはマグナムエースを攻撃する。だがマグナムエースは叫ぶのを止めなかった。

「スバル!ギンガさん!!」

『無駄だよ!彼女たちのプログラムは完全に書き換えた・・・もはや君のことなどわからない!』

「・・・わかる」

『なに!?!』

「たとえばプログラムを書き換えられようとスバル達が俺達を・・・仲間との絆を忘れるはずがない!!」

マグナムエースはスバルとギンガに向かって構えた。その目は戦うことを決意した目だった。

『ほう・・・君に彼女たちと戦うことができるか?』

「・・・戦うさ・・・そして思い出させてみせる!! 彼女たちの本当の心を!!」

『面白い・・・ではやらしてもらおうか・・・そろそろ聖王の器も来る頃だ』

「なに!?!」

マグナムエースの後方の壁が破壊されると聖王の鎧を纏ったヴィヴィオが現れた。

「ヴィヴィオ!」

『逃げて! マグナムエース!!』

スバル、ギンガに加えヴィヴィオまでがマグナムエースに襲い掛かった。

「ぐあああああああああああ!」

『さあ踊ってくれ!滑稽なダンスを』

マグナムエースをあざ笑うスカリエッティはスバル達を襲い掛からせた。

「く!!」

マグナムエースはスバルの拳を回避するとボールを構え投球体制に入った。それはスバルも良く知っている技だった。

「44 おお おお おお ソニック!!」

マグナムエースの44ソニックがヒットするがスバルは受け止めていた。

「はあああああああああ!」

スバルの攻撃をマグナムエースは回避すると背後からギンガの攻撃がヒットした。

「ぐはっ!」

倒れるマグナムエースをヴィヴィオが追撃する。

「マグナムエース!逃げて!!」

言うことを聞かない身体。ヴィヴィオの攻撃はマグナムエースにヒ

ットした。

「く！」

マグナムエースは再び投球体制に入った。

「44ソニック・オン・ファイヤアアアア！」

「くああああ！！！」

ギンガの身体に44ソニック・オン・ファイヤーがヒットしギンガは動けなくなった。そして今度はヴィヴィオに投球体制に入った。

「44スクエアアアアアアアアアア！」

「うああああああああ！！！」

エネルギーが波打ち44スクエアがヴィヴィオにヒットした。そしてマグナムエースはGZのパックを取り出し44ソニックのエネルギーを込めた。

「何をする気……」

マグナムエースは外壁を引きちぎり即席のスティックを作った。

「44ソニック・ショット！！！」

「うああああああああ！！！」

ヴィヴィオに44ソニック・ショットがヒットする。そしてマッハ

キャリバーを構えるとスバルと同じ構えに入った。

「それは・・・」

「ライトニングバスターアアアアアア！！！！」

スバルと共に磨き合い生み出された技。ライトニングバスターがスバルにヒットした。三人が動けなくなるとマグナムエースは叫んだ。

「思い出せ！スバル！お前は多くの人の命を救いたかったんじゃないのか！？」

「くう！」

「お前のその心は！そんなプログラムで書き換えられる程度のものだったのか！？」

そして今度はギンガを見た。

「ギンガさん！あなたのスバルたちへの思いはその程度のものだったんですか！？優しかったあなたを取り戻してください！！！」

「くう！」

そして今度はヴィヴィオを見た。

「ヴィヴィオ！そんなレリックなんかに負けるな！！君への戒めはGZが解いてくれた！後は君が打ち勝つだけだ！！！」

「・・・マグナム・・・エース・・・」

必死に抵抗を試みるヴィヴィオ。そして三人は立ち上がった。

「みんな・・・」

その瞬間スバルは構えた。

「ターゲット・・・マグナムエース！！」

スバルはマグナムエースに向かって跳んだ。

「・・・IS起動・・・振動破碎」

「ぐおあああああああ！！！」

まともに受け止めてしまったマグナムエースはその場に倒れてしまった。

「破壊確認・・・！！」

マグナムエースの破壊を確認したスバルはその場を去ろうとした瞬間一つの気配に気付いた。なんとマグナムエースが立ち上がった。

「な・・・」

スバルには理解が出来なかった身体のダメージは既に限界を超えており尚且つ各パーツの破損もひどい上マグナムエース自身も人間で言う痙攣を起こしながら立ち上がっていたからだ。そして何よりもマグナムエースの命とも言える肩の破損がひどかった。

「なぜ・・・立つ・・・お前の身体はもう限界のはず・・・その腕も」

「倒れるわけにはいかない・・・俺は諦めない!!・・・たとえばこの腕と引き換えになろうと・・・俺は何度でも立ち上がる・・・お前の魂を呼び戻すまで何度でも!!・・・俺とお前が立っている限り何度でもだ!!」

マグナムエースはグローブをスバル達に向けた。

『ははははは!! 貴様一人ではなにができる!!』

スカリエッティは高笑いをした。そこにはスバルがギンガがヴィヴィオがいる。マグナムエース一人ではどうしようもないその時。

風が吹いた。

「・・・まさかシルバーキャッスルがこれだけだと思うのか？」

『誰だ！？』

突如響いた声にスカリエッティは周囲を見回した。

「・・・かつてゴールド三兄弟がクアットロに言っただ・・・
シルバーキャッスルと闘った者は全てシルバーキャッスルだと」

スバル達が見上げると二人のリーガーが立っていた。一人はサッカー、もう一人はホッケーリーガーだった。

「・・・ファイター・・・兄弟・・・」

スバルがつぶやくとファイター兄弟ことファイタースピリッツ、ファイターアローはマグナムエースの元へ降りた。

「に・・・兄さん・・・」

「速くあの子の心を取り戻せ」

「二人は俺たちが引き受ける」

ファイタースピリッツはギンガ、ファイターアローはヴィヴィオの前に立ちはだかった。

「・・・お前は」

「・・・ギンガ・ナカジマ、ヴィヴィオ、我々と共にいい戦いをしよう」

「なに!？」

「いい戦いとはいい試合をすることだ」

「きつとお前にもわかる!」

「なにを言っているんだ!!」

ファイタースピリッツはギンガに向かって投球体制に入った。

「エックス! サンシャイン!!」

ファイタースピリッツの足のタービンが回転し凄まじいエネルギーを生み出した。

「リミテッドエディション!! バージョン?!?!」

ファイタースピリッツから投げられたボールが巨大なXを描きながら回転した。

「く! うああああああああああ!!」

ギンガの身体に渾身のエックスサンシャインがヒットするとギンガはそのまま倒れこんだ。

「G Z・・・お前の想い・・・受けたぞ」

ファイターアローはG Zの想いが込められたパックを拾い上げた。

「はあああああああああああ!!」

ファイターアローの渾身のショットがヴィヴィオに襲い掛かる。ヴィヴィオはレリックに抵抗するべくその場で静止した。

「G Z・・・助けて・・・」

ヴィヴィオにG Zの想いが込められたパックがヒットする。

「あああああああああああああ!!」

体内のレリックが破壊され倒れるヴィヴィオをファイターアローは受け止めた。するとヴィヴィオの身体は子供に戻った。

「マグナムエース・・・後はお前の番だ」

その言葉を聞いた瞬間マグナムエースはマッハキャリバーをスバルに向けた。

「行くぞスバル! 正々堂々! 真正面から勝負だ!!」

「くう!!!」

身構えるスバル。そしてマグナムエースはマツハキヤリバーに全ての思いを・・・道を切り開いてくれた仲間の思いを込めた。

「この一球で完全に思い出させてみせる……！」

マグナムエースの身体にシルバーキャッスルとティアナたちの魂が乗り移った。

「お前の本当の魂を……！！！！」

スバルは身構えた瞬間マグナムエースはマツハキヤリバーを構えた。膨大なエネルギーが聖王のゆりかごから天を貫いた。

「うおおおおおおおおおおおおお！……俺の全てをこの
 おおおおおおおお！……一球に注ぎ込む……」

「うおりやあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

「

マグナムエースのメイン回路に無限のエネルギーが蓄えられ、コロキットが無限のエネルギーを生み出していく。そして誰もがマグナムエースに銀河を見た。

510

高町なのは、リインフォースに伝えたマグナムエースの心。

「これが心の・・・アステロイドキャノンだああああああああああ！！！！」

アステロイドキャノン・・・それは心により限界のない技。膨大なエネルギーが籠められたマツハキャリバーが複雑な軌跡を描いた瞬間いくつもの流星の様な彗星がスバルに降り注いだ。

「
! ? ? ? ? ?
」

回避しようとするスバルだが身体が言うことを聞かないそしてある体制に入った。

「なんだ！？この構えは！？」

キャッチャーの体制に入るスバル。そしてアステロイドキャノンを受け止めた。

「う！う！うあああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！！！」

膨大なアステロイドキャノンのエネルギーがスバルを飲み込んだ。

「あああああああああああああああああああ！
！！！！私にはあああああああ！！私にはあああああああ
あああああああああああ！！！！」

スバルの身体の中に膨大な思いが注ぎこまれる。
エネルギーが晴れるとスバルはそのまま動かなくなってしまった。

スバルのライトニングバスターがガジェットたちを破壊した。

「スバル・・・元に戻ったのか」

マグナムエースに駆け寄るスバル。

「マグナムエース！！ごめん私！」

「気にするな・・・こうして元に戻れたんだ」

スバルが元に戻ったことに微笑むマグナムエースはそのまま機能停止した。

『何故だ！？何故元に戻った！！完全にプログラムを書き換えたはず！！』

「マグナムエースが言ったでしょ・・・たどえプログラムを書きかえったって絆を忘れたりしないって！！」

「馬鹿な・・・高々機械の分際で・・・なんなんだ・・・アイアンリーガーとは一体！！」

天才と呼ばれたスカリエッティ。だがその合理的考えではアイアンリーガーという不確定要素を理解することができない。その時だった。

「な・なんだ！」

ファイターアローが突然の地震を感じ取った。

「地震？」

「馬鹿な！ここは空の上だぞ！！」

『ふふふ・・・』

「スカリエッティ？」

『破壊してやる・・・アイアンリーガーも世界もこの世も！！』

終に気が狂ってしまったスカリエッティ。聖王のゆりかごの全エネルギーを放出しようとしている。

「正気か！」

『貴様らアイアンリーガーを消す！！アイアンリーガーが消えれば・・・アイアンリーガーが消えれば・・・私の勝ちだ・・・私の』

アイアンリーガーそのものに憎悪するスカリエッティ。

「奴め・・・完全に狂ったか・・・」

ファイタースピリッツはギンガを抱き上げファイターアローもヴィオを抱き上げた。

「早く脱出するんだ！スバル！マグナムエースを頼む！！」

「え？」

スバルの隣で機能停止しているマグナムエース。

「今度こそ本当の意味でマグナムエースを助けてみる」

「ファイタースピリッツ・・・」

ファイタースピリッツの言葉にスバルはマグナムエースを助けようとするがどうしていいのかわからない。その時。

（スバル・・・）

「え？」

どこからともなく声が響いた。そしてその声には聞覚えがあった。

（スバル・・・）

「誰！？どこにいるの！？」

（受け入れなさい・・・もう一度マグナムエースを・・・）

「え？」

（あなたが受け入れればマグナムエースを救うことができる）

「・・・受け入れる・・・」

〈相棒！〉

「マッハキャリバー！」

「マグナムエース達は私に魂を込めました！後はあなたの魂を燃やしてください！！奇跡は起こるはずです！！」

「わかった・・・」

スバルは集中した。

「マグナムエース！融合^{ユニオン}」

その瞬間マグナムエースの身体が微粒子となりスバルの身体に吸収された。スバルの上半身に赤い鎧が構築されその体内にマグナムエースのココロキットとメイン回路が宿った。

マグナムエースとスバルがもう一度一つになった。

スバルは機械の身体と人間の心を持った新生命体を上回った。マグナムエースから教えられた諦めない心と本当の魂が奇跡の融合を呼び起こした。

「マグナムエース！」

（スバル・・・これは・・・）

突然起きたことにマグナムエースは驚いていた。

「やった！マグナムエース！！」

すると再び声が響いた。

（やったわね・・・スバル）

「え？」

（大きくなったね・・・）

「お母・・・さん・・・」

スバルが呟くと声はその存在を消してしまった。

ドーン

「どうした！？」

スバル達が脱出を試みようと最終ステージを出ようとした瞬間ボ―シップが突っ込んできた。

「待たせたな！」

「ヴァイス陸曹」

「おいしい所に良い男は現れるってね！」

「陸曹！調子に乗りすぎです！！」

右肩にギブスはめたティアナに頭はたかれるヴァイス。

「ティア！」

「全く！ようやく元に戻って！この馬鹿スバル！」

「「スバルさん!!」」

「エリオ・・・キャロまで・・・」

「元に戻ってよかったです!!」

「スバルさん良かった・・・良かった」

エリオとキャロの言葉に涙ぐむスバル。

「マグナムの奴助け出したんだな」

「良かったぜ」

「ベリーウエルネ!!」

「あたしらも忘れんな!!」

ウインディ達もボーシップに乗っていた。そしてナンバーズたちもだった。

「みんな無事よ!! さっさとボーシップに乗って!!」

ファイター兄弟がギンガとヴィヴィオを抱えながらボーシップに乗り込むがスバルは乗り込もうとしない。

「スバル! どうしたの!？」

「ごめん・・・私・・・やることがある」

「全く・・・絶対に勝ちなさいよ!!」

「うん・・・アステロイドロード!!!」

ウイングロードの強化版アステロイドロードを展開しスバルは聖王のゆりかごの前に立った。

「ふん馬鹿め・・・ゆりかごと撃ち合うつもりか？無謀な」

スカリエッティが聖王のゆりかごの力を解放しようとコマンドを入力するが聖王のゆりかごは受け付けない。

「なに!?!どうした・・・」

するとゆりかご内のガジェット達が自らのエネルギーをゆりかごに送った。

「どういうことなんだ!!」

スカリエッティは画面を見た。そこにはデータが現れた。

『現状の我々のエネルギーでは奴に勝つことは不可能・・・だがガジェット・ドローン全てのエネルギーを吸収すれば勝利する可能性あり・・・』

スカリエッティの命令を無視して勝手に行動を始める聖王のゆりかごとガジェット。

「馬鹿な・・・ゆりかごやガジェットたちまで・・・一体!?!」

聖王のゆりかごは目の前のスバルと勝負するべく全エネルギーを開放した。正面から受けて立つスバル達。

「いくよ！マグナムエース！マッハキャリバー！！！！」

（ああ！！）

へあなたに命を預けます！

「ありがとう！はああああああああああああああああ！！！！！！」

スバルの身体から魔力と心の無限のエネルギーが溢れ出した。マグナムエースのココロキットから生み出されるエネルギーがマッハキャリバーのメイン回路を通しスバルの身体中にエネルギーが満ち溢れている。

「いけ！スバル！」

「頼んだぜ！！」

「ミー達是一緒ネ！！」

「・・・・・・スバル殿」

(・・・任せたぜ)

「スバル！」

「スバル！」

「スバル！！」

「行きなさい！スバルウー！！」

スバルの心にシルバーキャッスル・ティアナ・エリオ・キャロ・ナ
ンバーズ・全ての人の魂が宿った。

「受け取ったよ・・・皆・・・これが私たちの心の！！！！」

へ（「アステロイドバスターだああああああ！！！！！！！！」）へ

スバルの限界を超えた技。みんなの魂と心で生み出された限界のな
い技が流星を描き聖王のゆりかごを光が飲み込んだ。後に現れたの
は全ての武装が使用不可能になっただけの聖王のゆりかごそのゆり
かごはゆっくりと安全地帯に着陸していく。

「や・やった」

するとスバルは力を使い果たすとボーシップまで落下した。

「スバル!!」

全員が甲板に落ちたスバルを迎えに行くとそこには二つの影があった。

「マグナムエース!スバルは!？」

「大丈夫だ・・・眠っている・・・」

マグナムエースの腕の中でスバルは穏やかな顔で眠っていた。

こうして後JS事件と呼ばれる事件は終幕した。

第三十三話 蘇れ魂の友よ（後書き）

あれから数ヶ月俺たちは元の世界に帰るための準備をしていた。そんな中陸士部隊から要請が。俺たちにできることをする

次回！疾風アイアンリーガーStrikers 地上最大のキックオフ

正々堂々！試合開始！

第三十四話 地上最大のキックオフ

あれから数ヶ月の時が経った。

JS事件の終幕。それによるナンバーズの更生プログラム。そして機動六課の解散

・・・そして

第三十四話 地上最大のキックオフ

訓練スペース

「はあああああああ!!!!」

「ぬ!!!!」

シグナムのレヴァンティンを受け止める十郎太。その姿は生き生きしていた。

「やるな・・・それでこそ私の見込んだ剣士だ」

「シグナム殿・・・お主の剣に以前のような禍々しい物は無い」

「そうか・・・私は貴様を目標にしてきた・・・だから私は貴様を超える!!!!行くぞ! 極十郎太!!!!」

「勝負!!!!」

シグナムと十郎太は決着をつけるべく向かって行った。

「GZ！私ね！なのはままの子供になるんだ！」

「そうかおめでとう！」

ヴィヴィオの嬉しそうな顔をGZは見て笑っていた。そしてヴィヴィオはいそいそと何かを作っていた。

「何を作っているんだ？」

「えっへっへっ内緒♪」

とGZは楽しみに待つことにした。

「シャマル先生これで良いですか？」

「ブルアーマーさんありがとう」

「いえ。お世話になったので」

「そうね。優秀なアシスタントが居なくなるのは寂しいわ」

「俺もです」

シャマルはブルアーマーとの別れを悲しむのだった。

「エリス。俺達と来ないか？」

ウインディがエリスを自分達の世界に誘っている。

「うううん。私はミッドチルダでアイアンリーグを築いてみせる！」

「Oh！楽しみにしてるネ！！」

「僕も試合が出来る日を楽しみにしてるよ」

「うん！でも忘れないで！私はシルバーキャッスルのエリスだよ！」

「何今更そんな事言ってるんだ。俺達はもう仲間じゃねえか！」

ウインディの言葉に笑顔になるエリス。

スバルとマグナムエースは六課の訓練スペースに来ていた。

「・・・機動六課の解散か・・・」

「ああ」

「マグナムエースともお別れなのかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スバルの言葉にマグナムエースは答えない。

「ねえいつその事・・・残らない？」

するとマグナムエースは答えた。

「スバル・・・残念だがそれは出来ない」

「え？」

「・・・だが忘れないでくれ・・・俺たちの心には同じ風が吹いている」

「同じ・・・風？」

「ああ、もし君が本当に困った事があるなら、俺は必ず駆けつける、必ず力になる」

「・・・マグナムエース」

するとスバルの通信端末がなった。

マグナムエース達シルバーキャッスルは陸士部隊まで来た。

「みんな！」

マグナムエース達を呼び出したギンガが駆けつけた。

「ギンガさん身体の方は？」

「おかげ様で。効いたわよマグナムエースの球」

と笑いが起きた。そして食堂に集まったリーガー達。

「それで俺達に頼みとは一体？」

「単刀直入に言うとなンバーズの更生プログラムを手伝ってほしいの」

「ナンバーズってセイン達ネ！」

「更生ってあいつらそんなもん必要なのかよ？」

ウインディの言葉に難しい顔をするギンガ。

「理由はどうあれ・・・彼女達はスカリエッティに作られた・・・だから恐れる人たちも多いのよ」

「複雑だな」

「確かに闇の書だった私もまだ恐れられている」

「何人かの子はそれが原因で心を閉ざしちゃって」

その言葉を聞き捨てられないリーガー達。

「そこで皆さんにお願いが・・・私達ナンバーズチームとサッカーをしてもらいたいんです」

「サッカーを？」

「はい・・・更生プログラムを放棄しなかった子はシルバーキャスルと試合をした子達です・・・だから」

「俺達と試合をすれば」

「はいお願いします!」

ギンガがリーガー達に頭を下げた。するとマグナムエースが答えた。

「アイアンリーガーたるもの挑戦された試合は必ず受けます!」

「それじゃあ!」

「へ! 良いぜ! 俺達で良いなら」

「ウインディさん」

「ただし俺達もメンバーを揃えたい・・・それまで待つてもらえませんか?」

「わかりました」

ギンガの元を離れ機動六課に戻るとマグナムエース達はメンバーを集めた。

マグナムエース、ウインディ、リュウケン、ブルアーマー、十郎太、トップジョイ、GZ、エリス、ラインフォース。九人はいるがサッカーは11人でやるスポーツ。後二人足りなかった。

「中々見つからないな・・・」

機動六課解散の為色々準備している六課。メンバーが見つからない中スバルが挙手した。

「マグナムエース・・・」

「ん？どうした？スバル」

「私・・・マグナムエースと一緒に試合したい！！」

「スバル・・・」

「私達も忘れないでね」

マグナムエースの前にティアナ、エリオ、キャロが現れた。

「みんな・・・」

「水臭いわよ。私がチームシルバーキャッスルのリーダーなんだからね・・・」

「僕だってマグナムエースさんと一緒に試合したいです」

「私だって！！」

「決まったな・・・メンバー・・・」

ウインディの言葉にマグナムエースはこのメンバーで試合をすることにした。

翌日

陸士部隊に特設されたスタジアムのフィールドにシルバーキャツス
ルとナンバーズが並んでいた。

「マグナムエース！融合^{ユニゾンイン}！！」

スバルとマグナムエースが一つになりスバルのバリアジャケットの
上半身がマグナムエースのように赤くなった。

「良いのか？スバル」

身体の主導権は今回はマグナムエースにある。

（うん！これならマグナムエースと一緒に試合できる！）

スバルの言葉にやれやれといった様子のマグナムエース。

スターティングメンバー

シルバーキャツスル

マグナムエース&スバル・ナカジマ

マツハウインディ

キアイリユウケン

ブルアーマー

極十郎太

トップジョイ

GZ

エリス

リインフォース
ティアナ・ランスター
エリオ・モンデリアル

ナンバーズ
ギンガ・ナカジマ
ドゥーエ
トーレ
チンク
セイン
セツテ
オットー
ノーヴェ
デイエチ
ウエンディ
ディード

「そうかんやな」

観客席からはやてが見ていた。この試合、シルバーキャッスルの試合を見たいという管理局員で一杯になった。

「すごい観客ですね」

「アイアンリーグもこんなのか？」

「アイアンリーグ熱狂するってこういう事ね」

「GZが勝つもん!!」

観客席から見守るシグナム、ヴィータ、シャマル、ヴィヴィオ。ナンバーズは柔軟体操をしている。

「良いか・・・これはアイアンリーグのルール・・・だから・・・」

「わかってるよトーレ姉!」

トーレ達は何かをする気だ。

「ふふふ・・・あの機械たちに負けるわけがない」

獄中でスカリエッティ、ウーノ、クアットロがモニターで試合を見ていた。フェイトも監察できていた。

ボールがセットされる・・・シルバーキャッスル側のボールとなった。

「キックオフだ!!」

「行くぜ!!」

試合開始のホイッスルが鳴るとウインディがボールをキープした。

「勝負っス! マッハウインディ!!」

「へ! させるかよ!!」

ウエンディがスライディングでボールを奪取しようとするがウインディはボールを渡さない。

「行くぜ!!」

ウインディは加速したあまりのスピードについていけない・・・その時。

「エリアルレイヴ!!」

「ぐああああ!!」

「ウインディ!!」

ウエンディのエリアルレイヴがウインディにヒットした。

『ナンバーズ汚えぞ!!』

『そうだ! そうだ!』

観客席からナンバーズのラフプレーに観客席からブーイングが響く。

ウエンディはそのままボールをキープした。

「いっけえ!」

ディエチに向かってウエンディがパスを飛ばしディエチが受け取ろうとしたとき、ボールがカットされた。

「オウ!ソーリーネ!」

トップジョイが足のジョイントを利用したカット。

そのままボールを拾うティアナはドリブルでボールを運んだ。

「行って!!」

ティアナのセンタリングにウインディとリインフォースが食らいついた。

「行くぜリインフォース!」

「分かった!!」

ウインディとリインフォースが回転した。

「「ダブルマッハスピーン!!」」

ウインディとリインフォースの合体シュートがナンバーズ側のゴールを襲う。ナンバーズのゴールキーパーはノーヴェエ。

「真っ向から受け止められない・・・なら」

ノーヴェエは空手の構えを取り力を収束させた。

「竜!鉄拳!!」

ノーヴェエの竜鉄拳とダブルマッハスピーンがぶつかる。

「はあああああああ!!激竜拳!!」

ノーヴェの檄竜拳を上乗せさせダブルマツハスピンを弾き飛ばした。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「流石だな！ノーヴェ！」

「お前こそな！」

ノーヴェはそのままギンガにパスを送った。

「よし！」

「ギンガさん・・・勝負！」

マグナムエースがギンガに強襲した。

「く！は！！！」

「であ！うおお！」

技と技のボール捌きのぶつかり合いになる。

「流石ですね・・・マグナムエース」

「ギンガさんこそ！」

「ハイパスパス！」

セインがボールをキープした。

「通さないぞ!!」

リュウケンがセインに強襲するが。

「ディープダイバー!!」

セインは華麗なボール捌きでリュウケンの後ろにパスを送りディープダイバーでリュウケンを潜り抜けボールを受け取った。

「凄い・・・ISを利用して・・・」

エリスはセインのプレーに感動した。

「勝負ネセイン!!」

「トップジョイ!!」

セインはセンタリングをあげた。

「「ジャアアアアアアアンプ!!」」

トップジョイとセインのジャンプがぶつかりボールを奪い合う。

「しまった!!」

「十郎太!!」

「精神波! 鋼の如し!!」

十郎太がパスを受け取りドリブルをしようとしたその時。

「ライドインパルス!!」

「ぐああああああ!!」

トーレのライドインパルスが十郎太にヒットした。

「トーレ姉! 何しやる!!」

「うるさい! 勝てばいいんだろ!!」

「なに!? 放せ!!」

GZをディエチ、オットーが羽交い絞めにする。

「スローターアームズ!!」

「ぐああああああ!!」

セツテの攻撃を受けるGZ。

「GZ おお!!」

ヴィヴィオの叫びが木霊する。

「・・・レイストーム」

オットーの拡散砲がシルバーキャッスルにヒットしていく。

「ぐああああ!!」

「もらった!!」

トーレのシュートがブルアーマーを襲った。

「どりゃあああああああ!!」

ブルアーマーのローラーがまわりシュート受け止めるが・・・

「ヘヴィバレル!!」

「ぐおあああああ!!」

ボールを受け止めるブルアーマーは狙撃されボールを放してしまった。

1点ゴールが決まってしまう。倒れるシルバーキャッスルのメンバー。

ピーーーーー!!

ホイッスルが響き前半戦が終了した。

ハーフタイム

シルバー陣営では傷ついたスバルとマグナムエースが治療を受けていた。ラフプレーの集中に

「くそ！あいつら！！」

ナンバーズ達のラフプレーにウインディが怒りをあらわにする。

「彼女達のプレーは確かに適格だ・・・だが・・・」

「あいつ等は俺達を試合で壊すことしか考えていない」

GZの言葉に頷いた。

「サッカーを楽しむ気持ちが感じられぬ」

十郎太言葉に頷くマグナムエース。

「とりあえず・・・マグナムエースは下がった方が・・・」

「いやこのままプレーさせてくれ」

「なんで？」

「俺が下があれば今度はウインディがやられる」

「見せてやろうぜ！俺たちの戦いを！！」

ウインディの言葉に後半戦に挑むシルバーキャッスル。

ナンバーズ側

「お前らなんだよあのプレー!!」

ノーヴェが怒りをあらわにしていた。そのノーヴェをあざ笑うトーレ。

「お前は何を言っている。我々の目的はシルバーキャッスルを破壊することだ」

「ふざけんな! あたしらはサッカーやってんだぞ!!」

「お前のほうが異常じゃないッスか?」

「なに!?!」

「確かにお前はキアイリユウケンのせいで変わった・・・」

「ちげえ・・・あたしは変わってねえ!!」

拳を叩きつけるノーヴェ。ギンガは見守っている。ナンバーズたちが己の答えを見つけることを信じて。

監獄

アイアンリーグを見ていたスカリエッティ。

「やはり・・・ただの機械だな・・・私の足元にも及ばない」

「それはどうかな?」

「なに?」

「勝負はまだまだこれからだよ」

フェイトの言葉に疑問を感じた。

後半戦

既にボロボロの状態のシルバーキャッスル。立っているのもやっとだった。

ナンバーズ側のボールだった。

「行くぞ!!」

ディエチのドリブルがそしてトーレのライドインパルスがGZを襲う。

「くううううううう!!」

GZはライドインパルスを受け止めていた。

「なに!?!」

「くう!この程度の攻撃どうってことないぜ!!」

「一度でダメなら・・・」

ライドインパルスの連撃がGZを襲った。

「ぐああああああ!!」

トーレの連撃で沈むGZ。

「・・・消えろ・・・レイストーム」

オットーのレイストームを食らうシルバーキャッスル。そしてデイエチはゴール前でシュート体制に入った。

「・・・通さない!!」

「「おう!!」」

エリス、十郎太、エリオが壁になる。

「邪魔だ!! 失敗作!!」

デイエチのシュートが放たれエリスはボロボロの身体でボールの勢いを殺した。

「どりゃあああ!!」

受け止めるブルーアーマー。だが倒れてしまった。

「ブル! ごあああああああ!!」

マグナムエースに襲い掛かるトーレとセツテ。

「マグナム! スバル! がああああああ!!」

ウェンディのエリアルレイヴでやられるウインディ。

「がああああああああ！！」

「うあああああああああ！！」

次々とやられてしまうシルバーキャッスル。そして誰も動かなくなってしまう。

「ぐ．．．あ．．．．．」

「く．．．．．」

「．．．あ．．．あ．．．．」

ナンバーズのラフプレーに倒れて起き上がらないシルバーキャッスル。

「く．．．．リュウケン！！！」

ゴールポストからノーヴェがリュウケンに向かって叫んだ。

「聞こえるかりュウケン！！お前を倒すのはあたしだ！！！！こんなところでくたばってんじゃねえ！！！！」

「う．あ．．」

蹲るリュウケン。

「何故だ！？何故奴らはあんなボロボロの身体で立ち上がろうとする・・・何故立ち上がることが出来る」

「それは・・・彼らがアイアンリーガーだから」

「なに！？」

フエイトの言葉にスカリエッティは再び驚いた。

「高々機械の分際で！」

「あなたも彼らと同じ力を持つ人を生み出したじゃない・・・」

「なに？」

スカリエッティはシルバーキャッスル側で蹲りながらも立ち上がるうとしているエリスを見た。

「馬鹿な・・・彼女は失敗作のはず・・・改造もされないで」

「そこが彼女の凄いところじゃない・・・」

「え？」

「もちろん・・・ナンバーズ達にも可能性はある・・・彼女たちは進化できるんだよ」

「くう」

奥歯を噛むスカリエッティ。

「みんな・・・みんな!!」

「あ! ヴィヴィオ!!」

はやての制止を振り切りヴィヴィオが走った。

(みんな! 私は皆に何も出来ないけど・・・負けないで! 皆!!!!)
ただひたすらにみんなのことを思い走るヴィヴィオ。

「みんなあああああああ!!!!」

ヴィヴィオが観客席から大きな旗を広げた。それはヴィヴィオが思いを込めて作ったシルバーキャッスルの旗だった。

「みんなあああああああ!!」

ヴィヴィオの叫びに立ち上がるGZ。

「GZおとおお!!」

「くう・・・あれを見て立ち上がらなかったらアイアンリーガーじゃないぜ!!」

GZを筆頭に次々と立ち上がるシルバーキャッスル。

「馬鹿な・・・たかが旗一つで・・・」

獄中のスカリエッティは驚いていた。アイアンリーガーを合理的に

理解できない。

「ありがとう・・・ヴィヴィオ・・・皆行くぞ!!」

「「「「「「「おう!!」「」「」「」「」

シルバーキャッスルの怒涛の反撃が始まった。ボールはまだブルーマーが持ったままだった。

「トップジョイ!!」

「十郎太あ!!」

「リュウウケン!!」

「GZおお!!」

「エリス!!」

「リインフォース!」

「ウインディ!!」

「頼むぜ!マグナム!スバル!!」

光の軌跡を描いたダイレクトパスがマグナムエースに送り込まれた。

「ライトニングクラアアアッシュ!!」

「なに!!?」

シルバーキャッスルのライトニングクラッシュがナンバーズのゴールに炸裂した。ノーヴェはカットする間もなかった。

「くっそ!!」

トーレが再びラフプレーを仕掛けようとするが。

「マッハキャリバー!!!!」

>了解!!<

マッハキャリバーのスピードでトーレをかわすマグナムエース。再びセツテ、ディエチ、オットーがラフプレーに走ろうとするが・・・

「でえ!!」

「ぐう!!」

GZ、十郎太、トップジョイがガードした。

「であああああああああ!!」

再びマグナムエースのシュートが炸裂する怒涛の反撃だった。あつという間に逆転してしまったシルバーキャッスル。

「よし!!行くぞ!!」

『おう!!』

シルバーキャッスルが再び反撃しようとするタイムが起きた。

「くっそ・・・」

トーレとウエンディが奥歯を噛んでいる。自分達の攻撃をいくらしても立ち上がるシルバーキャッスル、すると・・・

「・・・このままで良いのか？」

「ノーヴェ？」

「試合でも戦いでも負けっぱなしでいいの？」

「セイン？」

「やつらに勝つにはもうチームワークしかない」

「チンク・・・ふざけるな！！やつらを破壊すれば」

「それじゃ済みません」

「・・・デイド」

ノーヴェ、セイン、チンク、デイドの言葉に困惑するトーレ。

「姉は勝ちたい・・・シルバーキャッスルに」

「あたしだって・・・負けっぱなしで終わりたくねえ！！！！」

「あたしは試合を楽しみたいし・・・けど・・・勝ちたい！！」

「私も負けるのは嫌です」

するとギンガが。

「私達のチームワークを見せましょう」

「そんないきなり出来るわけが・・・」

「出来るわよ・・・だってずっと一緒に居たんでしょ？それに角突き合って来たんならもう磨り減っているはず・・・」

「このままシルバーキャッスルに負けたままで一生終わらせるのかよ！！」

ノーヴェの言葉を獄中のスカリエッティも聞いていた。

「・・・勝ちたい」

「セツテ？」

「私はシルバーキャッスルに勝ちたい！！」

「僕も・・・ブルアーマーに勝ちたい！！」

「オットー・・・」

「勝ちたい・・・私は勝ちたい！！」

「ディエチ・・・」

「ここまで来たら勝って終わらせましょう」

「・・・・・・・・・・」

ドゥーエの言葉に歯を噛むトーレ。だがナンバーズ達は気づいていない自分達の中に目覚めつつある熱きものに・・・そして

『みんな!!』

「ドクター？」

獄中のスカリエッティが通信を送ってきた。

「ドクターどうしたんですか？」

『やかましい!! ここでシルバーキャッスルに負けるな!! 君達はやつらより優れているはずだ!! このまま敗北のまま終わらせて良いのか!! 私はそんなにやわに作った覚えは無い!!』

スカリエッティの言葉を聞いたトーレ達は。

「やろうぜ・・・トーレ姉!!」

「ああ! このまま! 負けて終わるか!!」

ナンバーズが決意したと同時に身体の中から未知のエネルギーがあふれ出した。

「おおおおおおおおお!!」

「でああああああああああ!!」

タイムが終了するとナンバーズ達の反撃が始まった。ラフプレーの無いチームワークをするつもりだ。

ナンバーズのプレーが変わったことにシルバーキャッスルは勿論観客も驚いていた。

「でああああああああああ!!」

マグナムエースがトーレにトラップを仕掛けるがトーレは技でかわした。

「・・・」

トーレのプレーに何かを感じたマグナムエース、それに応えることにした。

「セツテ!!」

トーレがセツテにパスを送る。今度は十郎太がセツテに仕掛けた。

「十郎太・・・」

「セツテ・・・お主達のプレーに魂が宿り始めたとみた・・・某それに精一杯応えよう・・・」

「行きます!!」

十郎太とセツテの勝負が繰り広げられる。そして十郎太を抜いた。

「ようし良いぞ!! その調子だ!!」

スカリエッティはヒートアップしていた。ウーノとクアットロはドン引きしていた。

「ノーヴェ!!」

「おりゃああああああああ!!」

ゴールキーパーのはずのノーヴェが上がってきた。

「行くぜ!! ジェッドエッジ!! リボルバーアタック!!」

ノーヴェの渾身のシュートが放たれる。

「ぬおおおおおおお!! どりゃああああああああああああ!!」

ノーヴェの渾身のシュートを受け止めるブルーアーマーだが破壊のためではないシュートのパワーに押される。

「ぐああああああ!!」

ボールごと吹き飛ばされゴール枠を破壊した。

「ブル!!」

「ぐあ・・・凄いパワーだぜ!!」

立ち上がるブルアーマー。そしてナンバーズは満ち足りた気分にな
っていた。

「なんだ・・・この気持ち」

「分からない・・・けど勝ちたい」

シルバーキャッスルを見るナンバーズ。

「勝負だ・・・力の限り」

ナンバーズを見るマグナムエース。

残り時間1分

第三十四話 地上最大のキックオフ（後書き）

俺達とナンバーズの戦い・・・決着は絶対つける！！そして俺たちは勝つ！！

次回！疾風！アイアンリリーガーStrikers 勝利への大行進
正々堂々！試合開始！

第三十五話 勝利への大行進

シルバーキャッスル、ナンバーズの戦いは残り時間あと1分だった。

第三十五話 勝利への大行進

「でいあああああああ！！」

マグナムエースのドリブルが冴える。

「ああああああああああああああああああああ！」

マグナムエースにノーヴェ、セツテが襲い掛かる。

「もらった!!」

セツテがマグナムエースのボールを奪い取りトーレにパスをした。

「行くぞ!!」

「おう！」

トーレがセンタリングを上げるとノーヴェが構えた。

「食らええええ!! シルバーキャツスル!!」

「十郎ウ太!!」

「リュウウケン!!」

「GZオオオオ!!」

「エリス!!」

「リインフォース!!」

「ウインディ!!」

「マグナム!!スバル!!」

「とあ!!」

ブルーアーマーから放たれたダイレクトパスが光の軌跡を描いた。

「あれは!!」

ギンガが構えた。

「ライトニンググラアッシュ!!」

マグナムエースから放たれたライトニンググラッシュを身体を張って受け止める体制に入るギンガとチンク。

「止めるわよ!!」

「分かった!!」

おお！！！！！！！！！！！

シルバーキャッスル全員ボールを受け止めた。

「くっ！！止めた！！」

凄く残念そうなスカリエッティ。試合に熱くなっているようです。

再びシルバーキャッスルの反撃ティアナのドリブルが冴える。

「リュウケン！！」

「オーケー！！」

ティアナからリュウケンにパスが出された。

「なにしている！！早くボールを奪い返すんだ！！ん？」

凄まじいテンションのスカリエッティを啞然と見ているウーノとクアットロ。

「え？ド・ドクター？」

「なにしている！！ぼさっとなしないで応援しないか！！君もだ！！真面目に応援しないとひどい目にあわせるぞおお！！！！」

「「が・がんばれーナンバーズ！」」

「「「ナンバーズ！！ゴーゴー！！ナンバーズゴーゴー！！」」」

「か・変われば変わるもんなんだね・・・」

「あの極悪人改心させちゃったよ・・・」

フェイトと刑務官がが啞然と見ている

するとフィールドのはやてが・・・

「風？」

風を感じ取った。

「十郎太！！風だ！！」

「ん！？わかった！！」

マグナムエースの指示に十郎太は風の入り口を探し始めた。残り時間は15秒をきった。

「そこだ！ウインディ！！」

「よし！でりゃ！！」

風の入り口に向かってシュートするウインディ。ボールが風の力で増幅する。

「リュウケン！！」

「よし！てええええええい！！」

ウィンディが空中に上げられるとマグナムエースがトップジョイの肩に乗り凄まじいジャンプを繰り返した。

「行くぜ！」

ウィンディの足に捕まるマグナムエース。

「マッハスピン！！大回転！！」

巨大な風車を描くと・・・

「くっ！ミストラルボンバーつか！！」

ウィンディの指示に防御体制に入るナンバーズ。

「うおおおおおおお！！！！」

ウィンディから放たれたミストラルボンバー。不死鳥がナンバーズのゴールに向かって羽ばたいた。

「だああああああああああ！！！！」

防御フィールドを張るナンバーズディフェンス。

「グアアアアアアアアアアア！！！！」

全員のフィールドがミストラルボンバーの威力を殺し・・・

「いけえ!! ノーヴェ!!!」

「おう! おりゃあああああああああああああ!!!」

トーレに投げ飛ばされるノーヴェはボールを構えた。

「ジェットエッジ!! ライジング!!!」

ノーヴェのシュートがシルバーキャッスルゴールに向かって飛んだその時。

「スーパーノヴァフォーメーションだ!!!」

「とお!」

「「でい!!!」」

「「はああ!!!」」

「「えい!!!」」

「どりゃあああああ!!!」

マグナムエース、ウインディ、リュウケン、ブルアーマー、十郎太、トップジョイ、GZ、エリス、リインフォースが円を描き9人同時にシュートする体制に入った。

「来るぞ!!!」

地上スレスレからカウンターシュート、スーパーノヴァが放たれた。

「はっ！」

シルバーキャッスルのスーパーノヴァがウエンディを掠めた。

「怯むな！！ 私たちもやるんだ！！」

「おう任せろ！！」

トーレの指令でノーヴェが突っ走った。

「あ！」

スバルが見るとノーヴェ、ディエチ、セツテ、オットー、ドゥーエ、ディードがスーパーノヴァ体制に入った。

「このボール死んでも止めるぞ！！」

「「「おう！！」」」

シルバーキャッスルのスーパーノヴァをスーパーノヴァで受け止めるナンバーズ。

「くうああああ」

「うあああああああ！！」

ディード、ディエチが吹き飛ばされる中ノーヴェが必死に踏ん張っていた。

「くうう！あたしたちの力見せてやる！！ウエンディ！！」

ノーヴェからパスが放たれた、

「セイン姉！！」

「トーレ姉！！」

スーパーノヴァからライトニングクラッシュに入るナンバーズ。

「凄いチームワークだ・・・」

ぶつかり合って生まれたチームワーク。観戦していたスカリエツェイが啞然としている。

「チンク！！」

「ギンガ！！」

ダイレクトパスが光の軌跡を描くがギンガの姿が無い。

「あそこ！」

スバルが指差すとギンガは遙か上空にいた。

「これが私たちの魂のシュートです！！」

ギンガから放たれたライトニングクラッシュがシルバーキャッスルに向かって飛んだ。待ち構えるブルーアーマー。

「今度は俺達の番だ！俺たちシルバーキャッスル全員の心のシュートで！決着をつける！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

マグナムエースの言葉にナンバーズの魂のシュートと真っ向勝負に入るシルバーキャッスル。

「「「はああああああああああああ！！」」」」

今度はブルーアーマー、ティアナ、エリオがスーパーノヴァ体制に入る。

「トップジョイ！！」

「十郎太！」

「リュウケン！」

「GZ！」

「エリス！」

「リインフォース！」

「ウインディ！」

「スバル！マグナアーム！！」

ブルーアーマーから放たれたダイレクトパスが五方星を描くとマグナ

ムエースとスバルが舞い上がった。

「たあああああああああああああああー!」

マグナムエースに銀河を感じるスバル。

「・・・アステロイド・・・キャノン・・・」

「スバル!行くぞ!」

「うん!」

シュート体制に入るマグナムエースとスバル。

「「これがシルバーキャッスルの!!!心の結晶だあああああああああああー!」」

心の結晶・・・ライトニングクラッシュ・ビクトリービーが解き放たれた。

グラウンドを飲み込みナンバーズのゴールに向かう。

「みんな!一歩も引くな!」

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」

ライトニングクラッシュ・ビクトリービーに飲み込まれるナンバーズ。

「うあああああああああああ！！」

「おおおおおおおおおお！！」

「あああああああああああ！！」

「「うあああああああああ！！」」

エネルギーが収まるとナンバーズのゴールにボールが突き刺さっていた。

試合終了のホイッスルと同時にボールが砕け散った。

結果は

3対2でシルバーキャッスルの勝利だった。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』

スタジアムから物凄い声援が生まれる。

「最高やったでえええええええええ！！」

「ヒューヒュー！！」

「GZおおおおおお！！」

はやて達の声援が湧き上がるとシルバーキャッスルはナンバーズに

歩み寄った。

「・・・マグナムエース」

マグナムエースはスバルの身体から分離するとギンガに手を差し伸べた。

「え？」

「すばらしい試合でした・・・俺を熱くさせてくれました」

「マグナムエース」

するとギンガは照れくさそうにマグナムエースの手をとりお互いの健闘を称えあった。

「ノーヴェ」

「リュウケン」

リュウケンもノーヴェに手を差し伸べた。

「次は勝つつスよ」

「へ！いつでも相手になるぜ！」

ウインディとウエンディが再戦を誓い合った。

「最高だったぞ！！」

「く・照れる」

「なんなんだこのモヤモヤ！」

GZの言葉に照れてしまうトーレとセツテ。

「ヘイセイン！ミートっても楽しかったネ！」

「けっけっけ！今度は凄くビックリさせるようなプレイしちやる！」

相変わらず仲の良いトップジョイとセイン。

「・・・十郎太」

「ふ・・・お主のプレイ・・・心がこもっていた」

十郎太の言葉が理解できないデイドだが何故か安らぐ。

「オットー最高だったぜ！」

「・・・僕は・・・その・・・」

目覚めかけた感情表現が上手くブルーアーマーに伝わらない。

「姉上！」

「あらあらちゃんとしたお姉ちゃんになっちゃった」

とチンクと一緒に喜ぶエリス。

「いい試合でした」

「こちらもな」

握手するドゥーエとリインフォース。

「和解したのか？なぜ？彼女達は敵のはず・・・」

「試合が終わったからお互いの健闘を称えあう・・・それがアイアンリーガーだよ」

奥歯を噛むスカリエッティ。

「くうううう！！覚えていろ！！私はいつか究極のアイアンリーガーを作って見せる！！私に出来ないはずが無い！！」

と言って奥に行ってしまったスカリエッティ。この後スカリエッティは監獄限定アイアンリーグのオーナーとなるのだった。

『皆！！サイコーだぜ！！！！』

祝福の声・・・フィールドで紙ふぶきが舞いシルバーキャッスルとナンバーズがお互いの健闘を称えあい笑顔になる中・・・

「マグナムエース・・・私は」

スバルがマグナムエースの姿を見つめ一つの決意をした。

第三十五話 勝利への大行進（後書き）

マグナムエース・・・あなたと出会ってからいろいろな事があった
よね・・・マグナムエースに助けられてばかりで・・・だから
私は！！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers シルバーキャツ
スル対機動六課

正々堂々！試合開始！

第三十六話 シルバーキャッスル対機動六課

なのは達との機動六課卒業模擬戦が終わり・・・

夜

「く!!く!!!!」

スバルが一人必死にバットを振っていた。その表情には鬼気迫るものがあった。

「く!!」

スバルの中にあるものは・・・

「私は・・・シルバーキャッスルと・・・マグナムエースと試合したい!!」

第三十六話 シルバーキャッスル対機動六課

「!!・・・!!」

スバルは必死にバットを振っていた。シルバーキャッスル・・・マグナムエースと勝負する為に消耗している身体で練習に励んでいた。

「あ！」

勢いあまりバットを投げてしまうスバル。

「いけない・・・」

スバルがバットを拾い上げようとしたときだった。

「なにやってんのよ・・・馬鹿スバル」

「・・・ティア」

スバルが落としたバットを拾い上げるティアナ。

「何やってんの？・・・なのはさんたちにボッコボコにされた後なのに」

スバルはティアナからバットを受け取ると答えた。

「私・・・マグナムエースと勝負したい！！」

「え？」

スバルの言葉に驚くティアナ。

「確かに・・・マグナムエースはずっと私達と一緒に戦ってくれた・・・けど」

「・・・けど？」

「・・・マグナムエースが居なくなったらどうするの？」

スバルの言葉に驚くティアナ。考えたこともなかった。マグナムエースが居なくなるそのときを。

「ずっとマグナムエースに頼ってるだけじゃダメなんだよ・・・だから」

次の言葉に絶句するティアナ。

「私はマグナムエースを超えなきゃいけないんだ!!」

マグナムエースを超える・・・その言葉がティアナの心に火をつけた。

「・・・スバル・・・あたしにもやらせて・・・」

「ティア？」

「あたしも・・・マグナムエースを超えたい・・・マグナムエースはあたしに44ソニックを教えてくれた・・・だから」

「ティア・・・うん！一緒にマグナムエースを超えよう！」

「私達もかませろ」

「「！？」」

スバルとティアナが振り向くとシグナムをはじめエリオ、キャロ、ヴィータ、フェイト、なのはが居た。

「全く・・・おめえたちだけにマグナムエースを倒させねえ」

「私は十郎太を超える・・・そしてマグナムエースも」

「僕だってマグナムエースさんと戦いたいです！！」

「マグナムエースさんを超える！！」

「機動六課の卒業・・・やっぱりマグナムエースさんを超えることだよ・・・」

なのはの言葉

マグナムエースを超える

それだけが機動六課全員に火をつけた。

そして機動六課はマグナムエースが一番得意なスポーツ・・・野球で挑戦する。

「マグナムエースさんの技って言ったら」

「やっぱり44ソニックだよね」

「前はあれに負けたけど・・・今度は勝つ!!」

「だったら・・・私が44ソニックを投げます!!」

「ティアナ？」

「マグナムエースに勝るか分からないけど・・・私の44ソニックで!!」

「よし！やろう！！」

『おお！！』

マグナムエースの44ソニックを攻略するべくティアナが44ソニックを投げ続けた。

機動六課はマグナムエースという大きな目標を超えるため大特訓を始めるのだった。

数日後

マグナムエース達シルバーキャッスルが元の世界に帰る日が来た。

「これでこの世界ともお別れか」

ウインディの言葉に少し寂しくなるシルバーキャッスル。

「寂しくなるね」

エリスも別れを惜しんでいる。今見送りに着ているのはエリスとリインフォースだけだった。

「大丈夫だ・・・遠く離れても・・・某達の心にはいつも同じ風は吹いている」

「エリス・・・俺達と一緒に来ないか？」

「うううん・・・私はこのミッドチルダでアイアンリーグを作る！」

「決意は固いようだな。頑張れよ！」

「うん！」

笑顔になるエリス。

「それにしても・・・主たちはどこに？」

リインフォースははやて達が見送りに来ないことに疑問を持った。

「皆色々忙しいんだろ」

「寂しくなるネ」

「俺も最後にヴィヴィオの顔を見ておけばよかった」

ブルアーマー、トップジョイ、GZも心中を語る。

「大丈夫だ・・・また逢えるさ」

「マグナム。お前スバルに挨拶しなくていいのか？」

「・・・ああ・・・また逢える」

マグナムエースの発言に呆れるウインディ。

「転送装置は何処に？」

「こっちのようだ」

十郎太が案内板で転移装置の場所を確認した。

「行くか」

マグナムエースは案内の通りに進んだ。正直別れの挨拶をしていなかったが悔いは残るがマグナムエース達は再び逢える日を信じた。

「着いた」

通路を抜けると広い空間に出た。

「真っ暗ネ？」

「どういうことだ？」

暗い空間シルバーキャッスルは暗視スコープに切り換えようとした時

バシャー！！

突然ライトアップされた。

「ここは？」

「野球の・・・スタジアム？」

マグナムエースが周囲を見たその時だった。

『ここで……選手の発表を行います!』

「?」

突如流れたのはアナウンスに驚くシルバーキャッスル。

『一番キャッチャー・・・スバル・ナカジマ。二番ショート・・・エリオ・モンデリアル。三番ピッチャー・・・ティアナ・ランスタ
ー・・・』

「これは・・・」

マグナムエースが電光掲示板を見ると次々に六課のメンバーが表示される。

「マグナムエース！」

スタジアムに立つはやてに目を丸くするシルバーキャッスル。

「・・・私達機動六課は・・・シルバーキャスルに挑戦します！」

「なに!？」

突然のことで混乱するシルバーキャツスル。

「マグナムエース！」

マグナムエースが振り返るとゴーグルを装着したスバルの姿があった。

「アイアンリーガーは挑戦された試合は絶対受けるんでしょ！」

いつもと違い物凄い剣幕のスバルに・・・

「やろうぜ！マグナム！」

「・・・ウインディ」

「ミーも思いっきり試合したいネ！！！」

「トップジョイ！」

「これが私たちシルバーキャッスルのこの世界の卒業試合だよ！」

「エリス」

マグナムエースが振り返るとブルーアーマー、十郎太、GZ、リインフォースは同じ気持ちだった。

「・・・わかった・・・この試合・・・受けよう！！！」

『おう！！！！』

シルバーキャッスルは意気込むがリインフォースだけは複雑だった。

「主・・・私は・・・」

「リインフォース・・・思うとおりにしたらええ」

「はい！」

そう言うとりインフォースはシルバーキャッスル側に入った。

メンバー

シルバーキャッスル

1番 セカンド マッハウインディ

2番 ファースト GZ

3番 ピッチャー マグナムエース

4番 ショート 極十郎太

5番 センター トップジョイ

6番 サード キアイリユウケン

7番 キャッチャー ブルアーマー

8番 ライト エリス

9番 レフト リインフォース

機動六課

1番 キャッチャー スバル・ナカジマ

2番 ショート エリオ・モンデリアル

3番 ピッチャー ティアナ・ランスター

4番 ファースト ヴィータ

5番 サード フェイト・T・ハラオウン

6番	セカンド	シグナム
7番	センター	キャロ・ル・ルシエ
8番	ライト	ザファイラ
9番	レフト	ヴァイス・グランセニック

オイルを給油し試合に備えるシルバーキャッスル。

そして

リーガー達同様ゴーグルを装着しバリアジャケット姿の機動六課は円になった。

「この試合・・・絶対勝って終わらせよう!!行くよ!!!!」

「「「「「「「おう!!!!」」」」」」」

スバルの号令に守備に付く機動六課チーム。

迎えるシルバーキャッスルの一番バッターはウインディだった。

ティアナはマウンドを慣らした。

「・・・今日は制限無しでとことんやるわよ・・・覚悟しなさい!!」

ティアナがピッチングフォームに入りスバルが構えた。

「44 おおおおソニック!!」

ティアナの渾身の44ソニックが放たれた。

「てえああああ!!」

「うおおおおおおおおおお!!」

ウィンディのセンサーが計算を始めるが追いつかず空振りしてしまった。

「なに!?!」

「てええええええああああああ!!」

再びティアナの44ソニックが放たれた。

「でああああああああ!!」

「うおおおおおおおお!!」

再び空振りしてしまうウィンディと44ソニックを受け止めるスバル。

(凄いぜ・・・マグナムの44ソニックに勝るとも劣らない)

「おりゃああああああああ!!」

「でああああああああ!!」

ウィンディが44ソニックを捕らえた。1塁に走るウィンディ。だが44ソニックのパワーに押されボールはサードに流れフェイトがキャッチすると1塁に向かい投げた。

「うおおおおおおお!!」

「おりゃあああああ!!」

ヴィータがボールをキャッチするとウィンディとぶつかった。凄まじい爆発が起こる。

「く!!」

ギリギリでベースから離れているウィンディ。

「アウトだぜ!!」

「へ!やるじゃねえか!!」

そう言うウィンディはベンチに戻った。

2番GZ

「来い!!」

「行くわよGZ!!」

ティアナがピッチングフォームに入った。

「44 おおおおソニック!!」

「ぐ!!!!」

44ソニックを捕らえるGZだがやはりファールになってしまった。
思うように打球が伸びない。

「うおおおおおおお!!」

「ぐ!!」

GZの渾身のスイングだが綺麗にライトに流れる。

「ておおおおおおお!!」

ザフィーラがキャッチするとGZはアウトになった。

3番マグナムエース

「行くぞティアナ・・・この試合は譲れない!」

「勝利って言うのは自分自身で掴み取るんでしょ!!」

ティアナは第二の師とも呼べる者に対し・・・

「マグナムエース・・・44ソニックであんたと勝負できるなんて
ね・・・」

「!!」

ティアナがマグナムエースに向かってピッチングフォームに入りマグナムエースもバッティングフォームになった。

「44 おおおソニック!!」

「く!!」

マグナムエースの視界センサーが44ソニックを計算する。

「うおおおお!!」

ティアナの44ソニックを捕らえるがパワーに押される。

『ファール』

「く!!」

奥歯を噛むティアナ。マグナムエースはバットを見つめた。

（・・・これは）

ティアナの44ソニックの感触を確かめると再びバッティングフォームに入った。

「でああああああああ!!」

「く!!」

再びマグナムエースがティアナの44ソニックを捕らえるが・・・

『ファール』

再び手の感触を確かめるマグナムエース。

(・・・一球事にパワーが上がっている)

「次で決める・・・」

(ティアナ・・・完全に44ソニックを自分のものにしたな)

ティアナの実力をかみ締めるマグナムエース。

「見せてやるわよ・・・44ソニックにあたしなりのアレンジを加えた技・・・」

ピッチングフォームに入るティアナの足元に魔方陣が描かれた。マグナムエースも渾身の力を込めバッティングフォームに入る。

「44ソニック・オン・クロスファイアアアアアアアア!!!!」

44ソニックにティアナの得意技。クロスファイアシュートの力を上乗せした。

「うおおおおおおおお!!」

バットを振るマグナムエースだが・・・

『ストライク！バッターアウト！』

バットを振り切ったマグナムエースだが同時に振り切ったバットが溶けてしまった。

「・・・ふう・・・すばらしい球だ」

「・・・あんたのスイングもね」

ティアナ達の本気を受けベンチに戻るマグナムエースは・・・

「マグナム！」

ウインディからグローブを投げ渡されるマグナムエース。

「・・・ウインディ」

「行こうぜ！」

「ああ！！」

シルバーキャッスルのメンバーが守備位置に着きマグナムエースもマウンドに向かう。

「！！」

マウンドに立つマグナムエースはいつもと違う気持ちになった。

（・・・俺は・・・この瞬間を待っていたのか？）

バッテリーボックスに入るスバルはマグナムエースをまっすぐ見た。

（・・・行くよ！マグナムエース！！）

（・・・行くぞスバル・・・力の限り・・・）

スバルの全力に応えるべくマグナムエースも構えた。

今まで共に戦ってきたスバルとマグナムエースが対峙した。

（（勝負！！））

スバルとマグナムエースの間を稲妻が駆け抜けた。

第三十六話 シルバーキャッスル対機動六課（後書き）

・・・ありがとう・・・皆に出逢う事ができて・・・機動六課・・・
俺はその名を忘れない！

次回！疾風！アイアンリーガーStrikers 友よまた逢う日
まで

正々堂々！試合開始！

最終話 友よまた逢う日まで

最終話 友よまた逢う日まで

スバルとマグナムエースの間に稲妻が走り・・・

「!!」

マグナムエースが大きく振りかぶりスバルはバットを握り締めた。

「44 おおおおソニック!!」

マグナムエースの第一球をがスバルに向かっていく。

「でああああああ!!」

スバルは44ソニックを捕らえた。

『ピッチャー強襲のライナー!!』

打球はマグナムエースに向かってくると・・・

「ぬん!!!」

真っ向から受け止めるマグナムエース。身体から蒸気が噴出した。

（・・・凄い・・・けど次は必ず貰うからね!）

(・・・ああ)

アイコンタクトで伝え合うスバルとマグナムエース。

「これって・・・」

マグナムエースのステータスボードを見ているシャーリーは驚いている。

「うあああああああ!!」

『ストライクバッターアウト!!』

空振り三振するエリオは尻餅をつく。

「はっはは♪やっぱりマグナムエースさんは凄いや」

マグナムエースの力を改めて感じるエリオ。

「あのオイルの熱・・・」

マグナムエースだけではなくシルバーキャッスル全員のオイルの温度が急激に上がっている。

「こんなの・・・いつ爆発してもおかしくない・・・スバルたちも・・・」

スバルたちの魔力のステータスボードも臨界を超えていた。

「シャーリー大丈夫だよ♪」

「ヴィヴィオ？」

「それはみんなの心が燃え上がってるんだよ」

「・・・そうだね」

ヴィヴィオの言葉に安堵するシャーリー。

バッテリーボックスに入るティアナ。

「絶対に罫に出る・・・勝負！」

「行くぞティアナ！44おお・・・」

「うあああああああ！！！！」

「ソニイイック！！」

ティアナは向ってくる44ソニックを捕らえるがバットが砕けてしまった。

「く・・・」

ティアナは改めてマグナムエースの大きさを感じていた。

（私は44ソニックにクロスファイアのエネルギーを上乗せしてや
つと砕いた・・・けどマグナムエースは・・・負けない・・・だ

からマグナムエースに挑戦するんだあああ!!!(

「うおおおおおおお!!」

「てえええあああああ!!」

マグナムエースから放たれる44ソニックを捕らえるティアナ。ボールはサードに流れると・・・

「はあ!!」

リュウケンのファインプレーがボールを阻止した。

『アウト!スリーアウトチェンジ!!』

「く!」

奥歯を噛むティアナはベンチに戻ると。

「ティア!」

スバルからグローブを渡される。

「ドンマイ!やっぱり一筋縄じゃないよ」

「うん!」

そう言うとき機動六課は再び守備に付いた。

「・・・マグナム」

「・・・ああ」

「勝とうぜこの試合！」

「俺達も彼女達という大きな存在を乗り越える！」

ウィンディの言葉に十郎太がバッターボックスに入った。

『4番ショート極十郎太』

（・・・十郎太か）

十郎太の実力を身にしみているティアナ。

「ティアナ殿！某この試合に魂の全てを込める」

十郎太はバットを独特のフォームで構えるとエネルギーがバットに注ぎ込まれる。

（・・・小細工無しで真っ向勝負！！）

ティアナがピッチングフォームに入った。

「44 おおソニック！！オン！クロスファイアアアア！！！」

十郎太に向って44ソニック・オン・クロスファイアが放たれる。

アイアアアア!!!」

トップジョイに向って44ソニック・オン・クロスファイアが投げられる。

「ミーは死んでも塁に出るネ!!! NOおおお!!!」

空振りしてしまうトップジョイ。

一方ベンチでは

「凄げえぜ・・・ティアナの球パワーだけじゃなくて球威も上がってる」

「わおおおおお!!!」

『ストライク! バッターアウト!!!』

「次は絶対貰うネ!」

とトップジョイは楽しそうにベンチに返っていった。

「うああああ!!!」

またしても空振り三振しベンチに戻るリュウケン。

「44 おおおおソニック!!」

「44 おおおおソニック・オン・クロスファイア!!」

凄まじい投手戦。魔球のパワーに押されているため思うように打球が伸びない。シルバーキャッスルの主砲ブルアーマーの打球もファールになってしまう。そして十郎太の打球にはシグナムが食らいつく。

機動六課もマグナムエースの44ソニックに押されてしまう。しかし44ソニックに食らい付くためこの数日間の特訓は並大抵ではなかった。

5回

「44ソニック・オン・クロスファイアアアアア!!」

「Noおおお!!」

『ストライク! バッターアウト!!』

またしても三振するトップジョイ。ここまで来てお互いに0対0で
出塁もしていない。

「ぐ！・・・う！！」

突然ティアナが肩を抑え始めた。

「ティア！」

「ティアナさん！」

「タイム！」

タイムを取りティアナの元に駆け寄る六課メンバー。監督のなのは
きた。

「大丈夫ですか！？」

エリオが心配するが・・・

「大丈夫・・・これくらい・・・う！」

やはり痛むのか肩を抑えるティアナ。

「無理ないよ・・・あんな凄い魔球を投げ続けてたんだもん・・・
44ソニックはマグナムエースがオーバーヒートした技だよ・・・
ティアナ・・・ピッチャーを交代 「嫌です！！」 ティアナ？」

ティアナの言葉に驚くのは。

「この試合だけは絶対ベンチから見たくないんです！！たとえ腕一本千切れたってやりたいんです！！・・・シルバーキャツスの試合だけは逃げたくありません！！」

ティアナはなのはに真っ直ぐな瞳で応えた。

「・・・なのはさん」

「スバル？」

「ティアの気持ちを・・・優先してください・・・」

「わかった・・・無茶だけはしちゃだめだよ」

「はい」

ピッチャーマウンドに立つティアナとミットを構えるスバル。向えるバッターはリュウケン。

「44 おおソニック・オン・クロスファイアアアアア！！」

その時ティアナの肩に異常が起きた。

「く！ぬあああああああああ！！！！」

ティアナは方の負担を押し切り投げるが・・・

「しまった！！」

手元が狂いボールはリュウケンに向ってしまう。

「リュウケン避けて!!」

ティアナの言葉にリュウケンはバットを投げ捨てた。

「え?」

「竜うううう撃! 打ああああああああ!!」

額に『心』の文字が浮かびリュウケンの拳が44ソニック・オン・クロスファイアを殴り飛ばした。打球はファーストに向う。

「く! うああああああああ!!」

竜撃打をまともに受け止めようとするがパワーに押され吹き飛んだ。

「はああああ!!」

ショートのエリオがカバーに走る。リュウケンも1塁を蹴り2塁に向うが。

「いっけえええ!!」

「ふん!! 勝負リュウケン!!」

「くうううううううう!!」

ベースで待ち構えているシグナムとリュウケンが正面から激突する。
判定は・・・

「平気だよ」

『セーフ!!』

吹き飛ばされたシグナム。

・・・出塁した。心理的にシルバーキャッスルが有利になった。

「俺もだ!!」

ブルーアーマールの打球がレフトに流れる。

「く!! いっけえええ!!」

ヴァイスがサードに向って投げるが暴投してしまう。その時

「任せて!!」

フェイトのジャンプがボールを受け取りリュウケンをアウトにした。

「エリオ!!」

「はい!!」

エリオがボールを受け取りブルーアーマールをアウトにした。

「44ソニック・オン・クロスファイアアア!!」

「シルバー打法!!」

エリスが独特のフォームで44ソニック・オン・クロスファイアを捕らえるがキャロがセーブする。

6回裏

必死に素振りをするエリオ。

（・・・ティアさんにこれ以上負担をかけられない・・・ここで一発！！）

バッテリーボックスに入りマグナムエースに向って構えた。

「はぁ・・・はぁ・・・行くぞエリオ」

44ソニックを投げ続けているマグナムエースも疲労している。

（ティアナがマウンドから降りない限り・・・俺も全力で応える！！）

「44おおおおソニック！！」

「うああああああああああああ！！気合が違うんです！！！！」

エリオが44ソニックを捕らえた。打球はグングン伸びる。

「く！！」

リインフォースがボールを捕らえるとファーストに向って投げた。

「うおおおおお!!」

「く!」

GZとぶつかり合うエリオだが・・・

『セーフ』

機動六課が始めて出塁した。流れが動き始めた。

「行くぞティアナ・・・44 おおおソニック!!」

「く!」

「なに!？」

ティアナは送りバントの構えを取った。ボールはマウンドの前に落ちるとエリオが2塁に向かって走った。

「く!」

シルバーキャッスルは2塁にいるエリオに狙いを定めるが・・・

「いない!」

「3塁だ!!」

マグナムエースが3塁を見るとエリオが走っていた。リュウケンに向って投げるが・・・

「セーフ！」

3 塁にエリオがいる。エリオのスピードなら先制点を取れる確率は高い。機動六課にとってはチャンスだった。

向えるバツターはヴィータ。

「マグナムエース・・・おめえがあたしに44ソニックを投げたあの日からあたしは血の滲むような特訓をしてたんだ・・・もらう！」

「行くぞヴィータ！！」

ヴィータに向かって44ソニックが放たれるが・・・

「うおりゃあああああああああああ！」

ヴィータが44ソニックスを捕らえ大空に押し返した。

「なに！」

打球はセンターに向うが・・・

「ミーにまっかけるネ！ ジャアアアアアアアアアアアアアアアアンプ
！」

トップジョイが自慢のジャンプでボールを捕らえた。

「ぐう……わおお!!」

打球の勢いが強すぎボールは落としてしまうがホームランだけは阻止した。

「うおおおおおおおおおおおお!!」

エリオがホームに向って走るとエリスがフォローに入りブルアーマーに照準を合わせた。

「シャイニングううう!!スマッシュ!!!!」

エリスの魔球シャイニングスマッシュがホームに向って投げられる。

「うおおおおお!!」

「どおりやああああ!!」

ホームでぶつかり合う両者・・・判定は

『セーフ!!』

機動六課チームが先制点を取った。

「くそ!!」

「ブル!!早く!!」

「あ!!」

3塁のリウケンがブルアーマーに向って叫んだ。ヴィータが迫っ

ていたからだった。

「勝負だリュウケン！」

「リュウケン！！」

「うおおおおおおお！！」

ブルアーマーの投球がリュウケンにわたりアウトになった。

『アウト！スリーアウトチェンジ！！』

攻守が変わるチーム。

「取れたね・・・1点」

「うん！」

シルバーキャッスルから先制点を取った。機動六課の士気が上がった。

「1点くらい返してみせる！」

「ああ！俺達は負けるわけにはいかない」

そしてバッターボックスに入るラインフォース。

「・・・来い！」

「44 おおソニック・オン・クロスファイアああああ!!」

「くううううううう!!」

ティアナの魔球は衰えるどころか増していく。だが同時に身体の負担もだった。

『ストライクバッターアウト!!』

均衡は続く1点を返そうとするシルバーキャッスルとリードを保ち精神的な余裕があるうちに追加点を狙う機動六課。

そして

「うおおおおおおおお!!」

『ファール!』

スバルが大ファールを出す。28球目だった。

「はあ・・・はあ・・・」

「はあ・・・はあ・・・」

スバルとマグナムエースは疲労が溜まっていく。だがスバルの方が身体に来ていた。44ソニックを跳ね返すたびにフルパワーになるためその疲労は半端ではない。

「く!!」

リボルバーナックルからカートリッジがロードされ再びバッティン
グフォームに入るスバル。

「行くぞスバル! 44 おおおおソニック!!」

「うおおおおおおおお!!」

『ファール!!』

またしても大ファール。そしてマグナムエースとの勝負から逃げな
いスバル。そして勝負続いた。

「うおおおおああああああああ!!」

『ファール!!』

39球目のファール。スバルはひたすらファールで粘る。

「く・・・くうう!!」

既にバットを杖代わりにしなければ立っていられないスバル。だが
倒れないマグナムエースを超えるただそれだけがスバルを突き動か
している。

「スバル! もういいよ! 三振して!! 身体が持たない!!」

なのはの言葉にスバルは・・・

「嫌です!!」

「・・・スバル」

「44ソニックを・・・打ち砕くまで絶対ベンチに戻りません!!」
今装填されているカートリッジを全てロードし再びバッテイングフ
ォームに入るスバルとそれに応えるマグナムエース。

（行くよマグナムエース・・・今度こそ44ソニックを打ち砕く！
！）

（・・・スバル・・・）

スバルの瞳を見たマグナムエースは・・・

（・・・俺はこんな気持ちで試合をするのは久しぶりだ・・・今ま
で共に歩んできた仲間と・・・何も考えず・・・最高の試合が出来
ることに・・・誰かの為じゃない・・・）

マグナムエースの・・・

（自分の為に!!）

・・・ココロキットが発動した

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお!!」

マグナムエースの身体から膨大なエネルギーが発せられスタジアムを飲み込み天を貫いた。

「え！」

スバルは感じていたマグナムエースの最大の技が来ると・・・

「うおおりゃああああああああああ！！！」

マグナムエースに銀河を見たスバル。

マグナムエースのココロキットが無限のエネルギーを生み出しメイ
ン回路に無限のエネルギーが蓄えられる。

「行くぞおおおおおお！！！」

マグナムエースがスバルを真っ直ぐ見た。

「アステロイドキャノン！！！」

マグナムエースの彗星のような球が複雑な軌跡を描くと流星が降り
注がれた。

「ああああああああああ！！！」

スバルはバットでアステロイドキャノンを捕らえると膨大なエネルギーに飲み込まれた。

「うあああああああ・・・！！！」

エネルギーが晴れるとバットを振り切ったスバルだがボールはミットに収まっていた。

『ストライク！バッターアウト！！』

膝を突くスバル。

「・・・最高だよ・・・マグナムエース！！」

金色のエネルギーを纏いながらマグナムエースはマウンドに降り立った。

「・・・スバル！」

スバルの顔を見て攻守が交代される。

「く・・・う・・・」

限界を当に超えているティアナがマウンドに立った。向えるバッターは十郎太。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

十郎太は己を瞑想状態においている。

「行くわよ・・・十郎太！！44ソニック・オン・クロスファイア！！！」

ティアナの渾身の44ソニック・オン・クロスファイアが放たれると・・・

「精神波・・・鋼の如し・・・心眼・・・月の如し」

十郎太のバックに大きな月が現れ青い闘気があふれた。

「見切った!!」

ボールを捕らえる十郎太。

「これがああ・・・極限!!」

バットごと押し切られる十郎太のバイザーが破壊された。

「刃刀返し!!」

「え!!」

「させるか!!」

十郎太の打球を捕らえようとするシグナムだがグローブを貫き大空の彼方に飛ばした。

同点にした十郎太かし。

「ぐ・・・う・・・」

一発のホームランに全ての力を込めた十郎太。やはり身体に大きな負担がかかった。

1対1のまま続くデットヒート。

両者は疲労を押し切り試合を続けていた。

その光景を見ていたなのは・・・

「く・・・目を逸らしちゃダメ・・・けど」

ボロボロになりながら闘うみんなの姿に目を逸らしそうになってしまふ・・・だがそれはスバルたちを信じていない・・・そういうことになる。

最終回

バッターボックスに立つスバルとピッチャーマウンドに立つマグナムエース。

「ねえ・・・マグナムエース私・・・ずっと考えてた・・・なんでマグナムエースが私の中に入ったのか・・・」

「・・・お前だけじゃないさ・・・俺もずっと考えてた」

「けどね・・・今はもうそんな事どうでもいいの・・・マグナムエースは私に大切なことを教えてくれた」

「・・・お前も俺に大切なことを思い出させてくれた」

「・・・最後まで絶対諦めない心」

「・・・力の限り・・・」

「「正々堂々戦うという本当の意味を！！！」」

「勝負だ・・・スバル！！」

・・・マグナムエースの渾身のピッチング・・・

・・・スバルは打球を捕らえレフトに流れる・・・

「うおおおおおおおおおおおおおおおお
おおー!!」

凄まじい爆発が起こる

勝負は!!?

「十郎太・・・結局貴様との決着は着かなかったな」

「・・・某もまだ未熟・・・次に逢うときに決着をつけよう」

「・・・いいだろう」

再び再戦を誓い合う十郎太とシグナム。

「GZ・・・いつちやうの？」

「大丈夫だ・・・また逢える・・・」

「うん！」

精一杯GZに甘えるヴィヴィオ。

「ブルアーマーさん・・・ありがとう」

「シャマル先生。また着ます」

「今度はウチの手伝いもよろしゅう！」

「はやて・・・ああ!!」

ブルアーマーとの別れを惜しむはやてとシャマル。

「リュウケン！あたしは絶対強くなる!!今度は空手で勝負だ!!」

「うん・・・僕も負けない!!」

「へ!!」

腕をクロスさえるリュウケンとノーヴェ。

「トップジョイ！あたし絶対アイアンリーグ見に行くからね!!」

「オウ！ミーも楽しみにしてるネ!!」

「チケットは間近だからね!!」

「OKネ!!」

遊びに行くと宣言したセインと来るのを楽しみにしているトップジ

ヨイ。

「ウインディ・・・今度はライバルかな？」

「エリス・・・へへ・・・いいぜ！！俺も真っ向から勝負だ！！」

「私も・・・精一杯生きていく」

「ああ！お前ならできるさリインフォース！」

握手するウインディ、エリス、リインフォース。

そして・・・スバル、ティアナ、マグナムエースは・・・

「寂しくなっちゃうわね」

名残惜しそうなティアナはマグナムエースとスバルを見届ける。

「・・・・・・・・」

スバルは無言でマグナムエースの右腕に何か巻きつけている。

「・・・ありがとうスバル」

マグナムエースの右腕にスバルの鉢巻が巻きつけられた。するとスバルはマグナムエースの額のシルバーキャッスルのステッカーをはがした。

「ん？」

「・・・これ・・・記念に貰ってくね」

「・・・ああ」

「・・・あとね・・・」

「どうし・・・んん!!」

『わお!!』

スバルの行動に赤面するシルバーキャッスルと機動六課勢。

「・・・えっへへ」

赤面するスバルと回路が焼ききれそうになるマグナムエース。

「また逢おうぜ皆! おいマグナム! いつまで照れてんだ!!」

「あ・・・ああ」

「・・・マグナムエース」

「・・・さよならは言わないぞ・・・魂の友よ」

「うん!!」

それだけの言葉を残し

シルバーキャッスルと機動六課はそれぞれの道を歩き出した。

激しいクロスプレー・・・結果は・・・

『セーフ!!』

試合終了の合図。お互いの健闘を称えあいマグナムエースとスバルは握手を交わした。

エピソード

六課解散後

スバルはかねてより希望していた特別救助隊に転属した。

災害対策や人命救助の最前線で被災者を救助する

シルバーのエース

しかしスバルにはもう一つの名があった。

・
・
・限らない過ちを打ち砕き・
・

・
・
・最後まで決して諦めない意志・
・

・
・
・マグナムエース・
・

その肩には銀色の城のマークがあった。

『さあアイアンリーグ開幕戦シルバーキャッスル対ダークキングス・
・シルバーはエース、マグナムエース、向えるバッターは1番ゴ
ールドマスク！マグナムエース第一球投げた！！！！』

シルバーキャッスルのベンチでは別世界の友達との集合写真が飾ってあった。

正々堂々！試合終了！！

エピローグ（後書き）

スバル達と別れた数日後俺達にはいつも日々が戻ってきた。ん？この声は・・・スバル？どうしたんだ！？

・・・トーマ？・・・見過ごせない・・・かけがえの無い友の危機を！

次回！疾風！アイアンリーガーForce 銀幕の旗の下に

俺の名はエース

正々堂々と！試合開始！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3079j/>

疾風！アイアンリーガーStrikers

2011年7月29日23時14分発行